井尻Ｂ遺跡14

市道御供所井尻線建設に伴う発掘調査報告Ⅲ

－井尻Ｂ遺跡第17次調査（Ｂ区）の報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書

第834集

２００５

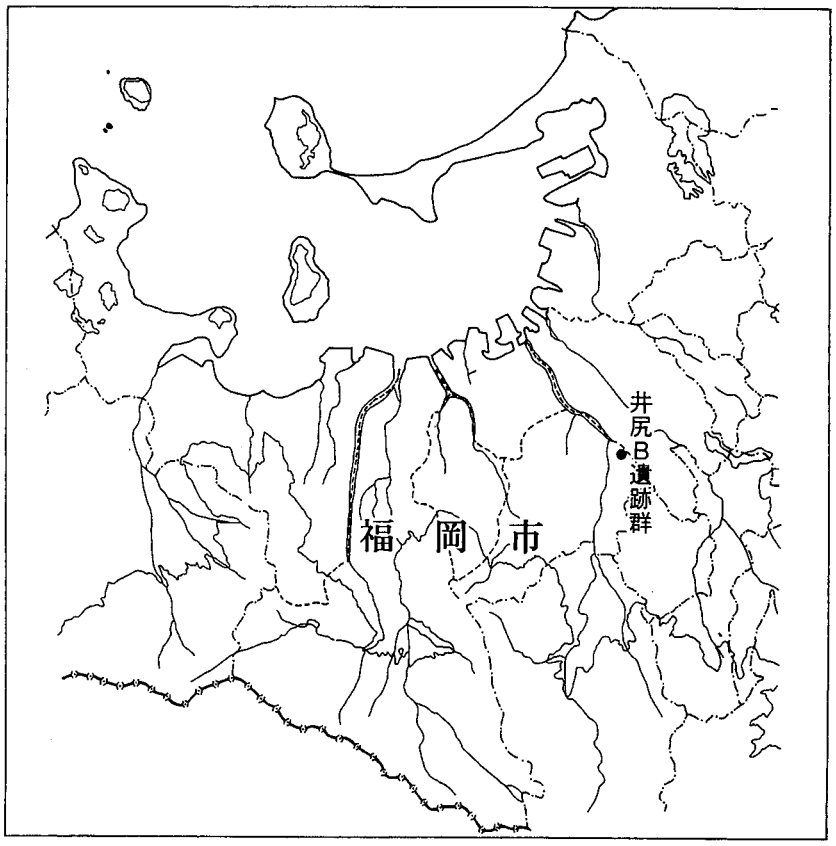
福岡市教育委員会

井尻B遺跡14

市道御供所井尻線建設に伴う発掘調査報告Ⅲ

－井尻B遺跡第17次調査（B区）の報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第834集



2005　調査番号　0027
遺跡略号　IGB－17

福岡市教育委員会

序

玄界灘を挟んで朝鮮半島と向き合う福岡市は、古くから大陸との文化交流の門戸として発展を遂げてきました。そのため市内には数多くの歴史的遺産が残されていますが、それらを保護し子孫に伝えていくことは私達の義務であります。しかし近年の都市開発によってそれらの多くが失われているのが現状です。

福岡市教育委員会は、このように開発によってやむを得ず失われていく埋蔵文化財に関して事前の発掘調査を行い、記録の保全と調査結果の公開に努めています。

本書は都市計画道路御供所井尻線建設に伴う南区井尻Ｂ遺跡群の発掘調査について報告するものです。本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料としてご活用頂ければ幸いに存じます。

最後に発掘と調査から報告書の刊行に至るまで多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに関しまして心から謝意を表する次第です。

平成17年３月31日
福岡市教育委員会
教育長　植木とみ子

例　言

１．本書は平成12年度から平成15年度にわたって発掘調査を行った井尻Ｂ遺跡第17次調査のうち、平成13年６月から平成14年３月にわたって発掘調査を行ったＢ区の調査報告書である。
２．本書で使用した遺構実測図の作成は名取さつき･屋山洋が、遺物実測図の作成は平川敬治･岡田裕之・屋山が、製図を土井良伸・屋山が行った。
３．本書で使用した遺構・遺物の写真撮影は屋山が行った。
４．本書で使用した方位は磁北である。
５．本書に使用した井尻Ｂ遺跡出土青銅器の鉛同位体比の分析は福岡市内出土の他の青銅製品と共に福岡市埋蔵文化財センターから東京文化財研究所へ分析を依頼し、2003年１月21日付けの報告書を平尾良光氏・鈴木浩子氏より頂いたものである。
６．挿図中の遺物番号と図版中の遺物番号は一致する。
７．本書の作成は屋山が担当した。
８．本書に関わる図面、写真、遺物等の資料は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管される予定である。

調査番号　0027			遺跡略号　ＩＧＢ－17
調査地地番　福岡市南区井尻１丁目地内			分布地図番号　ＮＯ24　板付
事前審査番号　11－１－１			
	開発面積	調査面積	調査期間
Ｂ区	1072㎡	934.6㎡	2001．6．4～2002．3．31

SC4063出土　広型銅戈鋳型

SE4169出土　坩堝・取瓶

本文目次

第１章　調査の記録……1
　１．調査にいたる経過……1
　２．調査の組織……1
　３．調査区の立地と環境……2

第２章　Ｂ区の調査……6
　１．弥生時代から古墳時代の遺構と遺物……6
　　１）竪穴式住居……6
　　２）平地式住居……47
　　３）掘立柱建物……49
　　４）周溝状遺構……53
　　５）井戸……54
　　６）土坑とその他の遺構……71
　２．古代の遺構と遺物……74
　　１）溝……74
　　２）掘立柱建物……85
　　３）井戸……85
　　４）土坑……86
　３．小結……86

挿図目次

Fig. 1　井尻Ｂ遺跡群の位置(1/25,000)　……3
Fig. 2　井尻Ｂ遺跡群北側発掘調査地点位置図(1/10,000)……4
Fig. 3　Ｂ区周辺図(1/1,000)……4
Fig. 4　Ｂ区全体図(1/160)　……折り込み
Fig. 5　SC4019実測図１(1/60･1/40･1/3)　…5
Fig. 6　SC4019実測図２……6
Fig. 7　SC4019実測図３(1/3)　……7
Fig. 8　SC4049実測図１(1/50・1/20)……8
Fig. 9　SC4049実測図２(1/50・1/3)　……9
Fig.10　SC4060実測図１(1/60)……10
Fig.11　SC4060実測図２(1/50・1/3・2/3)…11
Fig.12　SC4060実測図３(1/50・1/3)　……12
Fig.13　SC4062実測図(1/50・土層1/20・1/3) 13
Fig.14　SC4063実測図１(1/50・1/40・1/3)…14
Fig.15　SC4063実測図２(1/50・1/3)　……15
Fig.16　SC4063実測図３(1/3)　……16
Fig.17　SC4063実測図４(1/3)　……17
Fig.18　広型銅戈鋳型実測図(1/2)　……18
Fig.19　SC4064実測図１(1/50)……19
Fig.20　SC4064実測図２(1/50・1/40)……20
Fig.21　SC4064実測図３(1/50)……21
Fig.22　SC4064遺物実測図１(1/3)　……22
Fig.23　SC4064遺物実測図２(1/3)　……23
Fig.24　SC4064遺物実測図３(1/3)　……24
Fig.25　SC4064遺物実測図４(1/3)　……25
Fig.26　SC4064遺物実測図５(1/3)　……26
Fig.27　SC4064遺物実測図６(1/3)　……27
Fig.28　SC4064遺物実測図７
　　(1/3・ガラス勾玉鋳型1/1)……28
Fig.29　SC4086実測図(1/50)……29
Fig.30　SC4188実測図(1/50)……30

Fig.31　SC4190実測図(1/50・1/40) ……31
Fig.32　SC4220実測図(1/50・1/3) ……32
Fig.33　SC4336実測図(1/50・1/3) ……33
Fig.34　SC4394実測図 1 (1/50) ……35
Fig.35　SC4394実測図 2 (1/3) ……36
Fig.36　SC4398実測図 1 (1/3) ……36
Fig.37　SC4398実測図 2 (1/50・1/40) ……37
Fig.38　SC4398実測図 3 (1/50) ……38
Fig.39　SC4412実測図(1/50・1/3) ……39
Fig.40　SC4437実測図(1/50・1/40・1/3) …40
Fig.41　SC4438実測図(1/50・1/3・1/1) ……41
Fig.42　SC4439・4712実測図 1 (1/50・1/3)　42
Fig.43　SC4439・4712実測図 2 (1/50) ……43
Fig.44　SC4440実測図(1/50・1/3) ……44
Fig.45　SC4441実測図(1/50・1/3) ……45
Fig.46　SC4442実測図 1 (1/50) ……46
Fig.47　SC4442実測図 2 (1/3) ……47
Fig.48　SC4443実測図(1/50・1/3) ……48
Fig.49　SC4542実測図(1/50・1/3) ……49
Fig.50　SC4599実測図 1 (1/50・1/3) ……50
Fig.51　SC4599実測図 2 (1/50・1/3) ……51
Fig.52　SC4623実測図(1/50・1/3) ……51
Fig.53　SC4636実測図 1 (1/50・1/20・1/3) …52
Fig.54　SC4636実測図 2 (1/50) ……53
Fig.55　SC4661実測図(1/50・1/3) ……54
Fig.56　SC4664実測図(1/50・1/3・小銅鐸2/3) 55
Fig.57　SC4671・4850実測図(1/50・1/3) …56
Fig.58　SC4786実測図(1/50) ……57
Fig.59　4446実測図(1/40) ……58
Fig.60　4030実測図(1/40) ……59
Fig.61　SB02実測図(1/60・1/40) ……60
Fig.62　SB03実測図(1/60・1/40) ……61
Fig.63　SB04実測図(1/60) ……62
Fig.64　SB04柱穴土層図(1/40) ……63
Fig.65　SB06実測図(1/60) ……63
Fig.66　SB05実測図(1/60・1/40) ……64
Fig.67　SB08・09実測図(1/60) ……65
Fig.68　SK4514・4717実測図(1/40) ……66
Fig.69　SE4154実測図 1 (1/30・1/3) ……67
Fig.70　SE4154実測図 2 (1/3) ……68
Fig.71　SE4169実測図 1 (1/30・1/3) ……69
Fig.72　SE4169実測図 2 (1/3) ……70
Fig.73　SE4200実測図(1/30) ……71
Fig.74　SE4202実測図 1 (1/30・1/3) ……72
Fig.75　SE4202実測図 2 (1/3) ……73
Fig.76　SE4231実測図(1/30) ……74
Fig.77　SE4236実測図 1 (1/30・1/3) ……75
Fig.78　SE4236実測図 2 (1/3) ……76
Fig.79　SE4444実測図 1 (1/40・1/3) ……77
Fig.80　SE4444実測図 2 (1/3) ……78
Fig.81　SE4444実測図 3 (1/3) ……79
Fig.82　SE4444実測図 4 (1/3) ……80
Fig.83　SE4669実測図(1/30・1/3) ……81
Fig.84　土坑実測図 1 (1/30) ……83
Fig.85　土坑実測図 2 (1/30・1/3) ……84
Fig.86　A・B 区古代遺構配置図(1/1000) …85
Fig.87　SD4017出土遺物 1 (1/3) ……87
Fig.88　SD4017出土遺物 2 (1/3) ……88
Fig.89　SB01実測図(1/60) ……89
Fig.90　SB01柱穴土層図(1/40) ……90
Fig.91　SB07実測図(1/80) ……91
Fig.92　SE4504実測図 1 (1/40・1/3) ……92
Fig.93　SE4504実測図 2 (1/3) ……93
Fig.94　SE4504実測図 3 (1/3) ……94
Fig.95　SE4504実測図 4 (1/3) ……95
Fig.96　SE4504実測図 5 (1/3) ……96
Fig.97　土坑実測図
(1/30・1/3・403は1/4・410は2/3) …97
Fig.98　井尻およびその他遺跡出土小銅鐸の
鉛同位体比 ……98

第１章　はじめに

１．調査に至る経過

平成11年３月31日に土木局建設部南部建設課より福岡市教育委員会埋蔵文化財課長宛に南区井尻１・２丁目地内に新設する市道御供所井尻線建設に関する埋蔵文化財事前審査申請書が提出された（事前審査番号11－１－１）。申請地のうち井尻１丁目地内は周知の埋蔵文化財包蔵地である井尻Ｂ遺跡内に位置していることから、埋蔵文化財課では埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査が必要であると判断した。当地区は古い住宅地で道が狭く大型工事車両の通行が困難であった。ただ以前行われた周辺の調査および、道路の土地買収進展に伴う家屋建て替え時の試掘・発掘調査の事例から遺跡が存在することは確実であるため、平成11年10月から平成12年３月まで発掘調査を行った。（第14次調査）。今回の第17次調査は平成12年６月から台地南端のＡ区から発掘調査を開始したものでＢ区の調査は平成13年６月４日から14年３月31日の間に行った。調査地に面した道が狭く工事車両が進入できなかったため、発掘調査に使用する重機などの機械類は調査終了後埋め戻していたＡ区側から進入し、またＡ区は調査に伴う廃土置場としても利用した。17次調査は平成14年度まで継続したが調査工程としては平成12年度にＡ・Ｆ区、13年度にＢ・Ｄ・Ｅ区とＣ区北半部、14年度にＣ区南半部の調査を行った。井尻遺跡北台地上の初めての大規模な調査であり、台地の南東から北西に台地を横断した調査であるため台地上の遺跡分布の予想がある程度可能になるなど大きな成果を上げることができた。その成果を元に平成14年７月13日には出土遺物に関する新聞発表を行うことができ、また2003年文化庁主催の速報展にはこの17次調査で出土した遺物の中で特に重要であると考えられる８点を出展した。平成14年夏以降井尻Ｂ遺跡の発掘調査は終了して井尻Ｂ遺跡の北側に位置する五十川遺跡群へと移行したが、井尻遺跡第17次調査で出土した遺物は大量であり、また貴重な遺物が多いためそれらの整理報告は2007年までかかる予定である。

２．調査の組織

調査委託　　土木局建設部南部建設課
調査主体　　福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課
調査総括　　埋蔵文化財課　課長　　山崎純男
　　調査第２係長　　（前）山口譲治　　（現）田中壽夫
調査庶務　　文化財整備課　　（前）宮川英彦　　（現）御手洗清
調査担当　　埋蔵文化財課　事前審査　　（前）中村啓太郎・田上勇一郎　（現）井上繭子
　　調査第１係　　横山邦継　屋山洋
調査作業員　一ノ瀬フミヨ　上野龍夫　浦伸英　江嶋光子　大塩　　加藤常信　香田信子
坂下達男　大長正弘　橘良平　橘智子　高野瑛子　谷英二　谷正則　遠山勲　徳永静雄　中村尚美
布江孝子　税所篤英　廣田安平　前山政義　三浦力　宮川ヤエ子　大和育絵　山下智子　吉住政光
其田昌祥　大和武史　森本良樹　伊藤美伸　藤原直子　林厚子　乾俊夫　伊藤ミドリ　一宮義幸
牛尾与志助　海津宏子　川岡涼子　倉光政彦　高橋茂子　中園登美子　土生ヨシ子　満田雅子
三好道子　山田ヤス子

３．立地と環境

井尻Ｂ遺跡群は福岡平野中央部を博多湾に向かって流れる那珂川の右岸に沿って細長く延びる台地上に位置する。この台地上には数多くの遺跡が分布しているが、南側には春日市の須玖永田遺跡や須玖坂本遺跡等の青銅器製造関連の遺構・遺物の他にガラス製品の鋳型など複数の工房が存在していたことが判明している。ここ井尻周辺においても江戸時代から青銅器の鋳型が出土することが知られており、奴国の青銅器生産を支える工房の一つとして注目されてきた。福岡市教育委員会の発掘調査でも鋳型に使用された長石－石英斑岩の破片が多く出土するため、弥生時代後期には井尻Ｂ遺跡で多くの青銅器が生産されていた可能性が高いと考えてきた。また、井尻遺跡の北側の台地上には比恵・那珂遺跡という弥生時代から古代にかけての大規模な遺跡が存在しているが、これらの遺跡は弥生時代においても遺構の多さや大型掘建柱建物等の存在から拠点的集落であると考えられており、古代においても那津官家や那珂郡衙の可能性がある掘立柱建物群や瓦片が出土するなど、拠点的集落としての役割を果たしていたものと思われる。本遺跡はこのように南北を弥生時代から古代までの大規模な遺跡に囲まれており、これまでも重要な遺構が存在する可能性が言われてきた。しかし大正13年に九州鉄道（当時）に福岡～二日市間の電車が開通し井尻駅ができると、周囲の開発が進んで昭和20年代からは人口が急激に増加しはじめた。そのため駅周辺は住宅地として小規模な開発が進んだが、台地上には古くからの細い道しかなく車での進入が困難であったため、これまでは大規模な開発が行われず、調査も周辺での小規模なものにとどまり遺跡の全体像はつかみにくい状態であった。

本遺跡のこれまでの発掘調査の成果としては旧石器から古代の遺構が確認されている。旧石器は主に台地の南端部（西鉄大牟田線より南側）で確認されている（第２次調査）。台地北側では後世の遺構から石器が出土するものの原位置を留めたものはない。その後縄文時代には少量の石鏃が出土するのみで遺構や土器は確認されておらず、ヒトが定住した痕跡は確認できない。弥生時代では台地の北西端部で夜臼式土器や板付Ⅱ式土器の小破片が攪乱から出土している（17次Ｅ区）が、現在確実な遺構としては中期前葉の城ノ越式の貯蔵穴が最も古い遺構である。その後、後期前半までの検出遺構は少ない。しかし中期中～後葉の土器片は弥生後期や古代遺構から多量に出土する為、中期後半には多数の遺構が存在したものの後世の開発により消滅したと考えられる。弥生後期前半では中期後半ほどではないものの遺物は多く出土し、遺構も竪穴式住居が数件確認されている。弥生時代後期後半になると台地全体に集落が形成されはじめ、古墳時代前期までの間に多数の竪穴式住居や掘立柱建物が建てられるようになる。この時期は大規模な集落が形成されただけではなく、弥生時代末には青銅器生産関連遺物やガラス勾玉鋳型が出土するなど生産関連の遺物が出土するようになる。その後古墳時代中期になると竪穴式住居などの生活遺構はほとんど見られなくなる。これは遺跡の南端部で井尻Ｂ１号墳など５世紀後半の古墳が存在するため遺跡全域が墓域となったためとされることもあるが、現在までで古墳の周溝等の遺構や遺物が確認された区域は限られている。６世紀代には少量であるが須恵器も出土するようになる（11次・17次Ａ区調査）が現在遺構は確認されていない。７世紀末から８世紀初頭になると台地中央部で寺院・官衙遺構が構築され、遺構・遺物が多く確認できるようになる。この時期の遺構は台地北端の22次調査や南端に近い６次調査などでも確認されており遺構の分布する範囲は粗密があるものの南北約650m、東西250mと広域に渡ることが判明した。この時期の瓦が出土する遺跡は周辺で那珂川の対岸に位置する三宅廃寺、同じ右岸では那珂遺跡、高畑遺跡など密集している。これらの遺跡群は高畑遺跡が大宰府から北に伸びる東側官道に面しており、三宅廃寺や井尻Ｂ遺跡は西側官道近くに位置し、井尻Ｂ遺跡からは北に延びる道路状遺構も確認され西側官道と那珂郡衙等を結ぶ道である可能性も考えられるなど官道との繋がりが深い。

1　井尻Ｂ遺跡
2　雀居遺跡
3　東那珂遺跡
4　比恵遺跡
5　那珂遺跡
6　五十川遺跡
7　那珂君休遺跡
8　板付遺跡
9　高畑遺跡
10　諸岡Ａ遺跡
11　諸岡Ｂ遺跡
12　笹原遺跡
13　三筑遺跡
14　南八幡遺跡
15　井尻Ａ遺跡
16　寺島遺跡
17　横手遺跡
18　大橋Ｅ遺跡
19　三宅Ｃ遺跡
20　三宅Ｂ遺跡
21　野多目Ｃ遺跡
22　日佐遺跡
23　弥永原遺跡
24　日佐原遺跡
25　須玖遺跡群
26　岡本遺跡群

Fig. 1　井尻Ｂ遺跡群の位置（1/25,000）

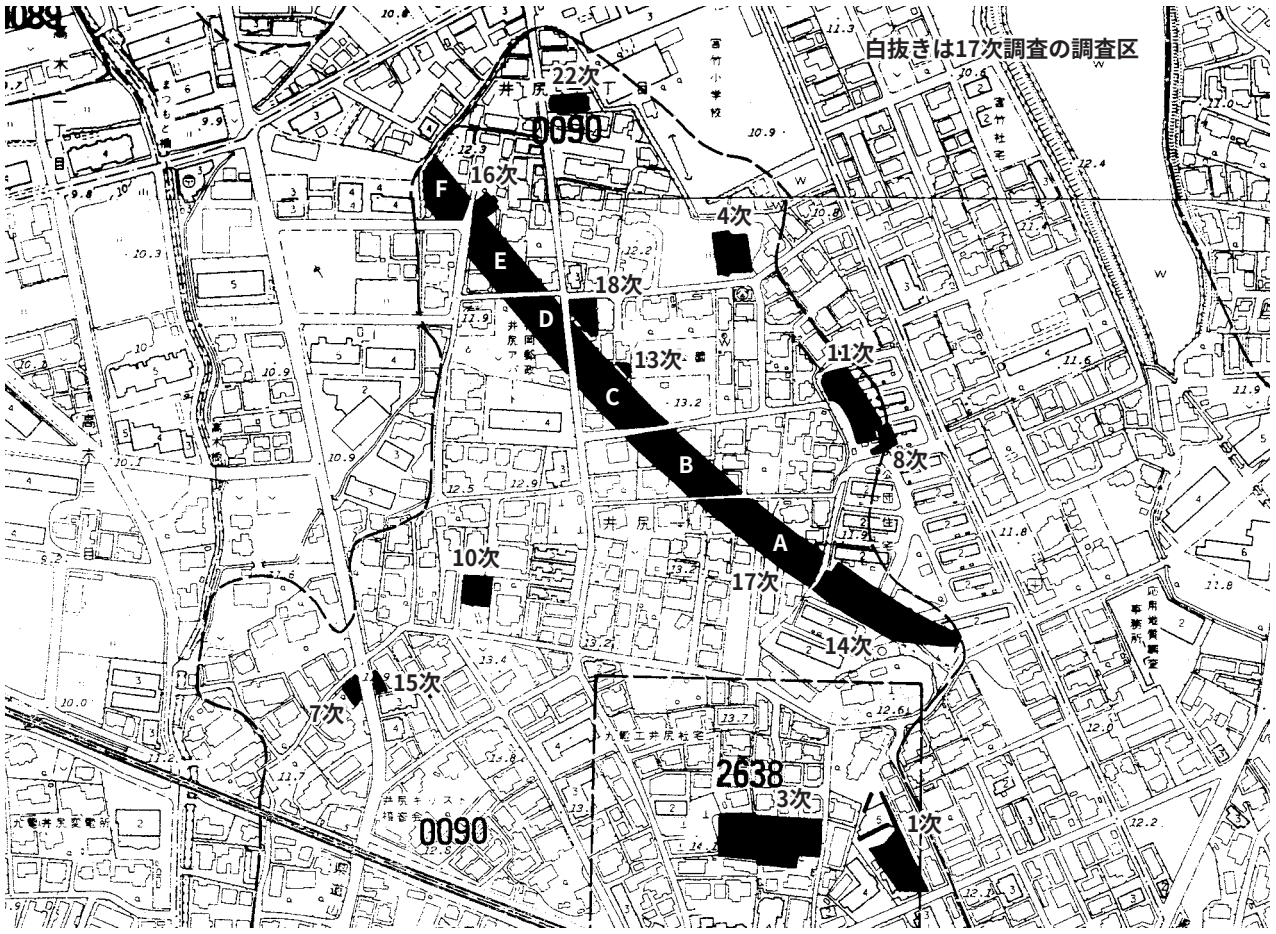


Fig. 2　井尻Ｂ遺跡群北側発掘調査地点位置図（1/10,000）

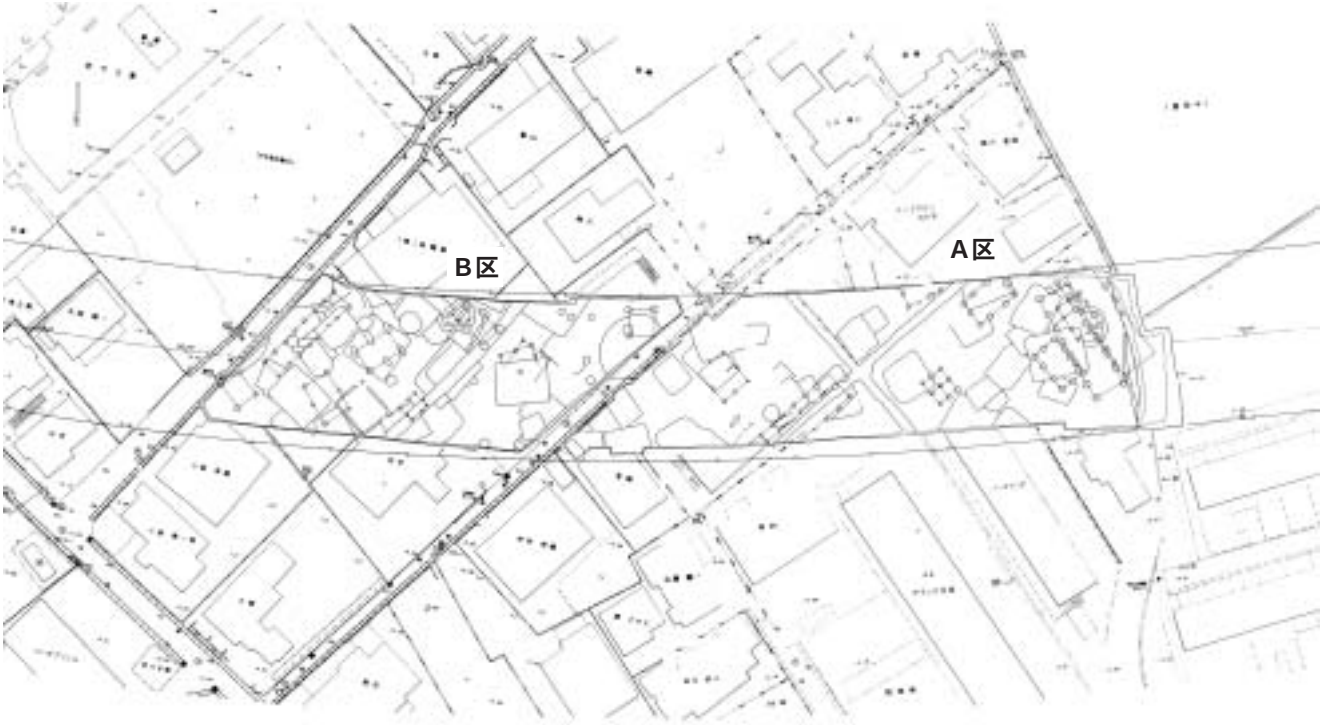


Fig. 3　Ｂ区周辺図（1/1,000）

Fig. 4　B区全体図（1/160）

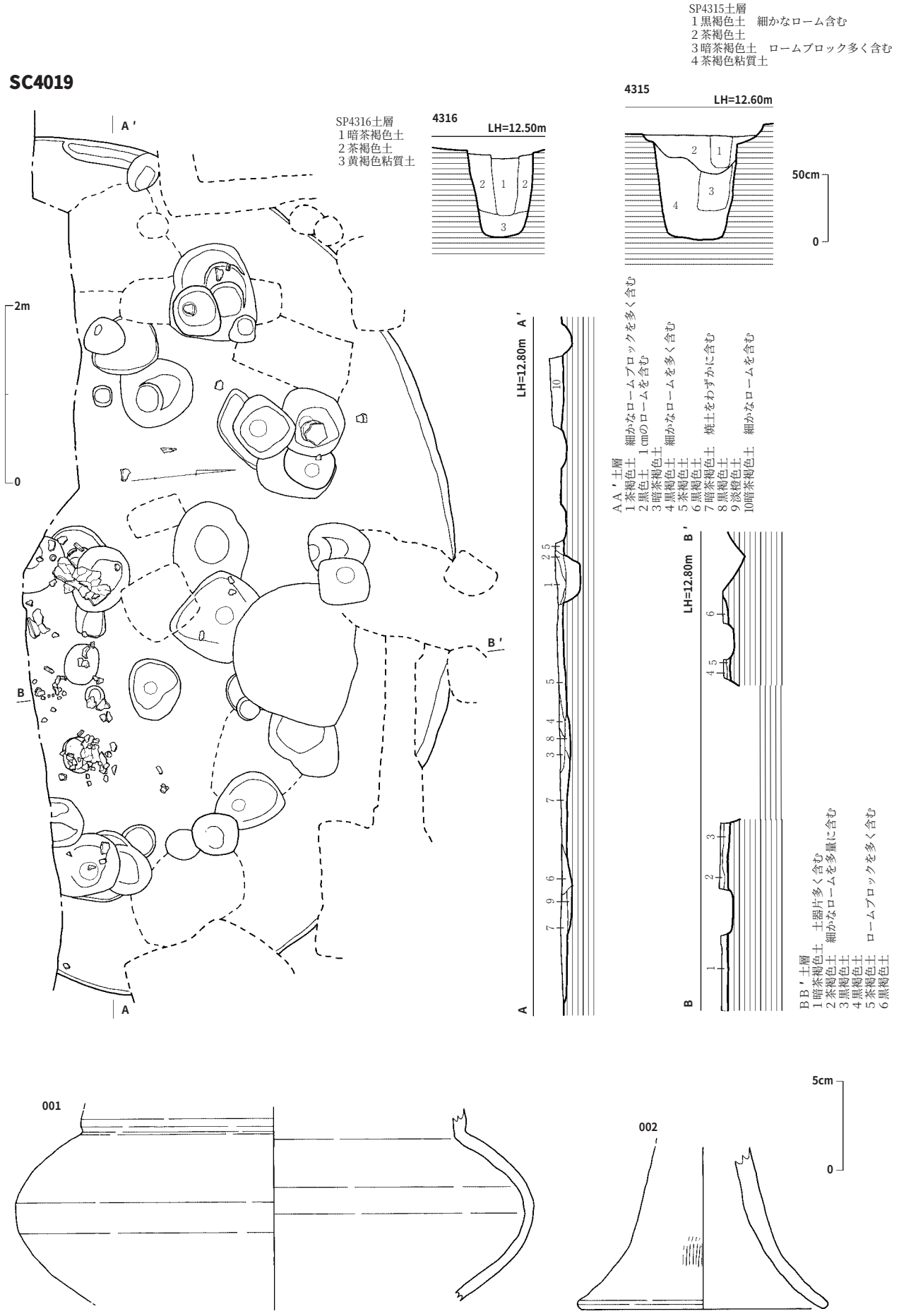


Fig. 5　SC4019実測図１（1/60・1/40・1/3）

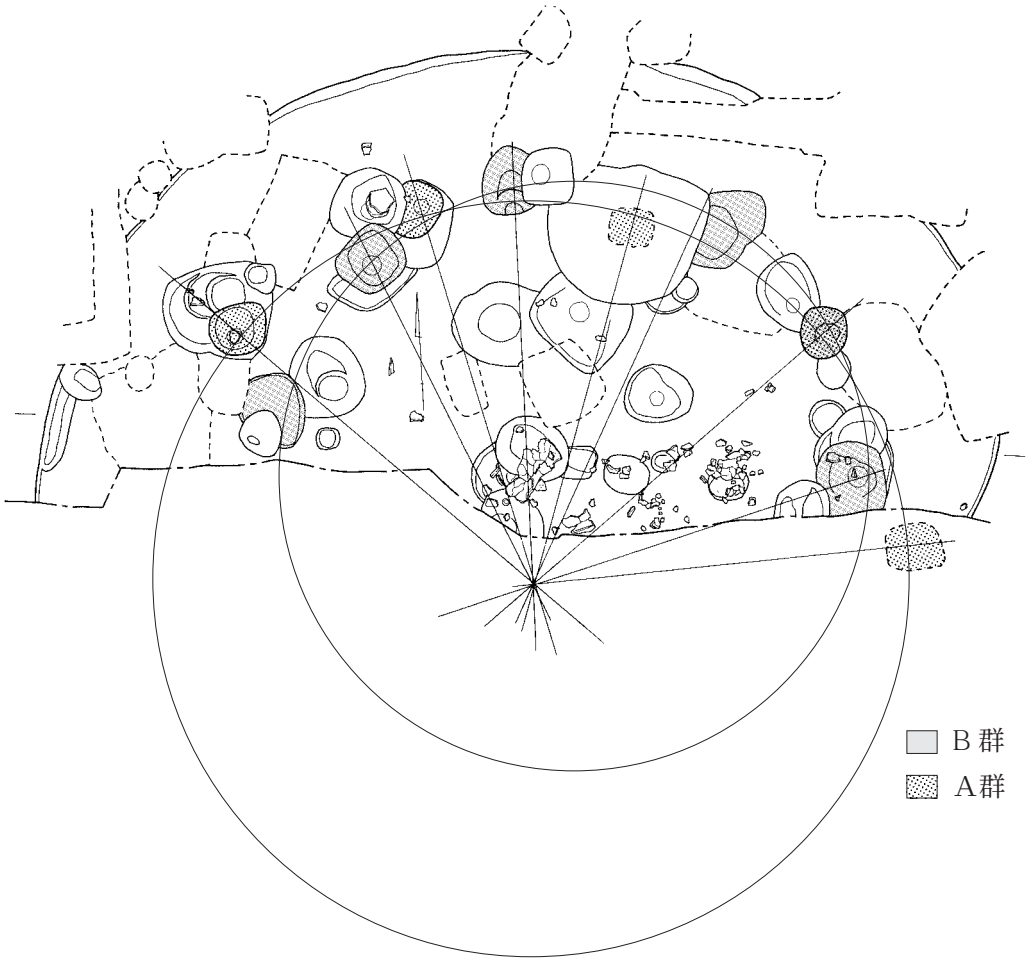


Fig. 6　SC4019　実測図２

第２章　Ｂ区の調査

１．弥生時代から古墳時代の遺構と遺物

１）竪穴式住居

SC4019（Fig.5～７）調査区南端部の東寄りに位置する大型の竪穴式住居で遺構の半分以上が調査区外に延びる。平面はやや潰れた円形を呈し現状で径9.8m、検出面からの深さ16㎝ を測り、推定直径は10.5m前後になると思われる。調査前にあった木造２階建て建築物の基礎に削られて遺存状態は悪い。壁溝は西端の一部分で確認した。柱穴は外壁から１m程離れて円形に並び10～11本（Ａ群）になると考えられ（Fig.6)、調査区内ではその内の３本を確認した。柱穴間の長さは芯々で2.2mを測る。柱穴掘方は円形を呈し径53～58㎝、深さ78～95㎝ を測る。これらの柱穴とは異なった間隔で円形に並ぶ柱穴群（Ｂ群）が存在するのは、柱建替えの柱穴群か。遺物の多くは中央部寄りの床面から５～10㎝ 浮いた状態で出土した。出土遺物（Fig.5・７　001～018)。001は広口壺の胴部で外面ミガキを施し一部赤色顔料が残る。002は器台脚部、003～008は甕口縁、009～011は甕底部、012～014は壺、015は円盤形土製品、016は取瓶片で内面は熱のため暗褐色を呈し焼き締まり、一部緑青が付着する。017は砂岩製の砥石、018は須恵器坏蓋である。016の取瓶片は青銅器生産に関連する遺物であるが、018など新しい遺物も含まれており、時期は中期後半に特定できない。

SC4049（Fig.8）　調査区中央部の西寄りに位置し、遺構の南西隅が調査区外に延びる。平面はわずか

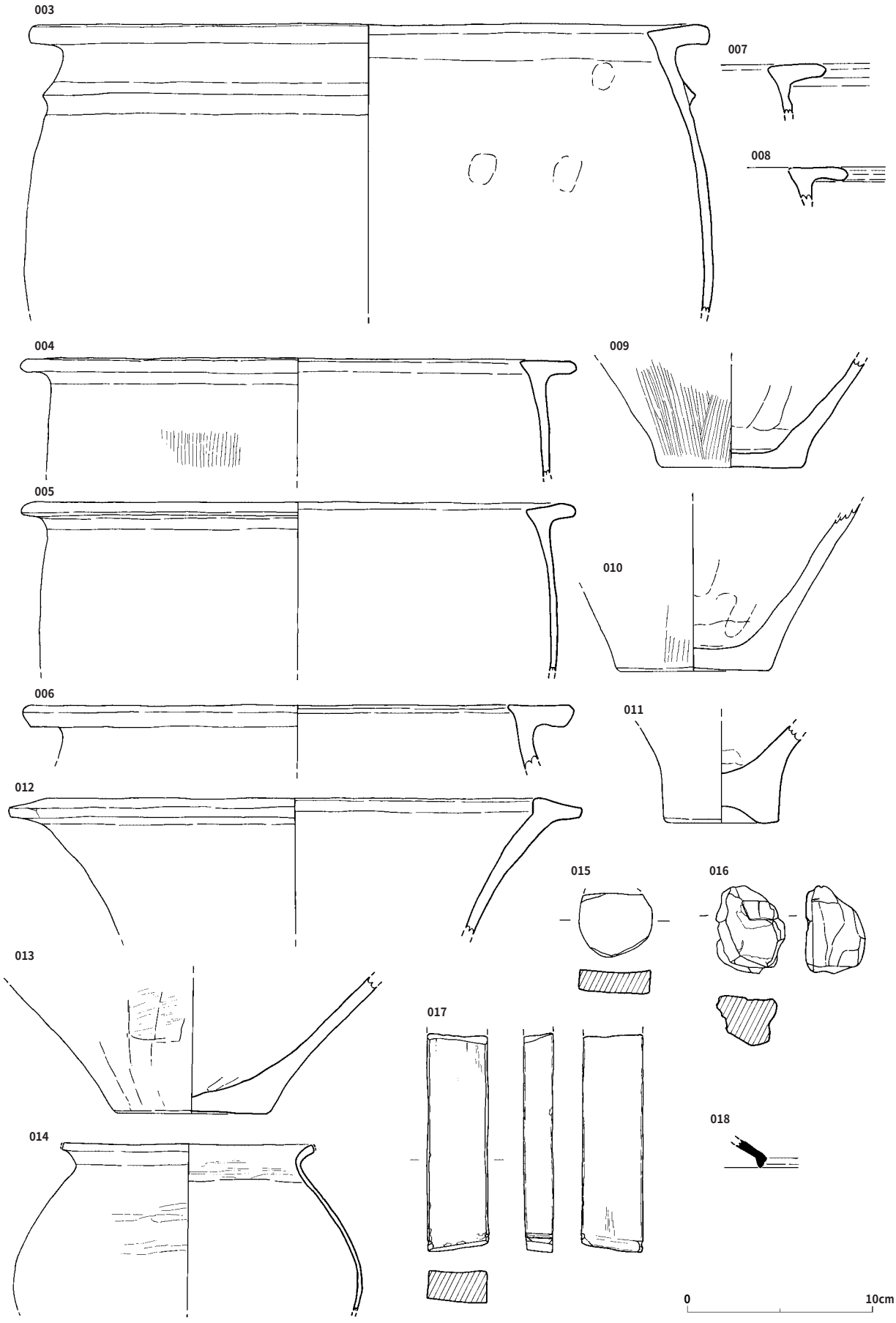


Fig. 7　SC4019実測図３（1/3）

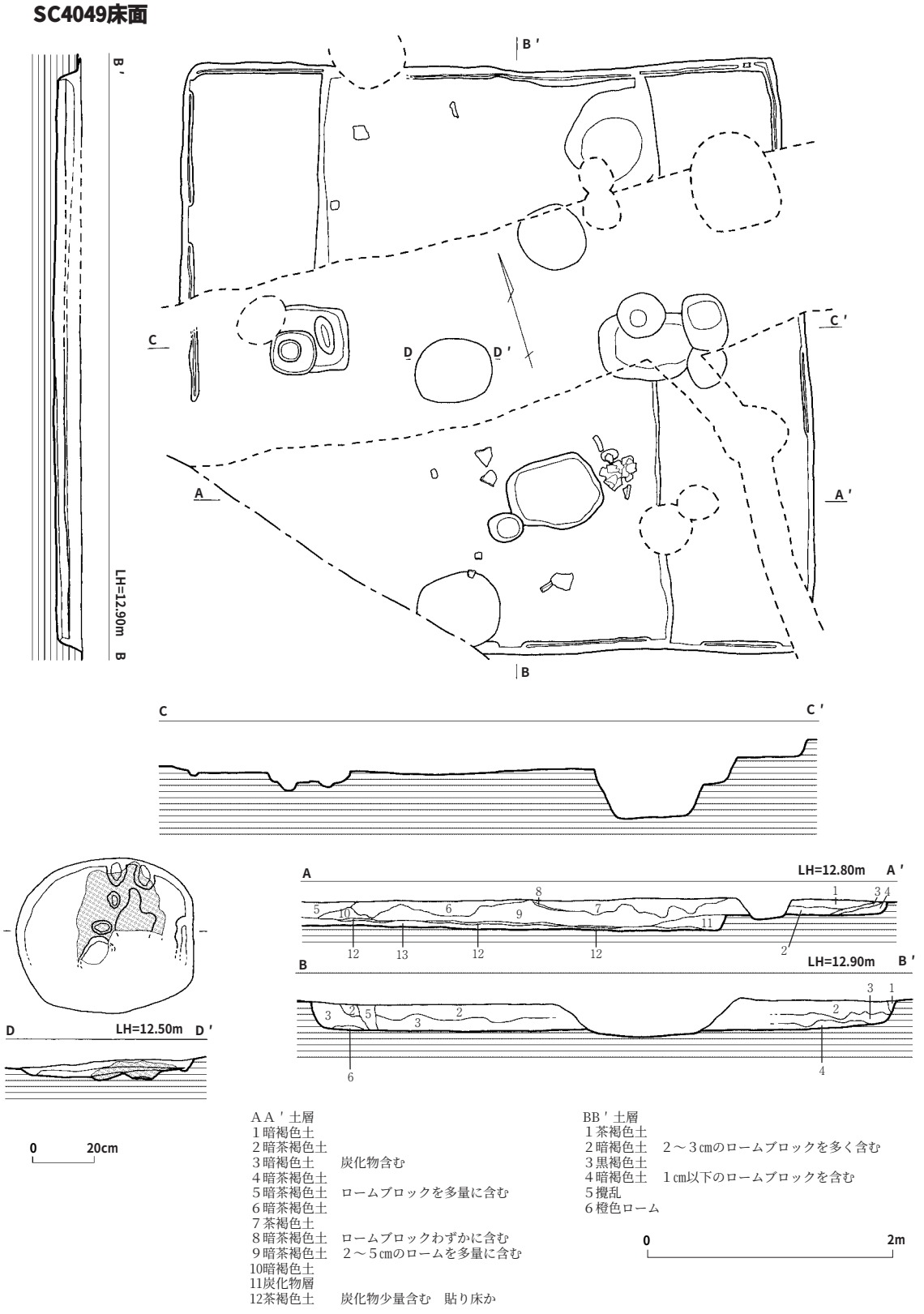


Fig. 8　SC4049実測図１（1/50・1/20）

に東西に長い長方形で主軸を N-75°-W にとる。長径5.1m、短径4.8m、床面までの深さ33㎝を測る。東西両短辺にベット状遺構がつき幅98～119㎝、床面からの高さ５～10㎝ を測る。ベット状遺構部分は低床部から４～９㎝高く段をつけた後、基盤層の暗橙色粘質土で盛土を施す。壁溝は東南隅を除いて断続的に巡り、幅５～９㎝、深さ３㎝を測る。低床部中央で炉を検出した。炉は長径58㎝、短径51

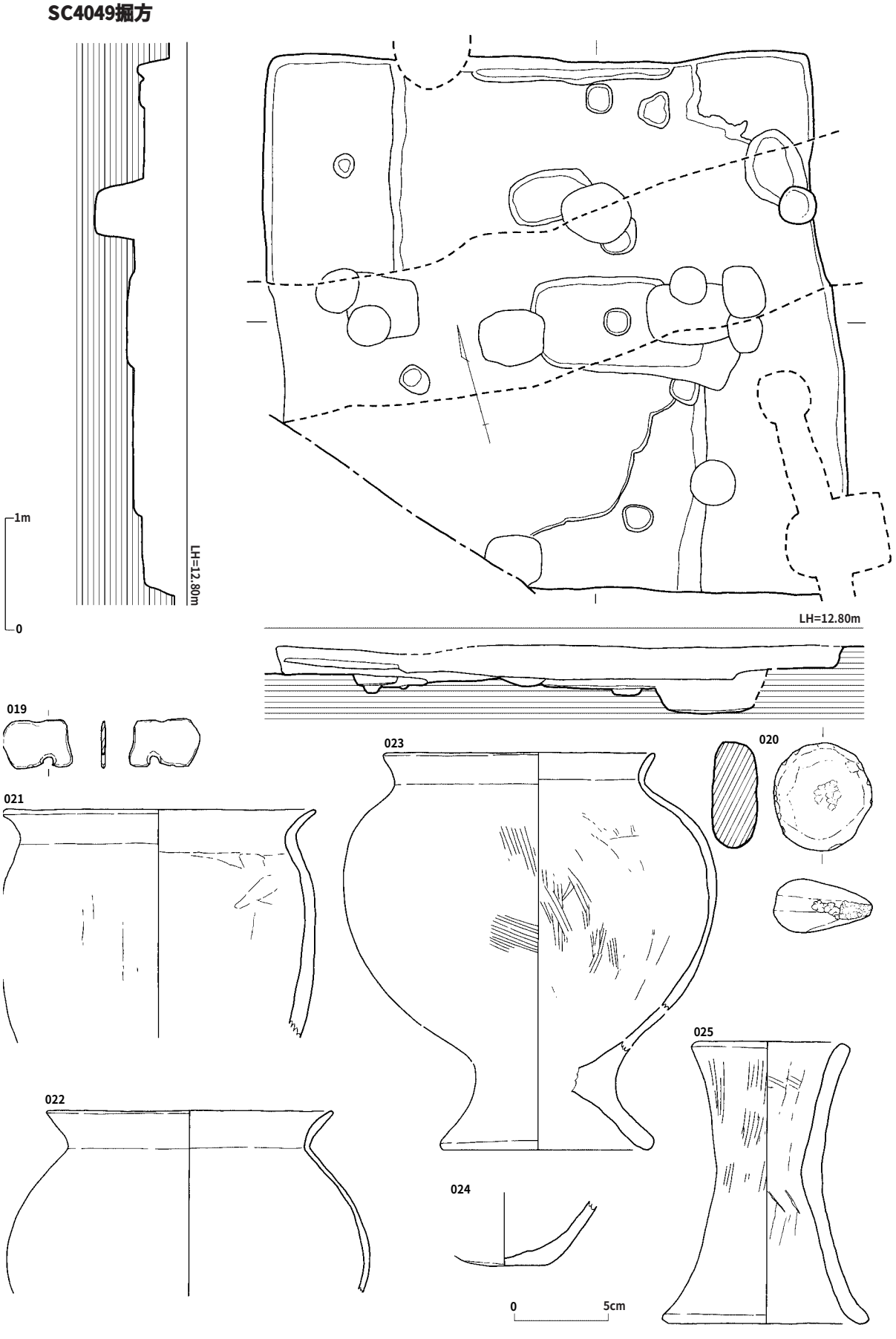
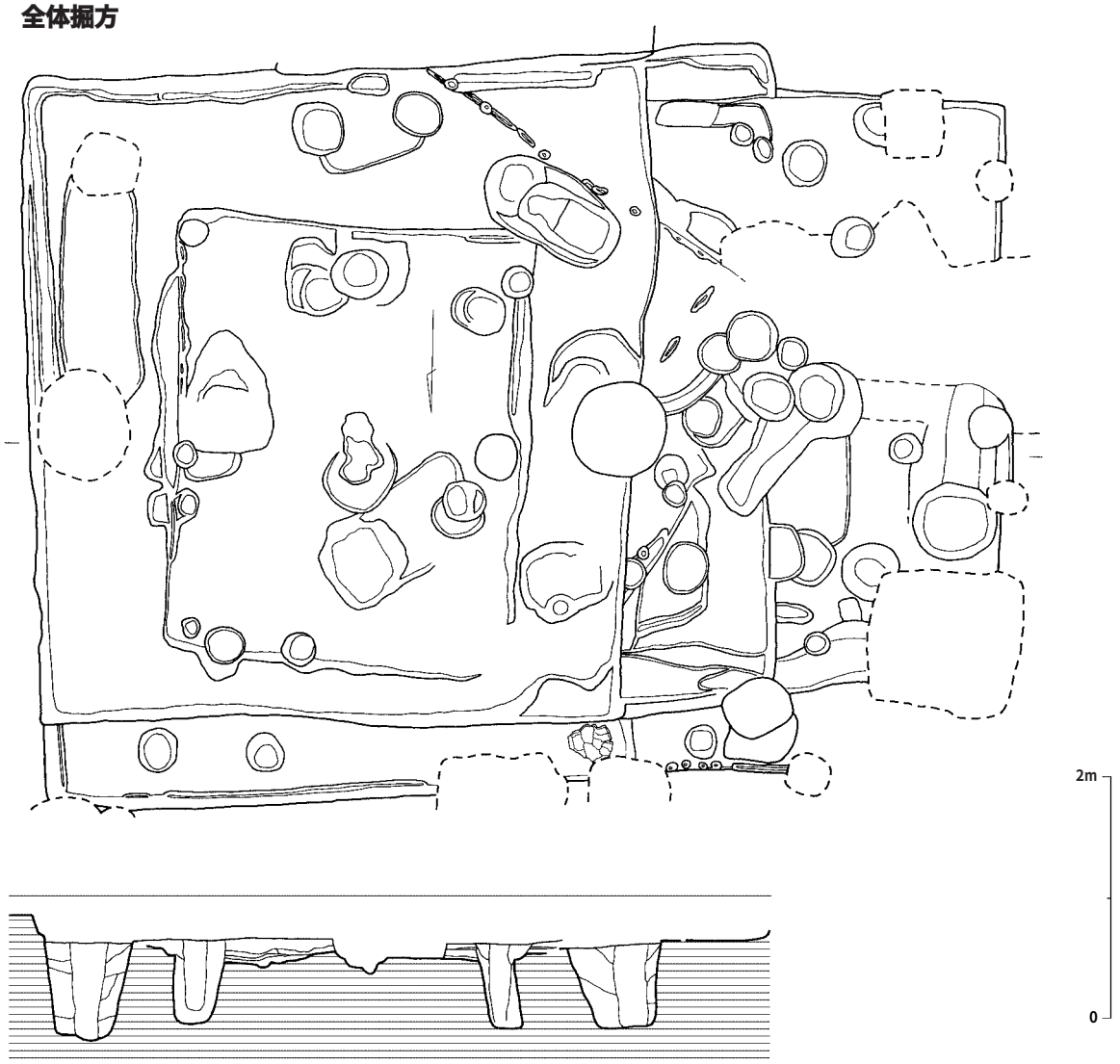


Fig. 9　SC4049実測図２（1/50・1/3）

全体掘方



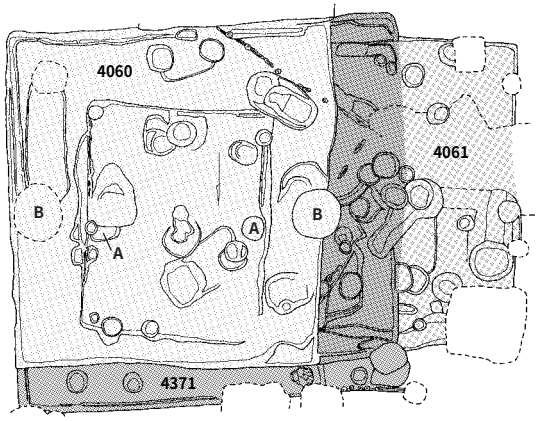


Fig. 10　SC4060実測図１（1/60）

㎝、深さ５㎝を測る。底面は凹凸が多く中央部が赤化する。柱は二本柱で柱間は約３ｍを測る。柱穴掘方は長方形を呈し長径63～75㎝、深さ16～38㎝を測る。柱穴掘方がベット状遺構を切る。低床部は東西2.4m、南北4.6mの長方形を呈す。炉と東側主柱穴の間に長さ1.9m、幅86㎝を測る長方形の土坑を確認した。土坑底面は柱穴側が低い。低床部中央から南側を一段深く掘り下げ、全体に４～６㎝程の貼床を施す。出土遺物（Fig.9　019～025）。019は石包丁片、020はタタキ石、021～023は壺、024は甕底部でわずかにレンズ状を呈す。025は器台である。

SC4060（Fig.10～12）　調査区中央に位置しSC4086を切る。主軸は南北にほぼ直交する。当初は主軸が同方向の竪穴式住居４軒の切合いであ

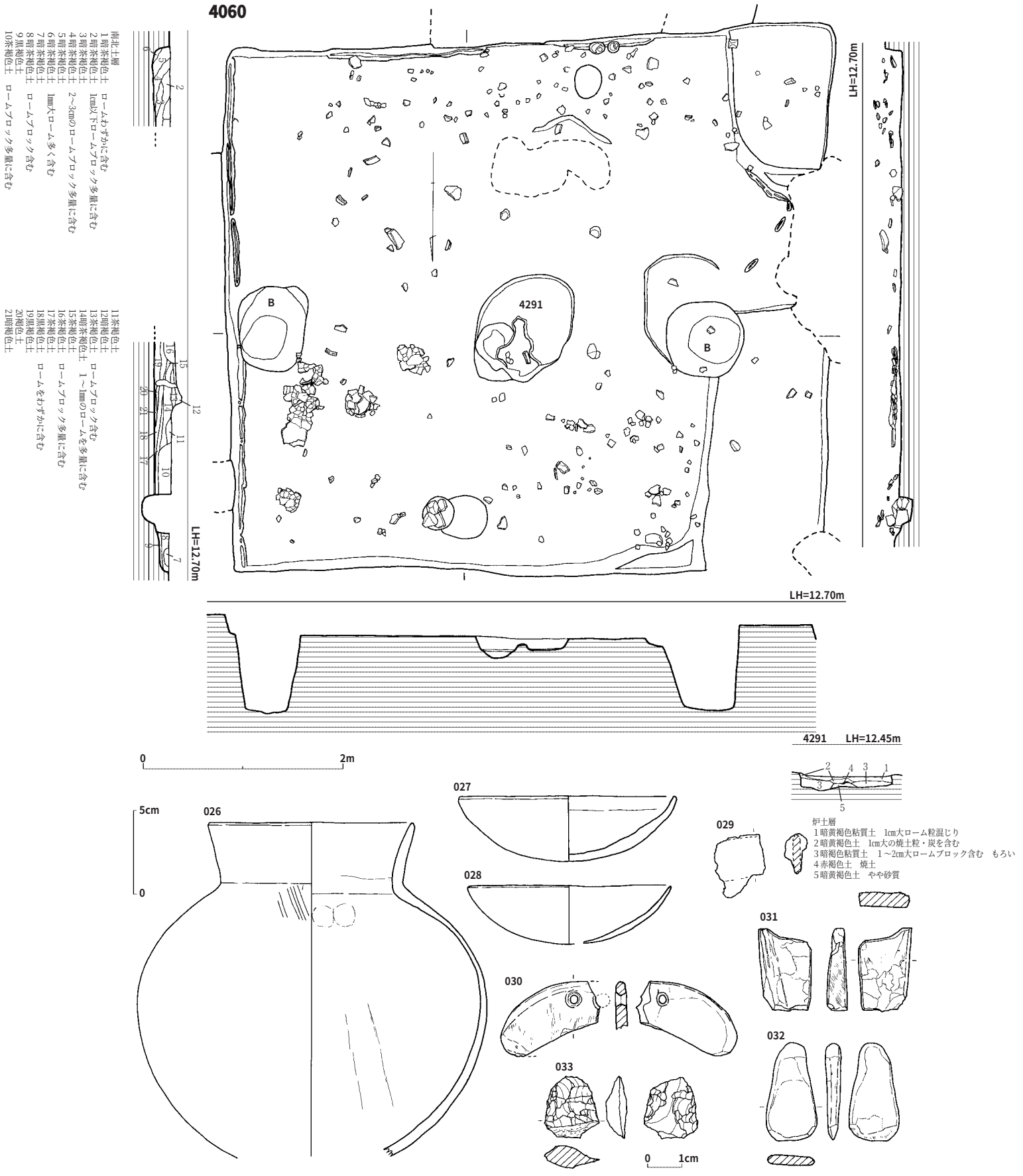
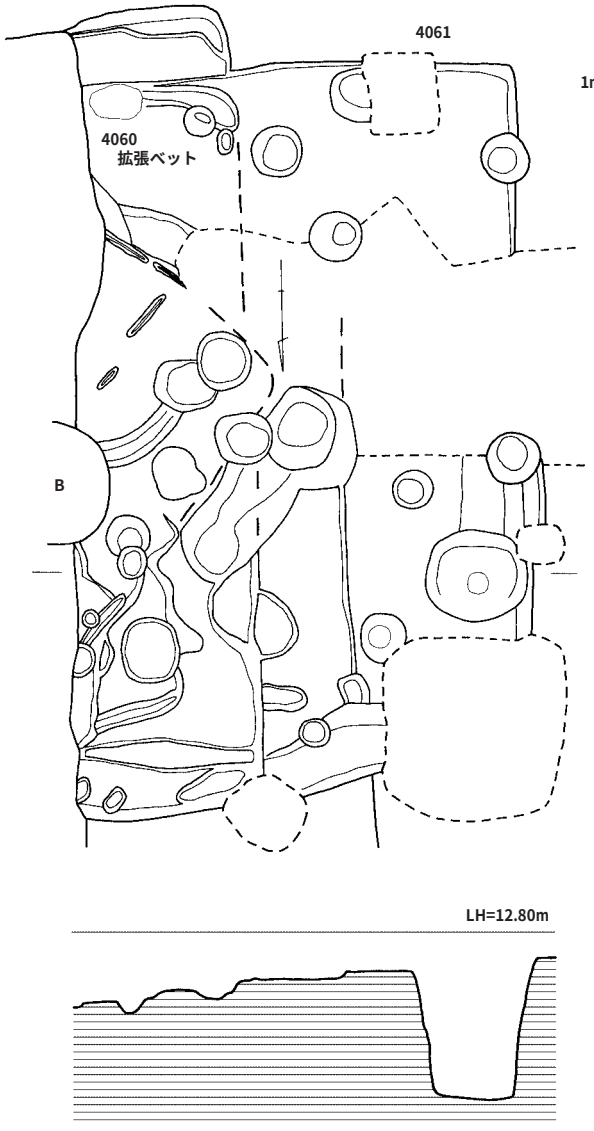


Fig.11 SC4060実測図２（1/50・1/3・2/3）



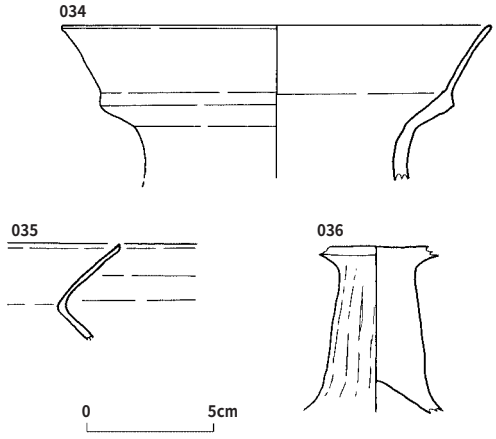


Fig. 12　SC4060実測図３（1/50・1/3）

ると考えた。（Fig.10　下図）。4060は東西５m、南北5.1mのほぼ正方形を呈しベット状遺構が四周する。主柱穴はＡとＡ′で芯々で2.4m、柱穴径28～35㎝、深さ67～69㎝を測る。炉は低床部中央に位置する。その後4060全体をベット状遺構の高さまで埋めて低床部とし西側にベット状遺構を拡張している。（Fig.10下図の濃いアミ部分が拡張したベット）ちなみにベット状遺構は現在西側のみであるが東側にもあったものと思われる。このとき主柱穴はＢとＢ′になり、これはA、A′線の延長上に位置する。BB ′は芯々で4.6mを測り、柱穴は径76～89㎝、深さ66～83㎝を測る。低床部とベット状遺構の高低差は当初13㎝、拡張後22㎝を測る。拡張後のベット部も盛土があったと思われるが削平されている。更に東側の4061と北側の4371との関係は不明であるが4371の東端壁が4060の東壁と揃うことや4061の南北壁が4060の南北壁とほぼ揃うことからこれも拡張である可能性があり、全体で東西8.1m、南北6.1mを測る中型の竪穴式住居となる。遺物は4060の拡張後床面直上で出土したが器壁が薄く細片化しており接合できないものが多い。出土遺物（Fig.11・12　026～036)。026は壺、027･028は土師器鉢、029は鉄片、030は凝灰岩製石包丁片、031は頁岩製砥石、032は玄武岩の薄い礫で端部（図では右側下端）にかすかに擦痕がみられる。用途不明であるが同様の物がＡ・Ｂ区で多く出土する。033は黒曜石剥片、034は二重口縁壺口縁部、035は甕口縁、036は高坏脚部である。

SC4062（Fig.13）　調査区の中央部やや南西寄りに位置し、遺構の南西部が調査区外に延びる。SC4061とSC4049に切られる。南東隅は緩やかな隅丸をなす。現状で東西7.1m、南北5.1m、床面までの深さ15㎝を測る。南壁沿いに壁溝を確認した。幅３～７㎝、深さ１～４㎝を測る。炉（4289）は東西方向の長方形で長径87㎝、短径67㎝、深さ９㎝を測る。一度内面を赤化するまで焼いた後炭化物を詰め円形に窪ませて粘土を貼り炉としている。南東隅と南隅の土坑（4376・4183）は住居に伴う。4376は長径74㎝を測る。4183は南壁に沿う東西に長い土坑で現状東西1.7m、南北98㎝を測る。住居の覆土は底面近くが黒色土化し、その上層はロームブロックを多く含む。住居廃棄後しばらく放置され、その

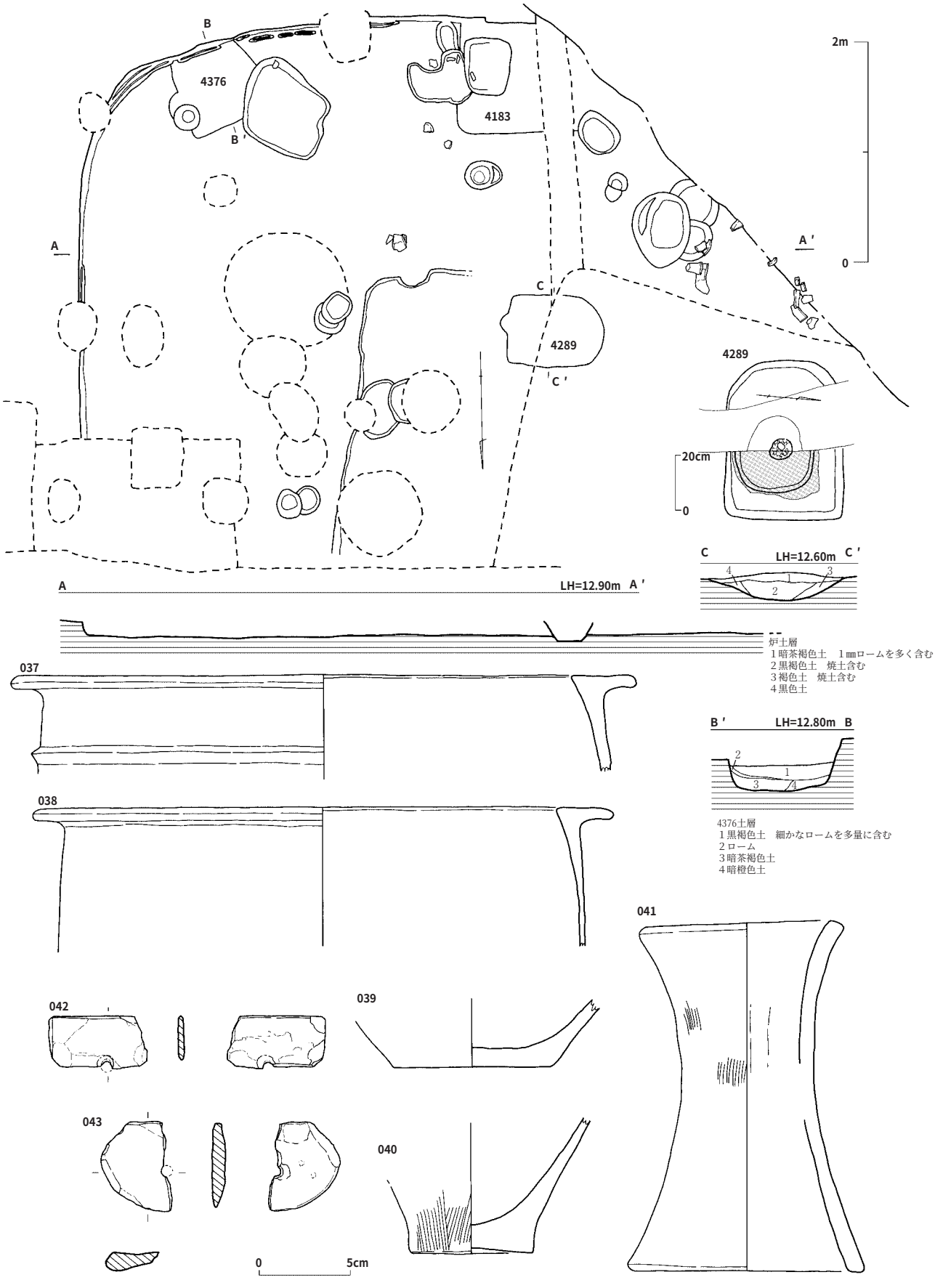


Fig.13　SC4062実測図（1/50・土層1/20・1/3）

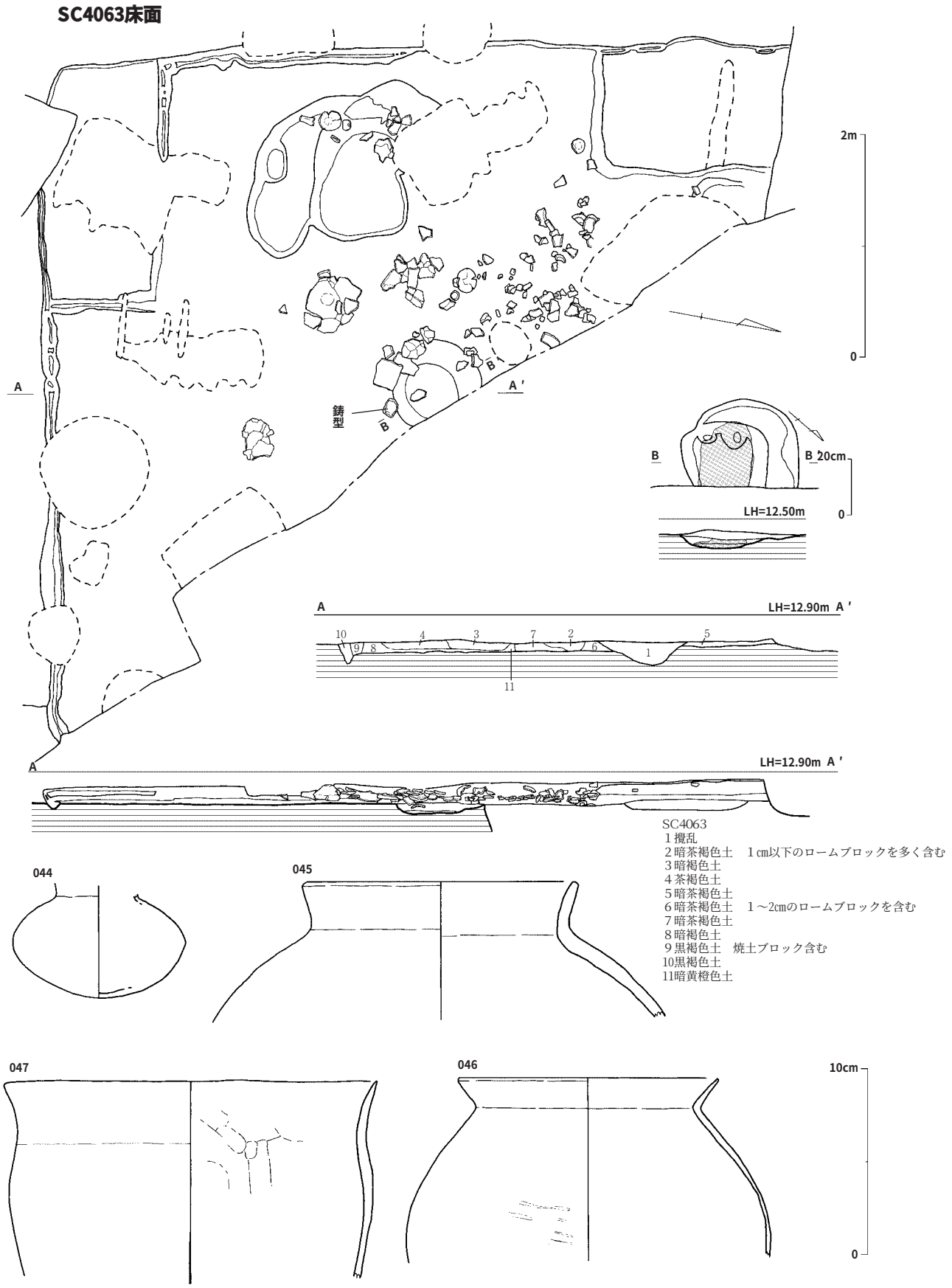


Fig. 14　SC4063実測図１（1/50・1/40・1/3）

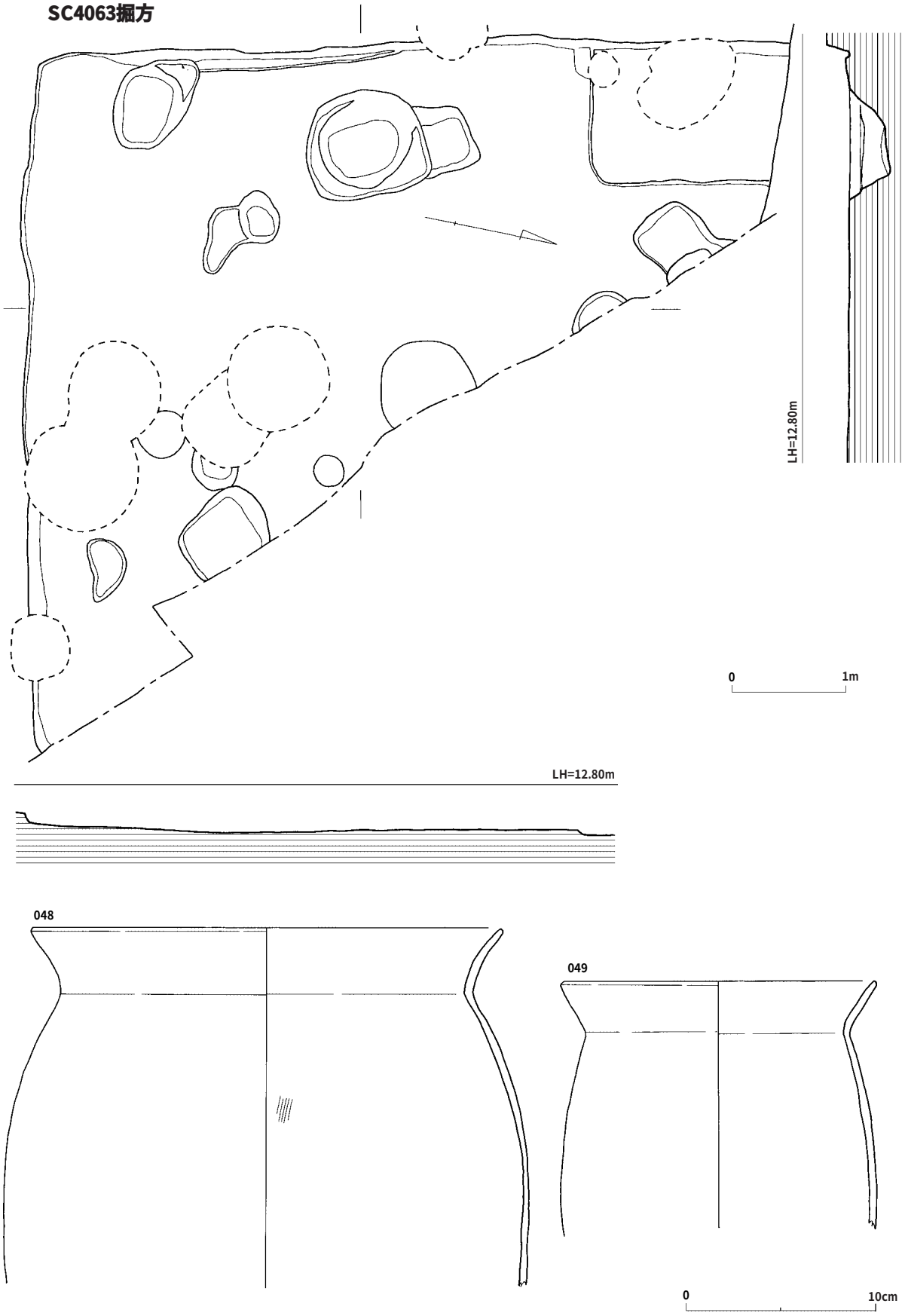


Fig. 15　SC4063実測図２（1/50・1/3）

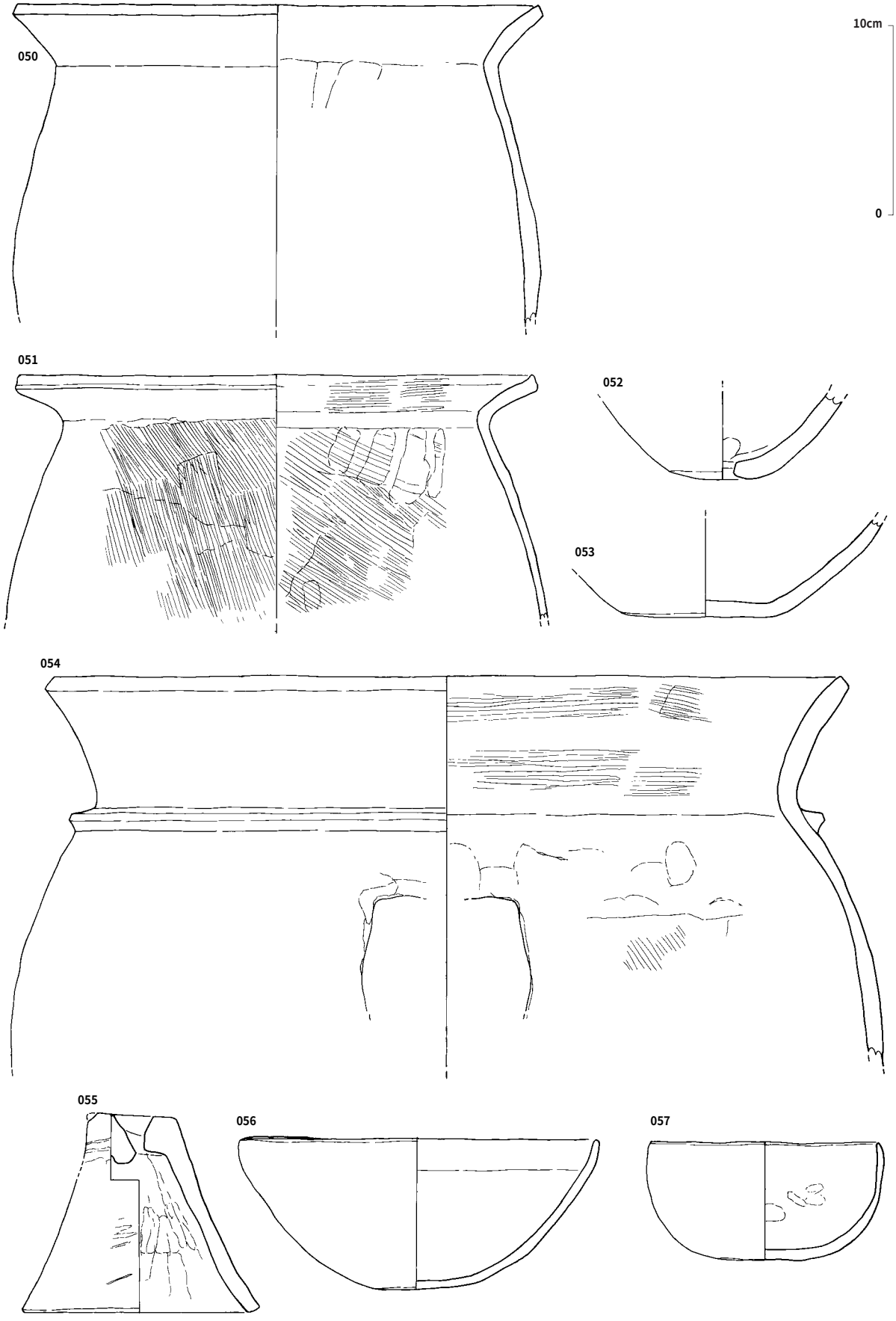


Fig. 16　SC4063実測図３（1/3）

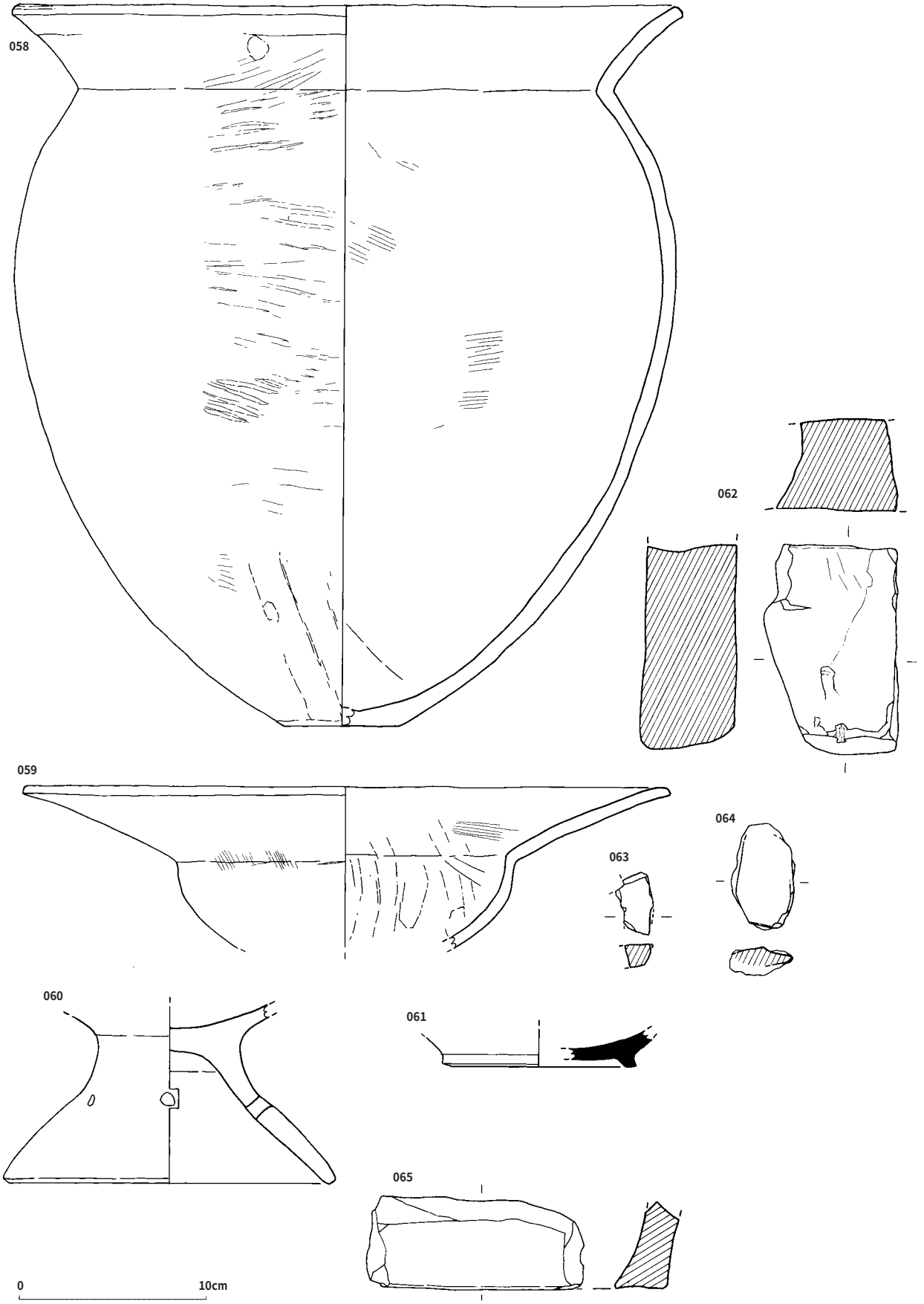


Fig. 17　SC4063実測図４（1/3）

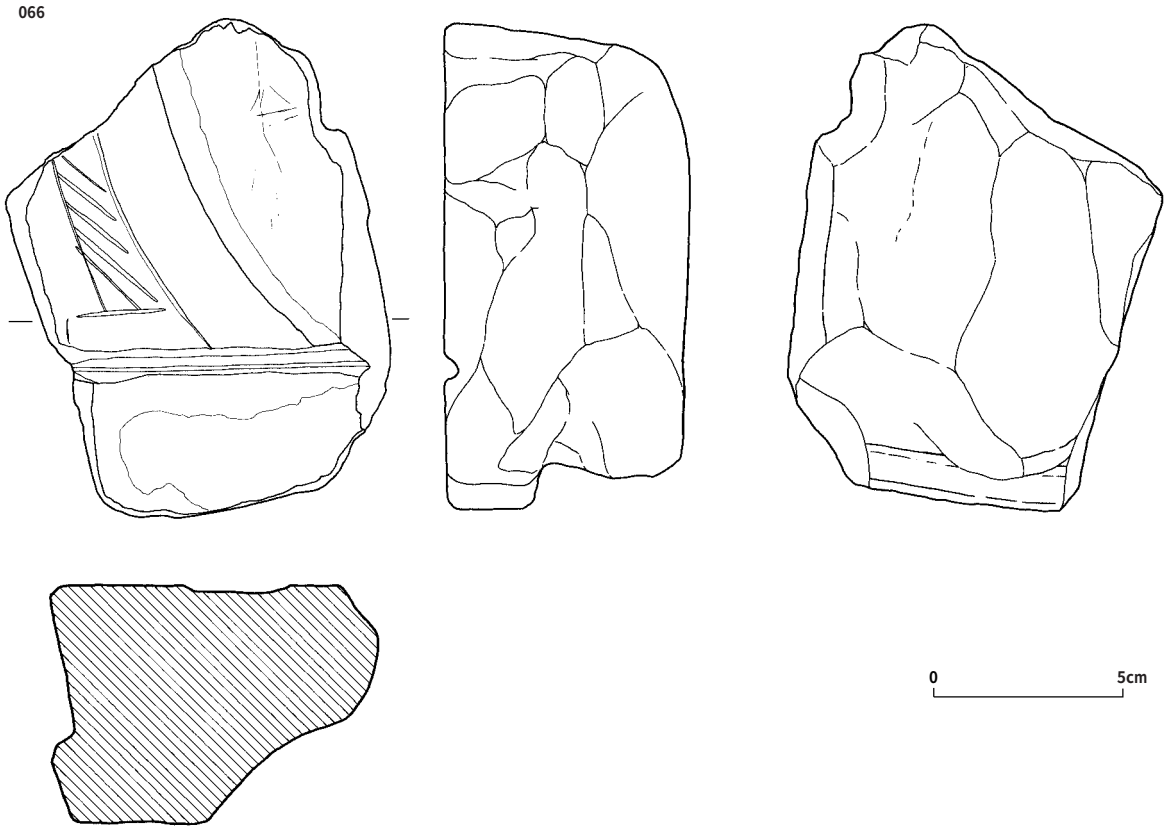
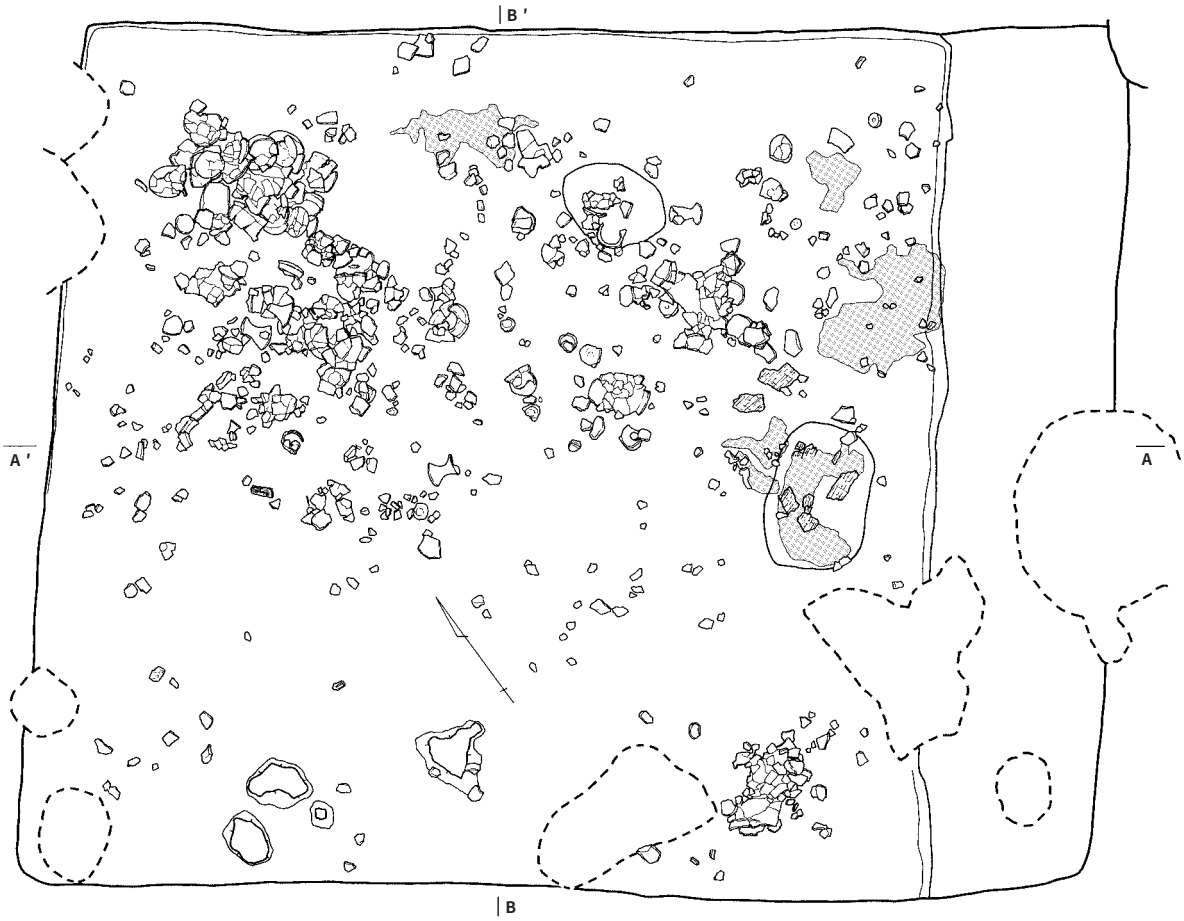


Fig. 18　広型銅戈鋳型実測図（1/2）

後人為的に埋められたものと思われる。出土遺物（Fig.13　037～043）。037・038は甕口縁、039・040は甕底部、041は器台、042は砂岩製の石包丁片、043は石包丁片か。

SC4063（Fig.14～18）調査区中央やや南東寄りに位置し、遺構の東半分が調査区外に延びる。主軸をN-12.5°-Wにとり、平面形は南北に長い長方形で、現状で南北6.6m、東西6m、床面までの深さ28cmを測る。西辺の南北両端に幅96～107cmのベット状遺構がつき、低床部からの高さ6～15cmを測るが北側ベットは低床部から5cm上までは削出しで、その上に盛土を行う。南側ベットは低床部面からの完全な盛土である。壁溝は南側に集中しており、低床部外周に沿う。幅3～7cm、深さ3～6cmを測る。炉は低床部中央に位置し径約50cm、深さ13cmを測る。南側が一段深く底面全体が熱で赤化する。主柱穴は不明。床面全面に2～5cmの貼床を施し、貼床の上面はわずかに黒色を呈す。床下掘方では西壁沿いで溝を確認した。遺物は炉の周辺で多く出土したが、ほとんどが床面から2cm以上浮いた状態である。炉の南端では床面から3cm浮いた状態で広型銅戈鋳型が出土した。出土遺物（Fig.14～18　044～066）。044～046は壺、047～053は甕で052は底部は狭くすぼまり焼成前に穿孔を施す。054は甕棺片、055は支脚。056・057は土師器鉢、058は甕、059は鉢で口縁が広く径34cmを測る。060は高坏、061は須恵器高台付き坏である。SD4017からの紛れ混みか。062は砂岩製砥石、063は不明土製品で左側両端に透かし状の孔があく。064は鉄片、065は移動式竈、066は広型銅戈の鋳型である。現状で長さ13.1cm、幅10.3cm、厚さ5.9cm、重さ881gを測る。鋳型は長石石英斑岩を使用し、鋳型の基部しかも幅半分程しか遺存していない。鋳型面は被熱のため青黒く焼けており、実際に使用されたことが判る。樋に綾杉文がみられる。中心線は基部に向かって緩やかに外側に広がり、枝は中心線から20°～40°の角度をなす。綾杉文は内側が砥石に転用されたため消滅してしまい、現状では外側しか見えない。

SC4064遺物出土状況



BB'土層
1茶褐色土
2暗褐色土
　2～3㎝のロームブロックを含む
3黒褐色土
4暗茶褐色土
5茶褐色土　ロームブロックを多量に含む
6茶褐色土　ロームブロックを多量に含む
7茶褐色土
8暗茶褐色土
9暗茶褐色土　1㎜のロームを多量に含む
10暗茶褐色土　炭化物をわずかに含む
11焼土ブロック
12黒褐色土　炭化物含む
13暗茶褐色土
14黒褐色土
15暗茶褐色土
16黒褐色土
17黄褐色土
18暗茶褐色土

AA'土層
1茶褐色土
2茶褐色土　ロームブロック少量含む
3暗茶褐色土　ローム多量に含む
4攪乱
5茶褐色土　ロームブロック含む
6茶褐色土　炭化物含む
7茶褐色土　ロームを多量に含む
8暗茶褐色土　焼土ブロック・炭化物を含む
9茶褐色土
10暗褐色土　焼土ブロック含む
11茶褐色土
12暗褐色土
13焼土層　最下層に炭化物を多く含む
14暗褐色土
15暗褐色土
16黄褐色ローム
17明茶褐色土　ローム多量に含む
18暗褐色土　ロームブロック含む
19暗褐色土

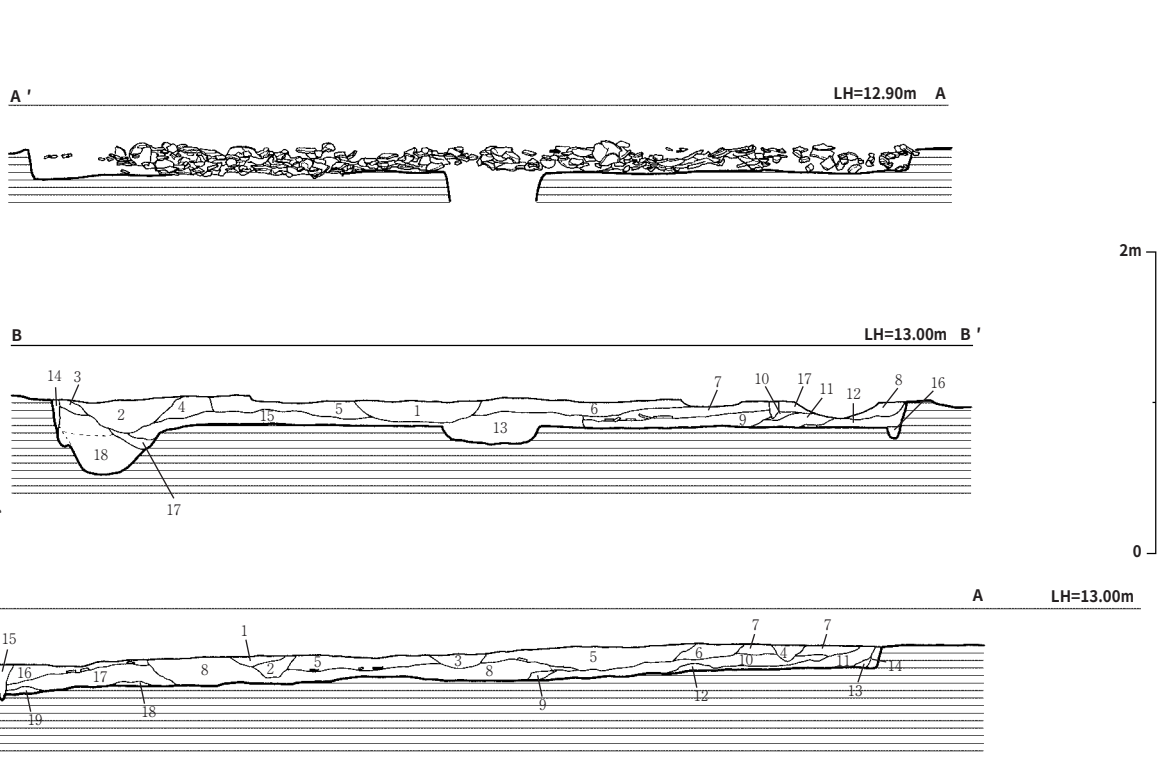


Fig.19　SC4064実測図1（1/50）

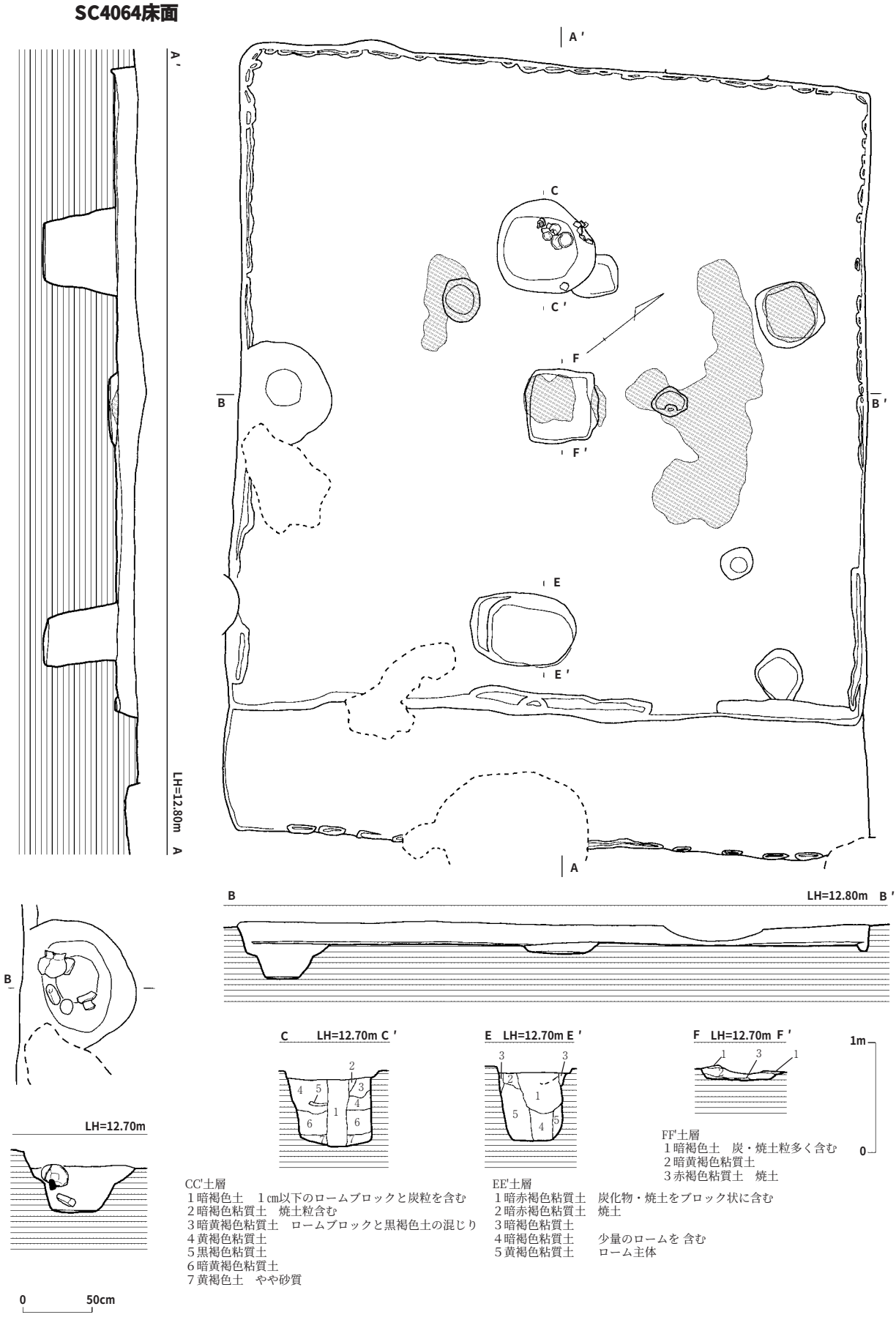


Fig. 20　SC4064実測図２（1/50・1/40）

SC4064掘方

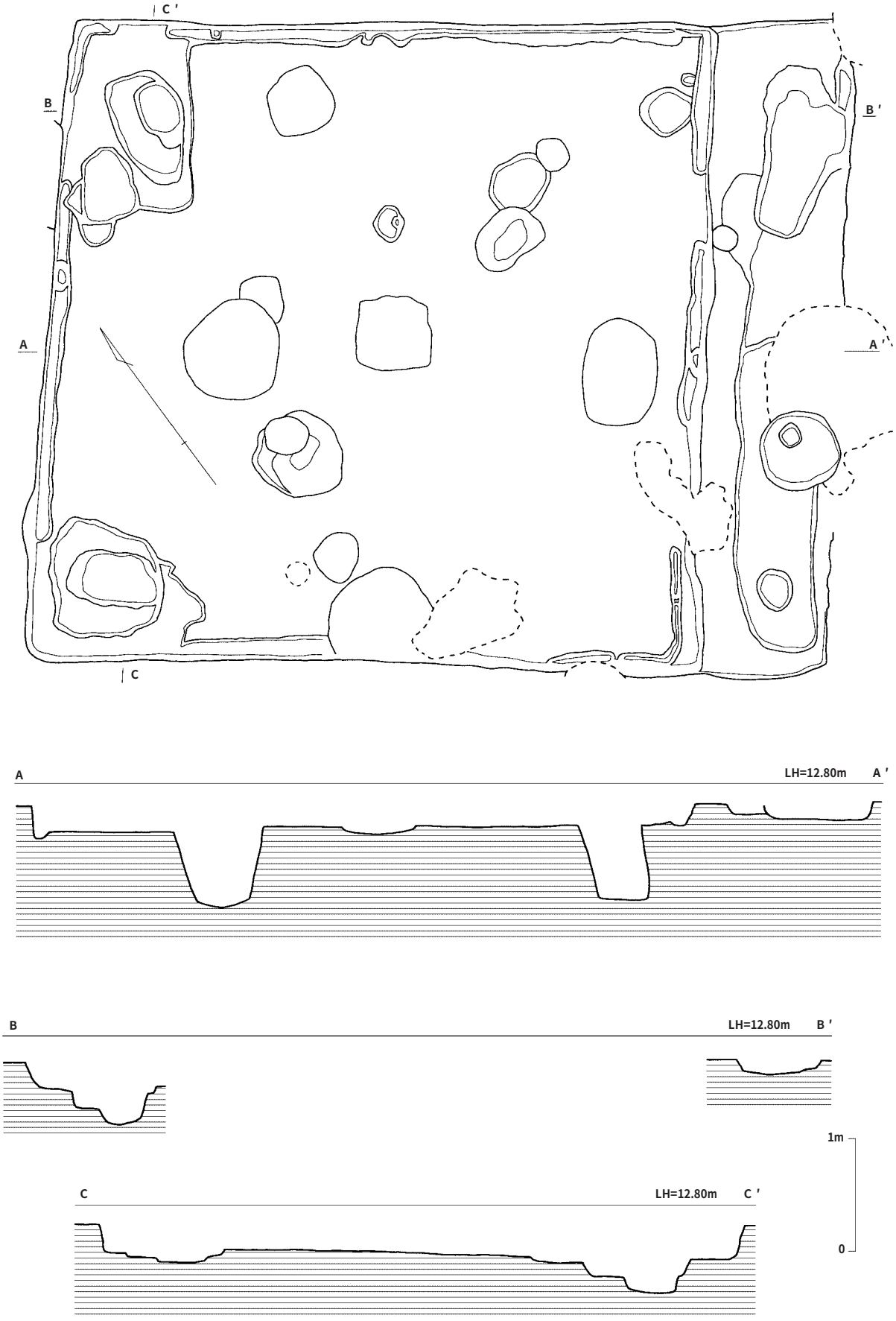


Fig. 21　SC4064実測図３（1/50）

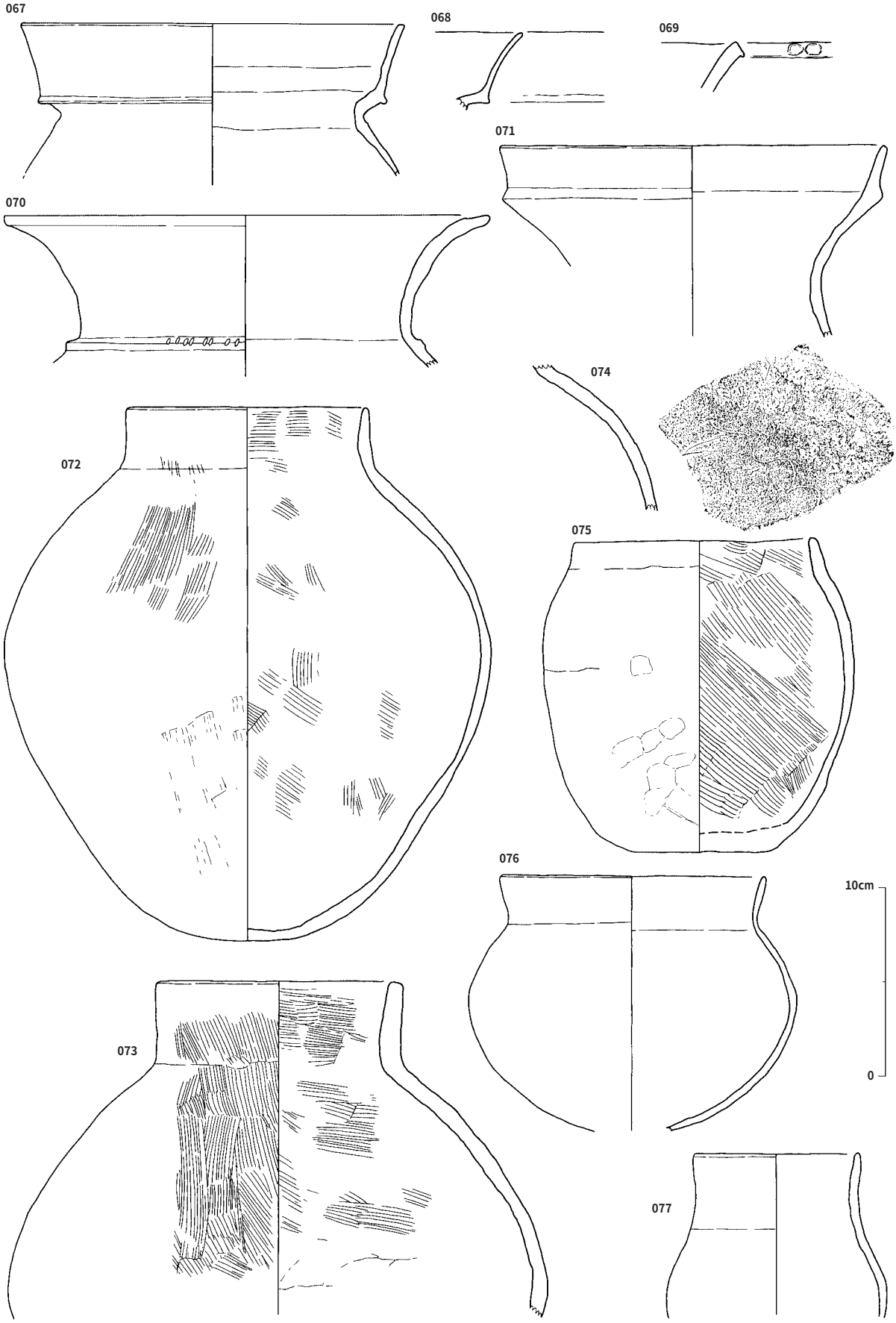


Fig. 22　SC4064遺物実測図１（1/3）

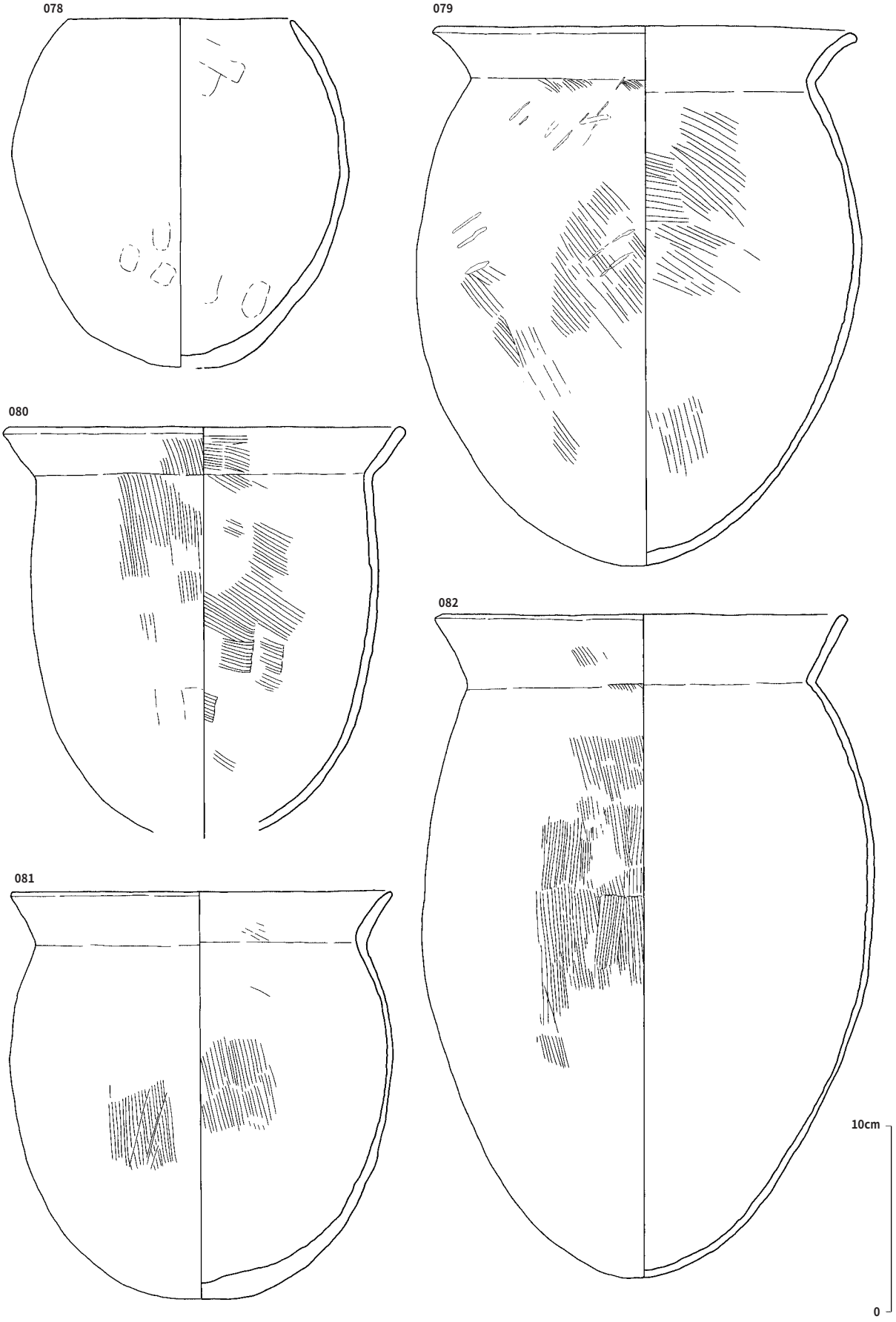


Fig. 23　SC4064遺物実測図２（1/3）

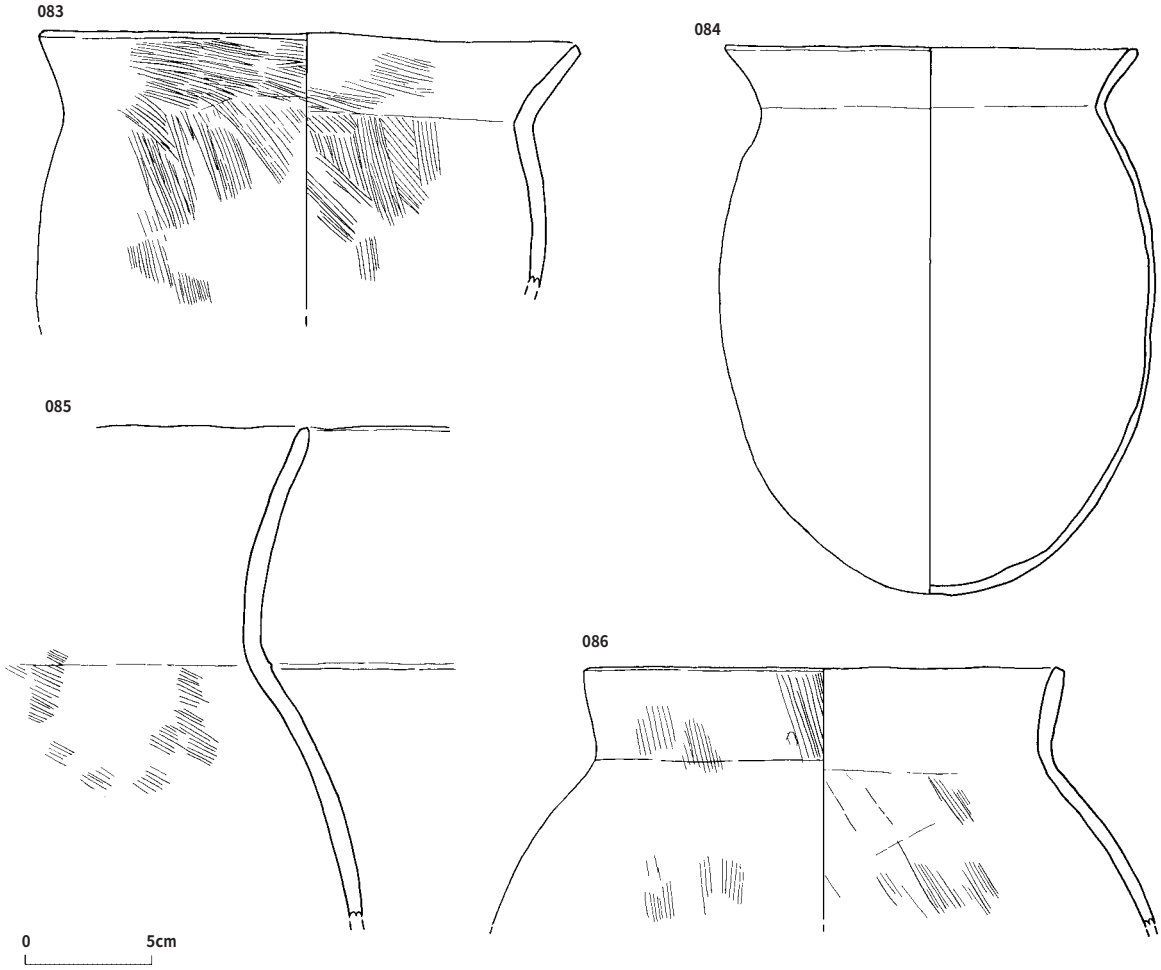


Fig. 24　SC4064遺物実測図３（1/3）

基部側面には段がみられるのは鋳型を連結するためと思われる。広型銅戈はこれまで５例出土の内で基部が残っている４例中３例に綾杉文がみられるのに対し、鋳型はこれで７例目であるが綾杉文が確認されたのは初めてである。広型銅戈は伝福岡県浮羽郡出土銅戈（神戸市立博物館所蔵）など福岡県南部で３例、大分県豊後高田市で２例など奴国文化圏でも辺境部で出土する。鋳型は前原市三雲遺跡、福岡市多々羅大牟田、筑紫野市仮塚南と奴国域ではあるが、この時期青銅器生産の中心である春日丘陵よりも周辺部での出土数が多い。

SC4064（Fig.19～28）　調査区南側に位置しSC4190を切る。主軸をN-46°-Wにとり平面は東西に長い長方形を呈し長軸7.12m、短軸5.8m、床面からの深さ９㎝を測る。壁溝は幅４～10㎝で全周を断続的に巡る。東側短辺に幅109～125㎝ のベット状遺構がつく。炉は低床部中央に位置する径67㎝ の方形を呈し、深さ９㎝を測り底面が赤化している。主柱穴は２本柱で柱間は3.5m、柱穴はいびつな円形を呈す。両方とも柱痕跡が残り径18～21㎝を測る。南壁中央の土坑は径96㎝、深さ31㎝を測り、壺などが出土した。低床面北側は床面が広く赤化する。図化した部分（Fig.20）は堅く焼けしまっていたがその周辺も薄く赤化しており、床面全体が半円形に焼けた痕跡が確認できた。埋土中に炭化物は多く含まないが、焼土ブロックは多量に含んでいた。床下掘方（Fig.21）はベット部分が低床部との間に30㎝の壁を残して外周壁際を溝状に幅70㎝、深さ13㎝程掘り下げ、橙色粘質土を含んだ黒色土で盛土を施す。低床部では周囲に幅約30㎝の壁溝を巡らすと共に北西・南西の両コーナー部を土坑状に掘り下げる。また、低床部全面に２㎝の貼床を施す。埋土中から多量の遺物が出土した。遺物は北側焼土面の上に集中していたが、遺物掘下げ中にも焼土面を数面確認した。出土遺物（Fig.22～28　067～

Fig. 25　SC4064遺物実測図４（1/3）

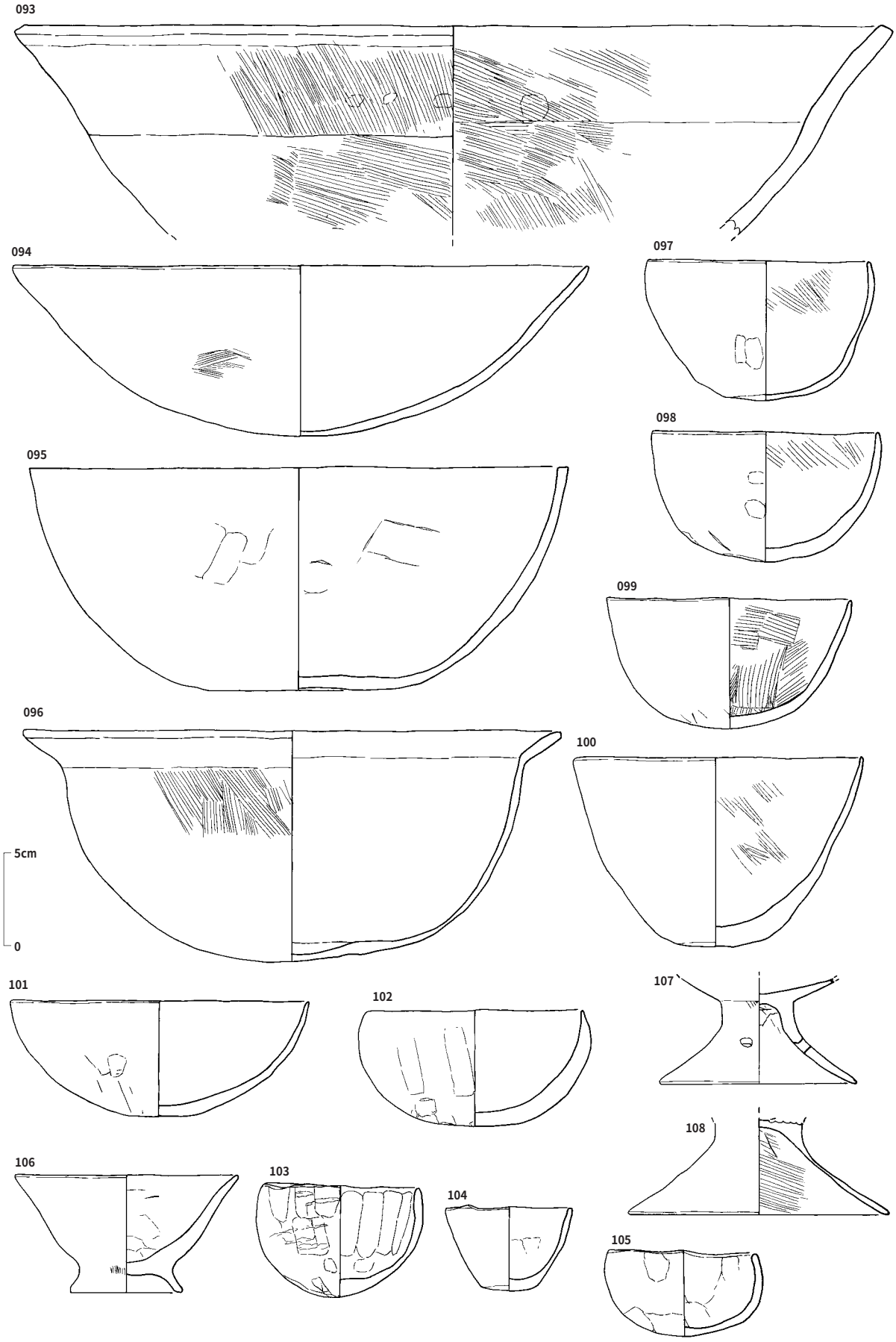


Fig. 26　SC4064遺物実測図５（1/3）

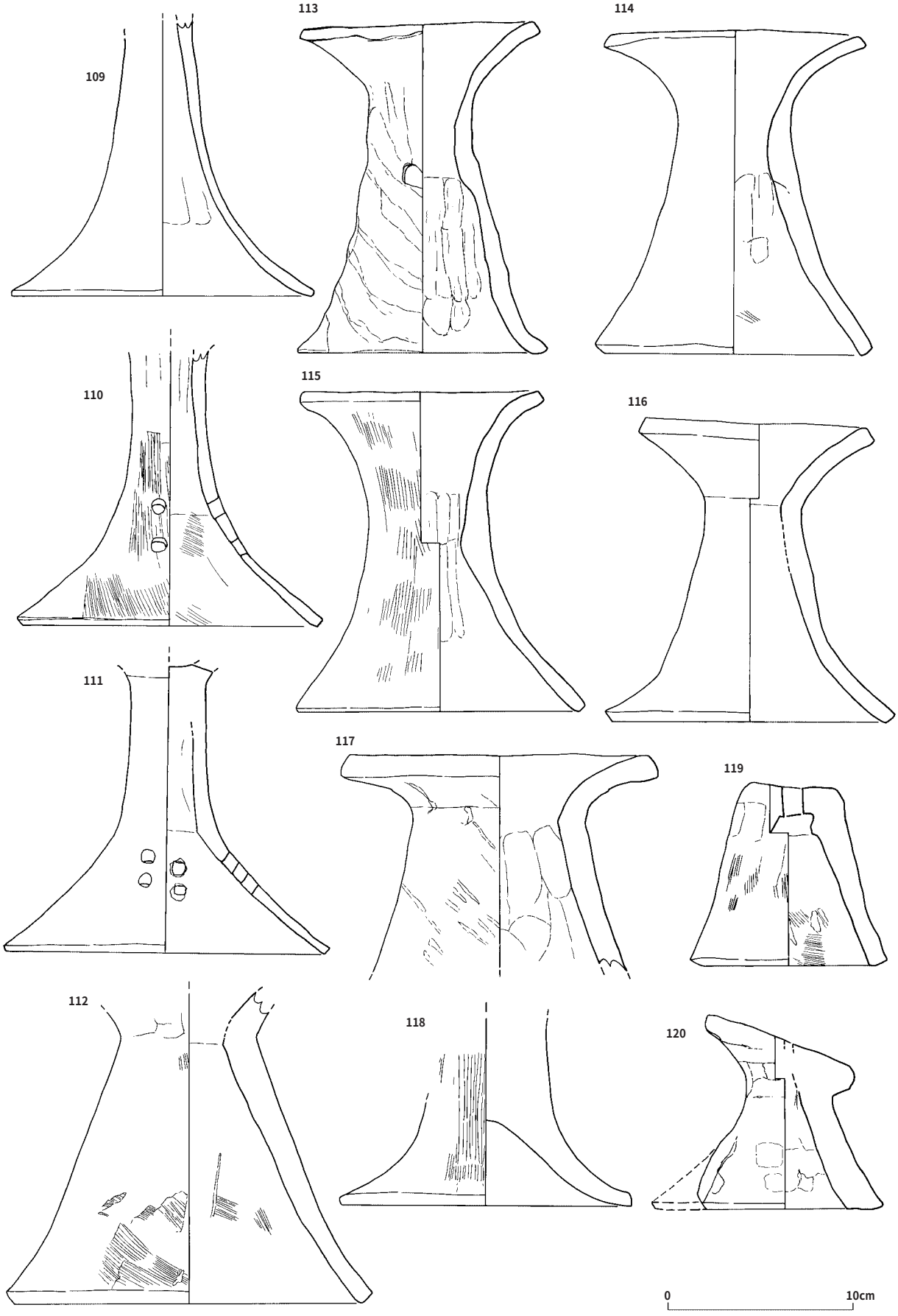


Fig. 27　SC4064遺物実測図６（1/3）

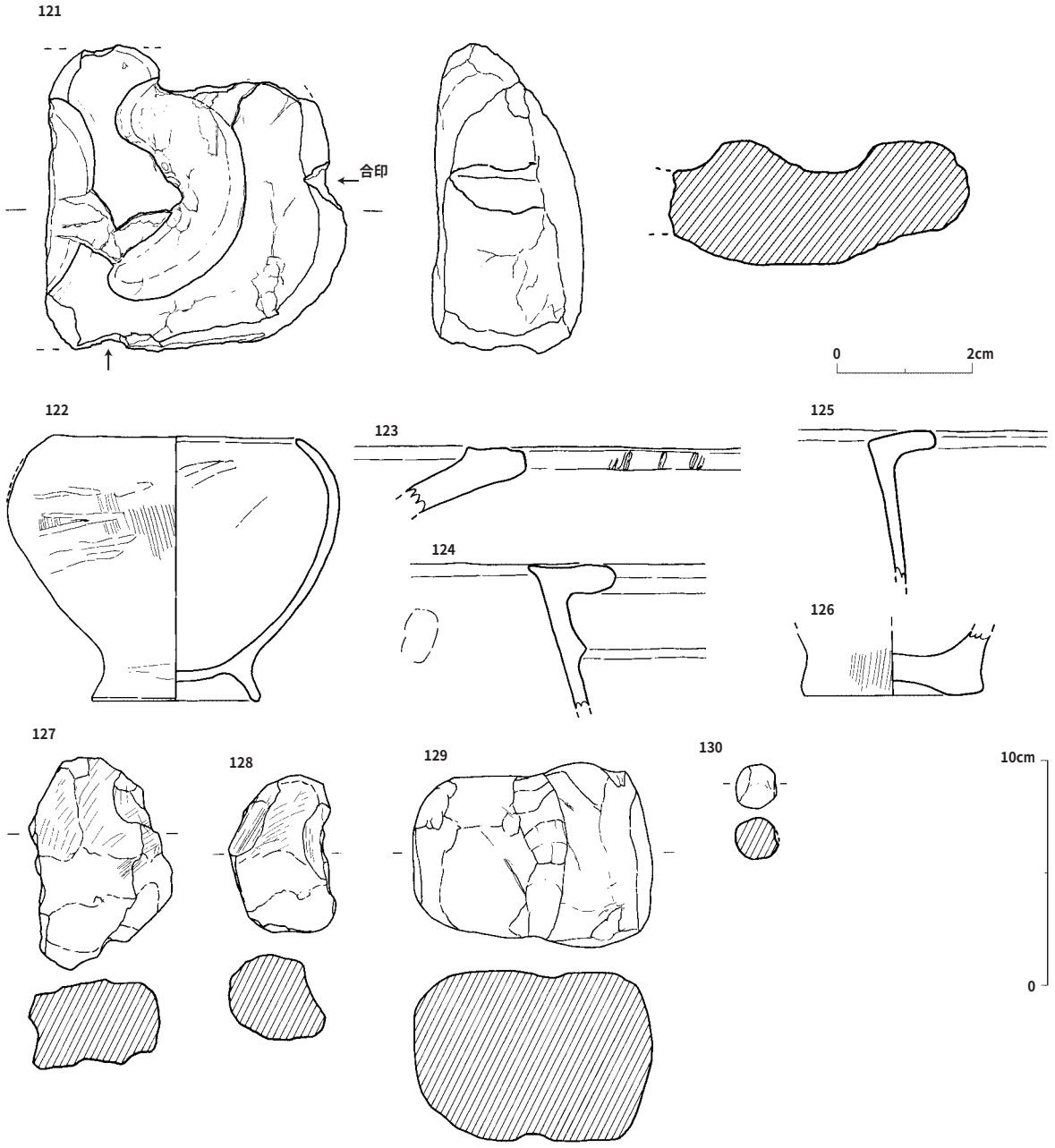


Fig. 28　SC4064遺物実測図７（1/3・ガラス勾玉鋳型1/1）

126)067～078は壺、079～092が甕、093～105が鉢である。106は台付き鉢、107～111は高坏、112～118は器台、119・120は支脚である。121はガラス勾玉の土製鋳型である。現状で縦4.37㎝、横4.44㎝、厚さ2.05㎝ を測る。勾玉は長さ3.2㎝ を測る。鋳型は２個以上の型が並ぶ連鋳式で図面右側中央と下側左端に刻み目がみられる。胎土は茶褐色を呈し、粒が細かく砂などを含まないが表面にこまかな気孔が多くみられる。頭部に孔用材の心棒を挿す為の小孔がない。中央の型から左側の型に溶けたガラスが流れるための溝があり、勾玉の頭部から上にも溝状の窪みが延びるため、上側に別の型か鋳口があったと思われる。基本的にガラス勾玉の鋳型は鋳型一枚を使用する片面型とされるが今回出土した鋳型は連鋳式という問題はあるが深さが浅い、頭に心材用の小孔がない、側面に合わせ目らしき刻み目があることから型押し法の雌型である可能性が考えられる。また、下側の縁は残りが良く幅1.8㎝を測るが合わせ目を除いて青灰色を呈し、何かが剥がれた痕跡がある。鋳型を合わせた後周囲を囲み

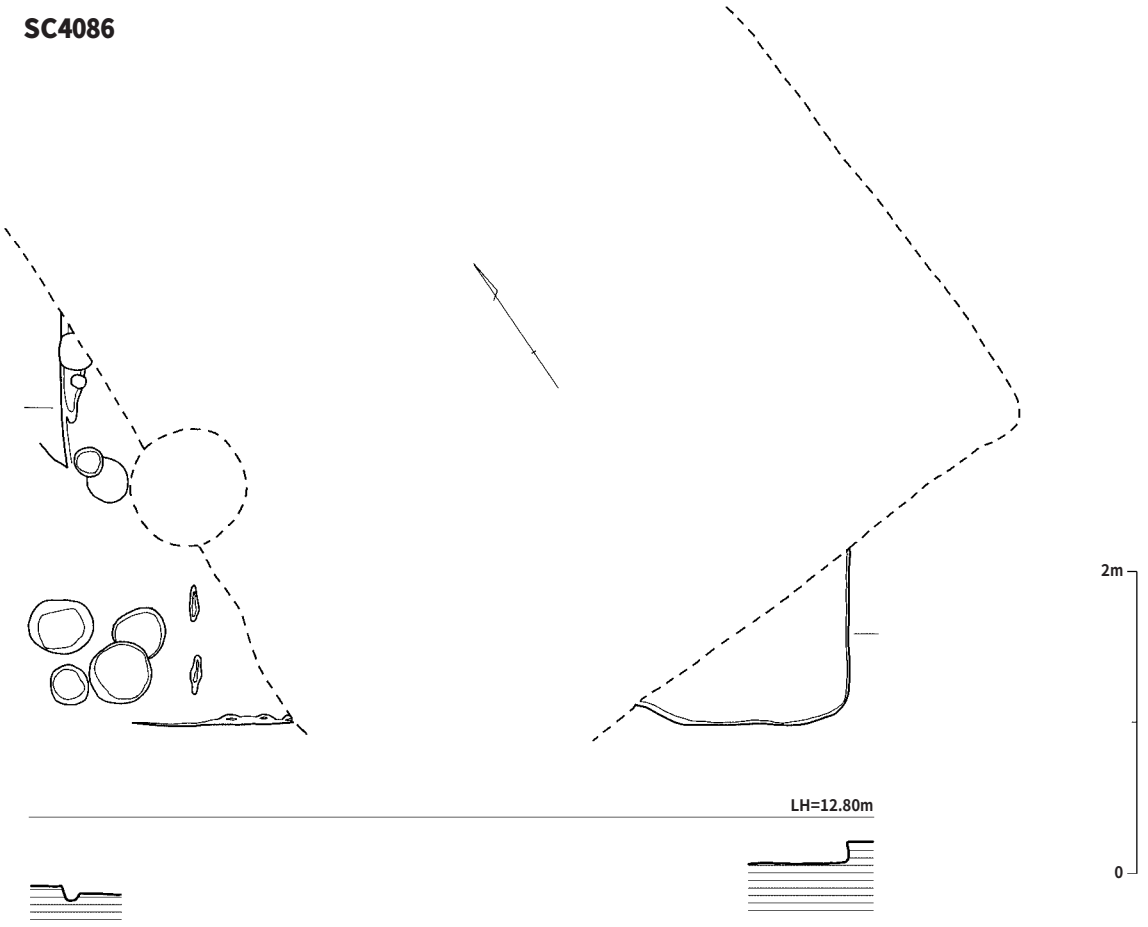


Fig. 29　SC4086実測図（1/50）

ずれないように粘土を充填した痕跡であろうか。122は台付鉢、123は広口壺口縁、124～126は甕、127・128は焼けた粘土塊、129は錘型土製品で長さ10.6㎝を測る。130は土玉で径２㎝。

SC4069（Fig.4）調査区南端部に位置する。きわめて遺存状態が悪く貼床が一部残っているのみで平板実測の段階までは確認できたが、雨による流出などで消失した。円形竪穴式住居の痕跡である。

SC4086（Fig.29）調査区中央やや南寄りに位置しSC4060に切られる。主軸をN-57°-Wにとり、平面は東西に長い長方形で長軸5.2m、短軸3.4m、床面までの深さ10㎝を測る。両側短辺に幅80～100㎝程のベット状遺構がつくものと思われる。掘方は底面まで30㎝と深く、西壁中央部に幅15㎝、深さ４㎝の壁溝がつく。出土遺物は１㎝角の土器細片が一握りと少なく時期が判明する遺物は無い。

SC4188（Fig.30）調査区南端西寄りに位置し、SC4220とSC4190を切る。主軸をN-68°-Wにとり平面は東西に長い長方形である。南西端のSC4220と重なる部分が外側に膨らむ。東西6.4m、南北5.7m、床面までの深さ11㎝を測る。壁溝は幅10㎝、深さ２～４㎝で他の住居跡と重なった部分では検出できなかったが本来は全周すると思われる。炉は中央から西寄りの掘込みで焼土を確認した。炉は平面楕円形で西側にテラスを持つ。長径98㎝、短径81㎝、深さ５㎝を測る。柱穴と床下掘方は確認できない。平面図左の遺物は弥生時代中期の甕底部である。その他に同じく弥生時代中期後半の甕口縁片が数点出土しているが１点のみ後期前半と思われる袋状口縁壺の破片が出土した。

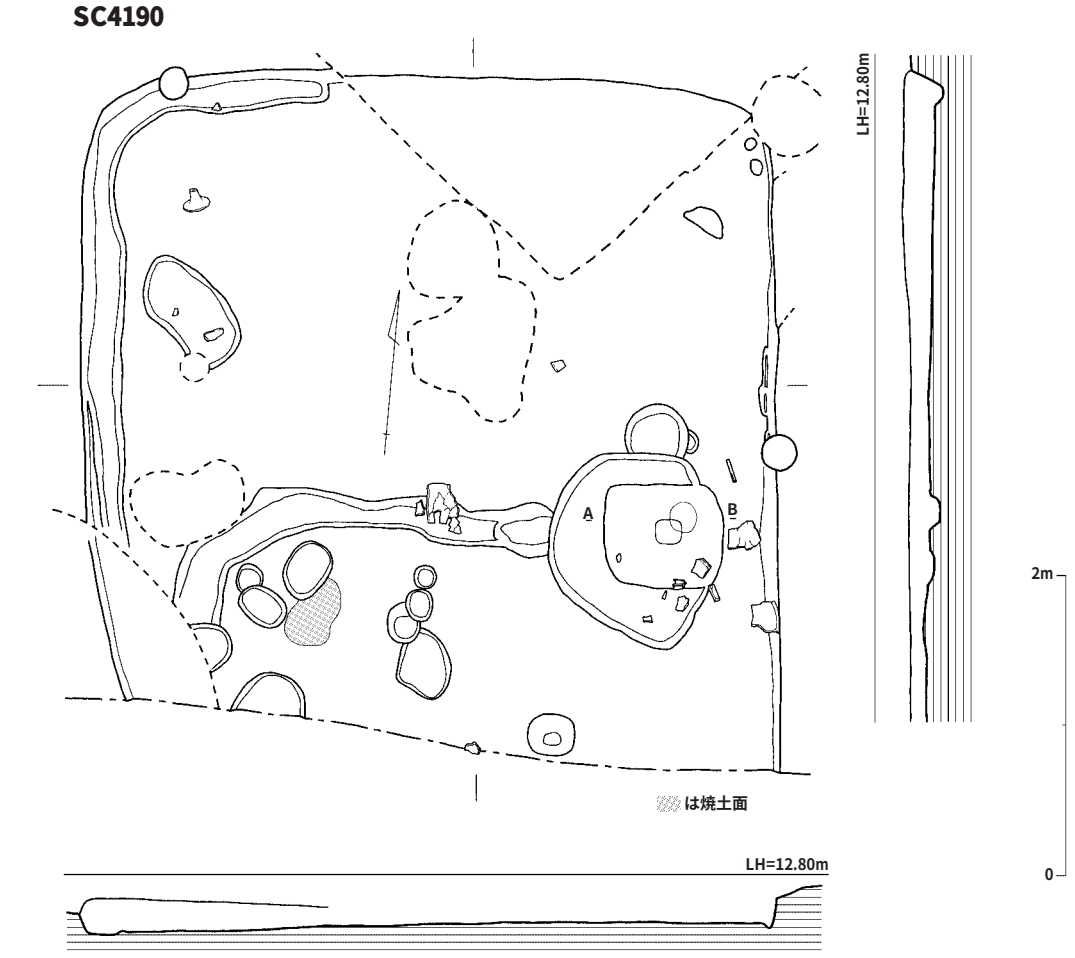
SC4190（Fig.31）調査区南端に位置し、遺構の南側が調査区外に延びる。SC4064とSC4188に切られる。主軸をN-５°-Wにとり、平面は南北に長い長方形を呈す。現状で南北4.6m、東西4.7m、床面までの深さ17㎝を測る。西壁と北壁西側に幅12～17㎝、深さ３～７㎝の壁溝が巡る。中央やや南側に

Fig. 30　SC4188実測図（1/50）

も幅20～27㎝程の溝があり、２軒の切合いである可能性もあるが東壁は直線で切合いはみられない。炉は南側壁溝のコーナー部分で焼土面を確認したが住居に伴うものかは不明である。出土遺物は弥生時代中期中～後葉と思われる高坏脚片や甕片がある。

SC4220（Fig.32）調査区南端西寄りに位置する円形竪穴式住居で遺構の南側２／３以上が調査区外に延びる。SC4188と SC4190に切られる。推定直径は７ｍを測り床面までの深さ11㎝、掘方底面までの深さ18㎝を測る。壁溝は幅４～６㎝、深さ２㎝を測る。床下全体に４～７㎝の貼床を施す。調査区内の部分が少ないため炉や柱穴に関しては不明である。出土遺物（Fig.32　132～134）。132は甕口縁、133は壺口縁、134は砂岩製の砥石である。４面を砥石として使用している。

SC4336（Fig.33）調査区中央部西端に位置し、遺構の南側１／２が調査区外である。主軸を N-16°-E にとり平面は南北に長い長方形を呈す。現状で南北4.4m、東西4.1m、床面までの深さ16㎝を測る。壁溝は断続的で幅３～12㎝、深さ１～３㎝を測る。北西側隅の土坑は平面形隅丸長方形を呈し長径106㎝、短径79㎝、深さ42㎝を測る。床下掘方は北側壁沿いを２～３㎝程溝状に浅く掘り込む。遺物は弥生後期前半の高坏片の他は中期後半の遺物が多く出土している。その他に焼粘土塊や花崗岩礫が出土した。出土遺物（Fig.33　135～139）。135は高坏脚部である。136は甕口縁、137は壺口縁か。138・



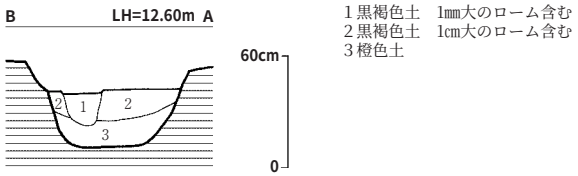


Fig. 31　SC4190実測図（1/50・1/40）

139は甕底部である。

SC4394（Fig.34）調査区北端に位置し、遺構のほとんどが調査区外へ延びる。平面は円形を呈し、推定直径が12mと大型の竪穴式住居で、床面までの深さ22㎝ を測る。壁溝は幅18～22㎝、深さ４～７㎝を測りほぼ全周する。一部壁溝に沿って径５㎝の杭痕跡がみられる。壁板の押さえか。床下掘方は住居中央寄りに土坑状の大きな掘方があるが住居に伴うかどうかは不明である。土層の８～10層は住居床面の汚れである。出土遺物（Fig.35　140～147）。140～142は甕口縁、143・144は壺口縁である。145～147は甕もしくは壺の底部である。

SC4398（Fig.36～38）調査区北側に位置し SC4412と SC4542を切る。主軸を N- ２ °-W にとり平面は南北に長い長方形を呈す。長径7.2m、短径5.6m、床面までの深さ40㎝ を測る。東側壁を除く３壁にコの字型ベット状遺構がつき、幅94～109㎝、低床部からの高さ13～20㎝ を測る。壁溝は北壁を除いて幅４～８㎝、深さ５～９㎝が断続的にみられる。南側ベットの外縁から60～75㎝で低床部に沿う幅６～13㎝ の溝を確認した。低床部は長径4.8m、短径4.2mを測り中央部で炉を検出した。炉は２基が切合っており、新しいＡが長径58㎝、短径53㎝、深さ10㎝、Ｂが同じく84㎝、63㎝、16㎝ を測る。２基とも底面の一部が赤化する。柱穴は二本柱で距離は芯々で3.7m、長径58㎝、深さ78～80㎝ を測る。どちらも柱痕跡が確認され径17㎝ を測る。柱穴近くに基盤層の橙色粘質土による盛り上がり（土山Ａ・Ｂ）を二カ所確認した。この盛り上がりは北側が径70㎝ の円形、南側は判りづらく掘下げ時に削っ

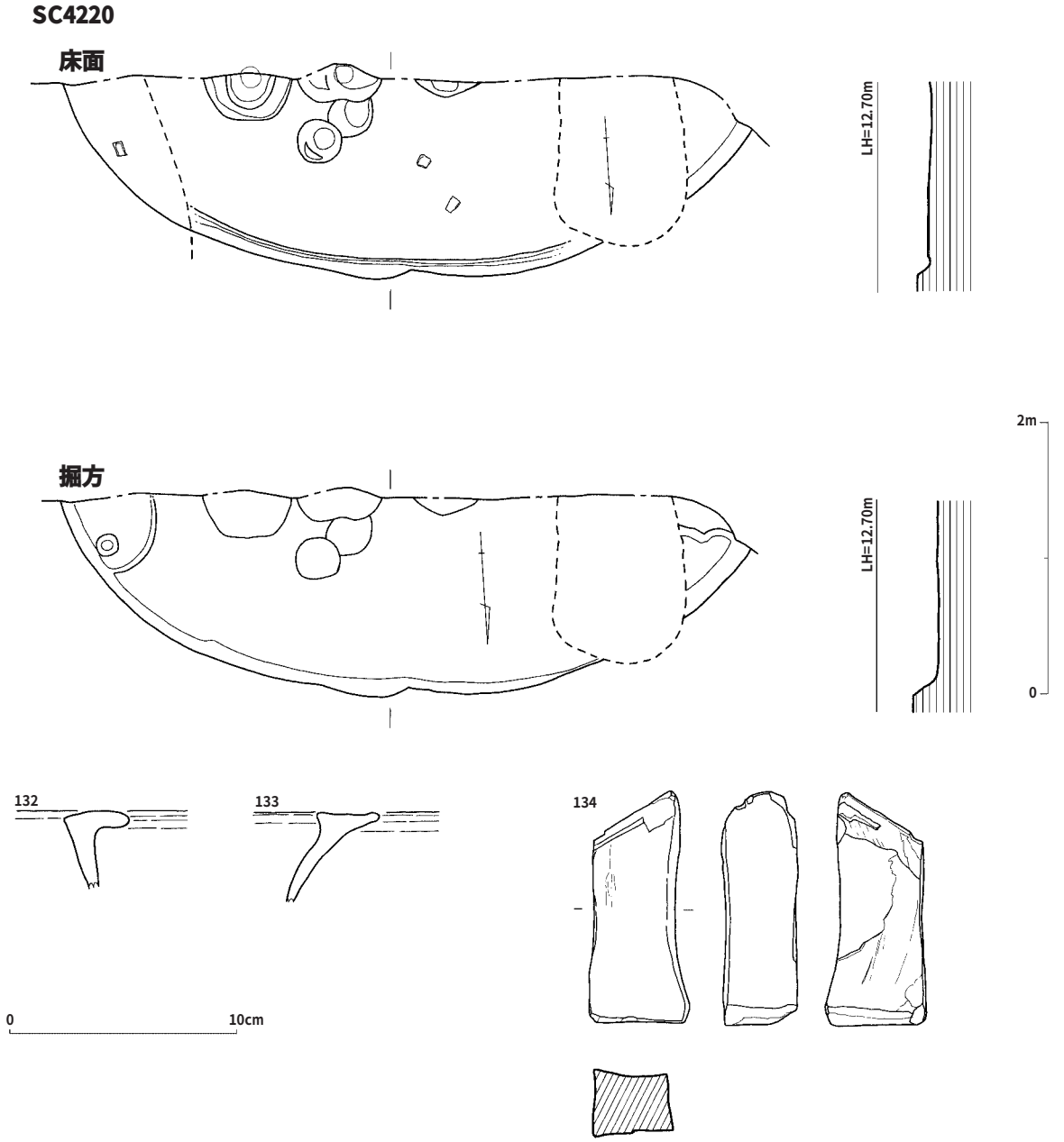


Fig. 32　SC4220実測図（1/50・1/3）

てしまったが径60㎝の楕円形を呈し、いずれも床面の汚れである薄い黒色土層上にのる。この盛り上がりに関しては柱抜き取り時の廃土の可能性がいわれており、今回の盛り上がりも柱穴に近いことや床面直上であることなど共通点が多い。しかし遺構では柱痕跡が残っており柱の抜き取りが行われていないため、作業台などの別の用途が考えられる。東壁中央の土坑は出入り口に伴う掘方か。径81㎝、深さ38㎝ を測る。床下の掘方（Fig.38）はベット状遺構部分では低床部との境を堤防状に残し、内側を低床部と同じ高さまで掘り下げている。北と西側が幅広く掘り下げているのに対し南側ベットでは壁際の幅20㎝のみを溝状に掘り下げる。低床部では東西壁際に溝を設け、壁際を２～10㎝と浅く掘り下げる。土層（Fig.38）により各ベット状遺構とも削出しだけでなくその上の盛土が確認できた。特に西側では低床部との境にみられる23層は壁を押さえる板材の痕跡と思われ、ベット状遺構は削出した上に盛土を行い、崩落しないよう板で押さえていたことが判る。出土遺物（Fig.36　149～152）。149

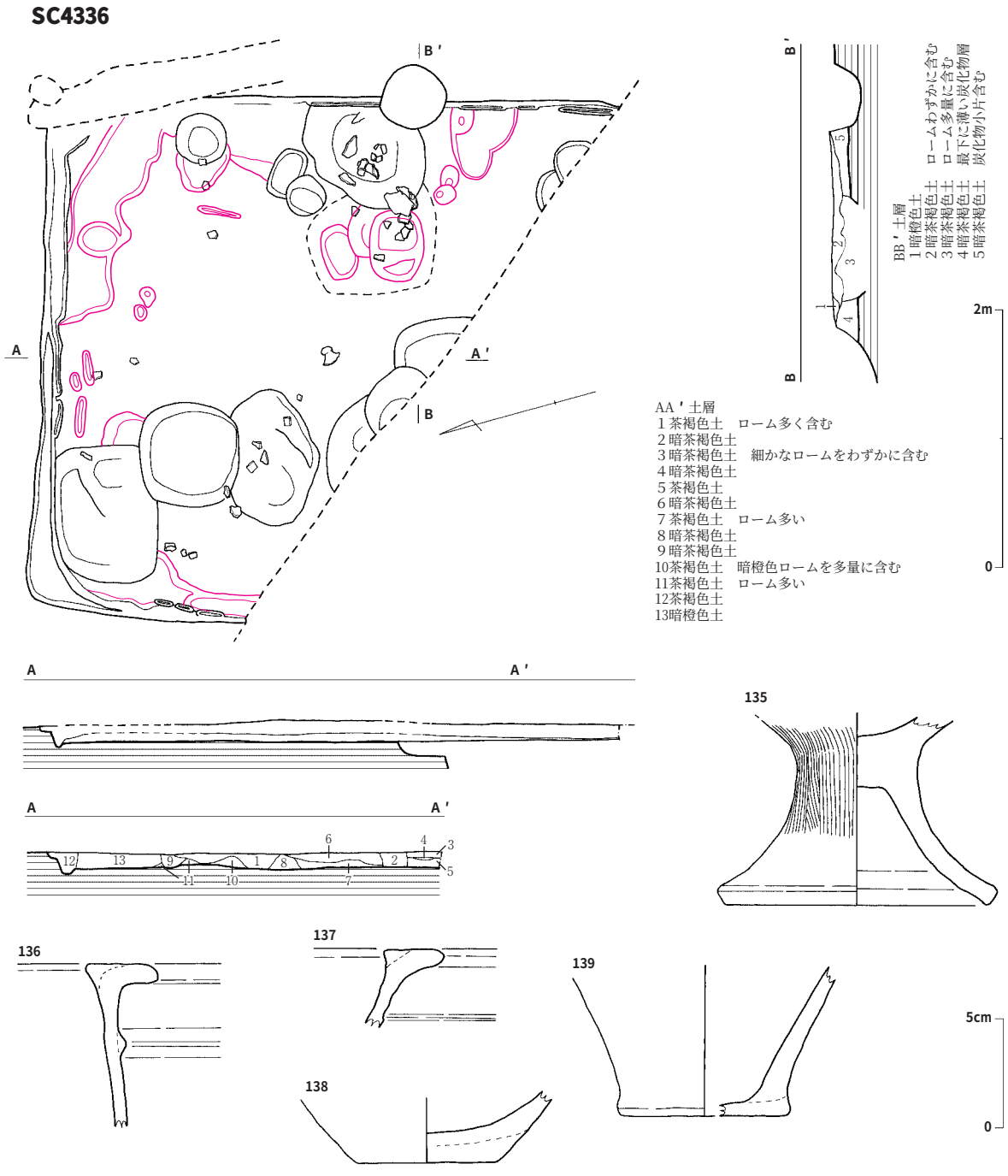


Fig. 33　SC4336実測図（1/50・1/3）

は高坏、150は甕胴部、151と152は砥石である。

SC4412（Fig.39）調査区北端西寄りに位置し南側はSC4398に切られ、主軸をN-18°-Wにとる。平面は南北に長い平面形で、長径は推定で約7m、短径4.6m、深さは検出面から床面まで23cm、ベット状遺構の上面まで3～5cmを測る。北東コーナー部に幅5～7cm、深さ4cmの壁溝がつく。ベット状遺構は北側短辺と西側長辺の2辺で確認でき、北側は幅87～93cm、西側は幅92～98cmを測る。ベット状遺構は低床部から15cm の高さまでは削出しでその上に盛土を施す。低床部は短辺3.6mを測る。炉はSC4398による削平をうけたが一部は残っており、平面は円形で径56cm、深さ10cmで掘方内面全面が赤変する。柱穴は4435もしくは4480で4435は径73cm、深さ54cm、4480は径52cm、深さ56cmを測り土層断面で確認した柱痕跡は径18cm を測る。低床部は全面に3cm 程貼床を施す。西側ベット壁は西壁と軸

がわずかに異なり、また北西隅がつながらないため4412より古い別の住居である可能性がある。出土遺物（Fig.39　153・154）。153は土器底部である。わずかにレンズ状に膨らむ。154は磨製石斧の刃部で、本調査区の弥生時代石製品としては石包丁片は多いが石斧の出土は少い。

SC4437（Fig.40）調査区北寄りに位置し、SK4561とSK4682に切られる。SC4786との切合いは不明。主軸をN-６°-Eにとり、平面形は隅丸長方形を呈し長径5.48m、短径3.3m、床面までの深さ25㎝を測る。壁溝は確認できなかった。西壁中央部では床面を奥に掘り込んだため壁面がオーバーハングする。炉は中央北寄りに位置し平面は円形で径73㎝、深さ６㎝を測り、壁が赤く焼ける。柱穴は壁に沿う２×２間の長方形を呈す。梁間は全長2.7m、桁行きは全長3.2mを測る。柱間は1.2～1.7mを測る。径は10～32㎝、深さ21㎝を測る。中央南寄りでは、床面から10㎝浮いた状態の白色粘質土ブロックが、径35㎝の範囲から集中して出土した。出土遺物は炉から弥生後期中頃の甕底部が１点出土した他は弥生時代中期中頃～後半である。土製投弾２個と砥石が出土した。出土遺物（Fig.40　155～160）。155は壺底部である。156・157は甕口縁、158・159は土製投弾、160は砂岩製の砥石である。４面を使用する。

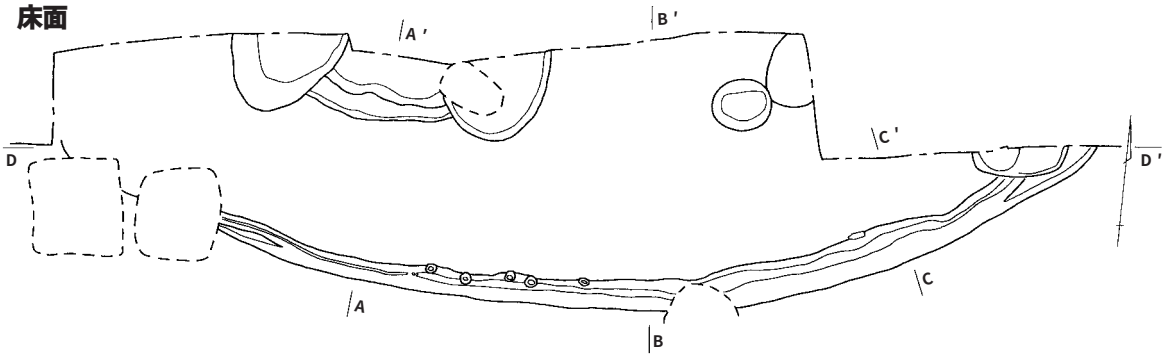
SC4438（Fig.41）調査区中央北寄りに位置しSC4623とSC4636を切る。主軸をN-81°-Eにとり平面はほぼ正方形で東西65.6m、南北6.5m、床面までの深さ19㎝を測る。溝は北壁を除いた壁際に断続的にみられる壁溝の他に、東壁から105㎝、西壁から50～60㎝離れて幅４～７㎝、深さ２～４㎝の溝を設ける。床溝は屋内区分のためでベット状遺構と併せればコの字状を呈すが西壁側は幅が狭くまた南側のベット上にも溝が続くため別の用途である可能性も残る。実際に確認できたベット状遺構は南壁沿いのみで幅122㎝、低床部からの高さ７～９㎝を測る。柱穴近辺の幅が狭いのは崩壊のためである。炉は南北に並んで２基確認した。南側は平面円形を呈し径53㎝、深さ８㎝を測る。掘方内と周辺床面が赤化する。北側を攪乱に削られ一部しか遺存していない。東西に不整形の窪みが並んでおり二つの窪みとその間の床面が赤化している。赤化の範囲は東西幅87㎝を測る。柱穴は四本柱で柱間は東西3.3m、南北3.7～4.0mを測る。柱穴は平面形が楕円もしくは方形で径49～56㎝、深さ67～91㎝を測る。北西と南東の柱穴は柱痕跡が残っており、径18㎝と25㎝を測る。掘込みは低床部南西側を浅く一段下げている。遺物は床面直上で袋状口縁片と土器底部が出土した。出土遺物（Fig.41　161～163）。161は袋状口縁壺で床面直上で出土した。162は壺底部、163は黒曜石製の石鏃である。

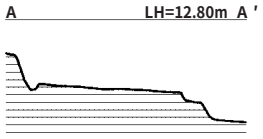
SC4439（Fig.42・43）調査区中央東端に位置し、遺構の東側半分が調査区外に延びる。SC4442を切りSC4712に切られる。主軸はS-５°-Wにとり、平面形は方形もしくは長方形と思われ現状で東西４m、南北4.6m、床面までの深さ12㎝を測る。覆土は暗茶褐色を呈し小ロームブロックや焼土片を含む。南壁中央で幅７～10㎝、深さ２㎝の壁溝を確認した。掘方は南壁側に浅いピット状の窪みとそれから東に延びる溝がみられる。全体的に貼床はみられない。出土遺物（Fig.42　164・165）。164は鉄片、165は甕底部である。遺物としては弥生時代中期中～後半の甕、広口壺片の他、須恵器大甕片や８世紀代の須恵器坏などの破片を含む。弥生時代後期後半か。

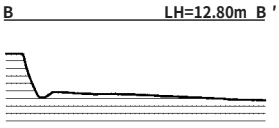
SC4440（Fig.44）調査区の北東部に位置し、遺構の北側は調査区外に延びる。SC4623を切り、SC4441に切られる。主軸をN-24°-Eにとり平面形は隅丸方形もしくは長方形を呈し、現状で東西2.1m、南北2.9m、床面までの深さ26㎝を測る。炉、主柱穴は不明である。南西隅の床面直上で径25㎝、高さ約10㎝の上面が平らな礫が出土した。床下の掘方は南壁に沿って幅115㎝、深さ14㎝程掘下げている。出土遺物は弥生時代後期後半の甕小片が出土しているが出土量としては弥生時代中期中頃の遺物が多い。出土遺物（Fig.44　169～172）。169は甕底部、170・171は甕口縁、172は石包丁片である。砂岩製で厚さ３㎜を測り、径５㎜の穿孔を施す。

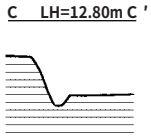
SC4394

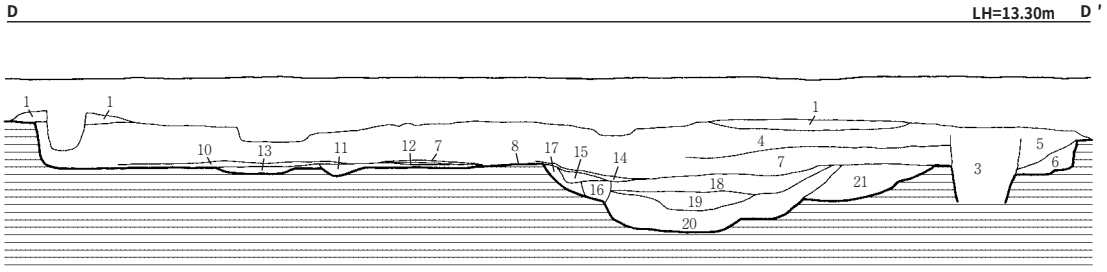
床面







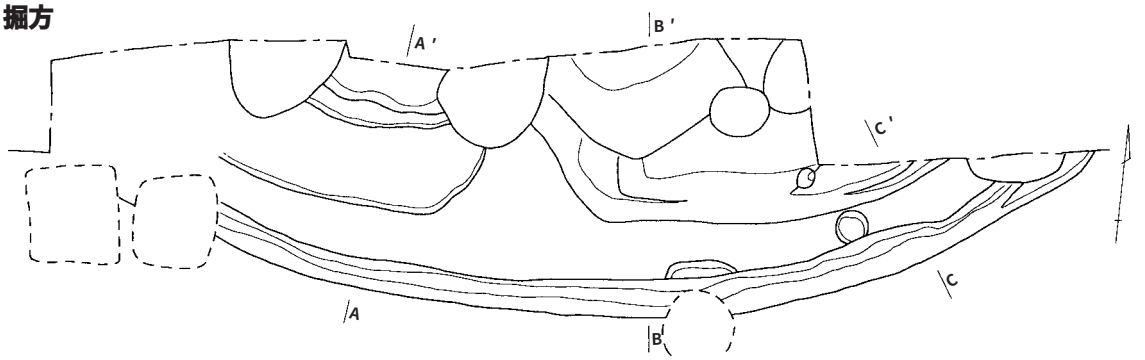


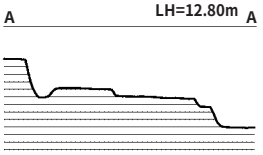


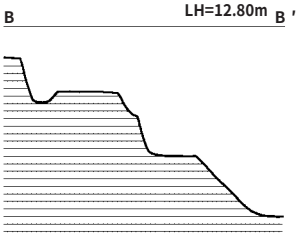
土層
1灰色土　畑耕作土
2暗茶褐色土
3黒褐色土
4暗茶褐色土　細かなロームを含む
5暗茶褐色土
6黒褐色土　ローム多く含む
7暗茶褐色土
8黒褐色土　貼床汚れ
9黒褐色土 貼床汚れ　炭化物含む
10黒褐色土 貼床汚れ
11茶褐色土
12橙色土　貼り床
13暗茶褐色土　薄い炭化物層含む
14茶褐色土
15茶褐色土
16黒褐色土
17茶褐色土　ローム多く含む
18暗橙色土　黒色土を層状に含む
19黒褐色土
20暗橙色土
21橙色土

0　2m

掘方







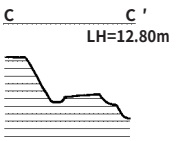


Fig. 34　SC4394実測図１（1/50）

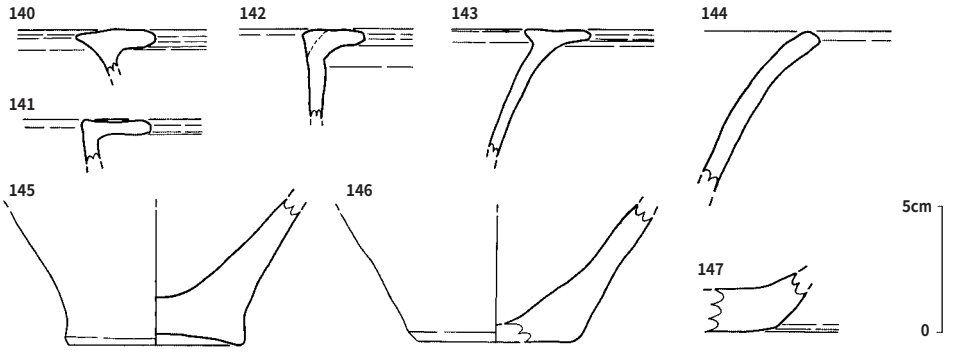


Fig. 35　SC4394実測図２（1/3）

SC4441（Fig.45）調査区北側東寄りで遺構の東側大半が調査区外に延びる。主軸をN-３°-Eにとる。平面形は方形もしくは長方形を呈し、現状で南北2.7m、東西1.9m、床面までの深さ31㎝を測る。壁溝、炉、ベット状遺構などは確認できなかった。床下の掘込みは南壁から70㎝離れて幅40㎝、深さ２㎝の溝状に掘下げており、またその周囲には径10～20㎝の楕円形の掘込みが点在する。床面から浮いた状態で弥生時代中期中頃から後半の土器片が多く出土した。出土遺物（Fig.45　173～178）。173は袋状口縁壺、174は壺胴部、175は器台、176は蓋、177は砂岩製タタキ石、178磨石である。

SC4442（Fig.46）調査区の中央北東寄りに位置し、遺構の北東端が調査区外に延びる。SC4439とSC4623に切られる。東西に長い長方形を呈し長径5.8m、短径5.1m、床面までの深さ23㎝を測る。南壁東側に幅８㎝の壁溝がつく。炉は中央東寄りに位置し、平面菱形で長径69㎝、短径63㎝、深さ９㎝を測る。底面がわずかに焼ける。柱穴は二本柱か。南壁中央の土坑は径92㎝、深さ29㎝を測る。また炉東側の床面から２㎝浮いた状態で焼土ブロックが面状に広がるのを確認した。出土遺物（Fig.47　179～191）。179は甕、180・181は器台、182は支脚である。183・185は花崗岩製タタキ石、184は緑泥岩と思われる砥石、186～191は住居に伴わない遺物であるが186は甕棺口縁、187は不明土製品である。黒褐色を呈し胎土は長石粒を多く含み焼成は良好である。188は石剣の剣先、189･190は粘板岩製石包丁片である。191は須恵器坏蓋口縁である。

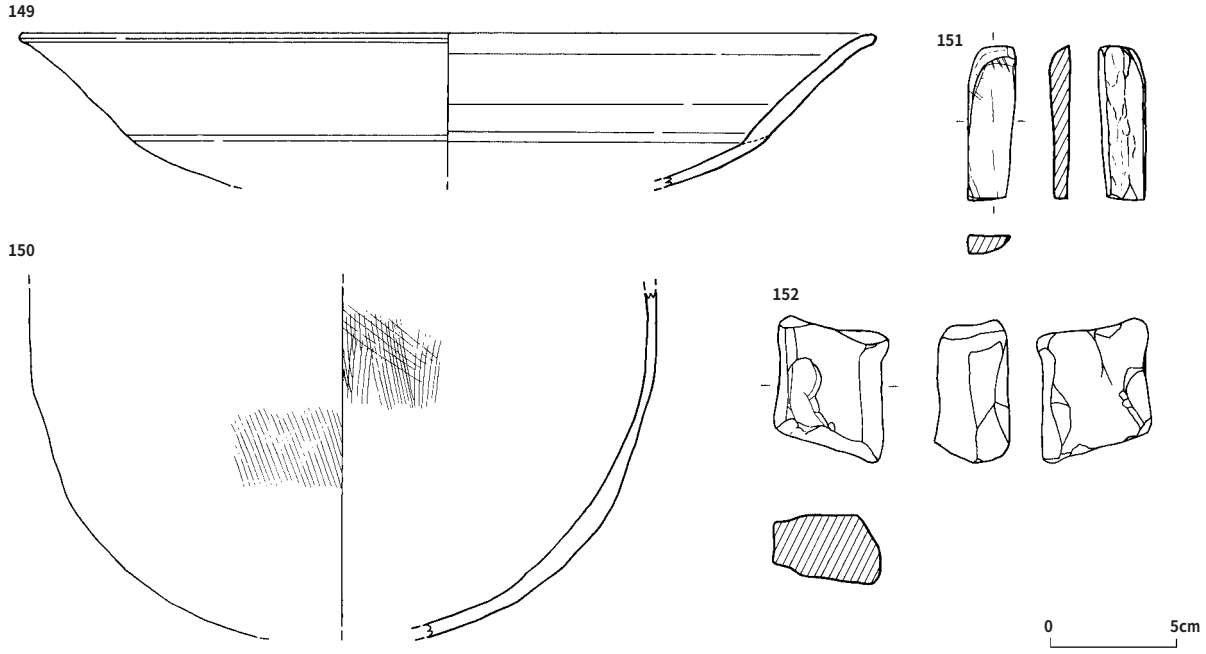
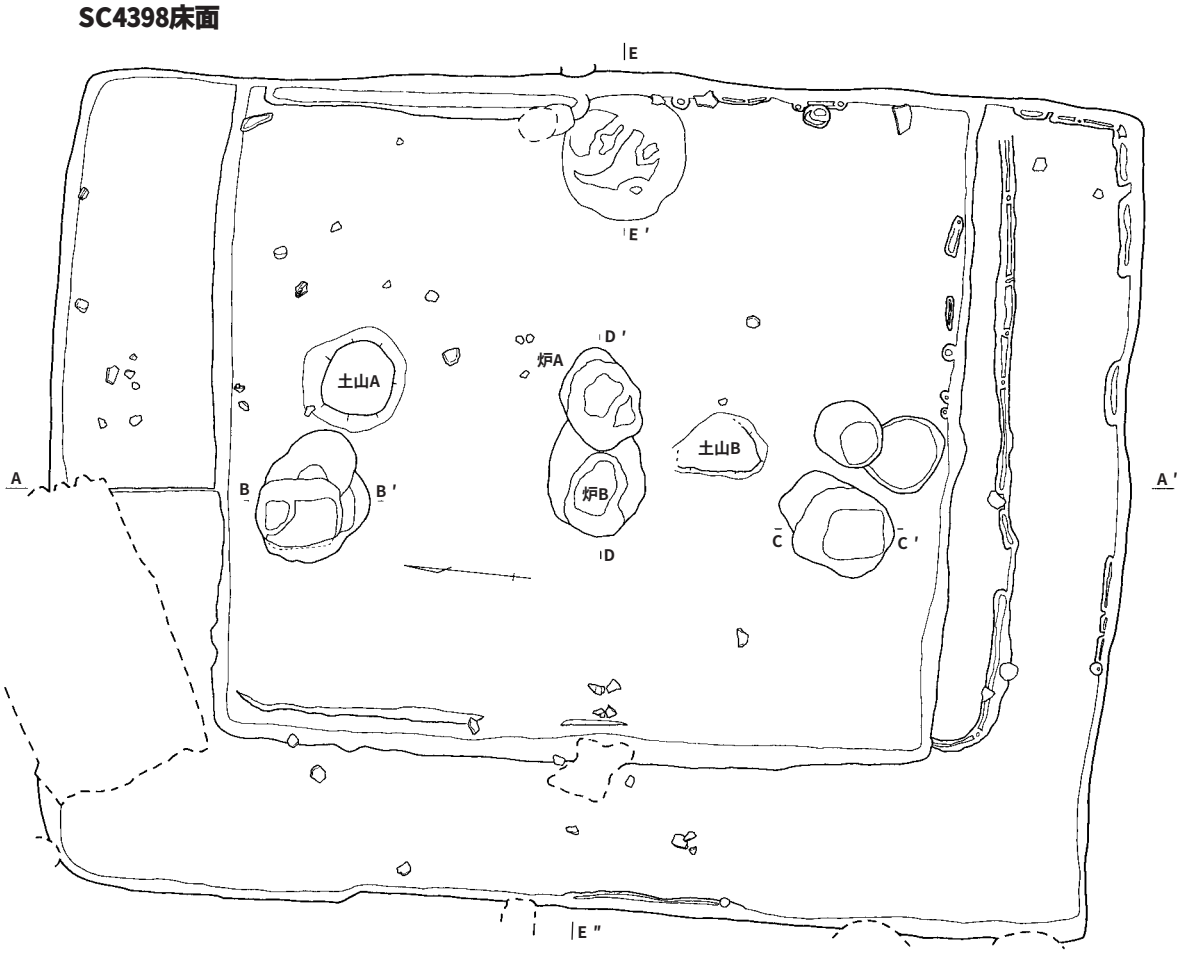
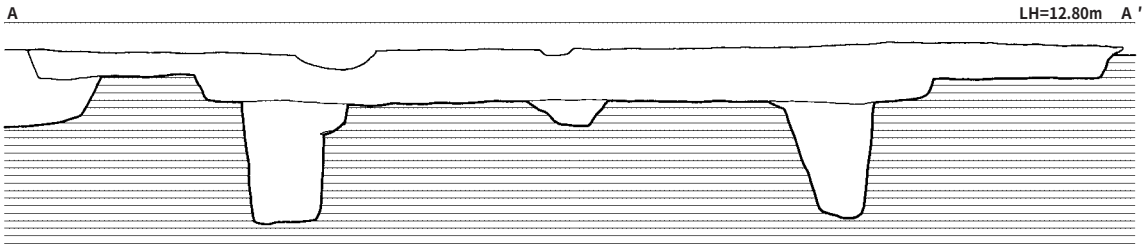
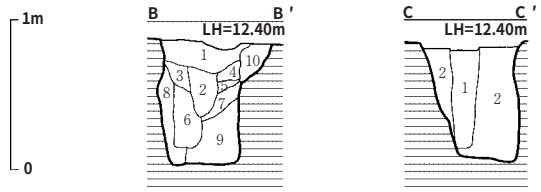


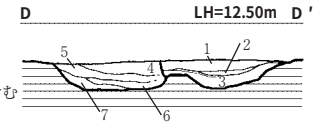
Fig. 36　SC4398実測図１（1/3）





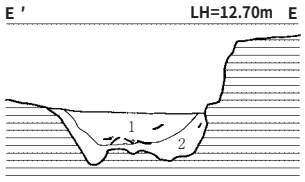


DD'土層
1灰褐色土　炭化物わずかに含む
2灰褐色土　3層との間に炭化物層あり
3灰褐色土　焼土ブロック含む
4茶褐色土　ロームブロックを多量に含む
5茶褐色土
6灰色シルト　炭化物をわずかに含む
7黒褐色土　炭化物を多く含む



BB'土層
1茶褐色土　5㎜のロームを多く含む
2茶褐色土　細かなロームを含む
3茶褐色土　ロームを多く含む
4茶褐色土　ロームを多く含む
5暗茶褐色土
6暗黄褐色土
7暗黄褐色土　やや黒色土を含む
8暗黄褐色土
9黄褐色ローム
10茶褐色土　パサパサのローム

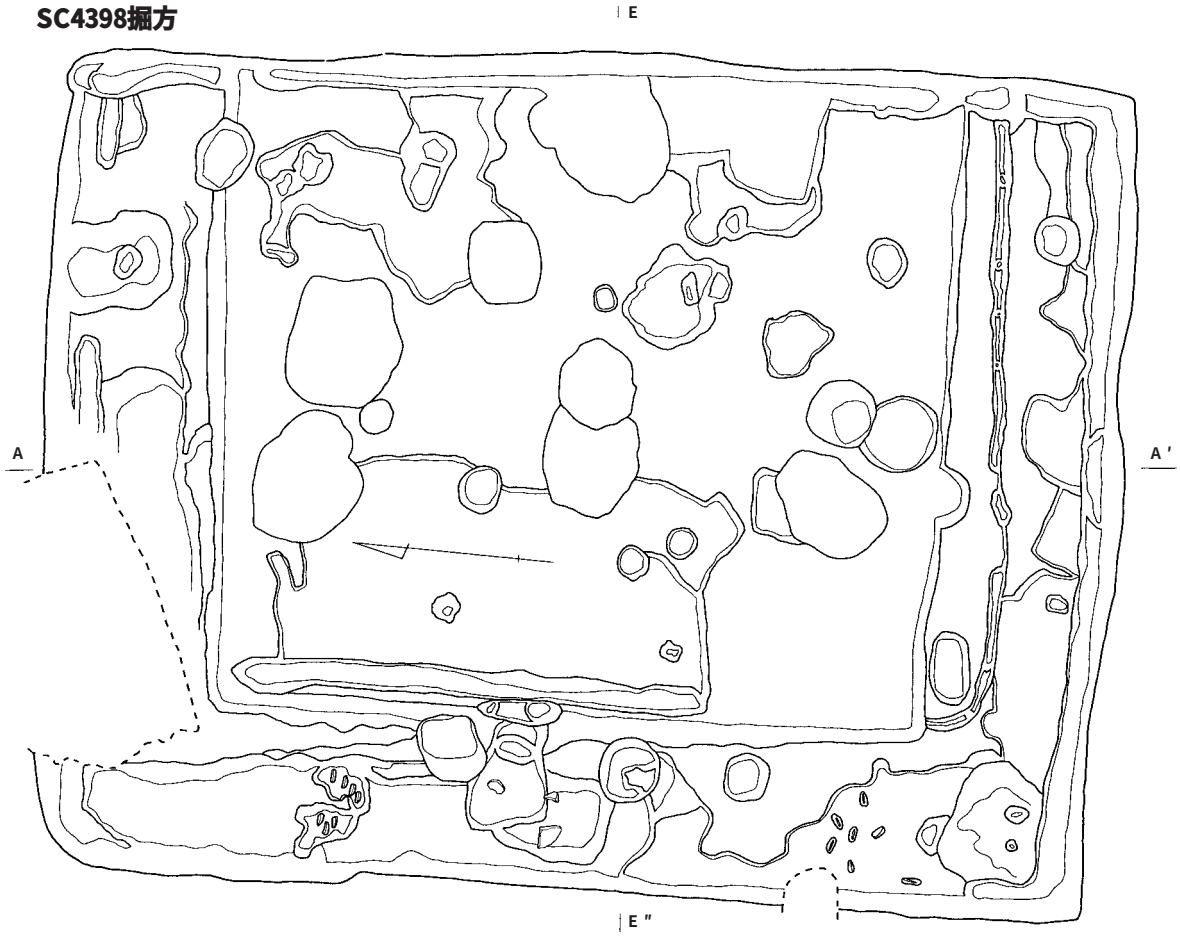
CC'土層
1暗茶褐色土　ロームブロックを少量含む
2暗黄褐色土　堅く突き固めている

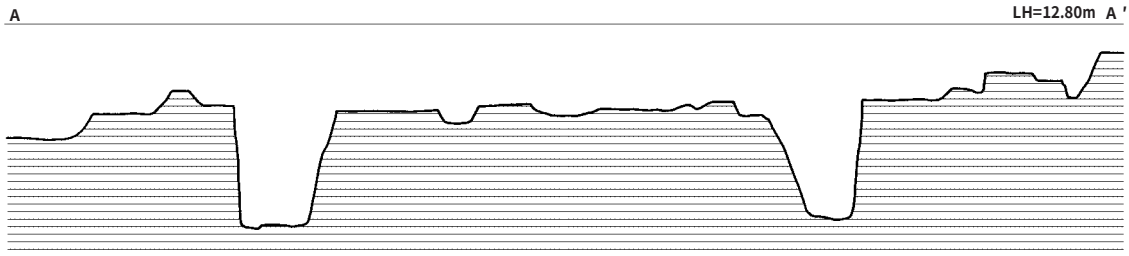


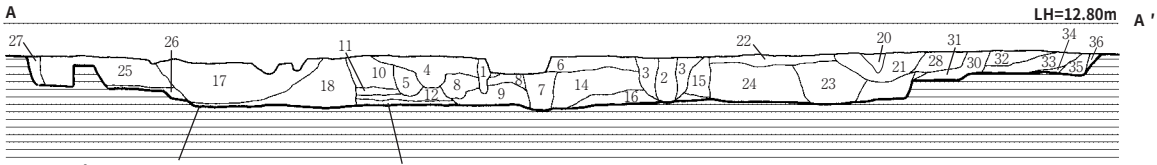
EE'土層
1灰褐色土　1㎝以下のロームブロックを多量に含む
2茶褐色土　炭化物わずかに含む

Fig. 37　SC4398実測図2（1/50・DD'EE 土層は1/40）

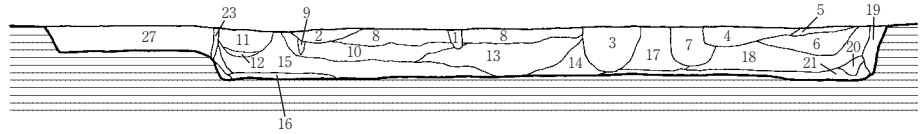
SC4398掘方







AA′土層
1 攪乱
2 暗褐色土
3 暗褐色土
4 暗茶褐色土
5 暗茶褐色土　細かなロームブロックを含む
6 暗茶褐色土
7 黄褐色土　ロームを多量に含む
8 暗黄褐色土　1㎝以下のロームを多量に含む
9 暗茶褐色土　ロームを少量含む
10茶褐色土　ローム含む
11暗茶褐色土
12茶褐色土　1㎜のロームを多量に含む
13暗茶褐色土　細かなローム、炭化物、焼土含む　貼り床
14暗黄褐色土　1㎝のロームを多く含む
15暗茶褐色土
16暗茶褐色土
17茶褐色土　1㎝以下のローム、炭化物を少量含む
18暗褐色土
19茶褐色土　1㎜のロームを多量に含む
20暗茶褐色土
21暗黄褐色土　1㎝のロームを多量に含む
22暗茶褐色土
23暗茶褐色土　焼土含む
24茶褐色土　1～3㎝のローム多く含む
25暗茶褐色土　1㎜のロームを多量に含む
26暗茶褐色土　土器片多い
27暗茶褐色土
28茶褐色土
29ローム
30茶褐色土　1㎜のローム含む
31暗茶褐色土
32暗茶褐色土　細かなロームを少量含む
33暗茶褐色土
34暗茶褐色土
35暗茶褐色土　やや灰色を帯びる
36黒褐色土　掘りすぎ、別の遺構



EE′土層
1 攪乱
2 黒褐色土
3 暗茶褐色土
4 攪乱
5 攪乱
6 暗茶褐色土　炭化物わずかに含む
7 黒褐色土
8 暗茶褐色土
9 暗茶褐色土
10茶褐色土　1㎝のロームブロックを多く含む
11茶褐色土　細かなロームを多量に含む
12橙色土　ロームを多量に含む
13茶褐色土　1㎝のロームを多量に含む
14暗茶褐色土　細かなロームを含む
15茶褐色土　炭化物含む
16黒褐色土　少量の砂を含む
17茶褐色土　少量のローム含む
18茶褐色土　2㎝のロームブロックを多量に含む
19暗茶褐色
20暗橙色ローム
21暗茶褐色土
22橙色ローム
23暗茶褐色土
24暗茶褐色土
25ローム
26黒褐色土
27茶褐色土　ベット部貼床

0　2m

Fig. 38　SC4398実測図３（1/50）

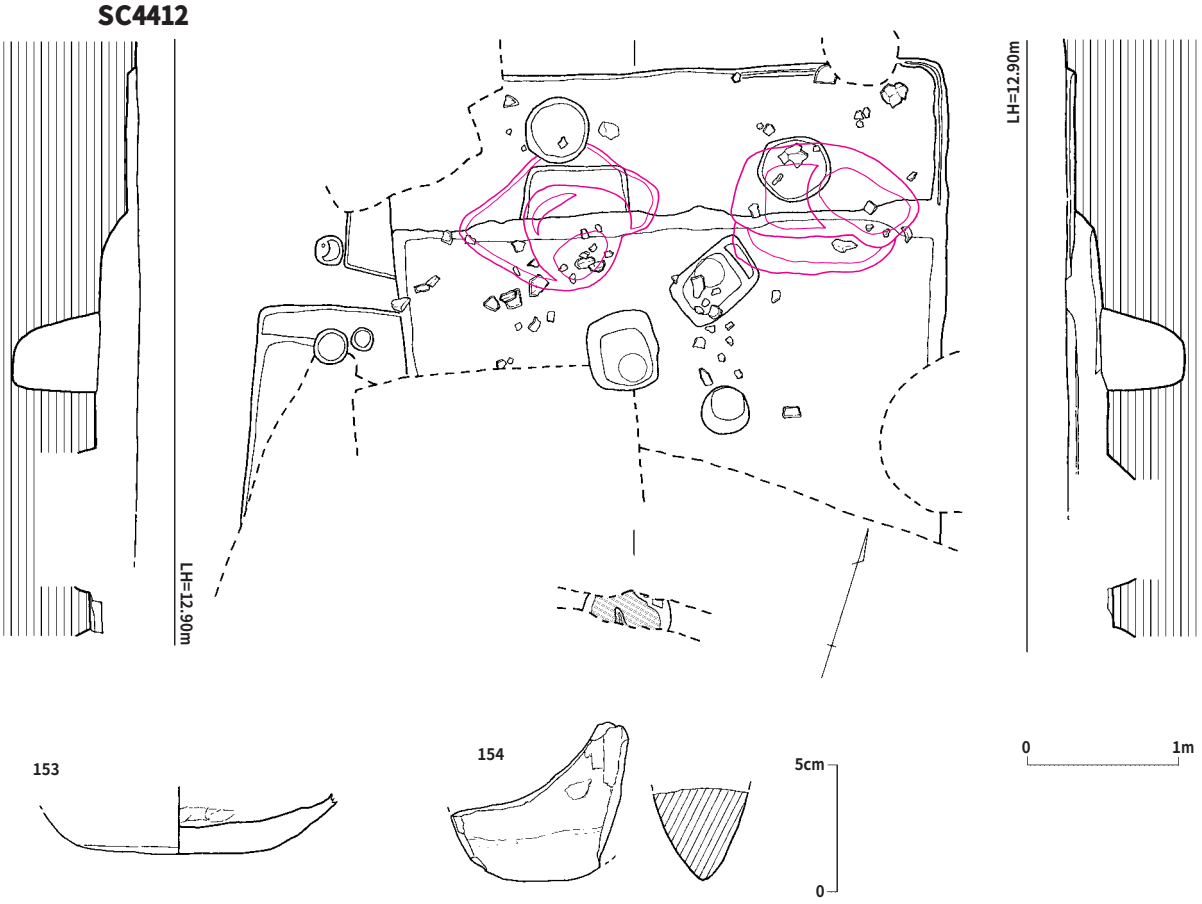


Fig. 39　SC4412実測図（1/50・1/3）

SC4443（Fig.48）調査区の中央東寄りに位置し、SC4439に切られる。主軸はN-87°-Wで平面形は東西に長い楕円形を呈し長径471㎝、床面までの深さ18㎝を測る。南壁西寄りに幅３～４㎝、深さ３㎝の壁溝が断続的に分布する。柱穴・炉は不明で床面下の掘込み等も確認できなかった。遺物は土器小片が多く出土したが時期が確認できたうち１点が弥生時代後期中頃で残りは中期の土器である。出土遺物（Fig.48　192～196）。192～194は甕口縁、195・196は甕底部である。その他に器台破片や赤く被熱した長石石英班岩片と黒曜石剥片が出土した。

SC4450（Fig.4）調査区の中央西端部に位置する。床の汚れの痕跡がわずかに遺存しているだけで平板測量を行った時点では痕跡を確認できたがその後雨などにより削られ、遺構の掘り下げ時には完全に消滅しており、個別等の図面作成は行えなかった。円形の竪穴式住居と思われる。

SC4542（Fig.49）調査区の北西側に位置し遺構の南西部分が調査区外に延びる。SC4398にも切られており、平面形は判りにくいが隅丸方形と思われる。現状で東西2.8m、南北3.5m、床面までの深さ16㎝を測る。壁溝、炉、柱穴は確認できなかった。土層では北壁から105㎝で直に近く立ち上がる８・９層より左はベット状遺構の盛土である。ベット部、低床部とも床下掘方はみられない。床面から10㎝程浮いた状態で土器が出土した。出土遺物（Fig.49　197～199）。197は甕頸部、198は甕口縁である。Ｌ型口縁が数点出土しているが197のみ「く」の字を呈す。199は器台か。

SC4599（Fig.51）調査区の北東端に位置し遺構の半分以上が調査区外に延びる。主軸をN-56°-Wにとり、SC4661、SC4664を切る。平面形は東西に長い長方形と思われ、現状で東西5.8m、南北3.1m、低床部までの深さ37㎝、ベット状遺構までの深さ26㎝を測る。東西短辺にベット状遺構がつくが東側ベット状遺構は幅101～120㎝を測り、西壁に沿って幅４～12㎝、深さ３～４㎝の壁溝が断続的に巡る。

Fig. 40　SC4437実測図（1/50・1/40・1/3）

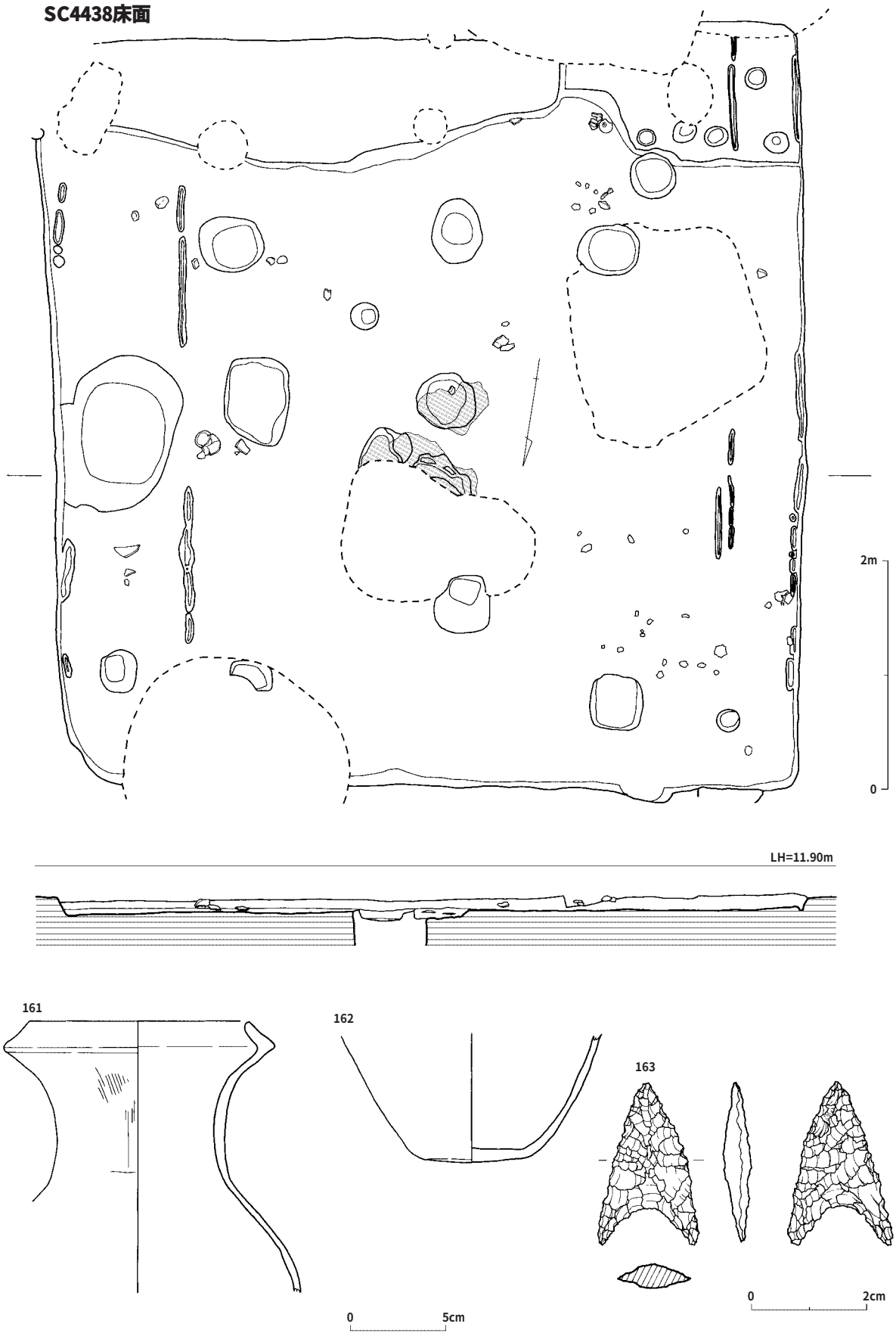


Fig. 41　SC4438実測図（1/50・1/3・1/1）

SC4439・4712床面

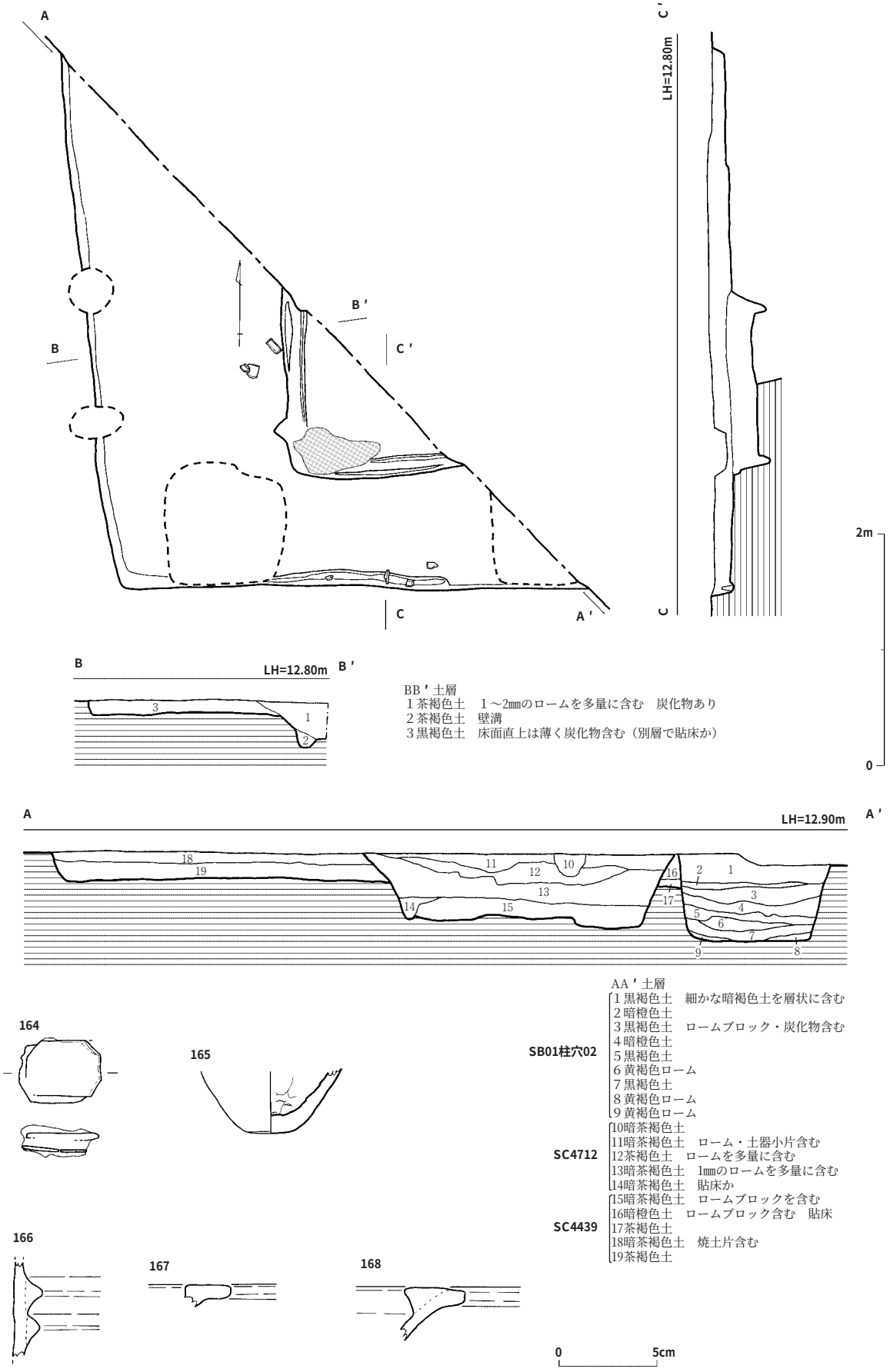


Fig. 42　SC4439・4712実測図１（1/50・1/3）

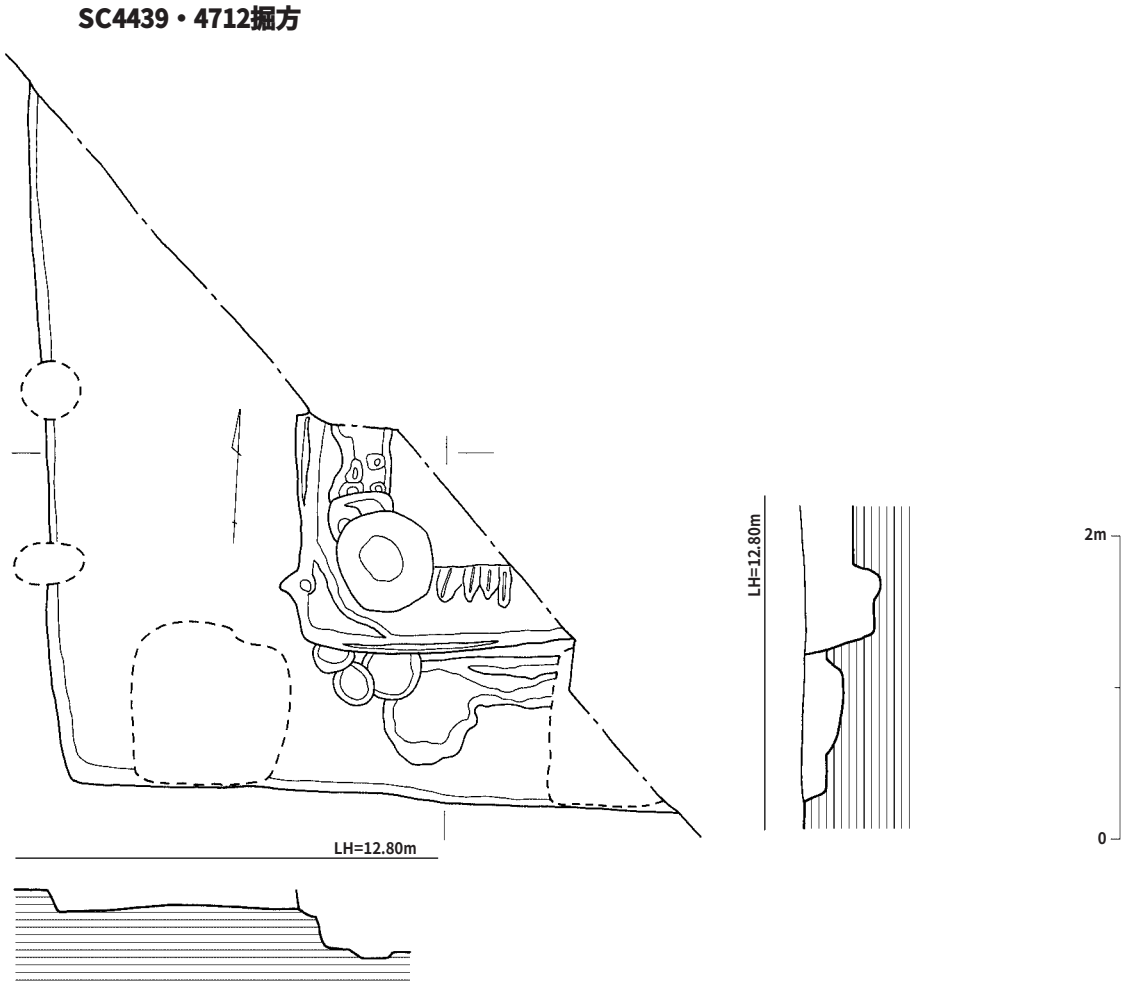


Fig. 43　SC4439・4712実測図２（1/50）

遺物はベット床面から10㎝浮いて水平に分布するため、10㎝程盛土があったと考えられる。低床部は東西4.1mを測る。南壁中央で検出した土坑は長径88㎝、深さ28㎝ を測り底面に凹凸がみられる。出入口に伴う土坑か。南壁の土坑から東側には幅15㎝、深さ６～10㎝の壁溝がつく。炉は低床部南東隅とベット部の２カ所で焼土面を確認したが住居に伴うかは不明である。柱穴は二本柱で東側のみ確認した（SP4766）。柱穴は平面楕円形を呈し長径65㎝、深さ72㎝を測る。柱痕跡はなかった。床下の掘方（Fig.51）は南東隅でピット状の掘方を数個確認したのみで床面全体を掘り下げるような掘方はない。出土遺物（Fig.50・51　200～207）。200は甕棺である。東側ベット上で出土した。201は小型壺、202・203は土錘で202は外面に端部と端部を結ぶ溝あり。204は頁岩、205は砂岩、206は安山岩製の砥石、207は土錘である。重さ416ｇを測る。浅黄橙色を呈し、石英・長石粒を多く含む。焼成は良好。他に袋状口縁片やレンズ状の甕底部、長石石英班岩片、鉄片（鎌？）、黒曜石等と共に多くの中期中頃の土器小片が出土した。

SC4623（Fig.52）調査区中央やや東南寄りに位置し、SC4440と SC4438に切られる。主軸を N-12°-E にとり、平面形は南北に細長い。北辺は弧状を描く。南側は遺存状態が悪く端部は不明である。現状で南北3.5m 前後、東西2.1m、深さ６㎝を測る。埋土は暗茶褐色を呈し１～２㎜程度のロームを多量に含む。炉、柱穴共に不明である。北側壁から少し離れて弧状の床溝があり、幅８㎝、深さ１～５㎝を測る。出土遺物（Fig.52　208～210）。208・209は甕口縁、210は甕底部である。

SC4636（Fig.53・54）調査区北端のやや東寄りに位置し SC4671、SC4438に切られ、SD4717を切る。

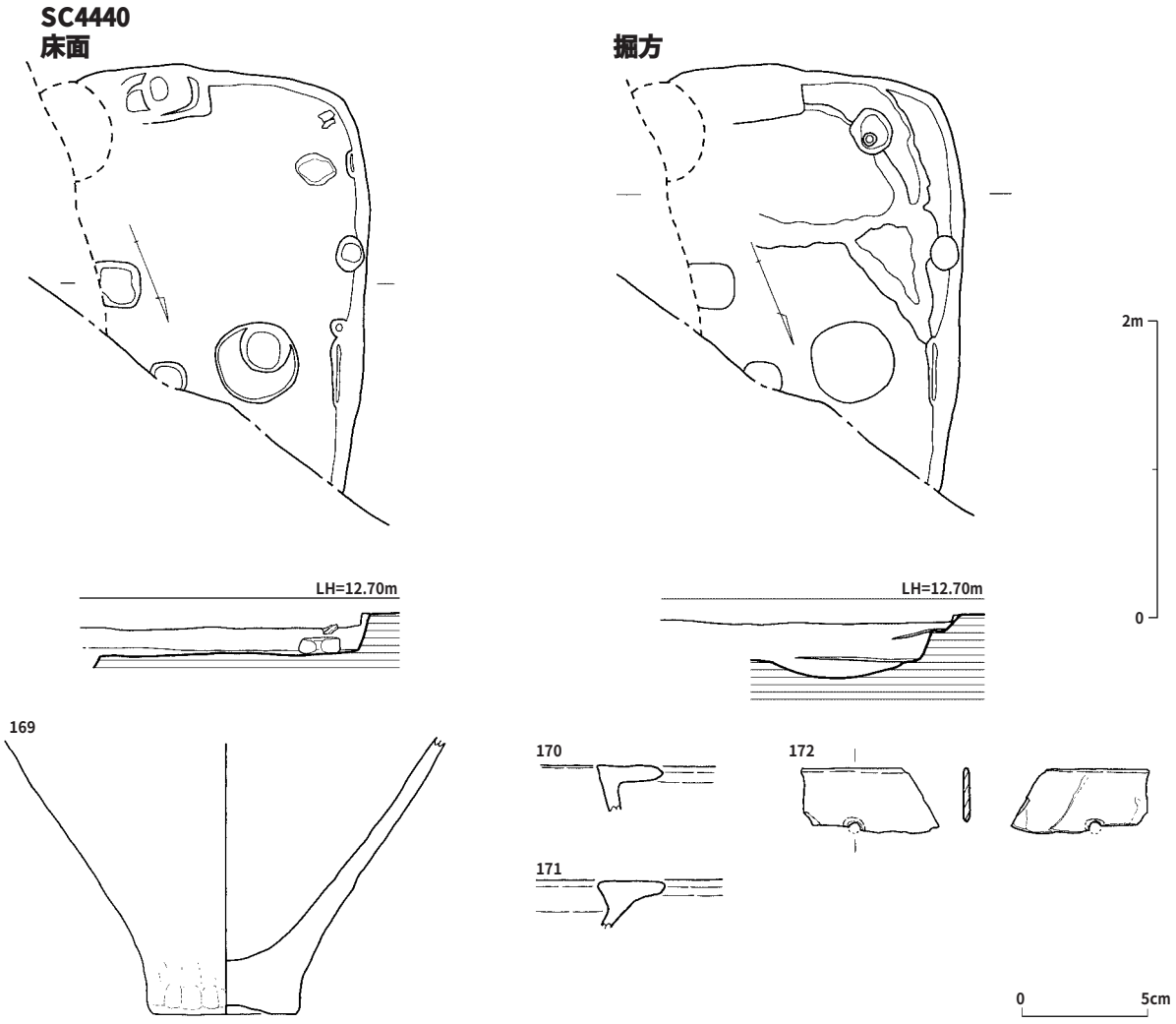


Fig. 44　SC4440実測図（1/50・1/3）

平面形は東西に長い長方形で主軸をS-87°-Wにとり現状で長径5.2m、短径4.2m、床面までの深さ29㎝を測る。西側短辺にベット状遺構がつく。ベット幅は118㎝を測り、一度低床部掘方より深く掘り下げその上に25㎝程基盤層の暗橙色土を盛り、更にその上に茶褐色土を約10㎝の厚さで盛る。東壁側ではベット状遺構を確認できなかったが、東壁に沿ってみられる幅1.5mの掘り込みはベット状遺構の下部構造の可能性があることから東側にも盛土によるベット状遺構があった可能性が高い。炉は低床部中央で検出した。平面形は楕円を呈し長径57㎝、短径49㎝、床面からの深さ22㎝を測り、掘込み内の一部が焼けている。柱穴は明確な主柱穴を検出できなかった。低床部南側で屋内土坑を検出した（Fig.53　4738）。平面形は西側がすぼまる楕円形で長径85㎝、短径69㎝、深さ47㎝を測る。土層から長軸両端を深く掘下げ、厚さ5㎝の板状のものを立てた痕跡がある。その後穴を半分埋めており、底面から径10㎝の焼けた礫が出土した。床面掘方は低床部北側に溝状の掘方がみられる他、ベット部分も全体的に低床部より深く下げているほか、部分的に土坑状に深く掘り下げている。これらのピット状、土坑状の掘方の多くは住居に先行する遺構と思われる。出土遺物は少なく打製石斧と砥石が床面から浮いた状態で出土した。出土遺物（Fig.53　211～218）。211・212は甕、213・214は甕口縁、215は土製投弾、216は黒曜石剥片、217は凝灰岩・218は砂岩の砥石である。

SC4661（Fig.55）調査区の北東部に位置する。SC4599に切られて遺存状況は悪い。平面形は楕円もしくは小判型をなし現状で東西3.1㎝、床面までの深さ21㎝を測る。壁溝、柱穴、炉は確認できなかった。

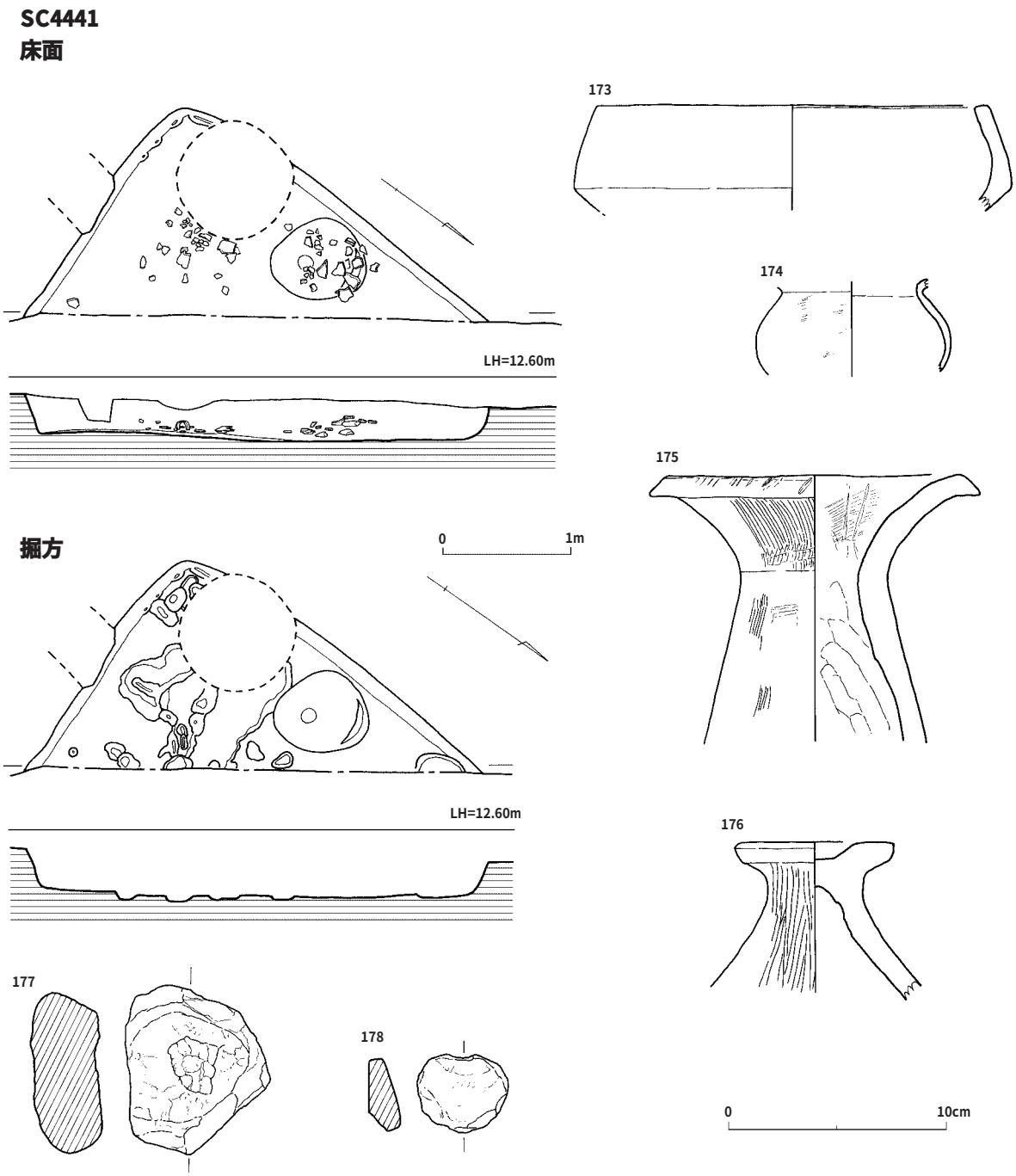


Fig. 45　SC4441実測図（1/50・1/3）

中央部が３～５ ㎝ ほど窪む。覆土は暗茶褐色土で１～２ ㎜ の橙色粘質土を多量に含む。出土遺物（Fig.55　219・220）。219は甕口縁である。220は甕胴部か。

SC4664（Fig.56）調査区の北東端に位置する。遺構の東側が調査区外に延び、また SC4599に切られており平面形は判りにくいが方形、もしくは長方形であると思われる。現状で東西4.6mを測る。覆土は暗茶褐色土で土器細片を多量に含む。南壁に沿う長方形土坑は切り合う掘立柱建物の柱穴である。出土遺物（Fig.56　221～232）。221～228は甕口縁、229は甕胴部、230・231は甕底部である。232は小銅鐸で高さ5.3㎝、底部径約３㎝、重さ12.9g を測る。鰭の部分はわずかに出っ張る。SC4599との間のベルト部分から出土した。ベルト断面に薄板状の緑青がみえたが遺存状態が悪く粉状に剥がれるため、福岡市立埋蔵文化財センターに依頼し周囲の土ごと取り上げ、センターでの処理を行ったところ小銅鐸であることが判明した。紐がやや下を向いた状態で出土した。ベルトを精査したが小銅鐸に伴う掘方は確認できなかった。

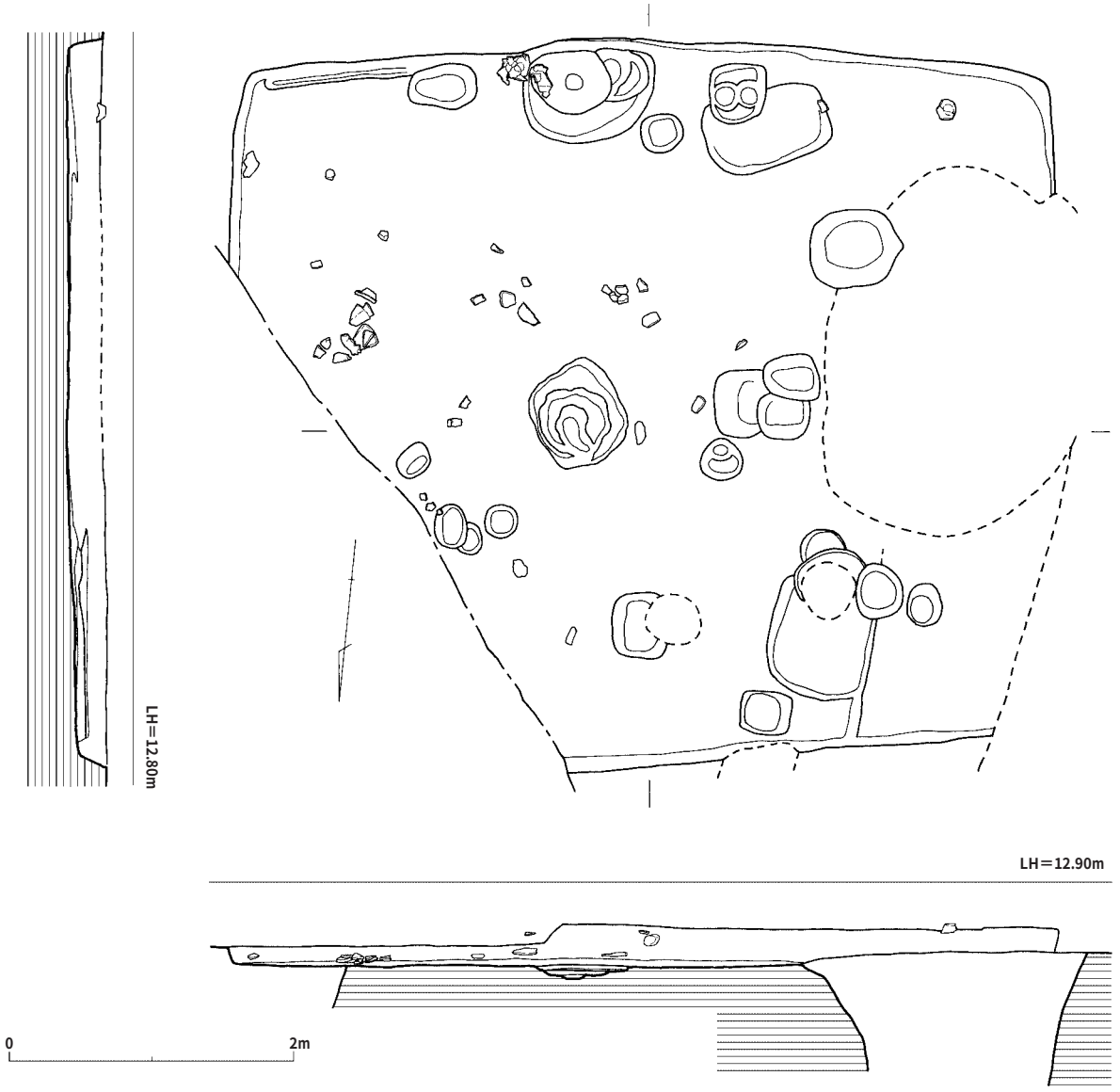


Fig. 46　SC4442実測図１（1/50）

SC4671（Fig.57）調査区の北東側に位置する。SC4664に切られる。SC4438やSC4636との切り合いは不明瞭である。主軸をN-４°-Eにとり、現状で長径４m、短径2.8m、深さ10㎝を測る。炉、柱穴は確認できなかった。出土遺物（Fig.57　233・234）。どちらとも甕口縁である。その他に粒が粒子がこまかな砂岩製の砥石、黒曜石剥片、桂化木片などが出土した。

SC4712（Fig.42・43）調査区中央東端に位置しSC4439を切る。遺構のほとんどは調査区外で現状で東西1.73m、南北1.53m、床面までの深さ39㎝ を測る。コーナー部に焼土面がみられる。壁溝は幅約10㎝、深さ９～10㎝を測る。掘方（Fig.43）はコーナー部の径62㎝、深さ46㎝のピット状の掘込みの他に、西と南壁に沿って幅40㎝前後の溝状の掘り込みがあり、その底面で鍬刃らしき痕跡を確認した。その上に20㎝ほどの厚さに褐色粘質土と黒色土を混ぜ、丹念につき固めて床面としている。出土遺物（Fig.42　166～168）。166は甕胴部突帯である。167は甕口縁、168は壺口縁か。

SC4786（Fig.58）調査区の北端部に位置する。SC4437、SC4636に切られる。遺存状況が悪く不明瞭であるが隅丸の長方形もしくは楕円形と思われる。遺存部分で東西3.3m、南北2.8m、深さ26㎝を測る。柱穴・炉は不明である。遺物は中期中～後半の土器片の他に後期前半と思われる甕の小片が出土した。

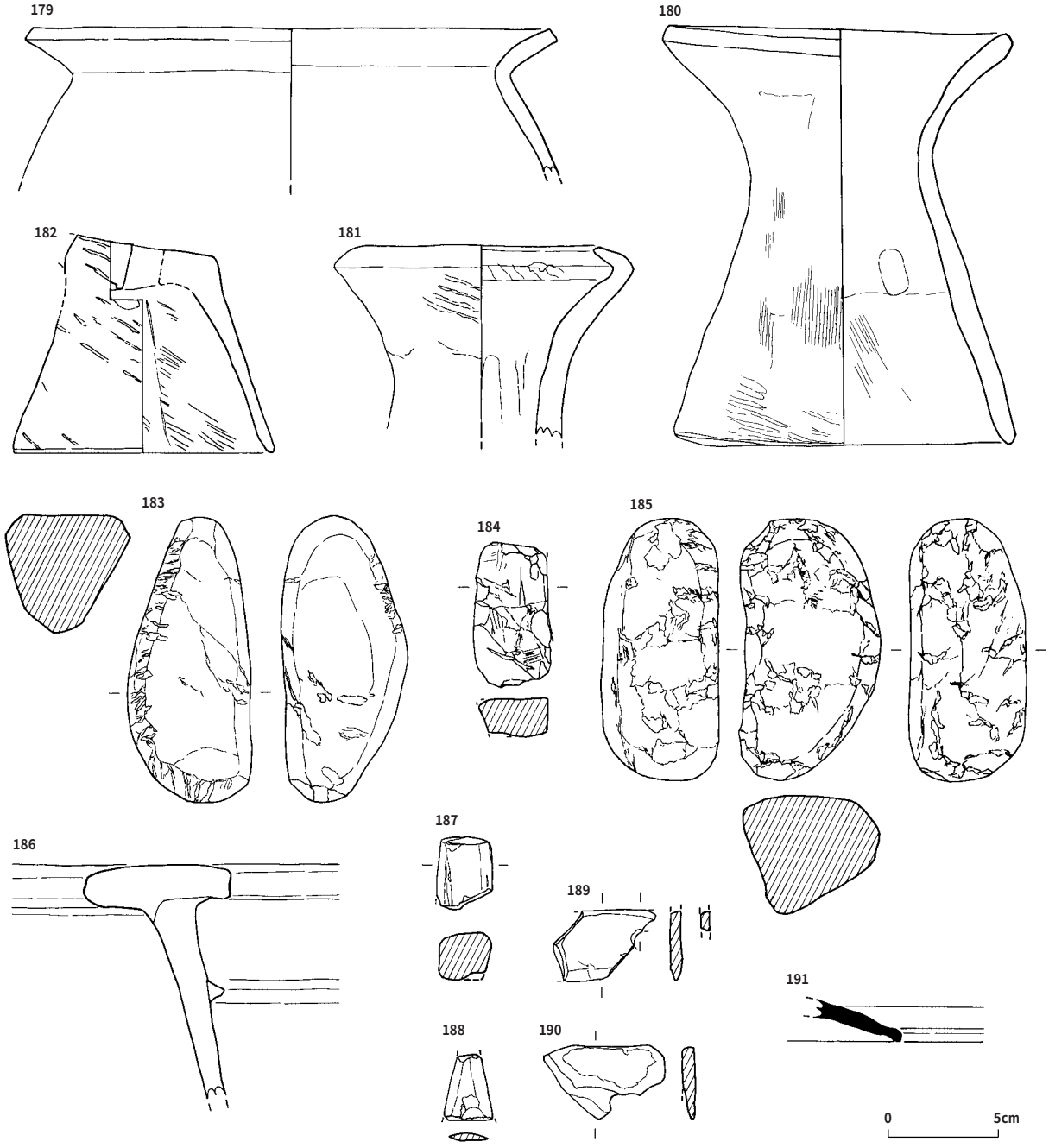


Fig. 47　SC4442実測図２（1/3）

しかし、中期後半と思われる SC4437に切られていることから中期中頃から後半と考えられる。

SC4850（Fig.57）調査区中央東寄りで検出した。SC4442に切られ、SC4443を切る。平面形は楕円形か。現状で東西2.4m、南北50㎝、深さ20㎝ を測る。

２）平地式住居

4446（Fig.59）調査区の中央西側で検出した大壁建物である。SC4336を切る。南側は攪乱に削られたため残りが悪い。片面は南北に長い長方形で、主軸はほぼ南北方向に沿う。南北６m、東西５mを測る。四隅の柱穴とその間の壁の部分を溝状に掘り、柱を埋めている。判りにくいが３×５間程度の建物になると思われる。建物に伴うと思われる柱穴に01～13の番号を付けた。梁間は4.6mを測り、柱間

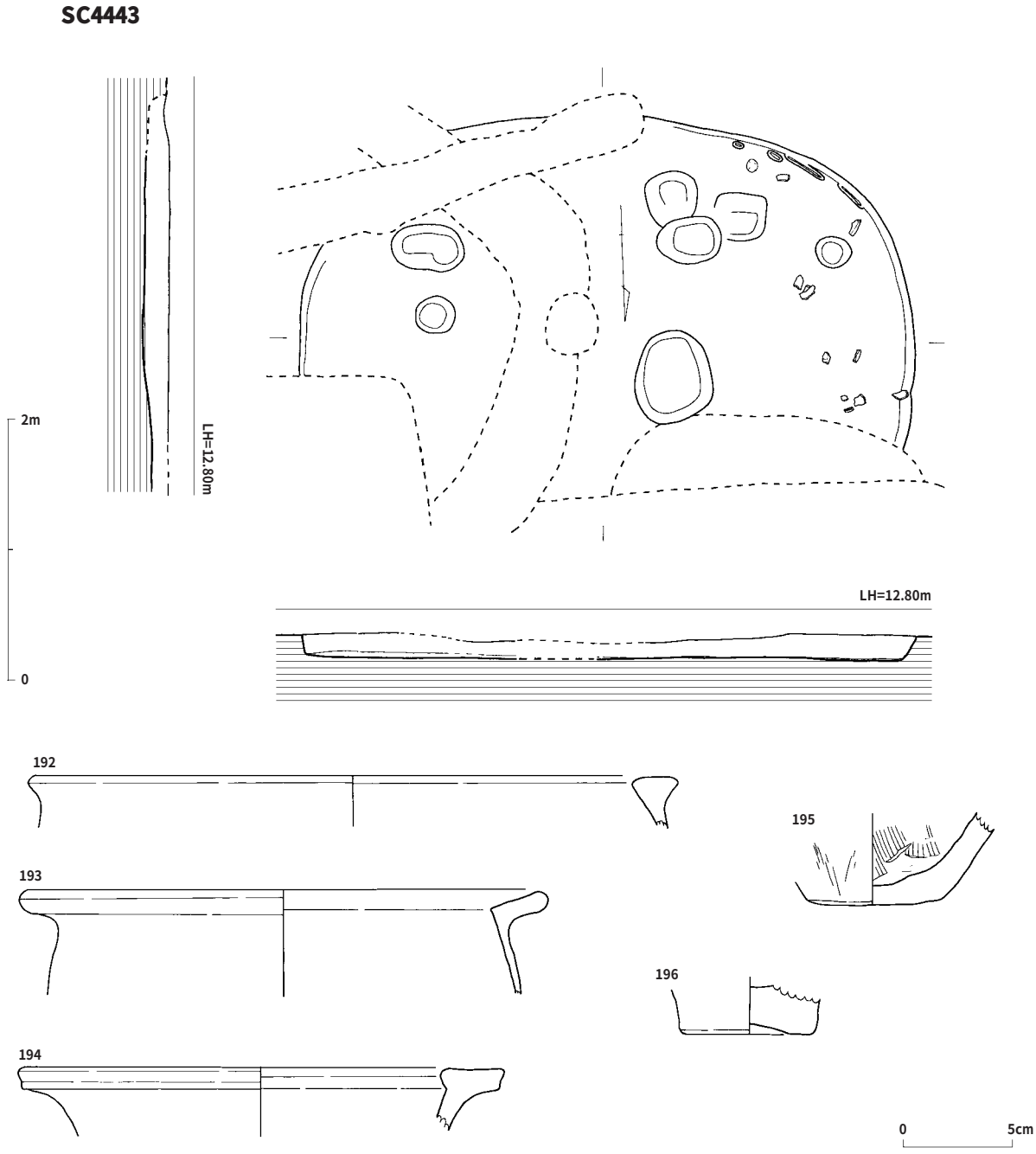


Fig. 48　SC4443実測図（1/50・1/3）

は1.1～2.3m程を測る。01～02間と03～04間は狭く、真中の02～03間が広い。桁行きは全長5.5mを測り、柱間隔は芯々で0.7mから1.4mを測る。柱間には径の小さな掘り込みがみられる。補助的な柱であろうか。01～02間は壁に沿う溝がないため、出入り口になるものと思われる。ほとんどの柱穴が、一度掘った溝を埋めてから再度掘り込んでいる。遺物はほとんど出土していないが、弥生時代後期前半から中頃と思われる SC4336を切ることや、柱穴11を切る方形柱穴の時期が弥生時代終末から古墳時代初頭になる可能性があるため、弥生時代後期後半頃になるものと思われる。

4030（Fig.60）調査区中央東側で検出した１×２間の掘立柱建物である。柱穴掘方がやや特殊なため平地式住居として報告する。周溝状遺構4514や SC4443を切る。SC4060との切り合いは南側が切られ、

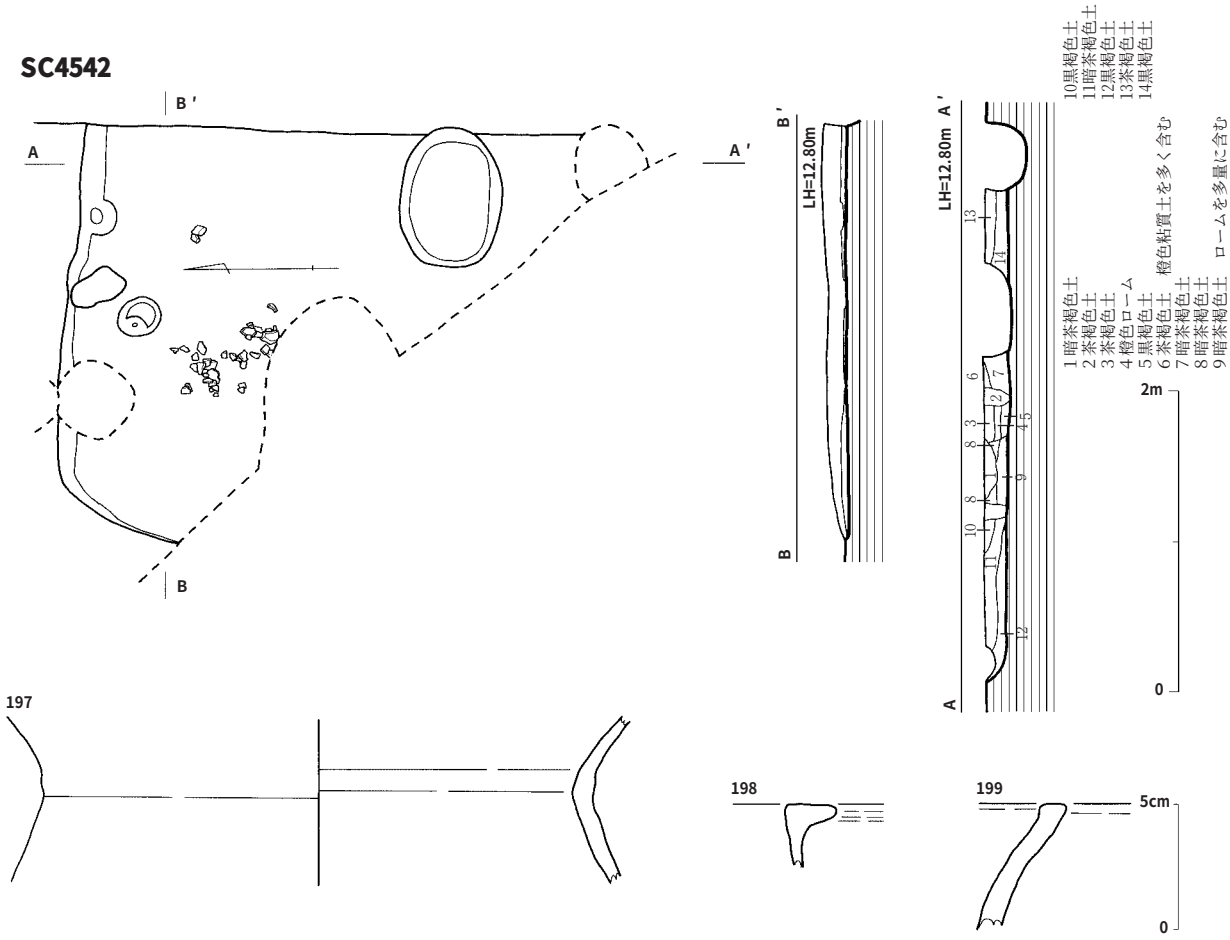


Fig. 49　SC4542実測図（1/50・1/3）

北側が切っているが、南側柱列と SC4060との境は他の遺構も含めて切り合いが激しく見誤った可能性が高い。打って返し後に意識しながら遺構検出を行った北側柱穴の切合いが正しいと思われる。古墳時代初頭か。主軸を N-75°-E にとり柱穴を主軸に沿って溝状に掘る。大壁建物のような小さな柱穴が多く並ぶのではなく、他の掘立柱と同様に柱間隔は広く、補助的な柱穴などもみられない。梁間は3.0mを測る。南側柱列は桁行き全長5.4m、柱間隔は2.5～３mを測り、北側柱列が桁行き全長4.5m、柱間隔は２～2.5mと北側柱列が狭く、平面はやや北側が狭い台形を呈す。床面積は12.4㎡を測る。柱穴は北側は１本の溝状であるが、南側は１柱穴ごとに途切れる。柱痕跡は４本が明確に残っており、径20～26㎝を測る。出土遺物は中期後半甕の小片が出土した。

３）掘立柱建物　弥生時代の掘立柱建物を６軒検出した。建物に結びつけられなかった柱穴はまだ多数残っており、まだ多くの掘立柱建物が建つものと思われる。

SB02（Fig.61）調査区の南東端で検出した。おそらく１×１間の掘立柱建物で、柱間はおおよそ東西、南北とも3.5mと正方形を呈す。主軸を N-41°-E にとる。柱穴は径84～96㎝、深さ40～56㎝を測る。

SB03（Fig.62）調査区の北西端で検出した１×１間の掘立柱建物である。柱間は南北が3.5～3.85m、東西が３mで主軸を N- ９°-E にとる。柱穴は楕円形もしくは長方形を呈し径54～71㎝、深さ57～104㎝を測る。柱痕跡は径15～23㎝を測る。

SB04（Fig.63）調査区中央北寄りで検出した１×２間の建物である。SC4438に切られる。主軸を N-83°-W にとる。柱穴は楕円形を呈し径は約1.4～2.3m、深さ87～116㎝を測る。梁間は全長3.5m、桁行きは全長5.1mを測る。柱間は2.5～3.7mをはかる。

SB05（Fig.66）調査区の北西側で検出した１×２間の建物である。SC4336、SC4398、SC4437を切る。

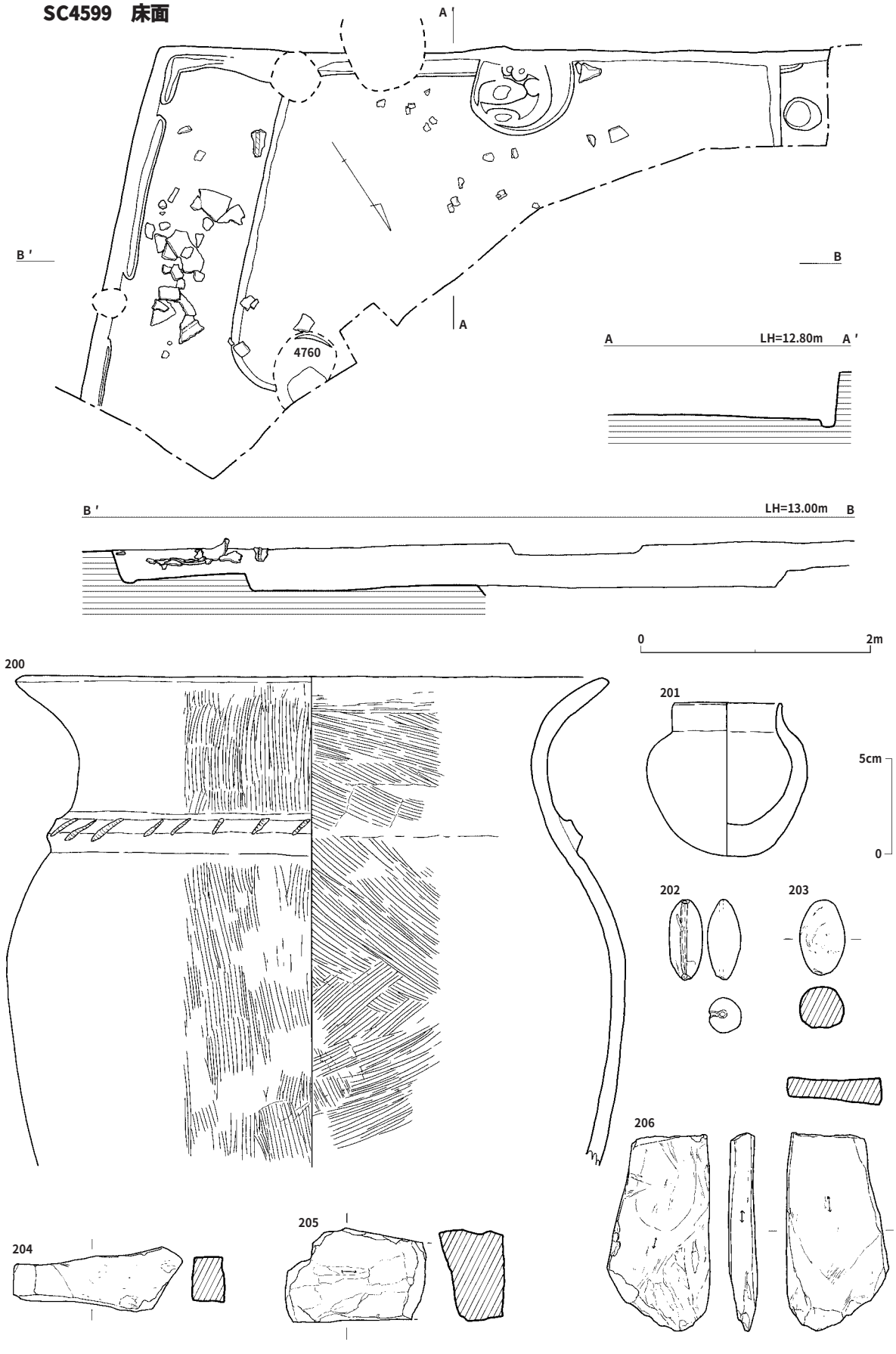


Fig. 50　SC4599実測図１（1/50・1/3）

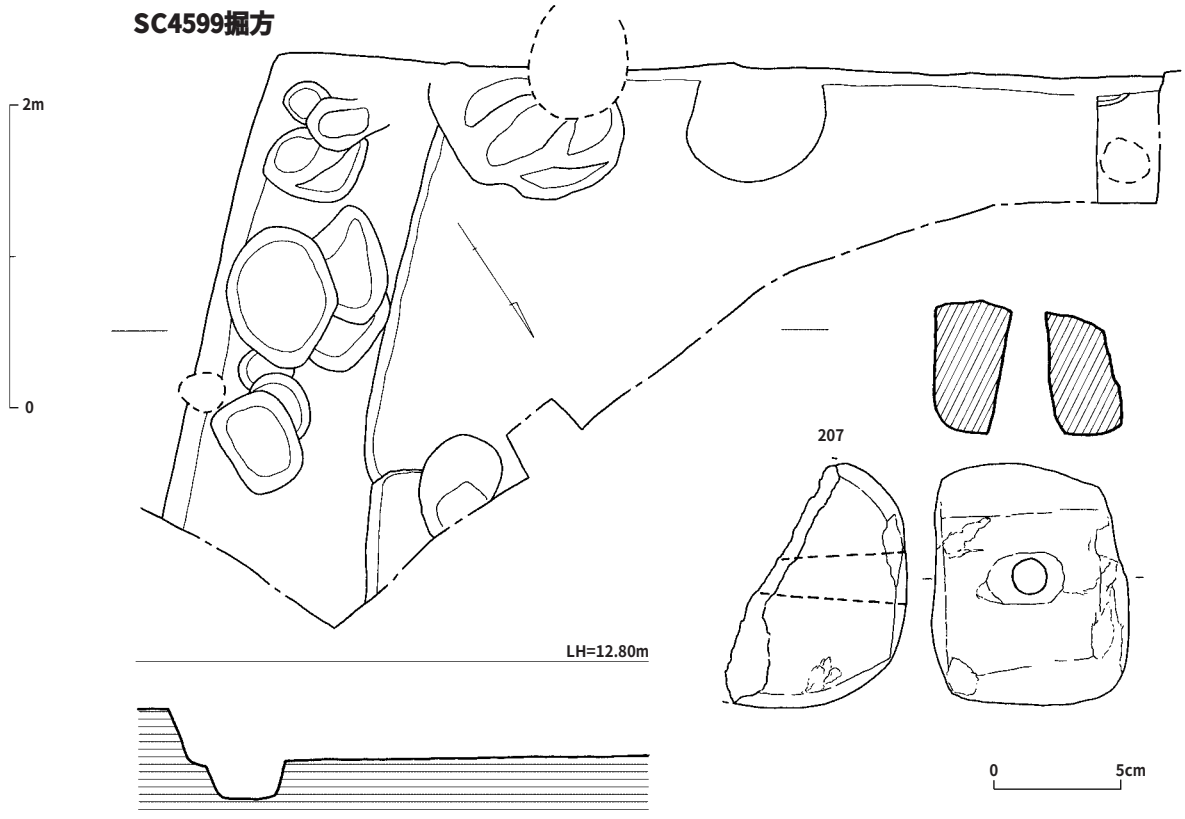


Fig. 51　SC4599実測図２（1/50・1/3）

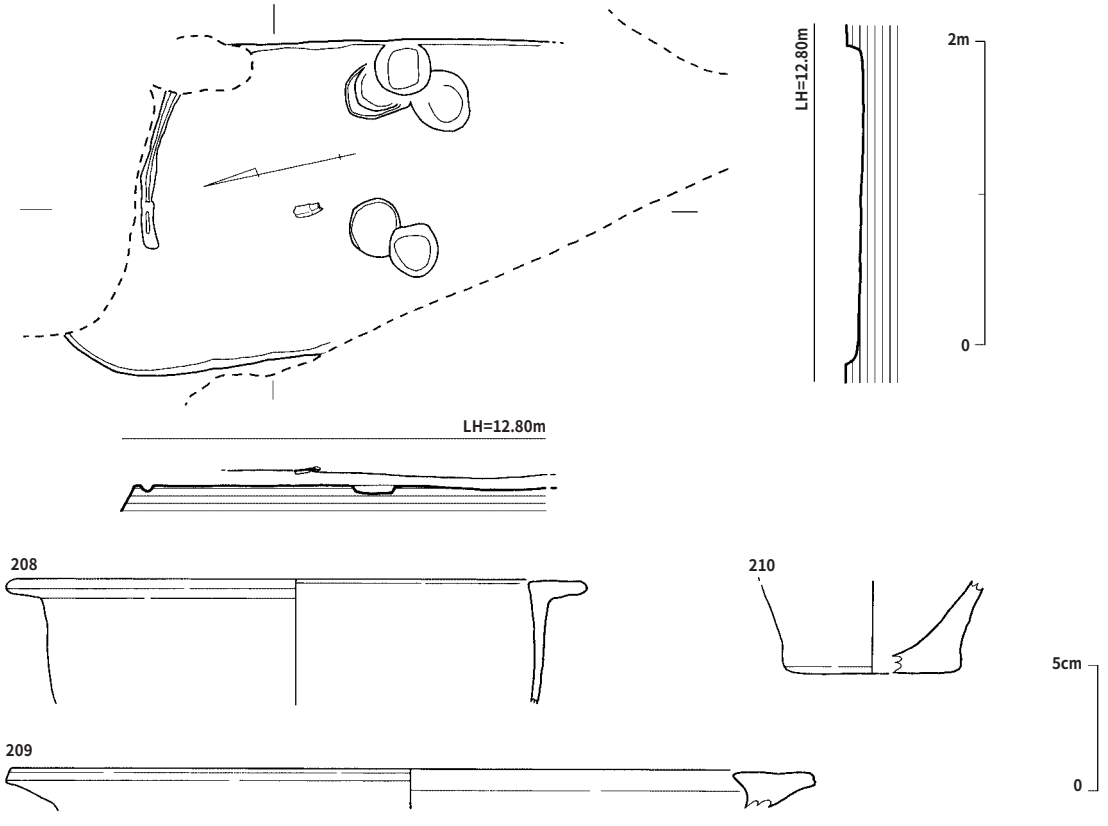


Fig. 52　SC4623実測図（1/50・1/3）

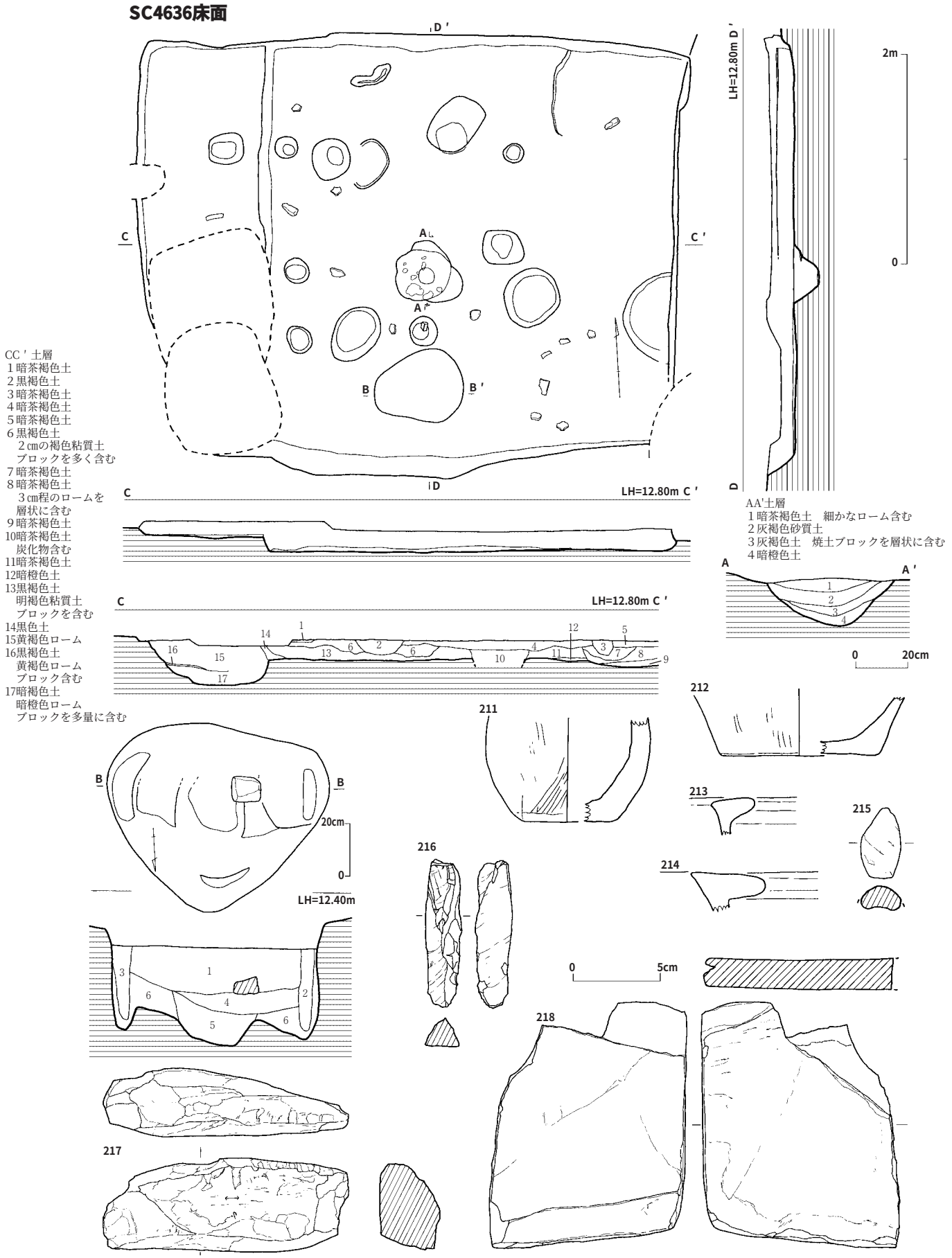


Fig. 53　SC4636実測図１（1/50・1/20・1/3）

SC4636掘方

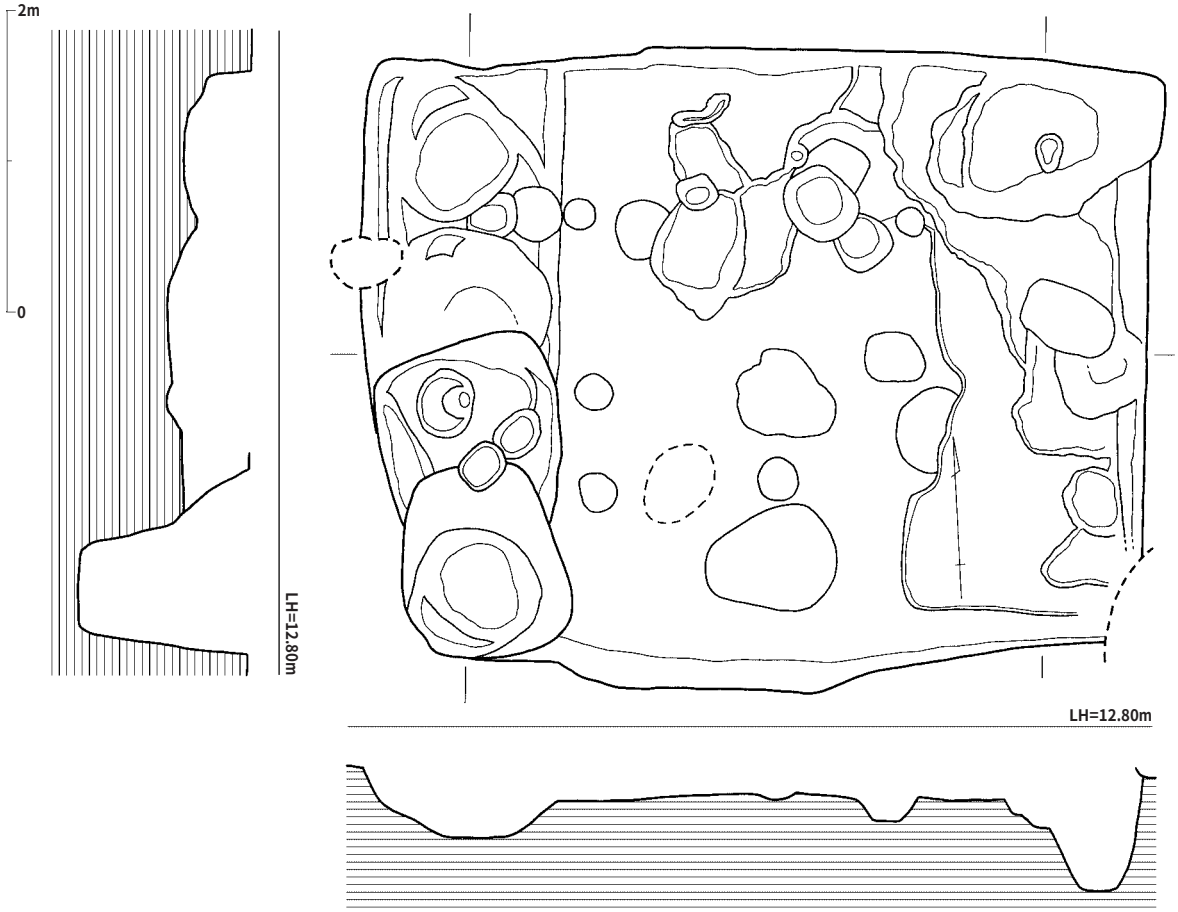


Fig. 54　SC4636実測図２（1/50）

主軸をN-12°-Eにとる。柱穴は隅丸長方形または円形を呈し径53～61㎝、深さ34～88㎝を測る。梁間は全長3.7m、桁行きは全長5.6m、柱間は芯々で2.8～3.8mを測る。６本中５本で柱痕跡を確認した。径16～21㎝を測る。弥生時代後期後半から終末か。

SB06（Fig.65）調査区の西側で検出した２×２間の側柱建物でSD4017に切られる。主軸は南北にほぼ直交する。柱穴は円形もしくは楕円形で径31～46㎝、深さ25～46㎝を測る。梁間は全長2.5m桁行きは2.8m、柱間は芯々で1.0～1.7mを測る。

SB08・09（Fig.67）調査区の南東側で検出したSC4064に切られる。２軒の建物のうち柱穴２期が重なることから成り立つのはどちらか１軒のみである。SB08は現状で１×４間であるが本来は梁間２間程度になると思われる。主軸をN-64°-Wにとる。柱穴は方形もしくは楕円形で径43～53㎝、深さ12～58㎝を測る。梁間は現状で1.5m、桁行きは全長で4.4mを測る。柱間は芯々で1.1～1.5mを測る。SB09は２×２間の側柱建物で主軸をN-78°-Eにとる。柱穴は楕円もしくは方形を呈し、径40～63㎝、深さ28～41㎝を測る。梁間は全長で3.1m、桁行きは3.7mを測る。柱間は芯々で1.4～1.8mを測る。

４）周溝状遺構

SK4514（Fig.68）調査区中央西寄りで検出した。SC4439、SC4443、4030に切られる。幅53～71㎝、深さ21㎝の溝が東西に長い隅丸方形状に巡り長径507㎝、短径約４mを測る。西側底面で鍬の刃痕らしき窪みを検出した。土層には流水・滞水の痕跡はない。鍬刃は長さ13～26㎝を測る。周溝内側で１×

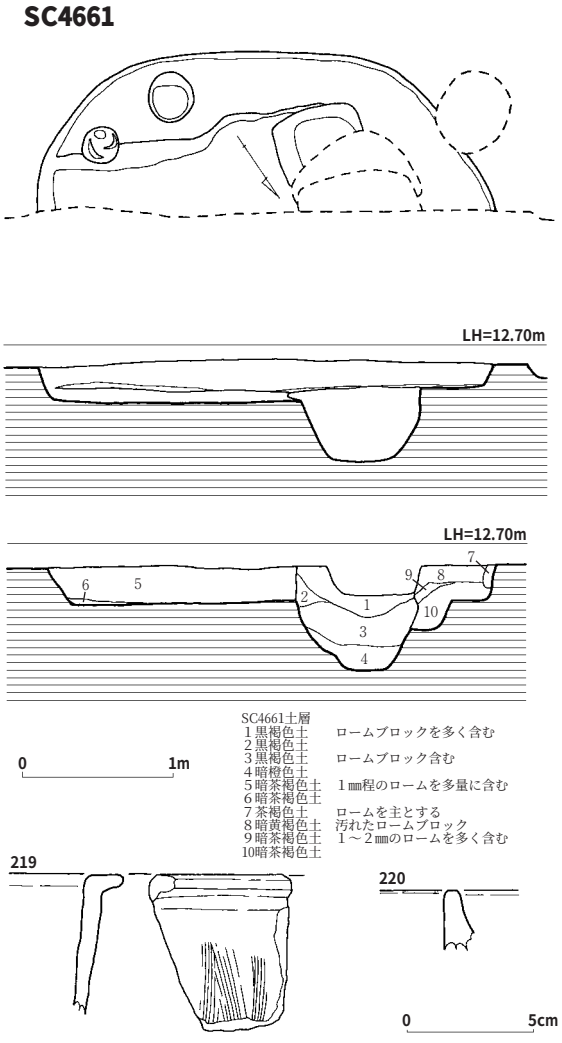


Fig. 55　SC4661実測図（1/50・1/3）

２間の掘立柱建物を検出した。建物は主軸をN-55°-Wにとり柱穴は円形で径32～43㎝、深さ24～52㎝ を測る。梁間は1.3～1.5m、桁行きは全長で2.7mを測る。柱間は芯々で1.2～1.5mである。弥生時代中期後半の甕破片が数点出土している他、１点のみレンズ状の甕底部が出土した。

SK4717（Fig.68）調査区北端部で検出した。SC4636とSC4661に切られ一部のみしか残っていない。溝の幅83㎝、深さ14㎝を測る。弥生時代中期後半のＬ型口縁片１点と広口壺の頸部片が１点出土した。

５）井戸

調査区内で弥生時代中期後半から後期後半の井戸８基を確認した。井戸の分布は調査区東側に集中する。南東側に位置するＡ区では当時期の井戸が１基も確認されていないのに対し北西側に位置するＣ～Ｅ区では多くの井戸が検出された。全体に分布する竪穴式住居に比べて分布に偏りがあることから、井戸の掘削にはなんらかの規制が働いていたものと考えられる。また、井戸のうちSE4169が八女粘土層に達した段階で掘削を中止している以外は八女粘土層を１ｍ前後掘り下げている。

SE4154（Fig.69・70）調査区南端に位置する円形の素掘り井戸である。検出面での規模は東西長105㎝、南北長108㎝、深さ298㎝ を測る。壁断面は八女粘土の上層までは緩やかにすぼまり鳥栖ロームとの境界の湧水点で崩落のため広がったのち、それから下は半円状をなす。検出面から深さ２ｍで中期後半の甕棺片がまとまって出土した。甕棺片は壁に沿って立てて、中央部は敷いた状態で出土し、実際に若干の水も湧いたため当初は井戸枠と認識した。覆土は甕棺から上は暗茶褐色で細かな土器片を多く含み、甕棺より下は暗灰白色泥質土で完形に近い甕などが出土した。後期前半と考えられる。出土遺物（Fig.69・70　235～251）。235は無頸壺である。236は鉢、237は小型壺、238・239は頁岩製石包丁片で240は頁岩製石包丁の再加工品か。241は甕棺片、242・243は鉢で242は底部に焼成前穿孔を施す。244・245は甕口縁、246～249は壺である。250は鉢、251は器台である。

SE4169（Fig.71）調査区の南端部に位置する円形の素掘り井戸である。検出面での規模は東西長109㎝、南北長102㎝、深さ196㎝を測る。壁断面は検出面から底に向けて緩やかにすぼまる。底面は八女粘土をわずか13㎝ 掘り下げて止めている。調査中に水はほとんど湧かなかった。検出面から25㎝ と81㎝の深さで三日月状のテラスがつく。また112㎝ と156㎝ の高さにわずかな窪みがみられるのは昇り降り用の足掛けか。西側のテラスから64㎝ 程垂直方向の溝がつく。雨水等が流れ込んだときの痕跡と

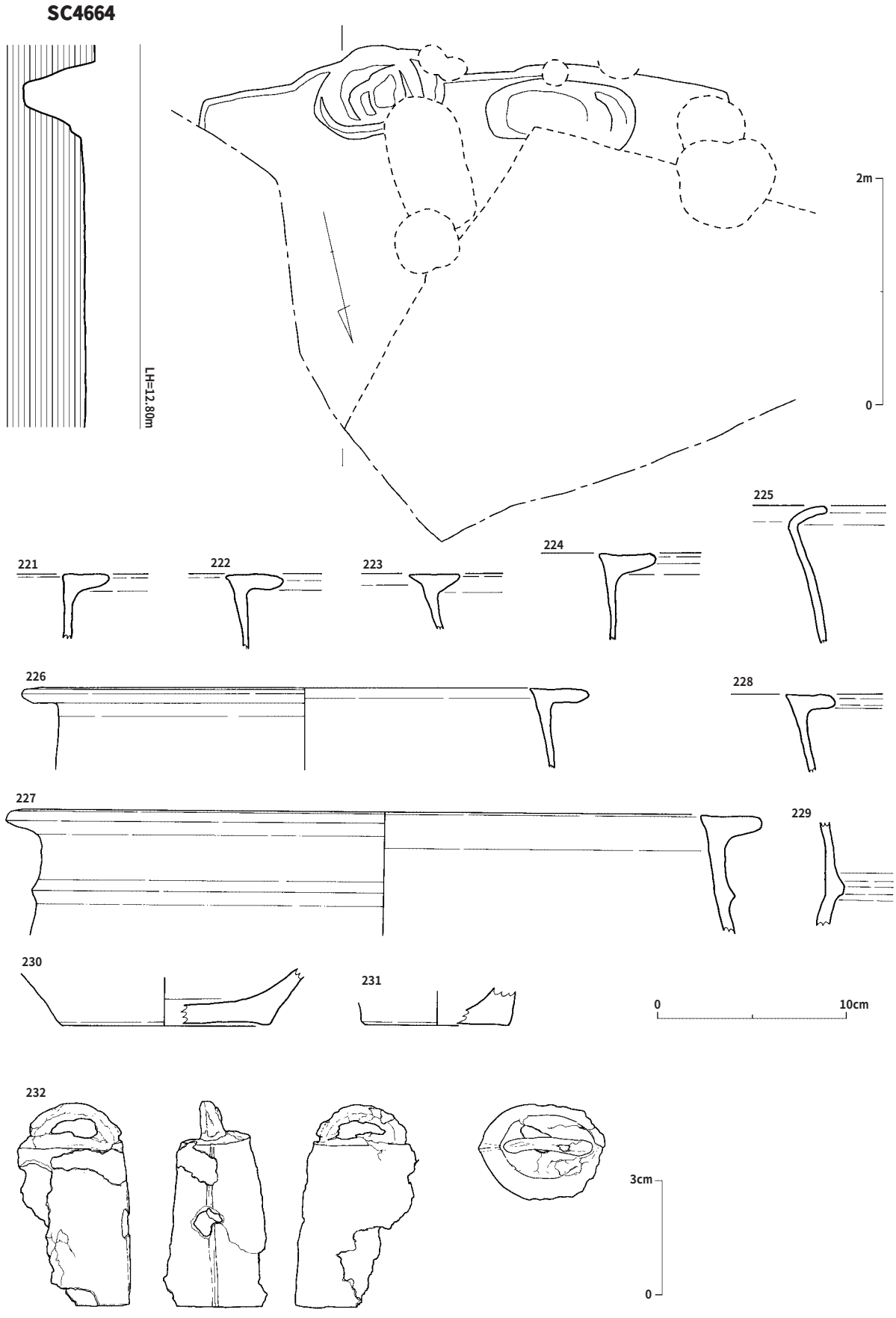


Fig. 56　SC4664実測図（1/50・1/3・小銅鐸2/3）

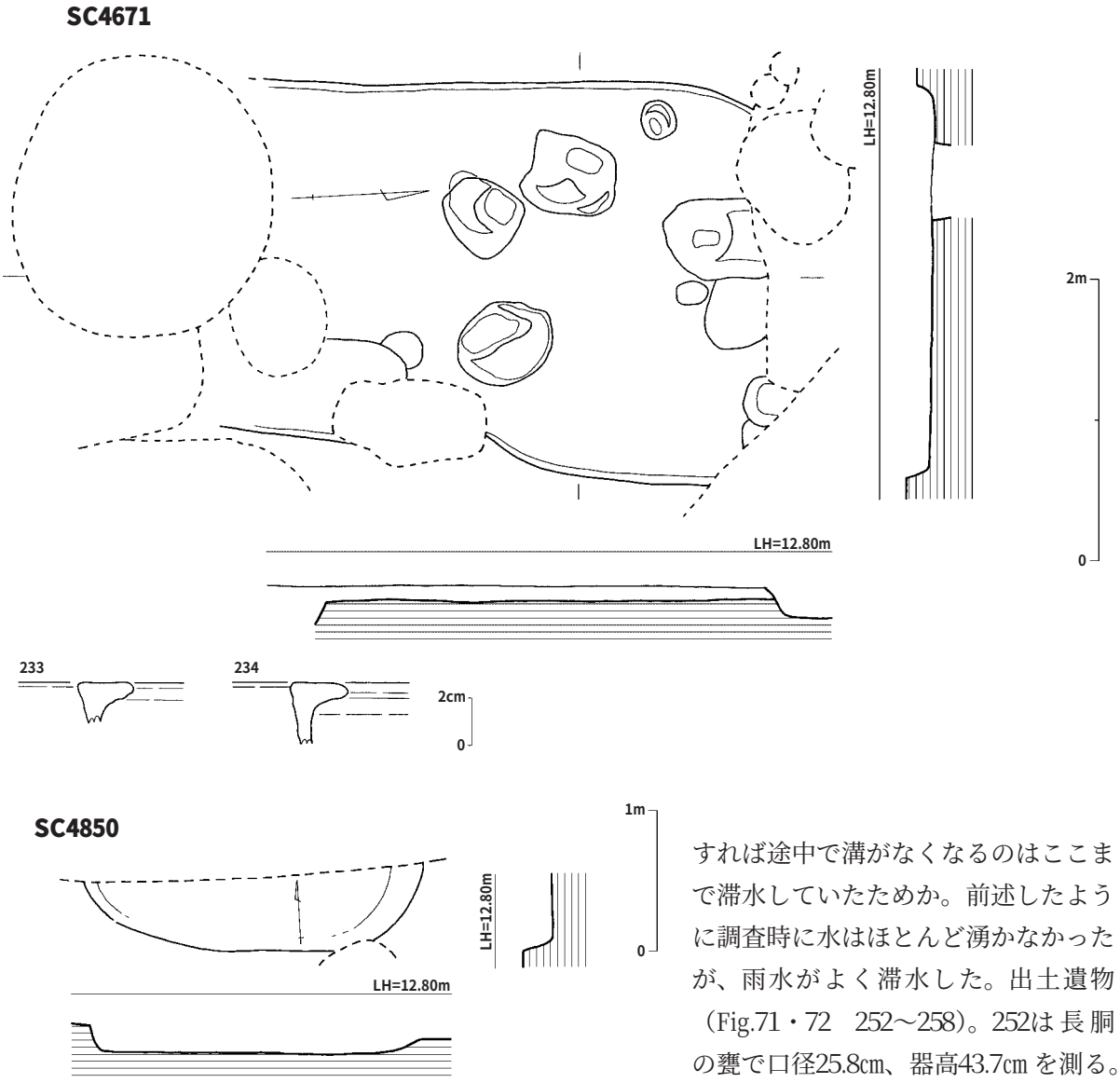


Fig. 57　SC4671・4850実測図（1/50・1/3）

すれば途中で溝がなくなるのはここまで滞水していたためか。前述したように調査時に水はほとんど湧かなかったが、雨水がよく滞水した。出土遺物（Fig.71・72　252～258）。252は長胴の甕で口径25.8㎝、器高43.7㎝を測る。253は甕である。底部に焼成前穿孔を施す。254は壺口縁、255は鉢、256は高坏である。257は青銅器生産に関連した遺物で坩堝もしくは取瓶である。内側は表面からの深さ2.5㎜の範囲がてかりを持つ黒色を呈し、こまかなひびが全体にみられる。福岡市埋蔵文化財センターの分析で銅と鉛と錫を確認した。外側は表面から深さ１㎝弱が黒色を呈し熱を受けたのは確実であるが、推測にすぎないが銅を溶かすのに使用したには焼きが足りないと考えている。口径26㎝、深さは10㎝以上である。器壁は３ ㎝ と厚い。この井戸から破片が２点出土したほか北側Ｃ区からも別個体が出土した。砥石などに再利用される鋳型と異なり再利用されることがないため、この近辺で青銅器生産が行われたことの証明となる遺物である。258は花崗岩質のタタキ石か。

SE4200（Fig.73）調査区南東部に位置する円形の素掘り井戸である。検出面での規模は東西長83㎝、南北長87㎝を測る。掘り下げ中湧水が多く壁に亀裂が入ったことから崩落の危険性があると判断し、八女粘土上面までで掘り下げを中止した。壁断面は深さ1.7mまでは緩やかにすぼまり、それから崩落のため広がる。土器細片がパンケース半分ほど出土したが時期が判るのは中期後半の甕の口縁と底部のみである。

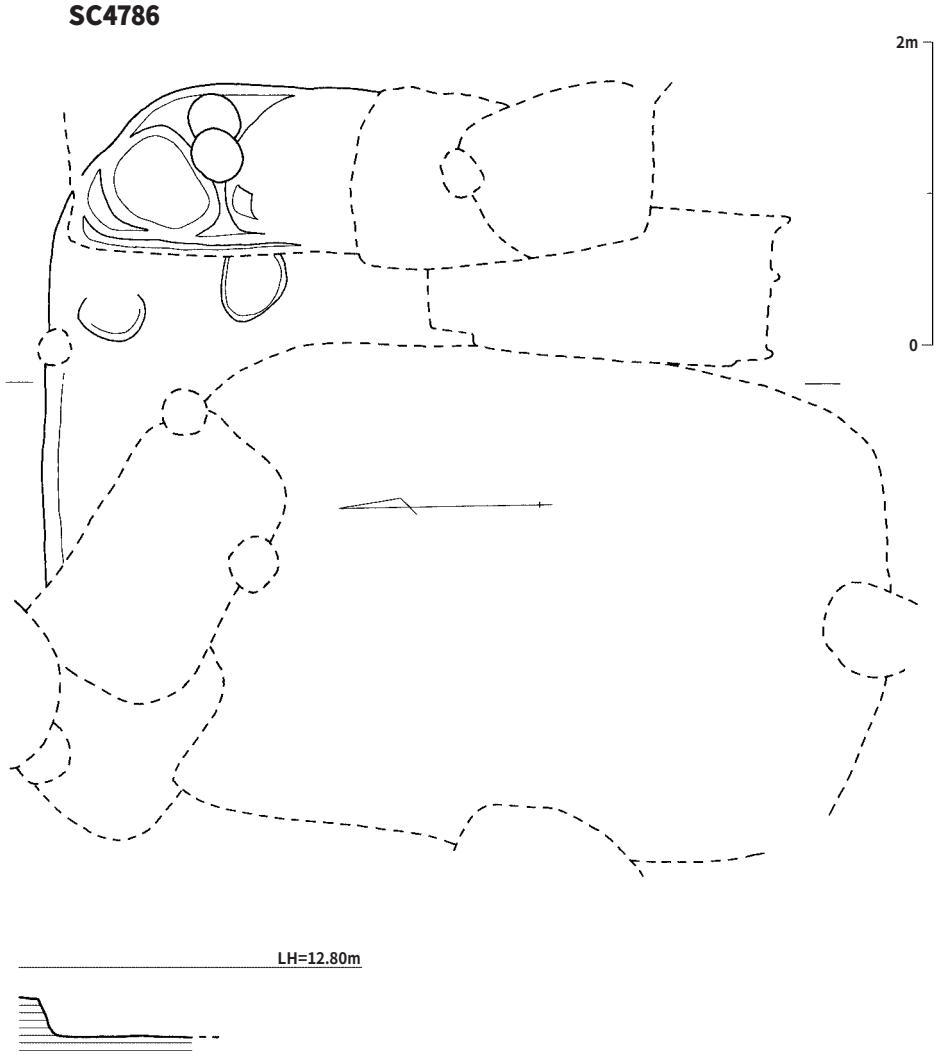


Fig. 58　SC4786実測図（1/50）

SE4202（Fig.74・75）調査区の南東部に位置する円形の素掘り井戸である。検出面での規模は東西長92㎝、南北長94㎝、深さ365㎝を測る。壁断面は検出面から1.6mまではほぼ垂直であるが、鳥栖ロームと八女粘土の境で湧水のため土が崩落して算盤玉状に広がり、深さ2.3mから下は緩やかにすぼまる。遺物は多く出土したが上層から中層にかけては中期中頃の甕の小破片が多い。深さ３mで完形の甕が横倒しの状態で出土したほか底部付近から完形に近い壺が数点出土した。出土遺物（Fig.74・75　259～268）。259～262は壺である。底部近くから完形に近い形で出土した。263は高坏、264は甕、265は蓋、266・267は小型鉢である。268は中期中頃の甕棺口縁である。

SE4231（Fig.76）調査区南東側に位置する円形の素掘り井戸である。検出面での規模は東西長85㎝、南北長87㎝、深さ3.5mを測る。壁断面は鳥栖ロームと八女粘土の境で大きく抉れている他はほぼ垂直の円筒形を呈す。遺物は少ない。投弾、袋状口縁、レンズ状の底部片が出土し後期中頃と考えられるが、その他に中期中～後半の丹塗り磨研土器片や甕棺片が出土した。

SE4236（Fig.77・78）調査区の南東端に位置する円形の素掘り井戸である。検出面での規模は東西長155㎝、南北長143㎝、深さ288㎝を測る。壁断面は深さ1.6mまではほぼ垂直であるが、鳥栖ロームと八女粘土の境界で崩落のため算盤玉状に広がる。出土遺物（Fig.77・78　269～284）。269・270は高坏

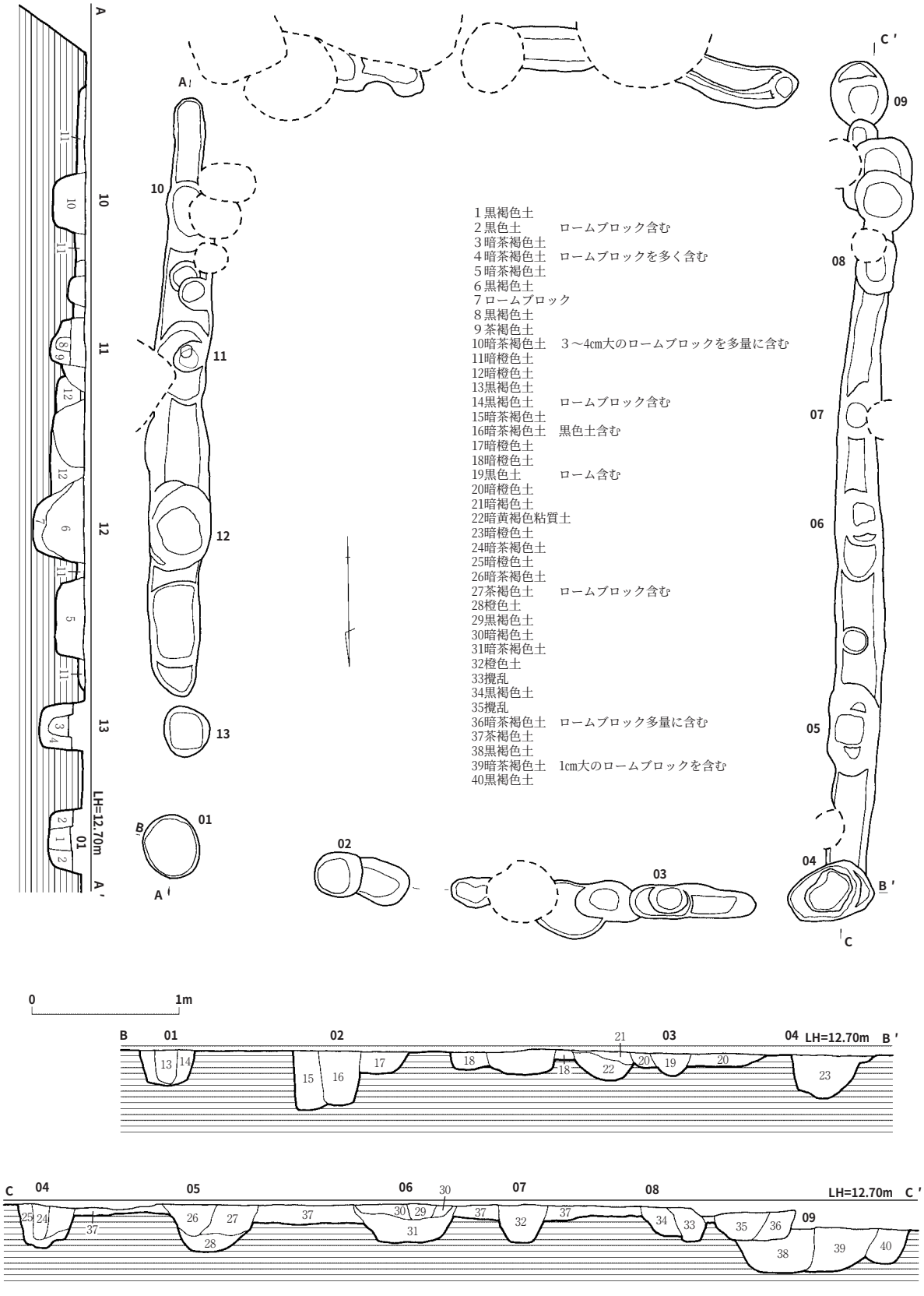


Fig. 59　4446実測図（1/40）

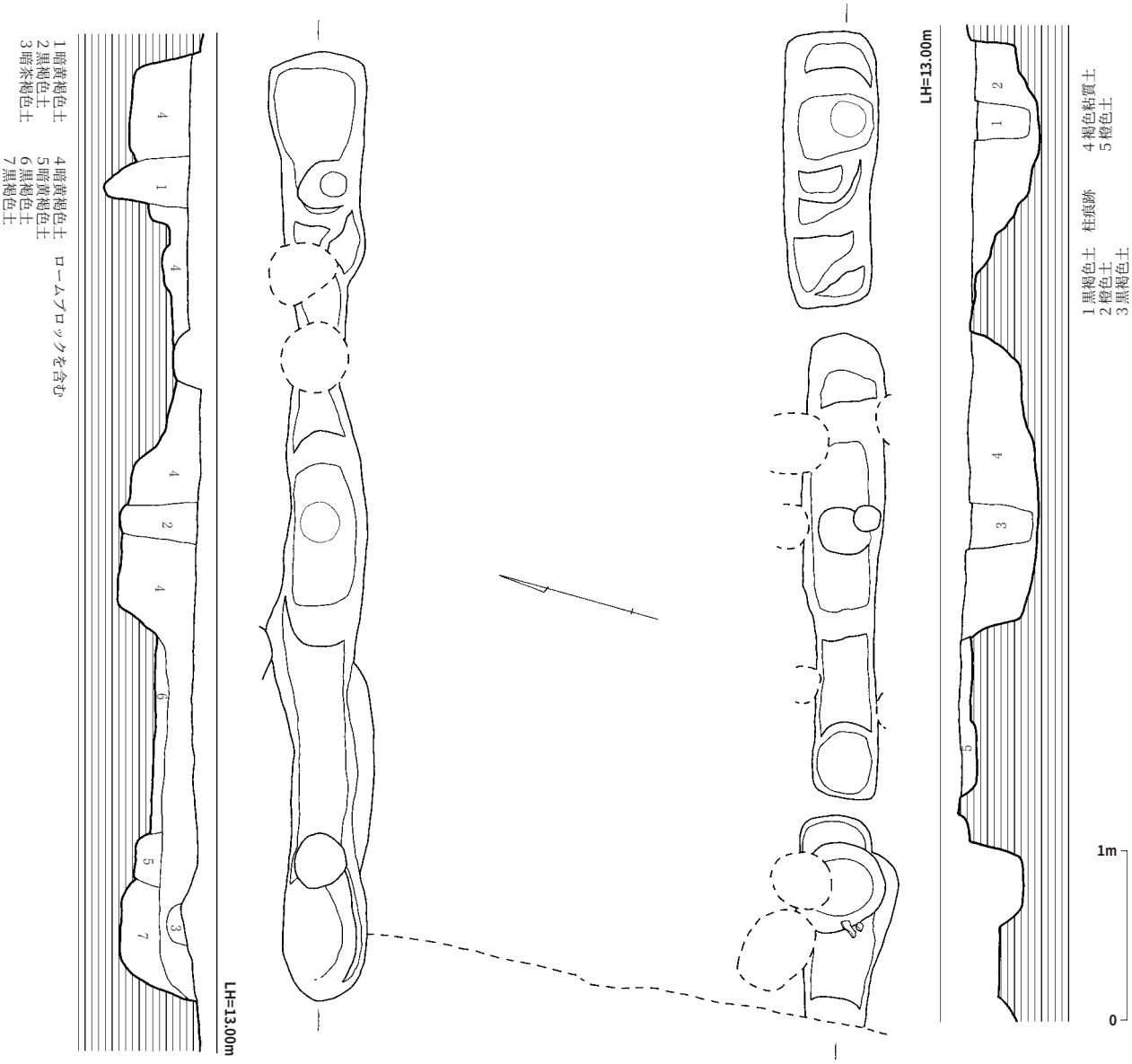


Fig. 60　4030実測図（1/40）

である。269は外表面に赤色顔料を施す。271～275は甕、276は鉢、277～279は壺である。280は鉢か。281は大型器台の底部で径42㎝ を測る。282は甕棺片、283は大型の広口壺で口縁端に刻目と外表面に粘土貼り付けの文様が付く。284は広口壺もしくは高坏か。

SE4444（Fig.79～82）調査区の北端に位置する円形の素掘り井戸である。検出面での規模は東西長156㎝、南北長151㎝、深さ4.7mを測る。壁断面は深さ2.1m まで緩やかにすぼまる。鳥栖ロームと八女粘土の境界付近で大きく崩落する。崩落により一度広がったあと、また底部に向かってすぼまる。検出面から深さ１m前後でわずかな窪みを五カ所確認した。いずれも下が平らである。横棒を架けたり、足をかけるための窪みか。出土遺物（Fig.79～82　285～307）。285～289・292～297は壺、290・291・298～301は甕、302は甕棺口縁、303は土製匙の柄、304・305は石包丁片である。306・307は高坏の坏部である。307は坏部内面に土製仕切板がついて内側を半分に仕切る。板は石包丁型を呈し長さ27.6㎝、高さ9.3㎝、厚さ1.2㎝ を測る。両面とも磨きを施し赤色顔料を塗布する。両端には鋤先口縁の内側出張りに対応する抉りがみられる。坏部との接触面は板の両側から粘土を塗って接着している。底

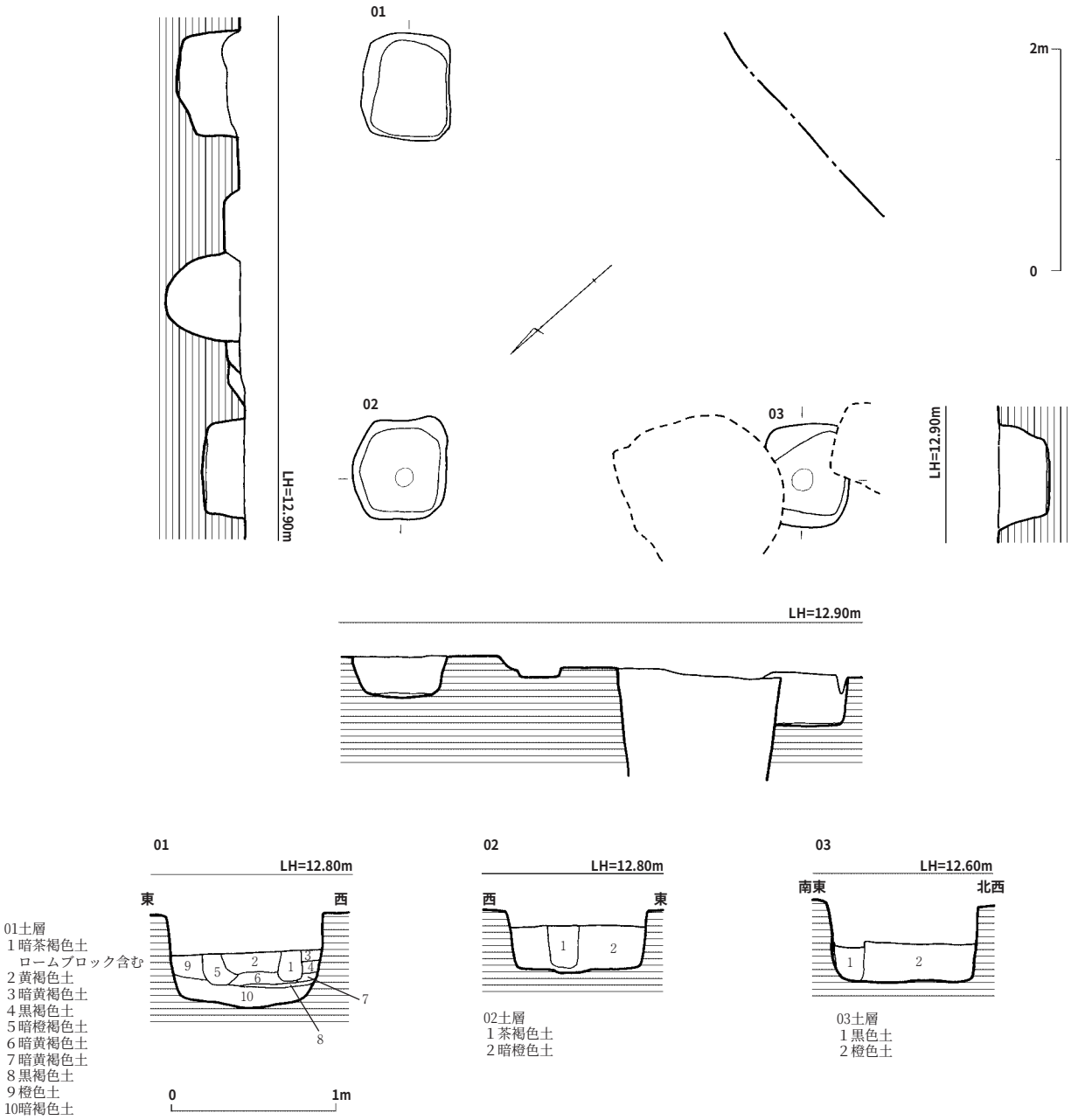


Fig. 61　SB02実測図（1/60・1/40）

建物番号	地区名	建物方向	長軸方向	規模 桁行×梁行	桁行		梁行		床面積 (㎡)	柱穴 番号	形状	規格（cm）			旧遺構 番号	柱痕跡径 cm	主要な出土遺物	建物時期	挿図番号
					実長 (m)	柱間寸法 (m)	実長 (m)	柱間寸法 (m)				長径	短径	深さ					
SB-02	17次B区	ほぼ方形	N-41°-E	1×1	3.6	3.6	3.6	3.6	12.96	01 02 03	長方形 長方形 長方形	96 88 84	79 85 79	56 40 49	4173 4176 4237	14 18 18	L型口縁、甕底部（弥生時代中期後半）	弥生時代 終末～ 古墳時代初頭	Fig.61

Tab.1　SB02 建物跡計測表

部中央では坏との間に隙間が１㎝以上空いてしまうため粘土を充填しているが、その粘土が仕切板側ではなく、坏部側に付くことから仕切板と坏部を同時に作ったのではなく、板の乾燥が進んだ状態で組み合わせている。また坏部内面と仕切板いずれも赤色顔料を塗布してあることや丁寧なミガキを施すことから祭祀に使用されたものである。

SE4669（Fig.83）調査区の北東側に位置する円形の素掘り井戸である。SC4438と SC4636を切る。検出面での規模は東西長204㎝、南北長193㎝、深さ299㎝ を測る。壁断面は深さ2.3mまでは緩やかにす

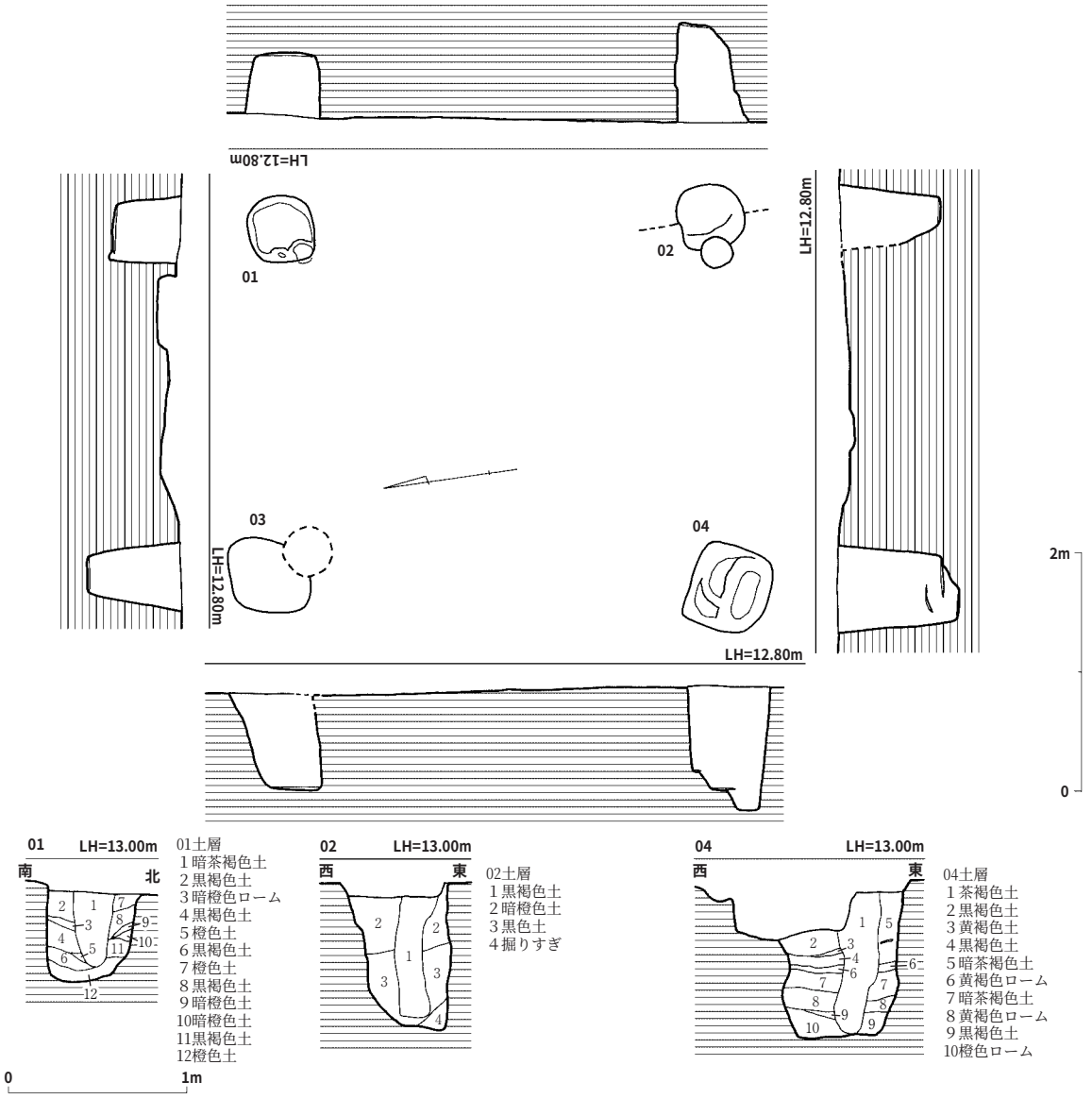


Fig. 62　SB03実測図（1/60・1/40）

建物番号	地区名	建物方向	長軸方向	規模 桁行×梁行	桁行		梁行		床面積 (㎡)	柱穴 番号	形状	規格（cm）			旧遺構 番号	柱痕跡径 cm	主要な出土遺物	建物時期	挿図番号
					実長 (m)	柱間寸法 (m)	実長 (m)	柱間寸法 (m)				長径	短径	深さ					
SB-03	17次B区	南北	N-9°-E	1×1	3.5～3.8	3.5～3.8	2.9～3.1	2.9～3.1	10.6	01 02 03 04	隅丸方形 楕円形 隅丸長方形 隅丸方形	54 56 68 71	53 53 60 67	57 84 78 104	4419 4553 4731 4550	23 15 21	後期前半甕、L型口縁、甕底部	弥生時代 後期後半	Fig.62

Tab.2　SB03 建物跡計測表

ぼまり鳥栖ロームと八女粘土間の崩落でわずかに広がった後逆台形型にすぼまる。出土遺物（Fig.83　308～319）308は壺、309～311は甕か。312・313は壺もしくは甕底部、314は大型の甕口縁、315・316は甕底部、317～318は甕、319は器台である。

出土木材（P82　320～323）各井戸から木片が出土している。数点の木製品が出土したがほとんどは未加工品である。中には径が5㎝以下の細い枝も含まれるが、枝先や葉などはなく伐採地で粗く加工した後集落内で製材したのであろうか。火を受け炭化した材もみられる。また、板材の切れ端も多く

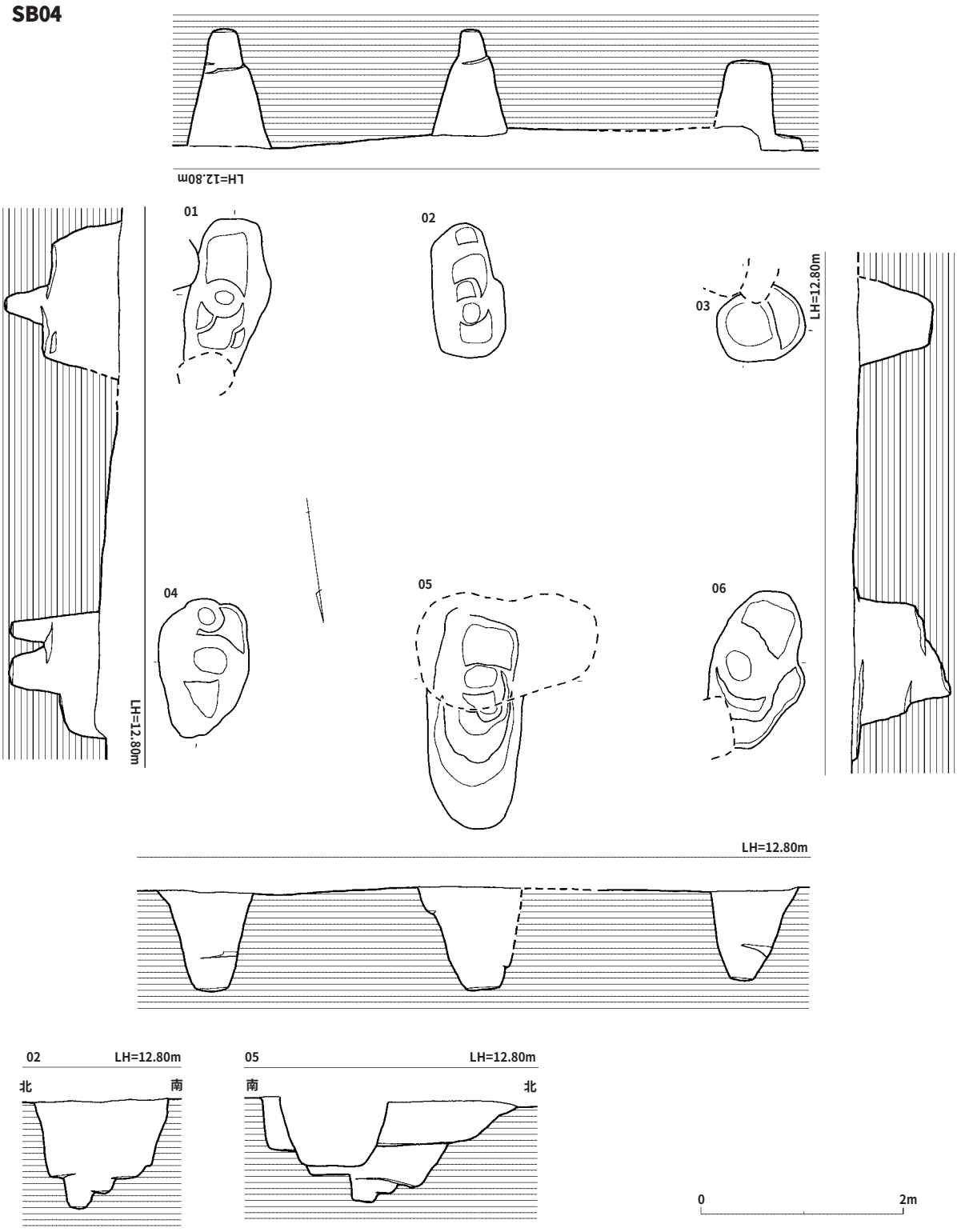
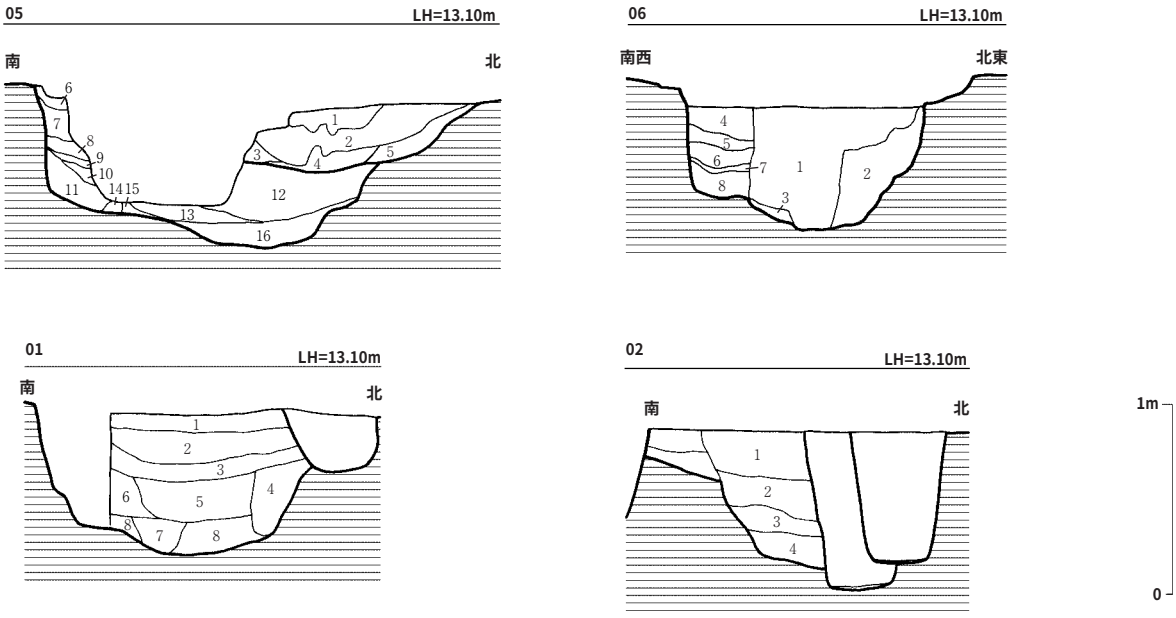


Fig. 63　SB04実測図（1/60）

建物番号	地区名	建物方向	長軸方向	規模 桁行×梁行	桁　行		梁　行		床面積 (㎡)	柱穴 番号	形状	規格（cm）			旧遺構 番号	柱痕跡径 cm	主要な出土遺物	建物時期	挿図番号
					実長 (m)	柱間寸法 (m)	実長 (m)	柱間寸法 (m)				長径	短径	深さ					
SB-04	17次 B 区	東西	N-83°-W	1×2	5.1	2.6	3.3～3.5	3.3～3.5	17.85	01 02 03 04 05	長方形 楕円形 不正楕円形 楕円形 楕円形	約160 132 現状120 128 208	73 69 79 88 94	116 103 87 98 100	4631 4641 4804 4815 4634		台付甕、後期甕底部、甕棺片、黒曜石 弥生後期後半甕底部、黒曜石 L型口縁、鉄釘、黒曜石	弥生時代 後期	Fig.63

Tab.3　SB04 建物跡計測表



01土層
１暗茶褐色土　細かなロームを多量に含む
２黄褐色土
３黒褐色土　ローム少量含む
４黒褐色土
５黒褐色土　１～３㎝のロームブロックを多量に含む
６黒褐色土　ロームわずかに含む
７黒褐色土
８黄褐色ローム

06土層
１暗橙色土　ロームと黒色土ブロック含む
２黄褐色土
３黄褐色粘土
４黒色土
５暗黄褐色ローム
６黒色土
７橙色ローム
８黒色土

05土層
１暗黄褐色土　SC4438貼床の一部か
２黒褐色土　１㎝のロームを層状に含む
３黒色土
４暗黄褐色土
５黒褐色土　細かなロームを層状に含む
６焼土　堅く焼け締まっている
７茶褐色土
８淡黄色粘質土
９黒色土
10暗橙色砂質土
11暗茶褐色土
12黒色土　３～５㎝のロームを多量に含む
13黒褐色土　１～３㎝のロームブロックを多量に含む
14黒褐色土
15茶褐色土　地山か
16茶褐色土

02土層
１黒褐色土　１㎝のロームブロックを多く含む
２黒褐色粘質土　ロームを多量に含む
３茶褐色土
４茶褐色粘質土

Fig. 64　SB04柱穴土層図（1/40）

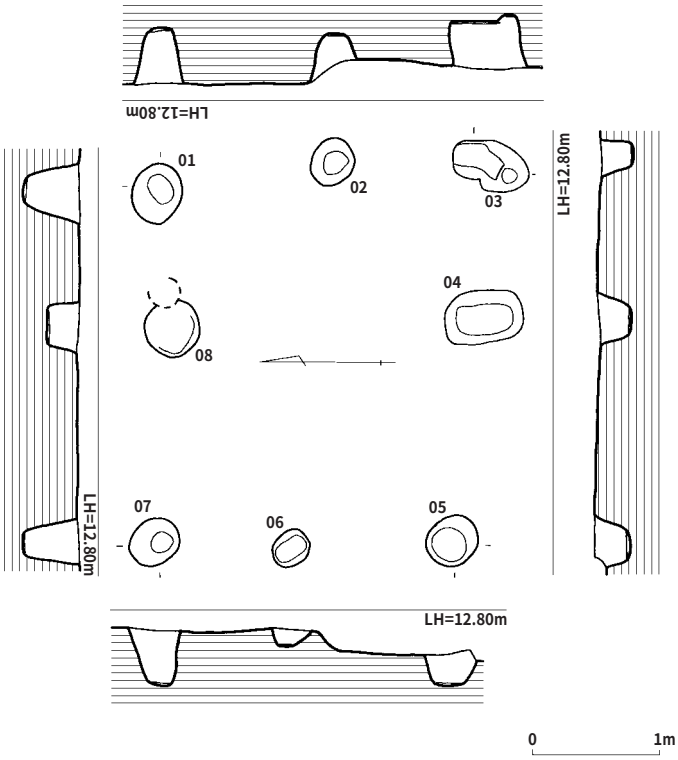
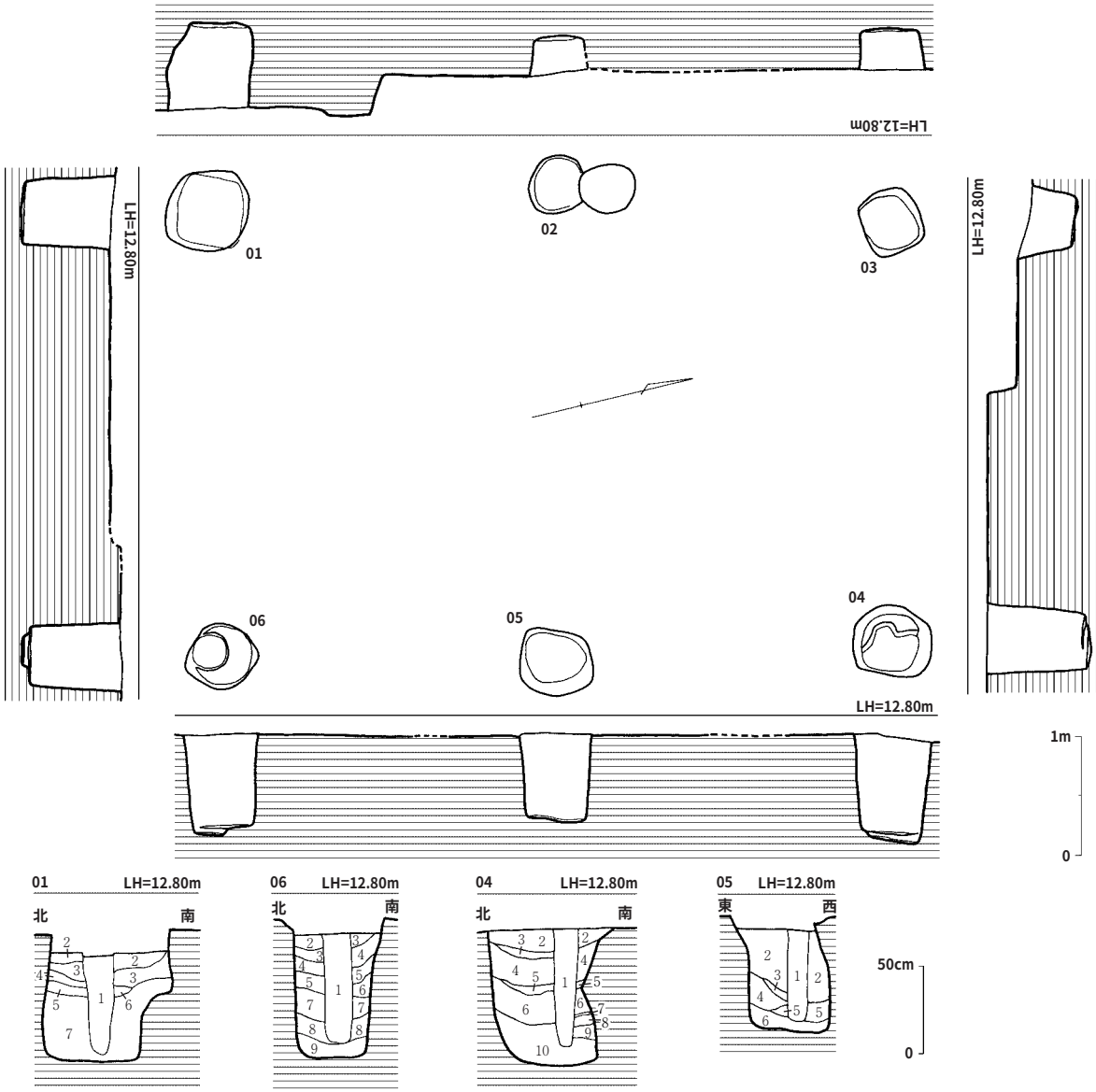


Fig. 65　SB06実測図（1/60）

出土しており、板材にしてから持ち込まれることも多かったと思われる。320は木鏃である。先端と根本の両端が欠損しているが現状で長さ3.5㎝、径1.1㎝ を測る。茎部は段をつけて細くしており、径6.6㎜ で現状で長さ３ ㎜ を測る。先端に向かって粗く削ったままのため、削った面が残っており根本は断面円形であるが先端部はひしゃげた六角形を呈す。321はSE4154から出土した。径4.2㎝ の枝で全周に皮が残っている。側面にナタ状の刃物痕がつく。先端を錐状に加工しているが突端部は刃物痕ではなく自然の割れ面である。棒を切断するための抉りか。322は竪杵の片方である。先端径6.5㎝、現状の長さ26㎝、中心側の径2.9㎝ を測る。323は又ぐわの基部



SB05
01土層
1暗茶褐色土
2黒褐色土
3黄褐色ローム
4黒褐色土
5黄褐色土
6暗黄褐色土
黒色土ブロックを含む
7暗茶褐色土
1㎝以下のロームを層状に含む

06土層
1茶褐色土
ロームを多量に含む
2黒褐色土
3暗橙色土
4黒褐色土
5黒褐色土
細かなロームを含む
6黒褐色土
7暗褐色土
8黒褐色土
9橙色土
白色粘土ブロック含む

04土層
1暗茶褐色土
細かなロームを多量に含む
2暗茶褐色土
ロームを多量に含む
3暗橙色ローム
4黒褐色土
5暗橙色土
6黒褐色土
7暗橙色ローム
8黒褐色土
9暗橙色土
10黒褐色土

05土層
1暗茶褐色土
2黒褐色土
3暗橙色土
4黒褐色土
5褐色土
6黒色土

Fig. 66　SB05実測図（1/60・1/40）

建物番号	地区名	建物方向	長軸方向	規模 桁行×梁行	桁行 実長(m)	桁行 柱間寸法(m)	梁行 実長(m)	梁行 柱間寸法(m)	床面積(㎡)	柱穴番号	形状	規格(cm) 長径	規格(cm) 短径	規格(cm) 深さ	旧遺構番号	柱痕跡径cm	主要な出土遺物	建物時期	挿図番号
SB-05	17次B区	南北	N-12°-E	1×2	5.7	2.8～2.9	3.7～3.8	3.7～3.8	21.7	01 02 03 04 05	方形 円形 隅丸長方形 楕円径 楕円形	60 51 53 66 61	57 48 49 59 56	79 34 35 87 75	4448 4515 4400 4532 4541	17 14 16	土器小片	弥生時代 後期末	Fig.66

Tab.4　SB05 建物跡計測表

建物番号	地区名	建物方向	長軸方向	規模 桁行×梁行	桁行 実長(m)	桁行 柱間寸法(m)	梁行 実長(m)	梁行 柱間寸法(m)	床面積(㎡)	柱穴番号	形状	規格(cm) 長径	規格(cm) 短径	規格(cm) 深さ	旧遺構番号	柱痕跡径cm	主要な出土遺物	建物時期	挿図番号
SB-06	17次B区	東西	N-90°-E	2×2	2.9	1.1～1.8	2.3～2.75	1.0～1.35	7.9	01 02 03 04 05	楕円形 不正円形 楕円形 隅丸長方形 円形	46 39 61 62 42	39 33 39 41 37	44 38 25 26 27	 4287 4285 4008			弥生時代 後期後半	Fig.65

Tab.5　SB06 建物跡計測表

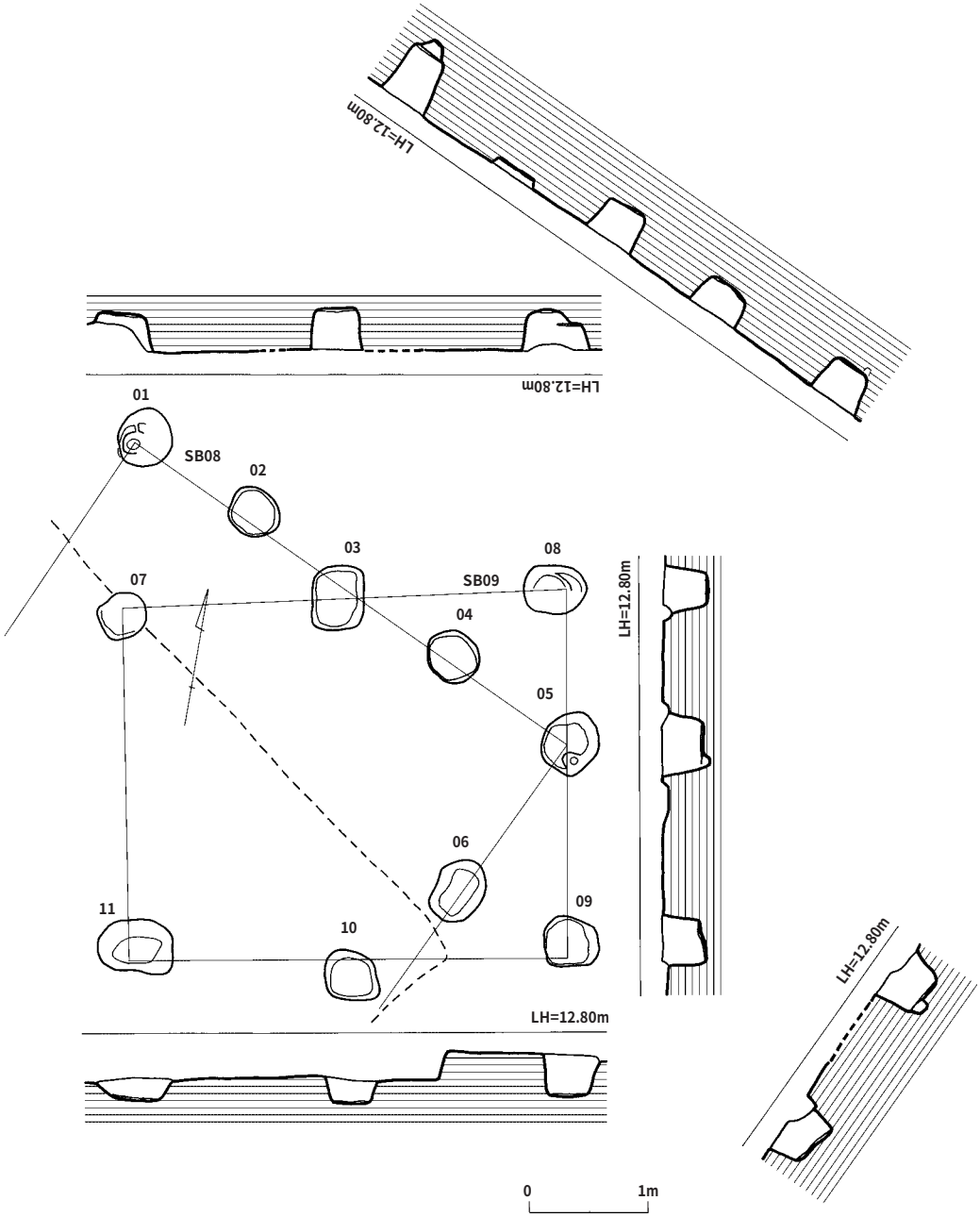


Fig. 67　SB08・09実測図（1/60）

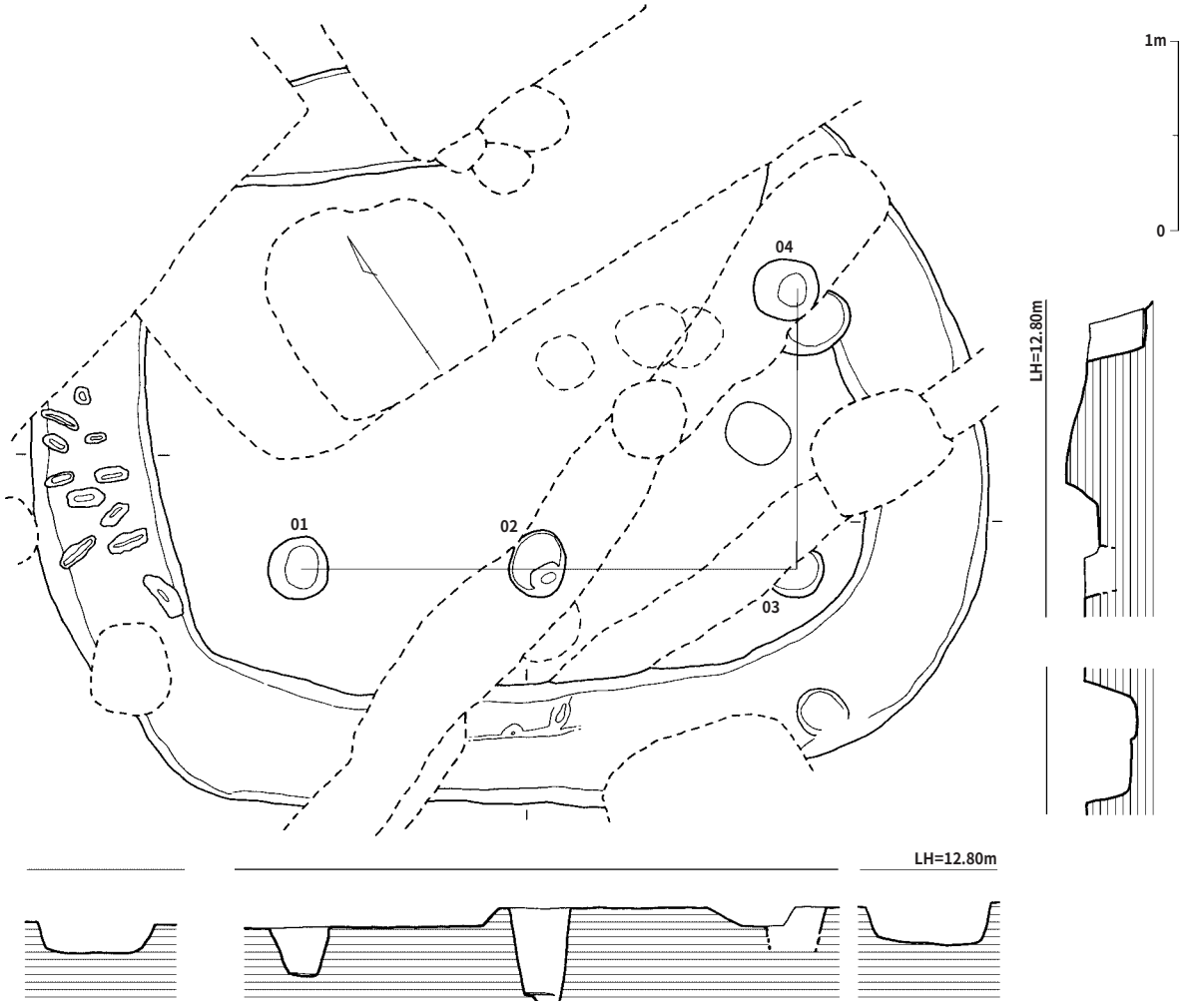
建物番号	地区名	建物方向	長軸方向	規模 桁行×梁行	桁行		梁行		床面積 （㎡）	柱穴 番号	形状	規格（cm）			旧遺構 番号	柱痕跡径 cm	主要な出土遺物	建物時期	挿図番号
					実長 （m）	柱間寸法 （m）	実長 （m）	柱間寸法 （m）				長径	短径	深さ					
SB-08	17次 B 区	東西	N-64°-W	1以上×4	4.4	1.0～1.2	不明	1.5		01 02 03 04 05	円形 楕円形 長方形 楕円形 円形	49 43 53 46 52	46 39 42 41 46	57 6 35 29 39	4117 4113 4127 4128	14		弥生時代 後期	Fig.67

Tab.6　SB08・09 建物跡計測表

建物番号	地区名	建物方向	長軸方向	規模 桁行×梁行	桁行		梁行		床面積 （㎡）	柱穴 番号	形状	規格（cm）			旧遺構 番号	柱痕跡径 cm	主要な出土遺物	建物時期	挿図番号
					実長 （m）	柱間寸法 （m）	実長 （m）	柱間寸法 （m）				長径	短径	深さ					
SK4514	17次 B 区	東西	N-55°-W	1×2	2.6	1.3	1.45	1.45	3.8	01 02	円形 円形	33 35	31 29	24 52	4757			弥生 後期	Fig.68

Tab.7　SK4514 内建物跡計測表

SK4514



である。現状長15.8㎝、幅6.9㎝、厚さ1.8㎝ を測る。上端に柄を差し込むための孔が確認でき現状で横3.7㎝、縦4.1㎝ を測る。柄はくわに対し斜めに差し込まれる。AはSE4669から出土した。左端から幅1.8㎝ が薄くなっており、金属製農具の袋部を差し込んだ痕跡か。現状で横8.4㎝、縦5.9㎝、中央厚さ1.2㎝、左側端部厚さ6.1㎜を測る。下側拡大写真には表面には表面を鉄器で削ったときの細かな擦痕が残る。BはSE4444から出土した角材である。長

SK4717

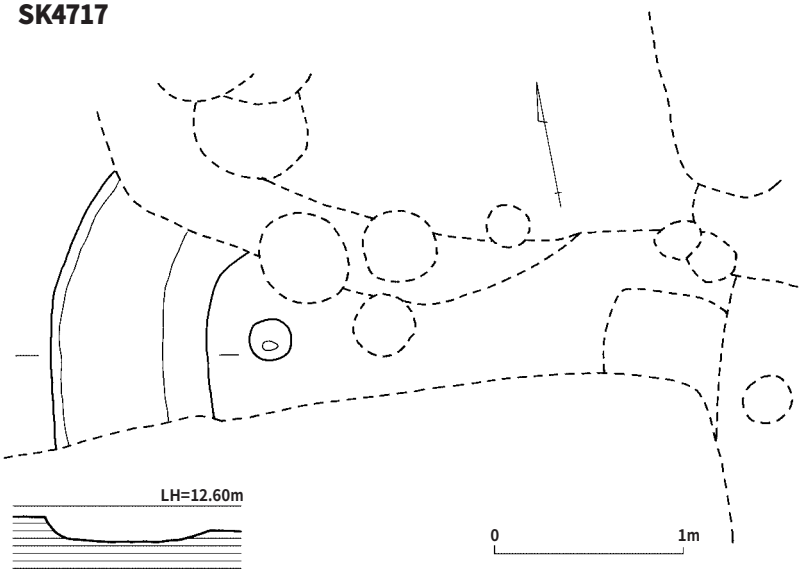


Fig. 68　SK4514・4717実測図（1/40）

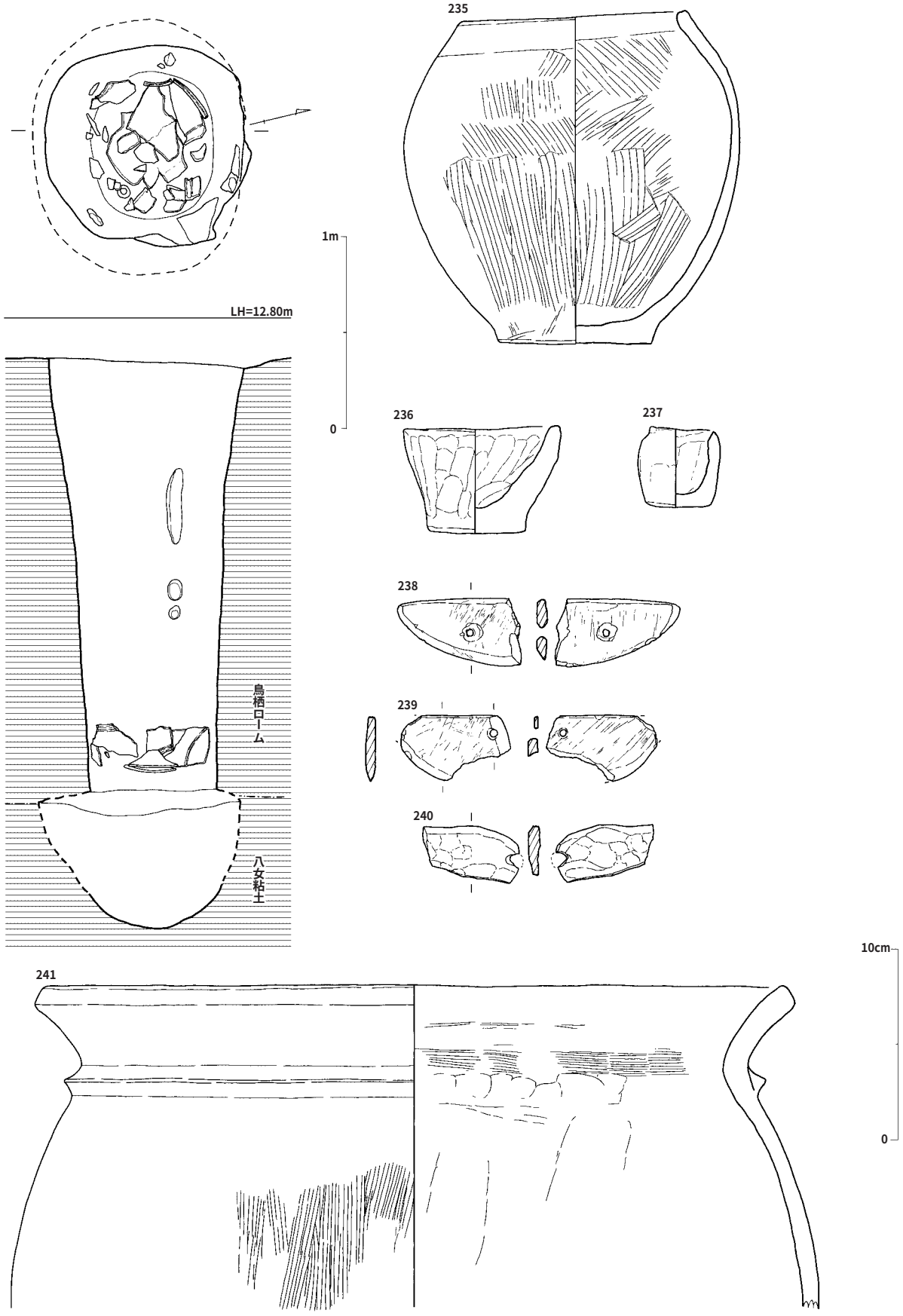


Fig. 69　SE4154実測図１（1/30・1/3）

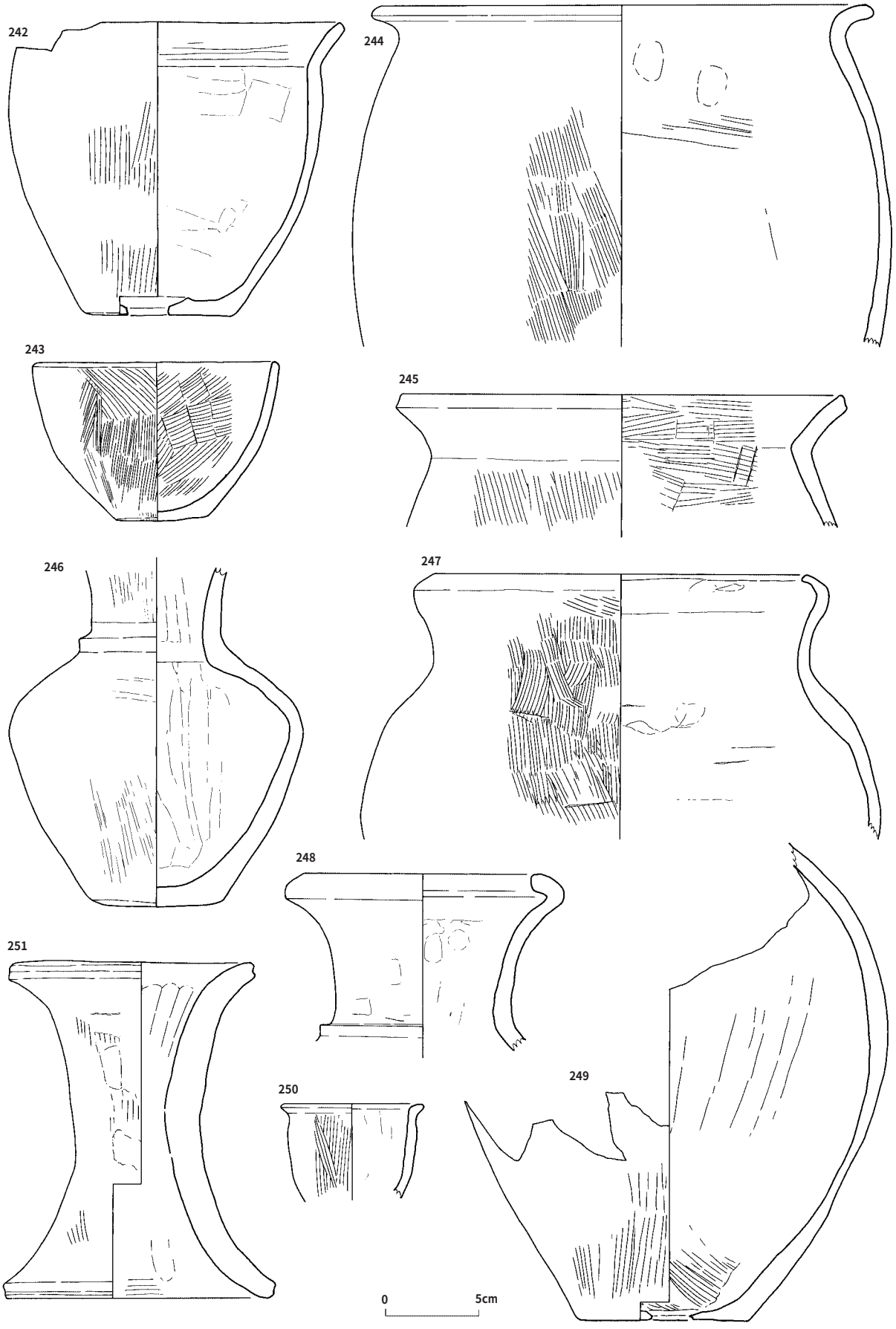


Fig. 70　SE4154実測図２（1/3）

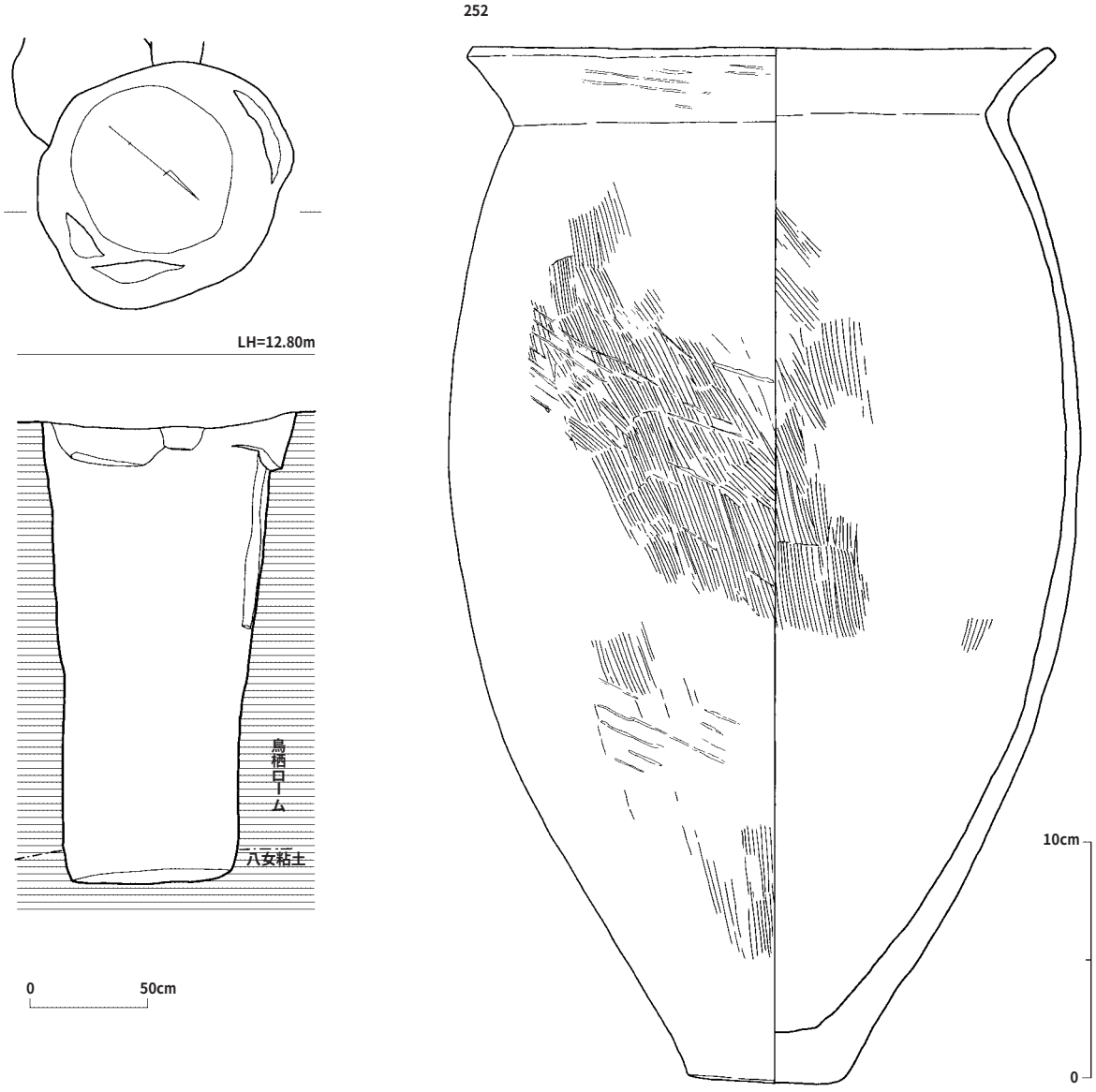


Fig. 71　SE4169実測図１（1/30・1/3）

さ35㎝を測る。C・Dも角材でCは4154から出土した。表面はある程度平らに削られ表面にこまかな削痕が残る。側面にナタ状の刃物痕あり。DはSE4444から出土した。長さ9.2㎝、幅4.6㎝、最大厚さ2.7㎝ を測る。両端は刃物による切断である。下の写真で判るように中央部がふくらんでおり、周囲に明確な段をつける。上の写真では左側と上側はきれいに段があるが、右側は段をつけるための切断中である。木製品の製作を中断しているが、中断の理由また、何の未製品かは不明である。EはSE4504から出土した。茸の一種か。最大径15㎝ を測る。木材について持ち込まれたとすれば木の表面を未加工のまま集落まで運んでいる。FはSE4154から出土した。写真の上下長5.3㎝、幅2.9㎝の小さな破片であるが上面は丁寧に削って平らな面をつくっている。未製品、もしくは破損品か。GはSE4200から出土した。長さ19.5㎝、幅７㎝、厚さ1.5㎝を測る。残り悪いが中心やや左側に刃物痕がある。HはSE4444から出土した板材である。現状で長さ15.5㎝、幅5.2㎝、厚さ８㎜を測る。右端の抉れは組み合わせの孔か。Ｉは薄い板片で厚さ２㎝ を測る。JはSE4154から出土した。全体に粗い加工痕がつく。

井戸から出土した木材にはここに載せたような刃物による切断痕や加工痕がみられるものがある。

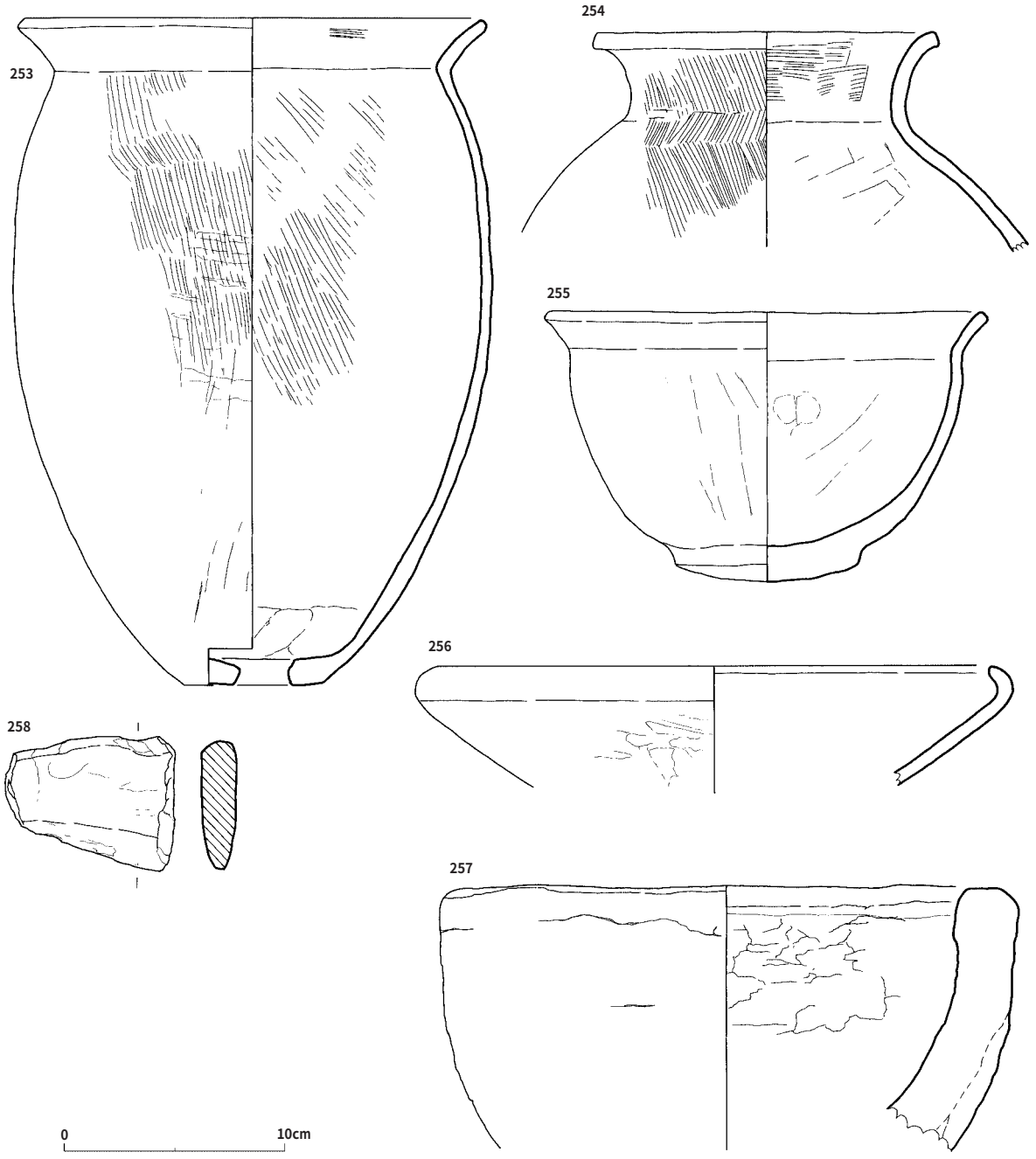


Fig.72　SE4169実測図２（1/3）

加工痕がみられるものには1. 製品（未製品も含む）、2. 板材、3. 角材、4. 丸太、5. 枝、6. その他がある。１の製品には、くわや縦杵等の農具、木鏃等の祭祀用具があり、その他にＤやＦも組み合わせ式木器の一部である可能性もあるため、多様な木製品が廃棄されていることが判る。２の板材で多くみられるのは厚さ１㎝以下と２～３㎝前後の板材で、薄い板はこまかな切れ端で、また端部が残っているものが少ないため用途は不明である。２～３㎝の厚い板はＣ・Ｇ・Ｈ以外にも多く出土した。323の又ぐわやＡのように農具として利用したものと思われるが、建築材も出土していることから他の用途に使用された可能性もある。３の角材は数が少なく、またＢやＩのよう３～４㎝の細いものばかりである。建築材であろうか。４丸太材には長さ１m前後、径10～15㎝程の丸木が数本出土している。中にはＪの様に粗い加工痕がみられるものや、加工ではなく刃物が刺さった痕跡のみがみられるもの、刃

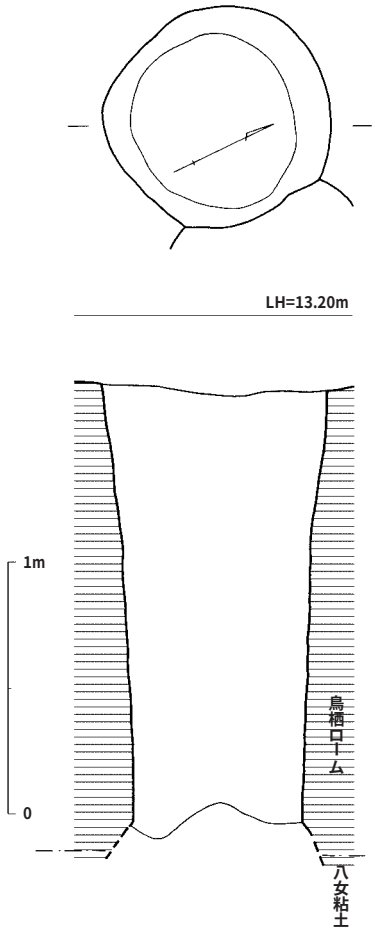


Fig. 73　SE4200実測図（1/30）

物により切断されただけのものなどがある。５の枝には321の様に太いものもあるが数は少ない。多くは径１～２㎝ほどの枝で、刃物により切断されたものも多い。表皮がないものとついたままのものがある。６のその他はＥの茸等である。木の葉は出土していない。

これらの木材の性格であるが未製品や製作・加工時にでる切れ端と廃棄品が混ざっている。未使用品としてはＤがある。前述したように右端は明らかに段をつける途中で段とその少し外側に切り目をいれて、その間を溝状に削っている途中であり、未製品であるのは間違いないと思われる。加工時の切れ端としては321がある。右端は周りから抉りを入れて太さ１㎝ 程になった段階で折ったものである。ナタ状のもので切らなかったのは反対側の木材にキズが入ったり、下手に折れたりするのを防ぐためと思われる。廃棄品としては322と321がある。とくに322は途中で割れているが、割れ方から加工中の破損ではなく、使用中に割れた廃棄品と考えられる。未使用品や廃棄品が混じることから、井戸の近くに木製品の製作工房があったのではなく、集落内ででたゴミの廃棄場所として井戸が利用されたものである。集落内で木材を供給できたとは考えられないが、運搬することを考えると小枝などはきれいに払い落とした方が運び易いと思われるし、できればある程度加工すれば不必要な部分まで運ぶ必要がなくなるが、今回の調査では枝なども多く出土しており、未加工の状態で集落内に持ち込まれたものと思われる。

６）土坑とその他の遺構

SK4235（Fig.84）調査区南東端に位置する。断面にテラスが複数みられるなどSB04の柱穴に似ているため柱穴の可能性もあるが今のところ対応する柱穴がない。径は138㎝ とかなり大型である。柱穴とすれば調査区外に延びるものである。後期中頃の袋状口縁壺片が出土した。

SK4247（Fig.84）調査区南東側で検出した。柱穴の可能性あり。広口壺など中期中頃の土器を主とするが後期らしき「く」の字型を呈する口縁が１点出土した。

SK4447（Fig.84）調査区中央部で検出した。貯蔵穴か。広口壺、器台、甕底部、甕口縁、高坏、焼けた粘土塊、粗い砂岩製の砥石など中期中頃から後半の遺物が出土した。

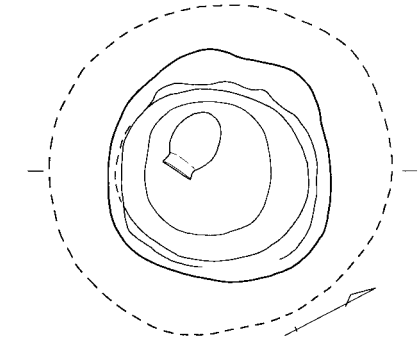
SK4668（Fig.84）調査区中央北寄りで検出した。貯蔵穴か。弥生中期後半から後期前半を主とするが弥生終末の丸底片が１点出土。

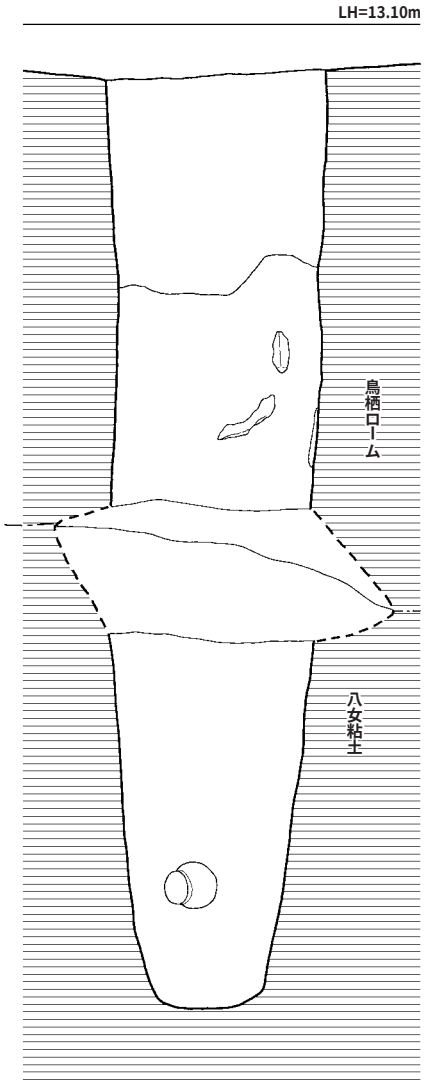
SK4561（Fig.84）調査区北側中央部に位置する。SE4444に切られる。東側が段状をなし柱穴の可能性があるが、対応する遺構を検出できなかった。出土遺物（Fig.85　324～326）。324と325は弥生時代中期中頃の甕口縁、326は中期後半から後期前半の甕もしくは壺の底部である。他に後期中頃から後半の甕片も出土したがSE4444が中期後半である事を考えると中期中頃から後半か。

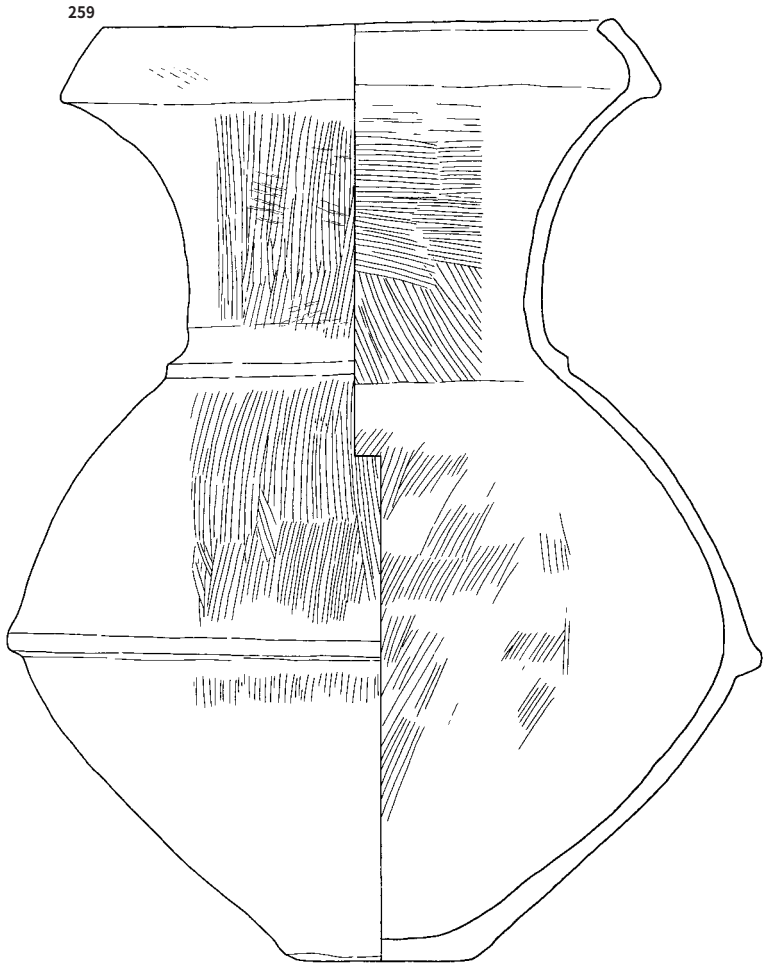
SK4781（Fig.85）調査区中央に位置する。底から完形の甕が１点出土した。 弥生時代後期前半。

SP4242（Fig.85）調査区南端に位置する。弥生時代中期末～後期前半の遺物出土。

SP4320（Fig.85）調査区の南東に位置する。SE4236を切る。井戸よりわずかに新しく、埋土が柔らかいため基盤にあたるまで深堀したものと思われる。結局盤がでなかったため長さ69㎝ の礫を根石と







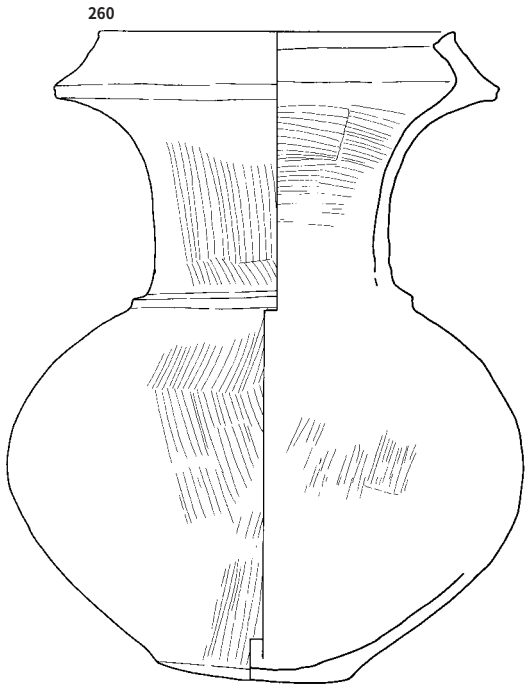


Fig. 74　SE4202実測図１（1/30・1/3）

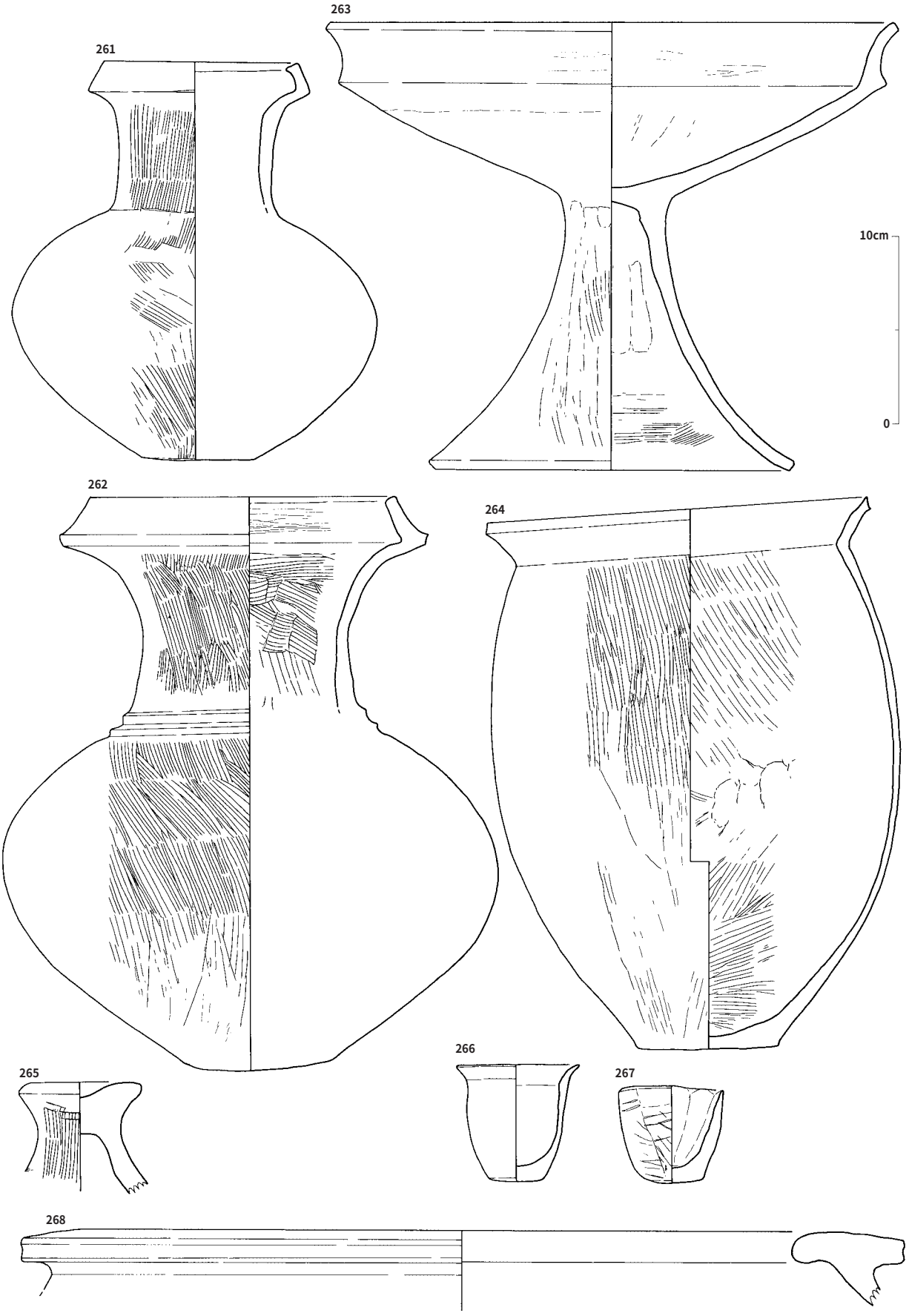


Fig. 75　SE4202実測図２（1/3）

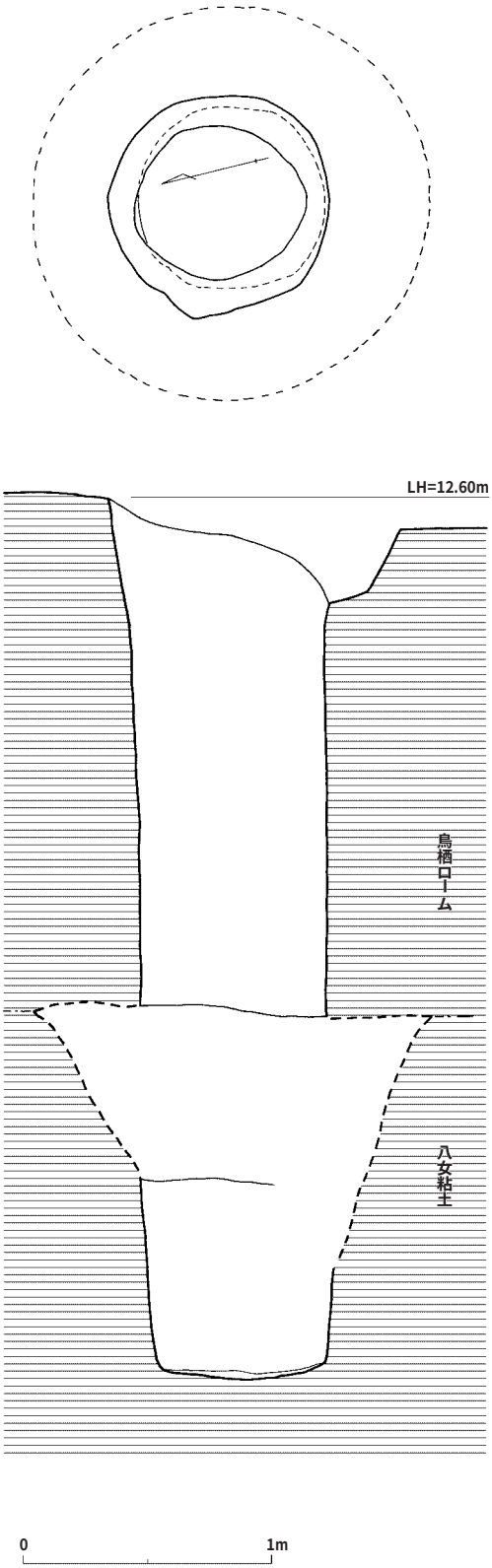


Fig. 76　SE4231実測図（1/30）

して使用している。袋状口縁壺片が出土した。

SP4851（Fig.85）調査区中央北東よりに位置する。柱抜き痕に甕を投げ込む。弥生時代後期中頃から後半。

２．古代の遺構と遺物

調査区中央部で東西方向の溝１条を確認したほか掘立柱建物２棟、土坑２基を確認した。Fig.86は中央から下がＡ区、上がＢ区である。遺構配置図でアミを掛けたものが古代の遺構であり、Ａ区では中央から南東側に古代の遺構が集中するのが判る。特に２×７間の大型掘立柱建物は台地端の南東隅に位置しており、台地中央側にはない。Ｂ区に置いてはSD4017から南で確認できたのは古代の遺構はわずかにSK4187だけでＡ区北西側とＢ区南東側は建物などの施設がない空間であったと思われる。

１）溝

SD4017　（Fig.4・87・88）調査区中央に位置する東西方向の溝で現状で長さ25m、幅126～180㎝、深さ５～18㎝ を測る。Ａ区中央で検出した十字溝が直線的であるのに対し緩やかなカーブを呈す。（Fig.86）。埋土は暗茶褐色を呈し、全体から須恵器坏や瓦片が出土した。東端で１×２間の掘立柱建物（SB01）と重なる部分は底面が立ち上がって浅くなっており、陸橋状を為していたものと考えられる。試掘また周辺調査から瓦が出土する北限にあたるため施設北端の区切り溝と考え、特に溝が浅く水が流れた痕跡が見られないことから、溝は土塀の基礎の掘方で土塀が切れた部分に門（SB01）があるのではと考えたが、土塀の版築土や雨落ち溝などは検出できなかった。その後、溝の北側で井戸や掘立柱建物（SB07）が検出され、北側のＣ区においても古代の遺構が確認されたため寺院・官衙遺構が更に北に延びることが判明し、施設内の区画溝である可能性が高くなった。出土遺物は８世紀中頃とＡ区溝より若干新しくなる可能性がある。特に遺物番号の340は高台が底部外端に付くことや口縁の立ち上がりが直線的であることから８世紀の後半まで下がる可能性がある。出土遺物（Fig.87･88　333～353）。333は須恵器坏蓋、334～340は須恵器高台付き坏である。高

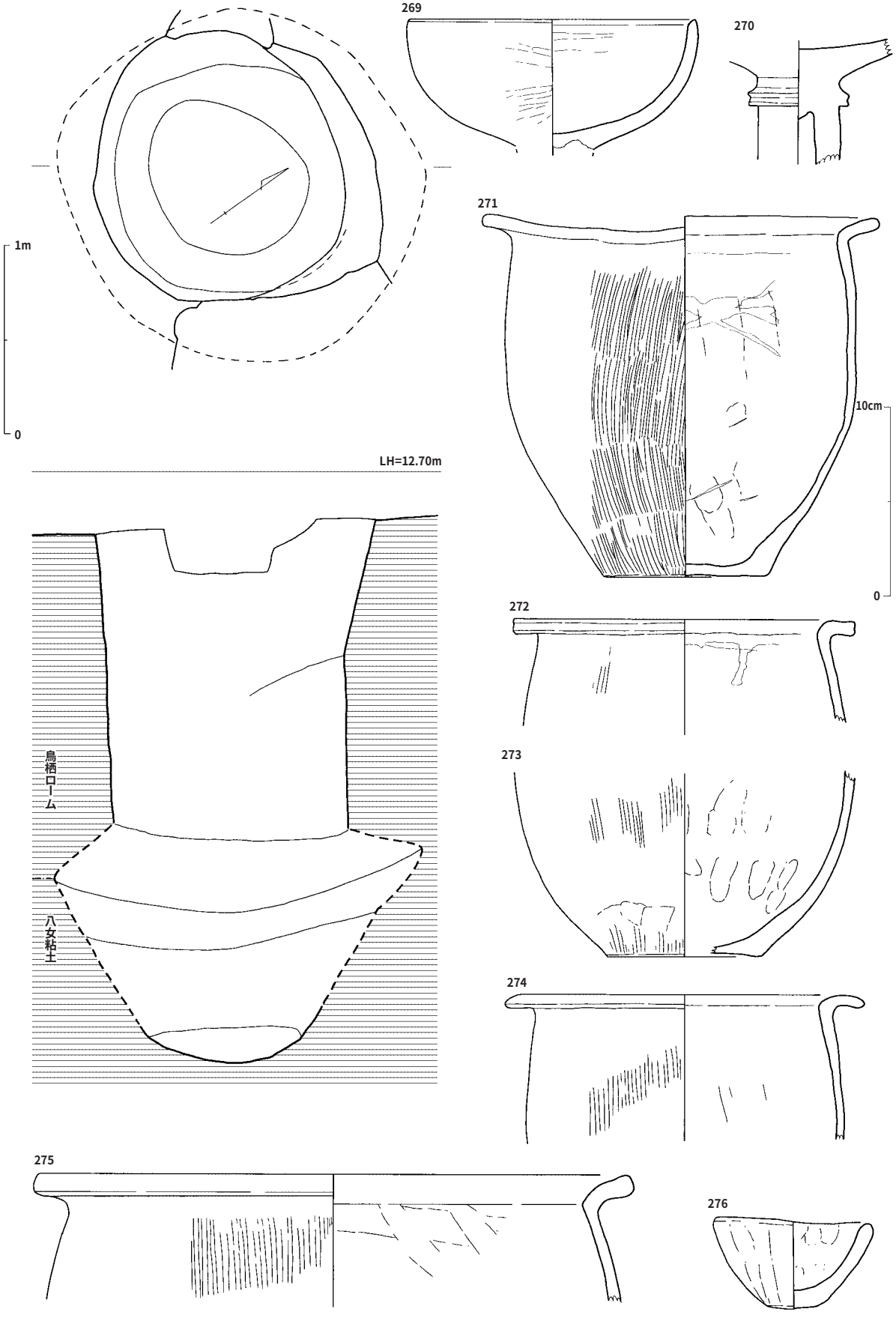


Fig. 77　SE4236実測図１（1/30・1/3）

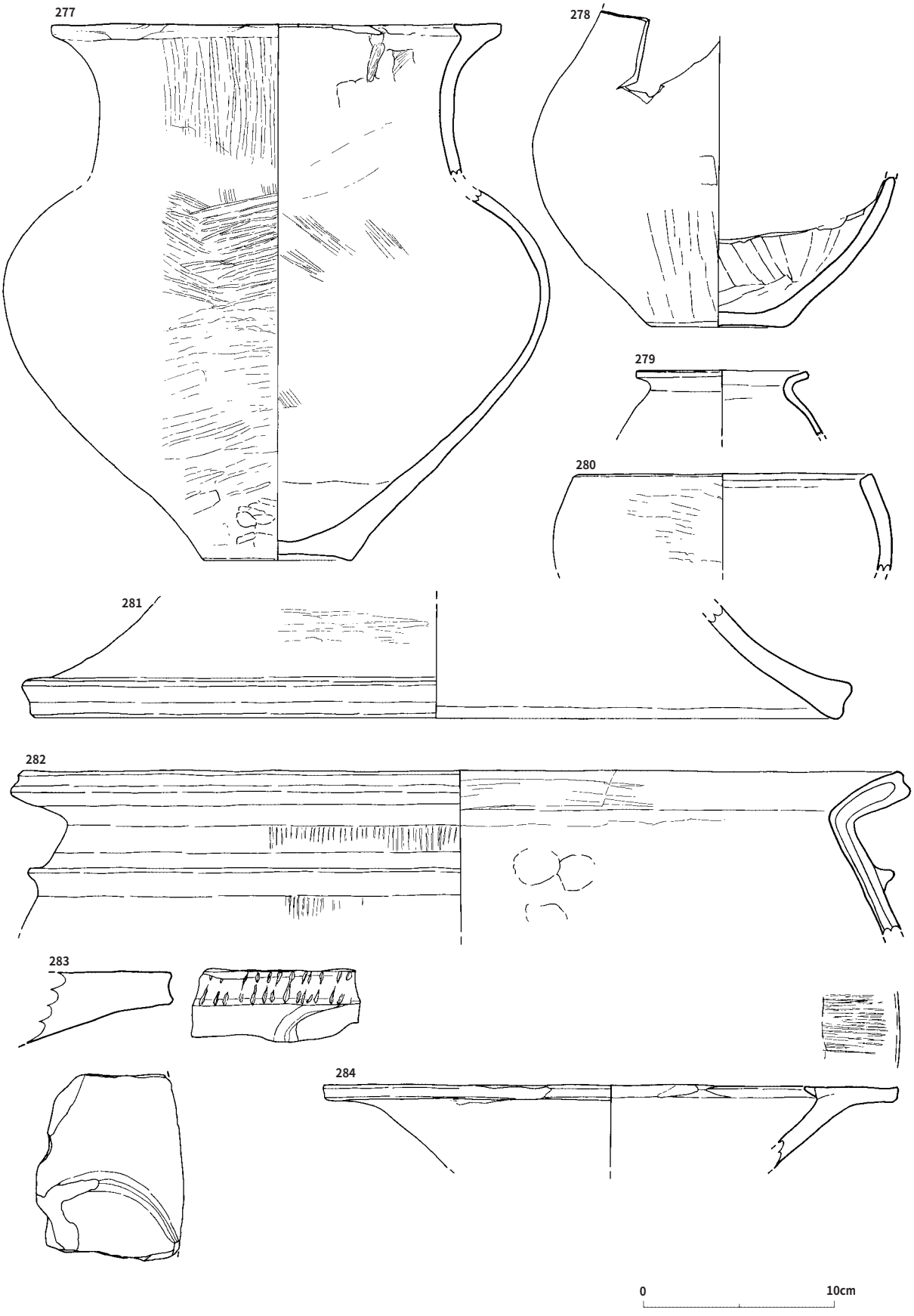


Fig. 78　SE4236実測図２（1/3）

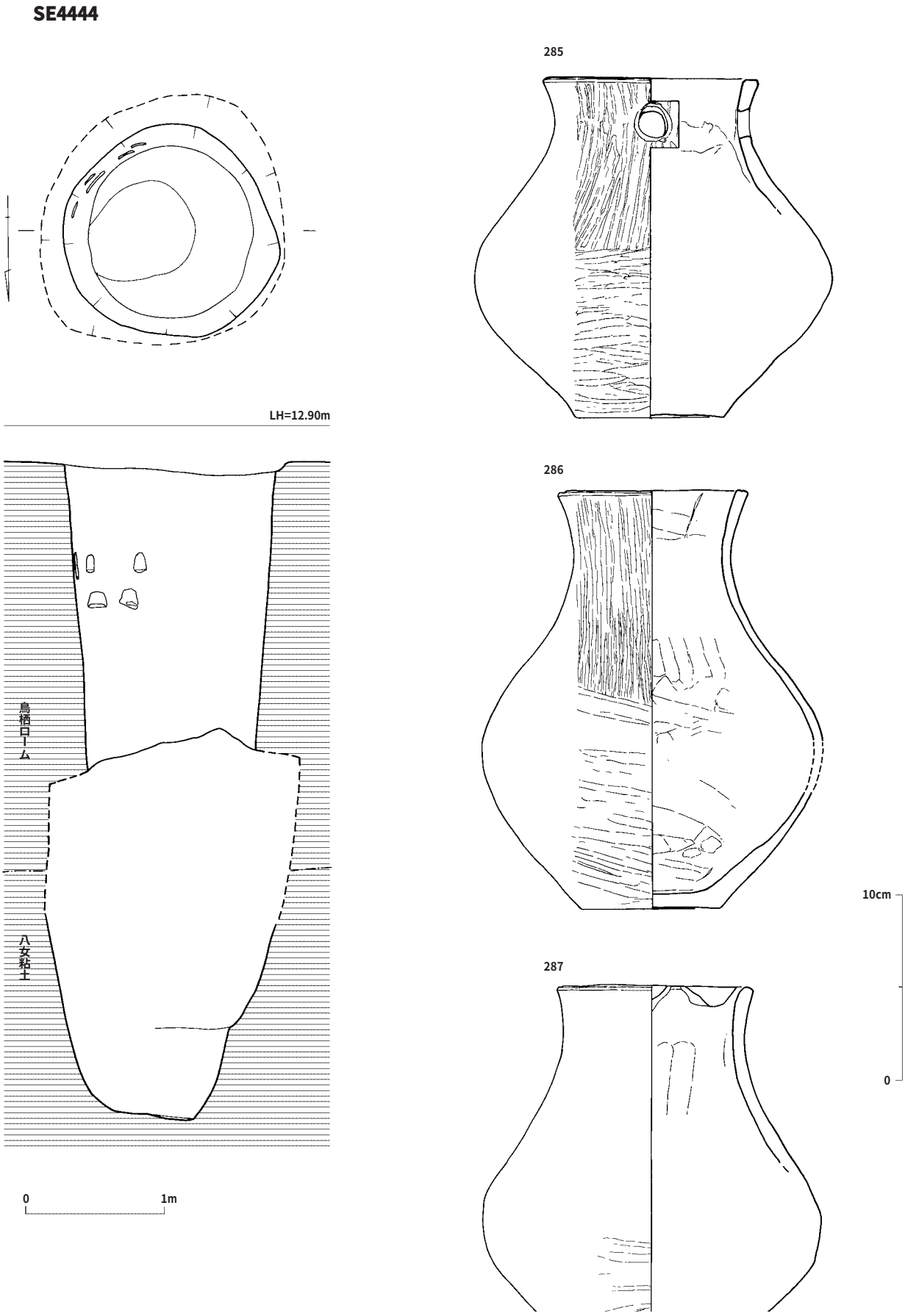


Fig. 79　SE4444実測図１（1/40・1/3）

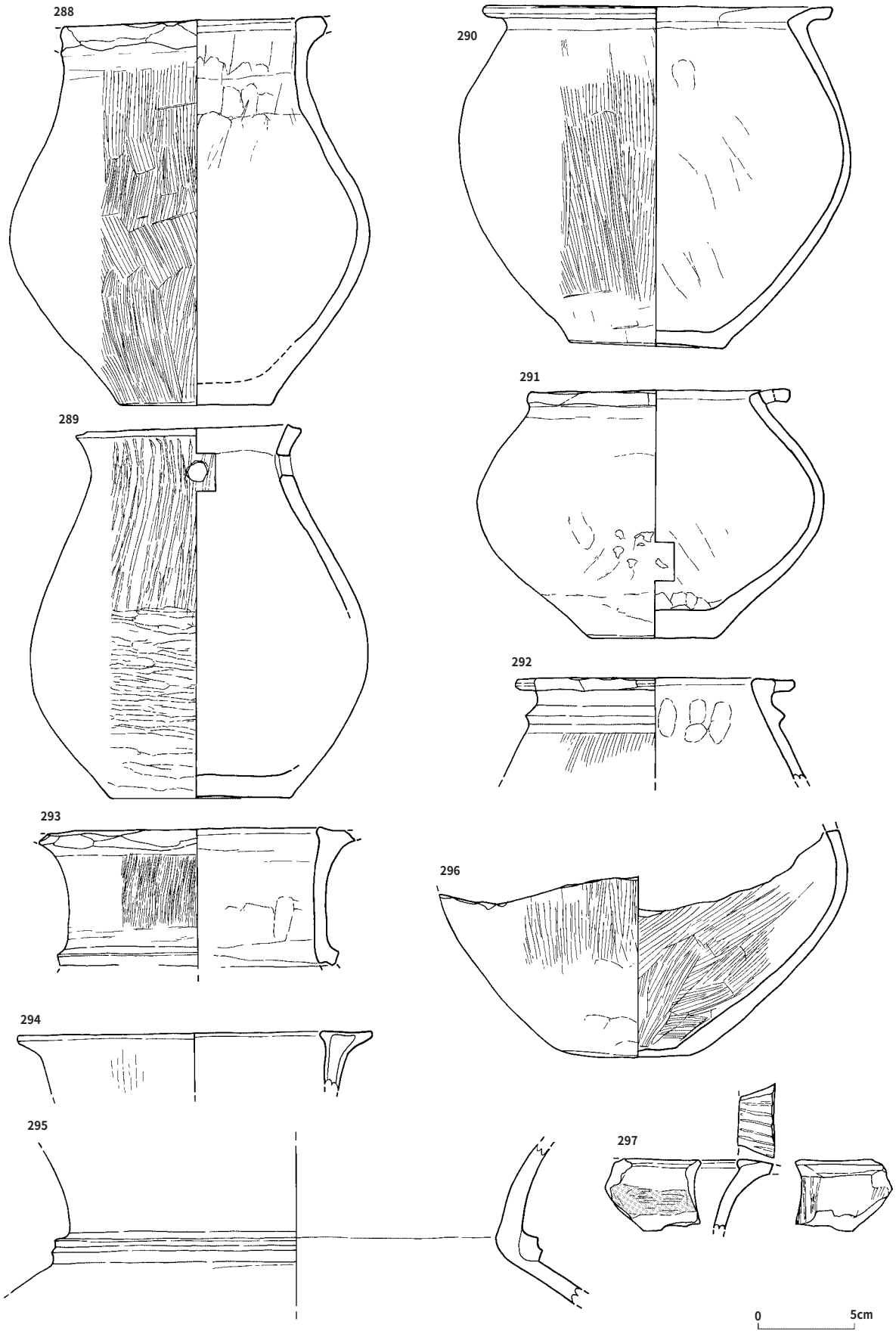


Fig. 80　SE4444実測図２（1/3）

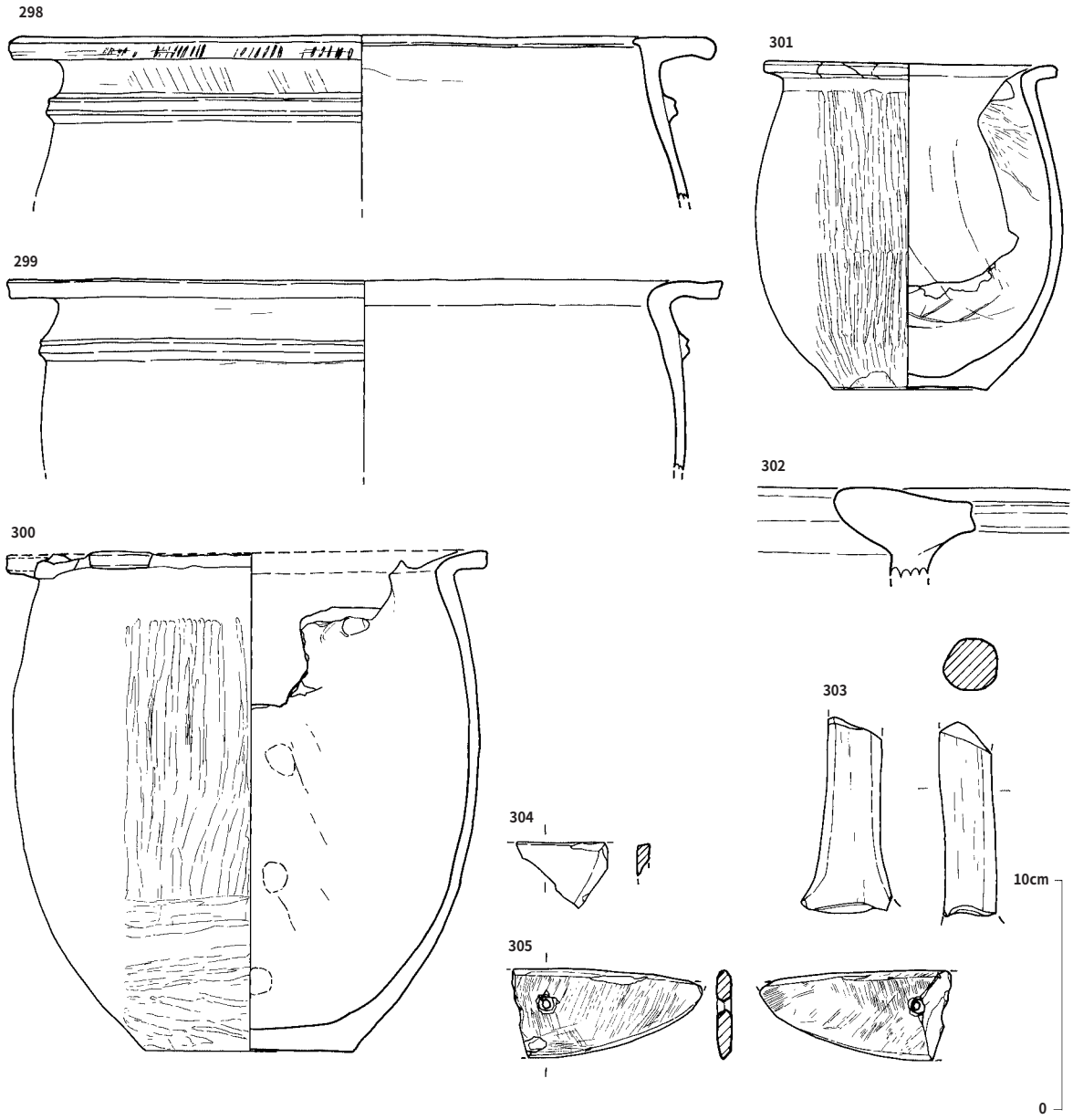
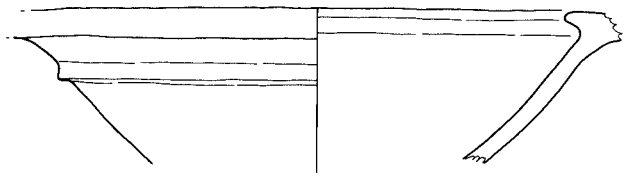
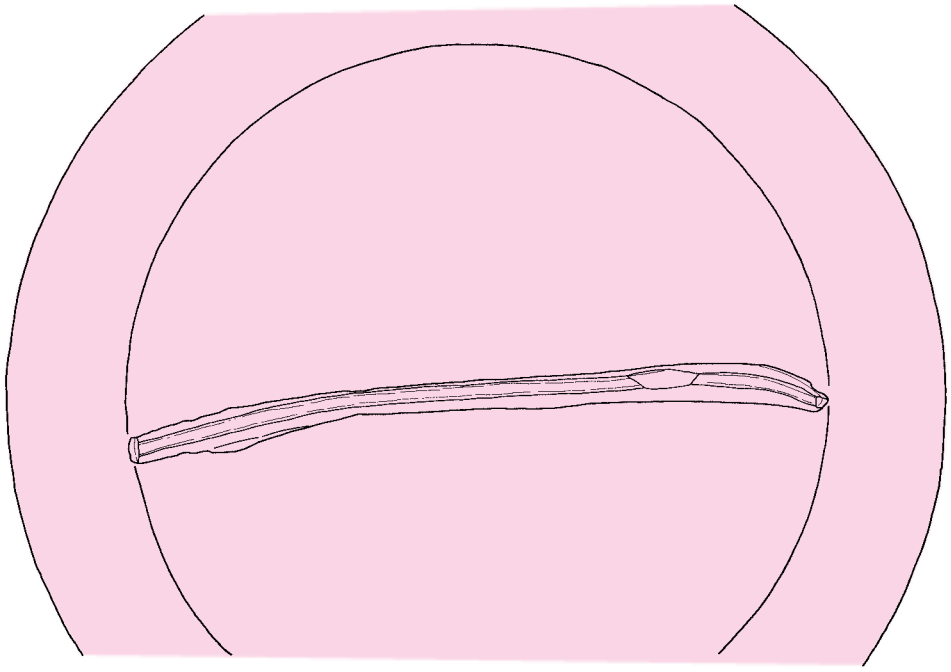


Fig. 81　SE4444実測図３（1/3）

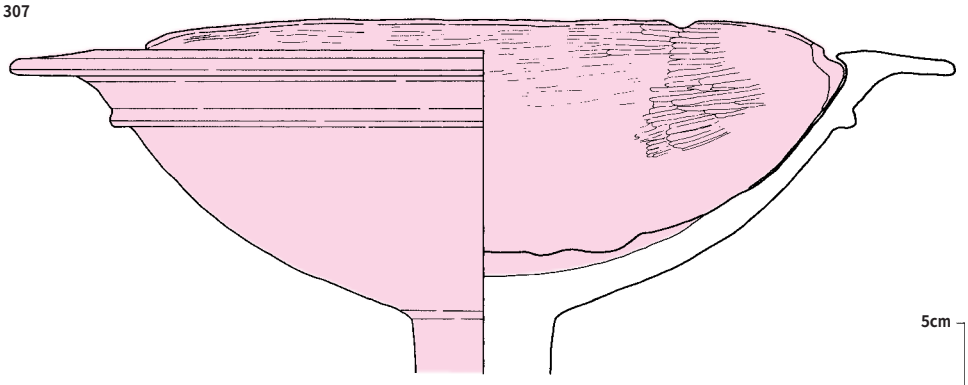
台は短く底部外側につくものが多い。341は沓形器台である。342は抉り入石器である。石斧の先端が欠損したものか。 343は砥石、344～347は丸瓦である。凸面はナデもしくは丁寧なケズリを施す。凹面は布状圧痕があり、その多くに竹状模骨痕がみられる。347は軟質の瓦で外面赤橙色、胎土は暗灰褐色を呈す。外面は丁寧なナデ、内面は布状圧痕と3.5㎝ の幅の板状模骨痕がみられる。他の丸瓦はほとんどが幅の狭い竹状模骨痕である。348は軒先瓦で今まで井尻Ｂ遺跡で確認されたのと同様に単弁でかえりが強い、間弁は鎬の盛り上がりは強いが弁の輪郭は不明瞭である。349は平瓦で凹面に布状圧痕が、凸面に格子状の圧痕がみられる。350は砂岩質の砥石であるが石斧の破片の可能性あり。350は堆積岩系で全体に縞模様がみられる。砥石と思われるが、扁平片刃石斧の破片である可能性あり。352は砂岩製の砥石で弥生時代の青銅器鋳型もしくは中子の再利用品である可能性が高い。表面の周囲に凹みあり。363は鉄片で鉄斧かノミ状鉄製品の破片か。

306





307



5cm

0

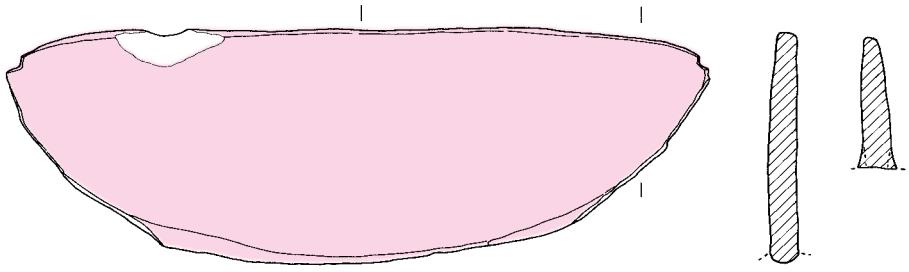


Fig. 82　SE4444実測図４（1/3）

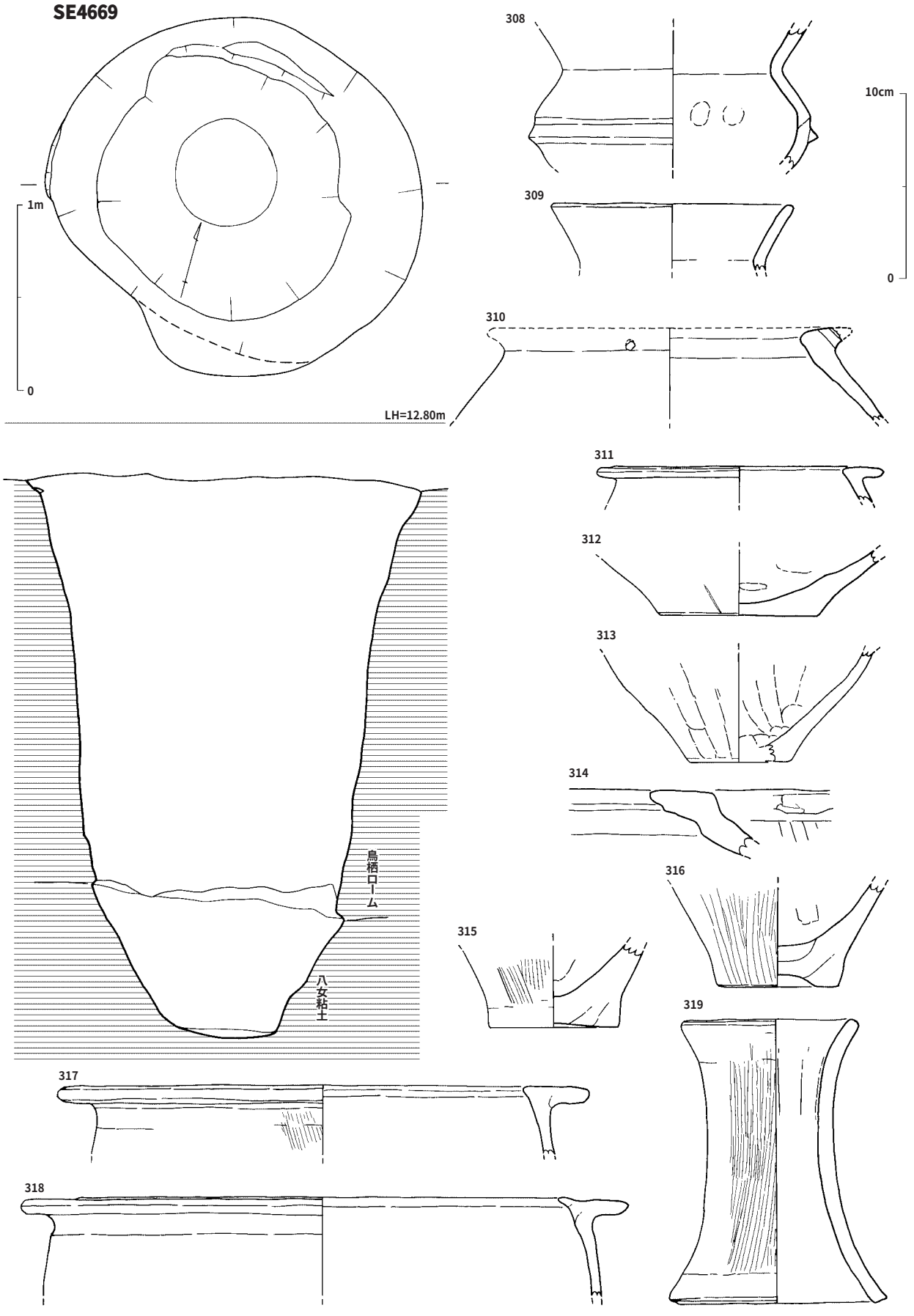
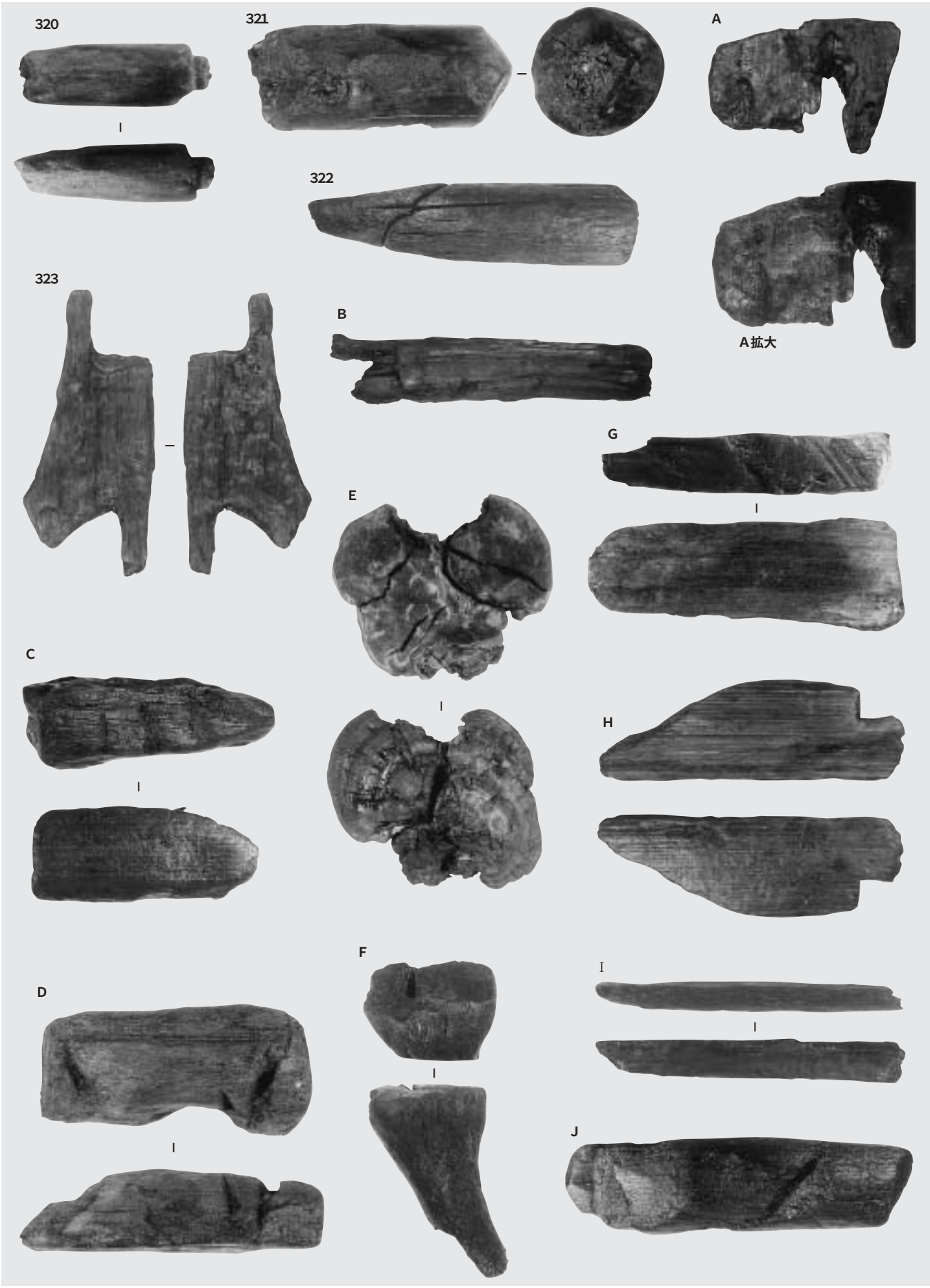


Fig. 83　SE4669実測図（1/30・1/3）


320
321
A
322
A拡大
323
B
G
E
C
H
F
I
D
J

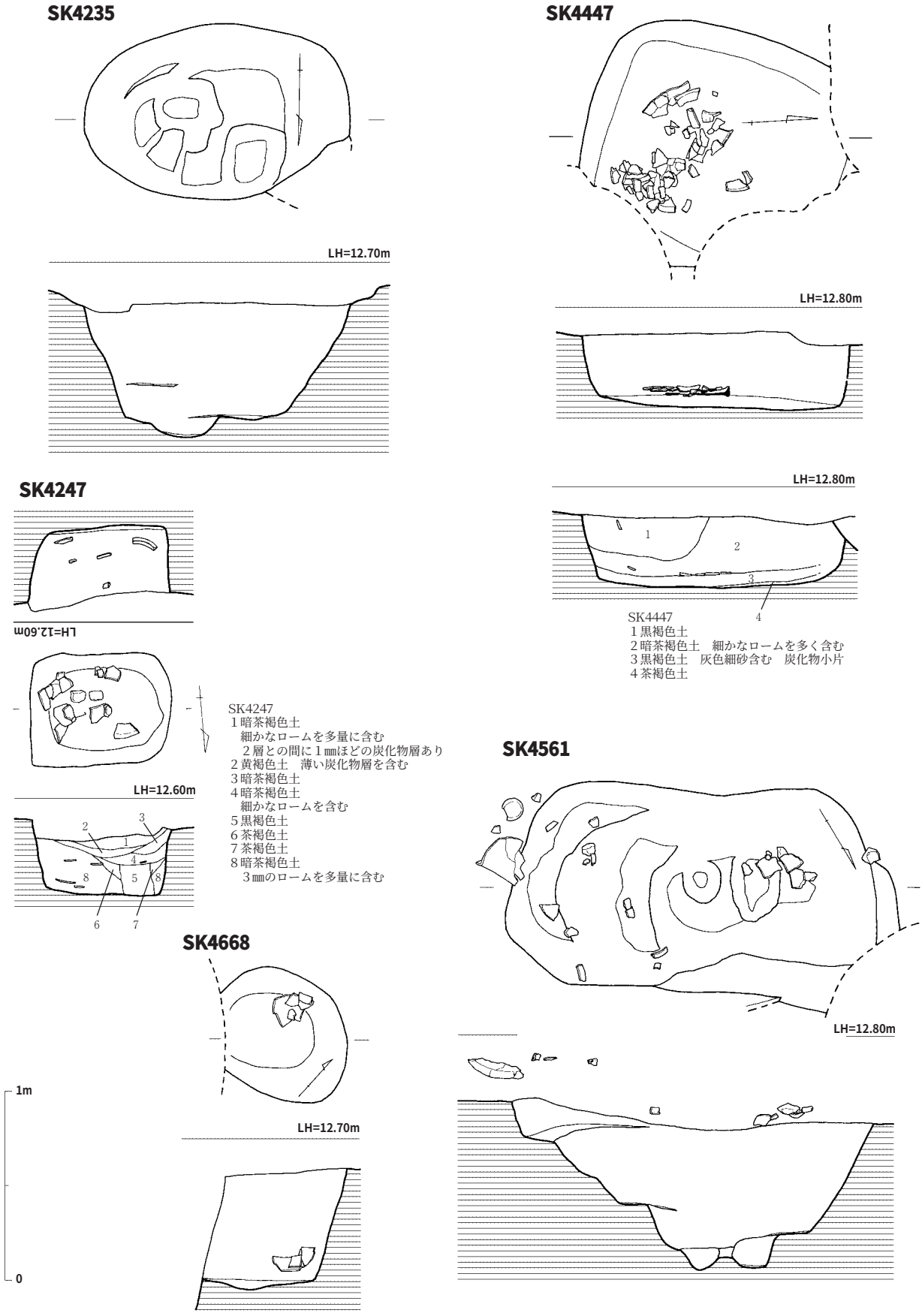


Fig. 84　土坑実測図１（1/30）

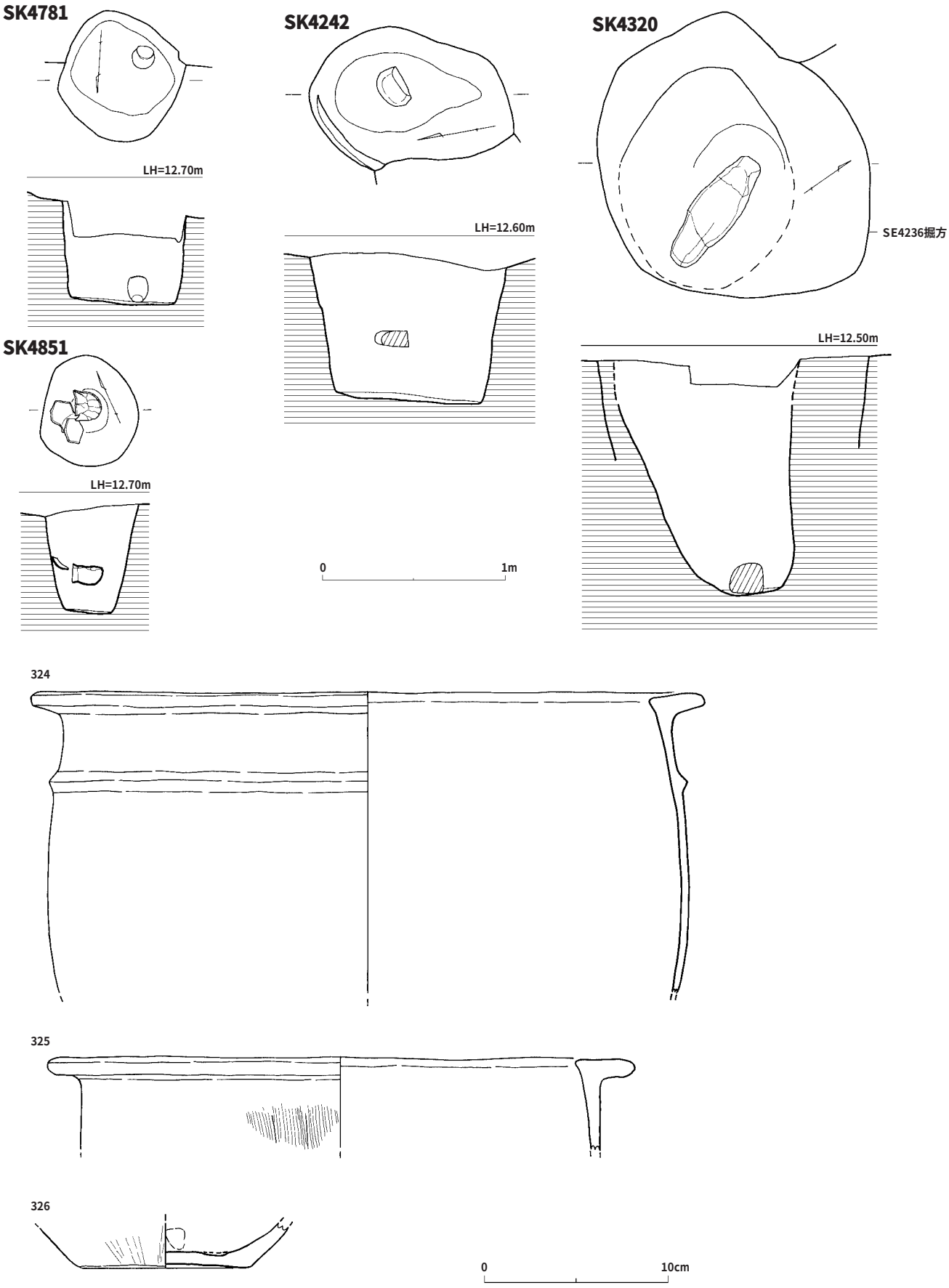


Fig. 85　土坑実測図２（1/30・1/3）

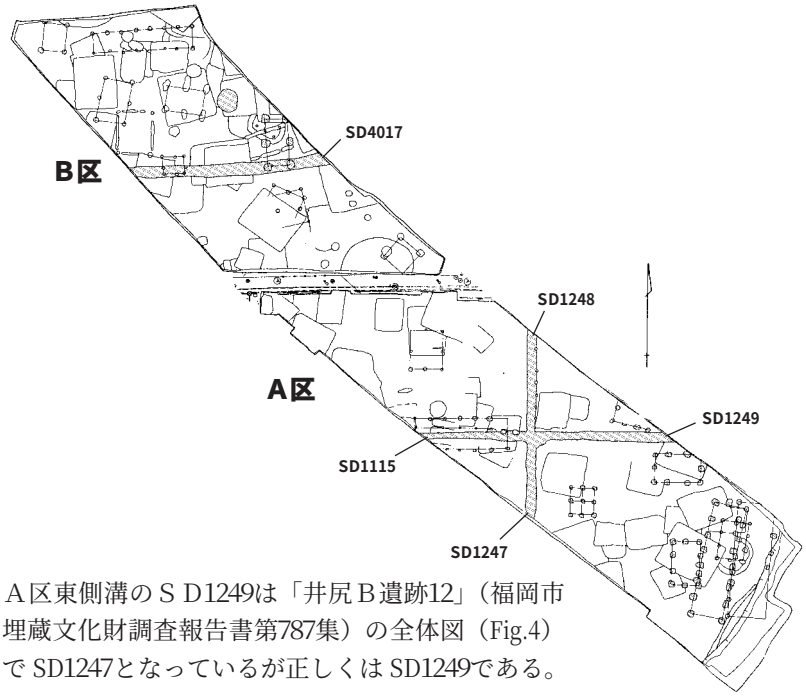
２）掘立柱建物　現在２軒を確認している。

SB01（Fig.89）　調査区中央東側で検出した１×２間の掘立柱建物でこれ以上北側には延びない。主軸をほぼ南北にとる。梁間は約３m、桁行きは全長6.5mを測る。柱間は芯々で３～3.2mを測る。柱穴は長径107～123㎝、深さ61～99㎝を測る。柱痕跡は03と05で確認できたが径13～21㎝を測る。04では柱の抜き穴が確認できた。建物南端がSD4017と重なるが、溝の説明で述べたように建物部分の溝底面は西側に比べ立ち上がって浅くなっており、陸橋状を呈している。これは建物を意識して浅くしていると考えられ、建物は門である可能性が高いと思われる。

SB07（Fig.91）調査区北側で検出した１×７間の掘立柱建物で主軸をN-87°-Eと南北にほぼ直行する。梁間は2.9m、桁行きは全長12.9mを測る、柱穴は円形もしくは楕円形で長径23～63㎝、深さ11～57㎝を測る。柱間は芯々で1.6～2.2mを測る。東西両端梁間の中心部分に浅い掘方があり梁間は２間になる可能性もあるが、１間とした時の梁間2.9mはＡ区で検出した２×７間掘立柱建物の半分が2.3mと比較的近いため、１間の可能性も高いと思われる。北側桁行きの柱列が柱間と深さが揃っているのに対して南側柱列は不揃いであるため、別の柱列と対応する可能性もあり、特に北側調査区端に近いため調査区外に延びる可能性がある。他の古代の掘立柱建物と比較すると、柱間はＡ区の２×７間建物のSB04とSB09の桁行き柱間が2.1～2.2mを測るのに対し、多くは1.7m～1.9mと狭く、また柱穴径もかなり小さい。

３）井戸　古代の井戸を一基検出した。周辺調査も含めると井尻Ｂ遺跡群内では弥生時代中期後半から後期の井戸は多く確認されているが古代の井戸は初めての出土である。

SE4504（Fig.92）調査区の中央北側で検出した。円形の素掘り井戸である。検出面での規模は東西長2.7m、南北長3.07m、深さ4.3mを測る。壁断面は遺構面から60㎝の深さまで急に狭まった後は八女粘土との境界の深さ2.3mまでは緩やかにすぼまる。八女粘土境界の湧水点で崩落のため広がり、また底に向かってすぼまる。覆土中からは多量の遺物が出土した。出土遺物（Fig.92～96　354～400）345～374は上層、375～400は下層から出土した。354、355は須恵器坏蓋である。356～360は須恵器高台付き坏である。高台は短く断面台形を呈し、底部の外側近くにつく。361・362は須恵器壺で363は須恵器盤片か。364～366は須恵器皿である。367は土師器鉢である。368・369は土師器甕で370～374は須恵器大甕である。下層は375・376は須恵器長頸



※Ａ区東側溝のＳＤ1249は「井尻Ｂ遺跡12」（福岡市埋蔵文化財調査報告書第787集）の全体図（Fig.4）でSD1247となっているが正しくはSD1249である。

Fig. 86　Ａ・Ｂ区古代遺構配置図（1/1000）

壺、377は須恵器高台付き坏。378・379は須恵器皿である。380は土師器高台付き坏。381は土師器皿、382は瓦器椀か。内外面とも口縁は黒褐色、その他は白色を呈す。内面はナデ、外面坏部はナデ、底部は回転ヘラ削りを施す。焼成は良好でかなり硬質である。383・384は土師器坏である。383は外面暗橙色を呈す。立ち上がりは回転ナデ、外底部は丁寧な回転ヘラ削りを施す。灯明皿として使われ外面口縁と内面全体が黒色を呈す。385は土師器小鉢で底部に焼成前の穿孔を施す。孔は径2.5㎝を測る。椀の内側から棒を差し込んで穿孔した後外側にめくれた粘土を棒の周囲になでつけたため孔の周囲が土手状に盛り上がり、座りが悪い。胎土は淡橙白色で細かな白色砂を含む。口縁はナデを施すが胴部は内外面とも指オサエのみである。外底面に397と同様の木の葉の圧痕がつく。386～397は土師器甕である。391は橙色を呈し、外面に２カ所黒斑がみられる。胴部は外面がハケ、内面が斜め方位のナデ、口縁は内面がハケ、内面は横ナデを施す。底部に３～４枚の木の葉の圧痕がみられる。木の葉を重ねて敷き、その上で土器を製作している。398は壺口縁もしくは器台脚部か。399は土師器甑か。400は器台と思われる。

４）土坑　調査区内で２基確認した。古代の遺構は少ない。

SK4187（Fig.97）調査区南側に位置しSC4064を切る。出土遺物（401～407）。 401は移動式竈片、402・403は丸瓦である。402は有段式の丸瓦で凸面はナデ、凹面は布目圧痕がみられる。403は凸面はナデ、凹面はには竹状模骨痕がみられる。404～407は弥生時代遺物の紛れ込みで、404は粘板岩製の石剣もしくは石鏃の基部で現状長さ４㎝、厚さ5.5㎜を測る。茎部は幅2.6㎝を測る。時期は弥生中期甕片（405～407）に伴う。

SK4559（Fig.97）調査区北側に位置する。SB07の柱穴に切られる。出土遺物（408・409）。408は須恵器坏蓋である。409は土師器坏である。

その他の出土遺物（Fig.97　410）。石剣切先である。SD4017から出土した。

３．小結

弥生時代から古墳時代の集落　Ｂ区では遺物は少量の城ノ越期の土器が出土しているが、遺構としては中期中頃の竪穴式住居と貯蔵穴が最も古い。それから古墳時代前期まで集落は継続しており、竪穴式住居31軒を確認した。南側に隣接するＡ区とほぼ時期的に同時期である。明確な円形住居はＡ区で確認できなかったがこれはＡ区の方がもともと標高が高かったと予想されるため、より激しい削平を受けて消滅したものと思われる。Ａ・Ｂ区とも遺構の中心は後期後半の竪穴式住居であるがＡ区の住居が両短辺にベット状遺構を持ち、そのベッド状遺構の下全体を溝状に低床部より深く掘り下げていること、低床部との間に堤防状の掘り残しが認められること、二本柱を主とすること、炉と主柱穴の間に一度溝を掘ってから埋め戻すこと、主柱穴がベット状遺構と低床部の境にあることなど規格的であるのに対し、Ｂ区の住居ではそれらが全部当てはまるものはなく、いくつかが当てはまる住居にしても築き方が雑な感じをうける。住居の規模もＢ区には径10m前後の円形住居が２軒あるのに対し、後期の住居は全体的に小型である。Ａ区では後期末に長径が８ｍに達する住居がみられ、わずかな距離ではあるが、集落の中心が台地中央から南東側に移動した可能性がある。

井戸　井戸もＡ区とは分布の仕方が異なる。Ａ区で井戸の可能性がある遺構を５基確認した（SE1181、1915、1916、1215、1917）が、埋土が暗黄橙褐色土と地山と区別しづらく、また遺物を全く含まないことや深さが約１ｍと浅いのに対し、Ａ区の井戸は覆土は暗茶褐色土～黒褐色土と地山と異なり、遺物を多量に含み、深さも約４ｍと深いなど異なる点が多い。Ａ区で確認した中期末～後期の井戸は17

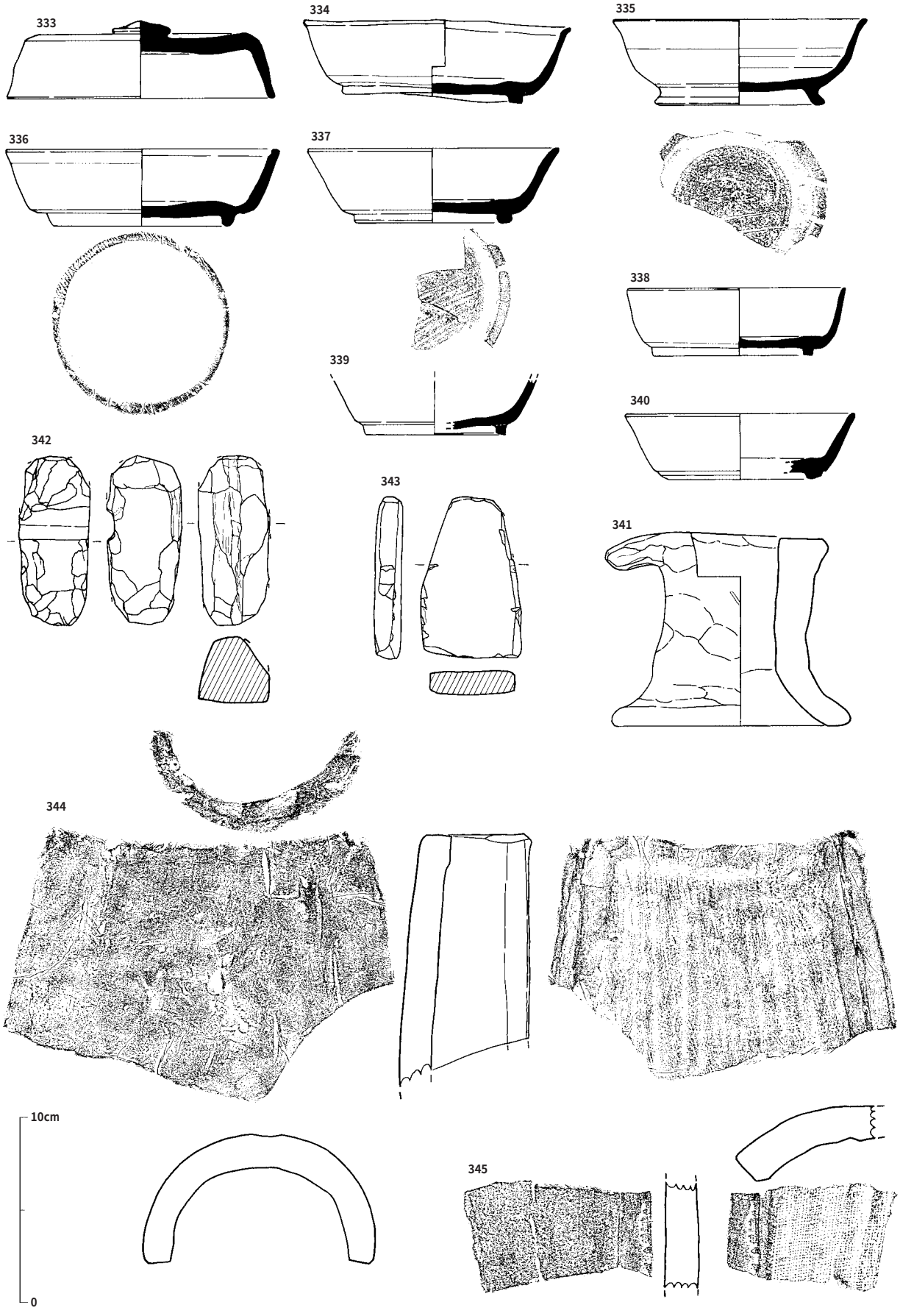


Fig. 87　SD4017出土遺物１（1/3）

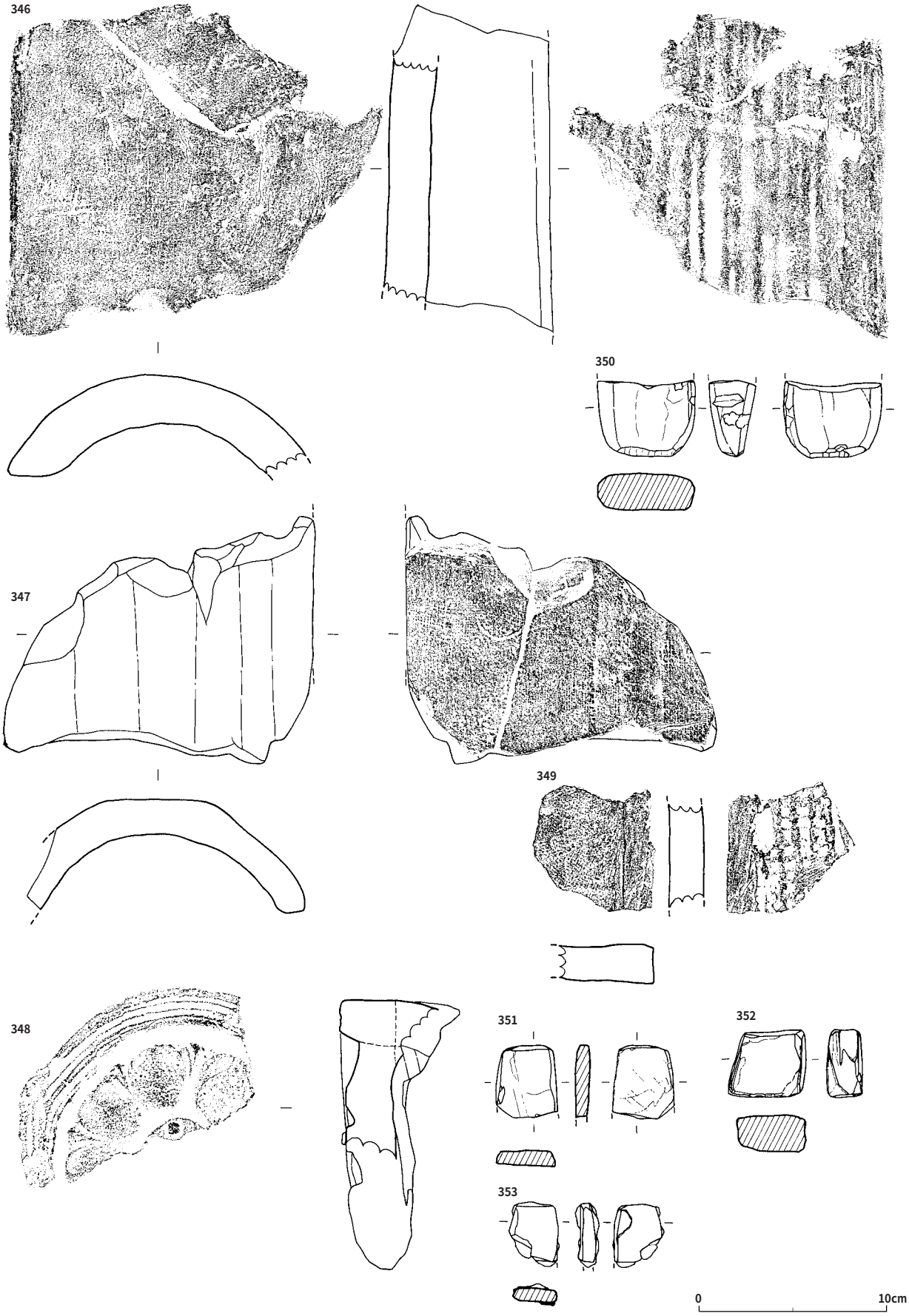


Fig. 88　SD4017出土遺物２（1/3）

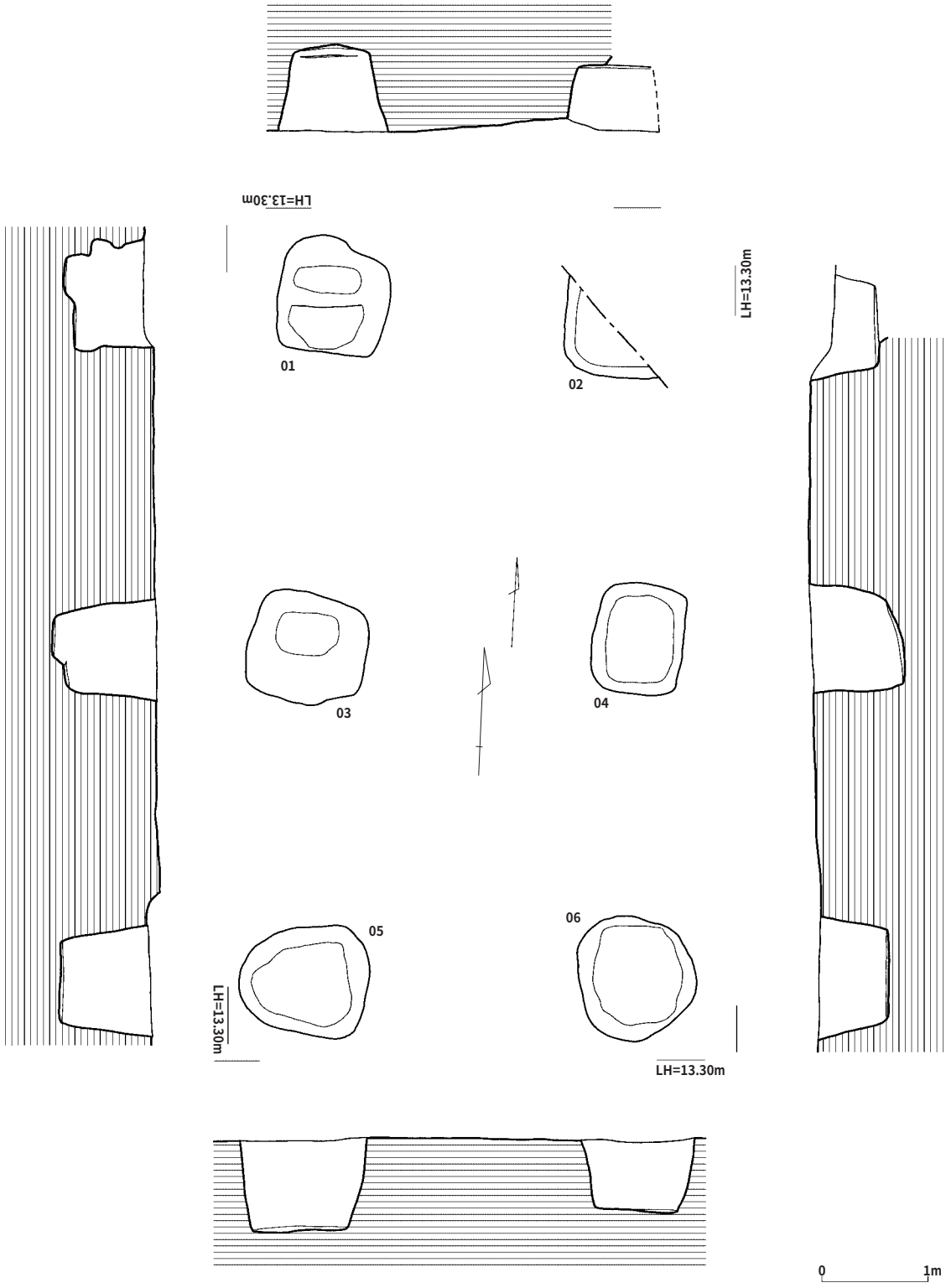
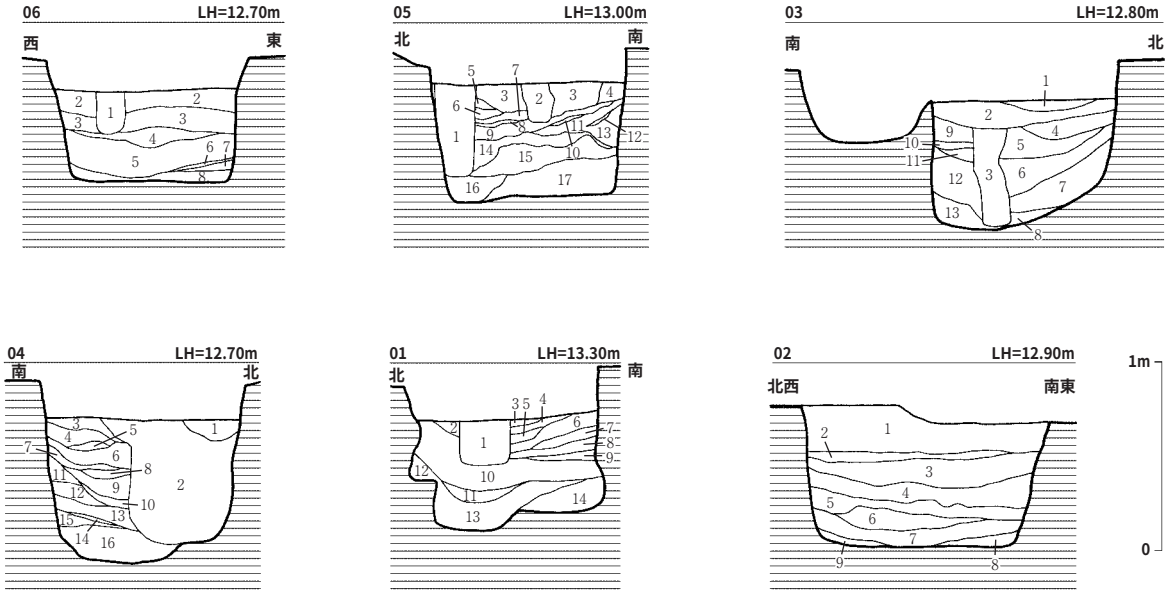


Fig. 89　SB01実測図（1/60）

建物番号	地区名	建物方向	長軸方向	規模 桁行×梁行	桁　行		梁　行		床面積 (㎡)	柱穴 番号	形状	規格（cm）			旧遺構 番号	柱痕跡径 cm	主要な出土遺物	建物時期	挿図番号
					実長 (m)	柱間寸法 (m)	実長 (m)	柱間寸法 (m)				長径	短径	深さ					
SB -01	17次 B 区	南北	N- 3 °- W	1 × 2	6.5	3.0～3.3	3	3	19.5	01 02 03 04 05 06	方形 方形 隅丸長方形 長方形 不正楕円形 不正円形	107 113 104 121 119	106 104 86 106 106	82 102 88 86 67	4602 4833 4513 4512 4038 4037		弥生中期甕片、黒曜石、古代 弥生中期後半～後期の土器小片多数 Ｌ型口縁、丹塗り土器片	古代	Fig.89

Tab.8　SB01 建物跡計測表



01土層
１茶褐色土
２暗橙色土
　黒色土の隙間にロームを多量に含む
３橙色土
４黒褐色土
５橙色土ローム
６黒褐色土
７橙色土ローム
８黒褐色土
９暗茶褐色土
10暗茶褐色土
　１～３㎝のロームを層状に含む
11橙色土ローム
12黒褐色土
13黒褐色土　ローム含む
14暗橙色土　黒色土ブロック含む

02土層
１黒褐色土　細かな暗褐色土を層状に含む
２暗橙色土　ロームブロック含む
３黒褐色土　ロームブロック・炭化物含む
４暗橙色土　ほとんどローム
５黒褐色土
６黄褐色ローム
７黒褐色土
８黄褐色ローム
９黄褐色ローム

06土層
１黒褐色土
２明茶褐色土
３黒褐色土
４茶褐色土　ロームブロック含む
５黒褐色土　１㎝弱のロームを層状に含む
６暗橙色土

03土層
１暗茶褐色土
２暗橙色土
３橙色粘質土
４黒色土
５橙色土
６黒色土
７橙色土
８黒色土
９暗橙色土
　ロームの間に黒色土を含む
10暗茶褐色土
　１～３㎝のロームを層状に含む
11橙色土
12黒褐色土
13黒褐色土　ロームを含む
14暗橙色土　黒色土ブロックを含む

04土層
１暗橙色土
２黒褐色土
　１㎝ほどのロームを層状に含む
３黒褐色土　ローム含む
４黒褐色土
５橙色土　ロームを多量に含む
６暗橙色土
７黒褐色土
８掘りすぎ
９黒褐色土　ローム含む
10黒色土
11黒褐色土
12黒色土　ロームわずかに含む
13橙色土

05土層
１黒褐色土
２明茶褐色粘質土
３黒褐色土
４暗茶褐色土
５明茶褐色土
６黒色土
７黒褐色土
８明茶褐色粘質土
９黒褐色土
10黒褐色土　ローム含む
11黒色土
12明茶褐色粘質土
13黒褐色土
　ロームブロック含む
14明茶褐色粘質土
15黒色土
　ロームブロック含む
16黒色土
17橙色土
　少し汚れたロームを含む

Fig. 90　SB01柱穴土層図（1/40）

次調査内ではＢ～Ｅ区間で多く確認され、周辺の調査でも分布域はかなり狭く何らかの規制があるのではないかと考えられる。また、規制に関していえば古代の溝と掘立柱建物の多くが真北方向を意識しているが、弥生時代の竪穴式住居にしても弥生時代末に一時的に主軸を異にする住居が出現する他は竪穴式住居の多くが同じく真北を意識していると思われ、後期の長い期間中に真北を意識して建てられたのであれば何らかの規制が働いているのではと考えられる。

青銅器生産遺物　Ｂ区では青銅器生産関連の遺物として広型銅戈の鋳型片と取り瓶（坩堝）が出土している。特に再利用されたり移動したりすることが少ない取り瓶（坩堝）が出土した（Ｃ区からも別個体が出土）ことからこの調査区周辺で青銅器が生産されたことは確実である。残念なことに削平に

建物番号	地区名	建物方向	長軸方向	規模 桁行×梁行	桁行 実長（m）	桁行 柱間寸法（m）	梁行 実長（m）	梁行 柱間寸法（m）	床面積（㎡）	柱穴番号	形状	規格（cm） 長径	短径	深さ	旧遺構番号	柱痕跡径 cm	主要な出土遺物	建物時期	挿図番号
SB-07	17次 B 区	東西	N-87°-E	1×7	12.9	1.6～2.3	2.8～2.9	2.8～2.9	37.4	01	円形	2.9		33				古代	Fig.91
										02	方形	40	38	27	4527				
										03	円形	32		19					
										04	円形	23		37	4547				
										05	楕円形	59	43	11	4794				
										06	円形	43		35	4831				
										07	円形	37							
										08	隅丸方形	41	39	25	4715				
										09	不正長方形	59	52	43	4749				
										10	楕円形	63	45	39	4418				
										11	楕円形	63	57	29					
										12	不正円形	53	48	47	4720				
										13	楕円形	59	50	43					
										14	隅丸方形	53	47	43	4654				
										15	楕円形	47	39	43	4657				
										16	円形	45		43					
										17	楕円形	54	47	57	4662				

Tab.9　SB07 建物跡計測表

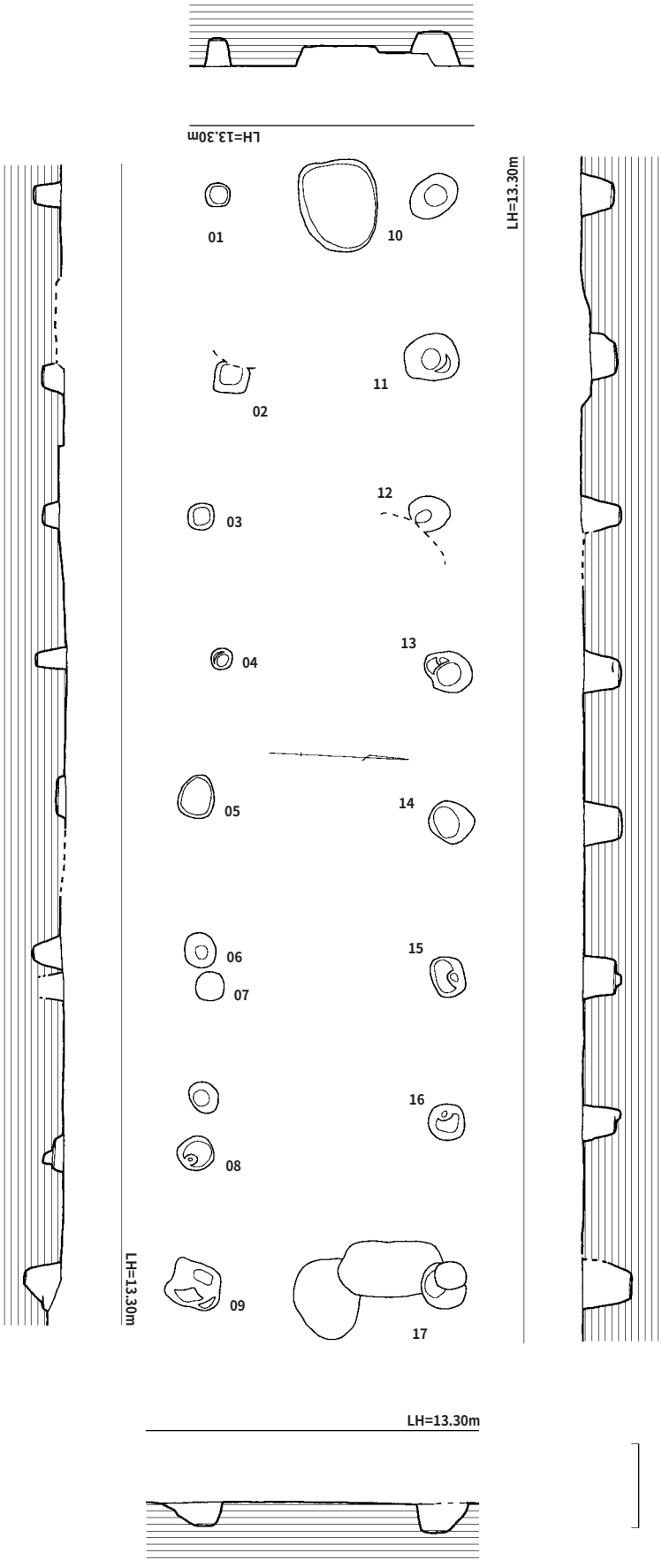


Fig. 91　SB07実測図（1/80）

より鋳造遺構は確認できなかったが、可能性がある遺構として周溝状遺構の中で１×２間の掘立柱建物が検出されており、これが同じく周溝の中に掘立柱建物がある春日市の須玖永田遺跡と似ているため、生産遺構である可能性は高いのではないかと思われる。また、今回調査したＢ区は低地に立地する須玖永田遺跡と異なり水はけがいいため、特に周溝は不要であるのならば、周溝を持たない掘立柱建物のうちSB02とSB03が工房の可能性があると思われる。これらは１×１間の掘立柱建物であるが柱間が2.7～４ｍと大きな特殊な掘立柱建物であり、特にSB02はガラス勾玉の土製鋳型片が廃棄されていたSC4064と主軸が同じであるため同時期と思われ、工房の可能性は高いと考えている。またこのSC4064自体も床面が広い範囲にわたって焼けており、この住居が生産工房の一部である可能性もある。しかし、これらを工房とするとSC4064に廃棄されていた土器のほとんどが一般の住居で出土する土器と変わらないため一般の住居と工房が混在していたこととなる。遺物の出土状況としては広型銅戈鋳型もガラス勾玉鋳型も多くの土器と共に竪穴式住居に廃棄されているが、土器は一般集落で出土するものと変わらない。その辺りを明確にするため、もう少し細かな時期区分が必要であるが切り合いが多いため困難な状況である。遺物としてはどの遺構にしても弥生中期後半の遺物が多くを占めていて、当時中期後半の遺構が多くあったことを示している。また

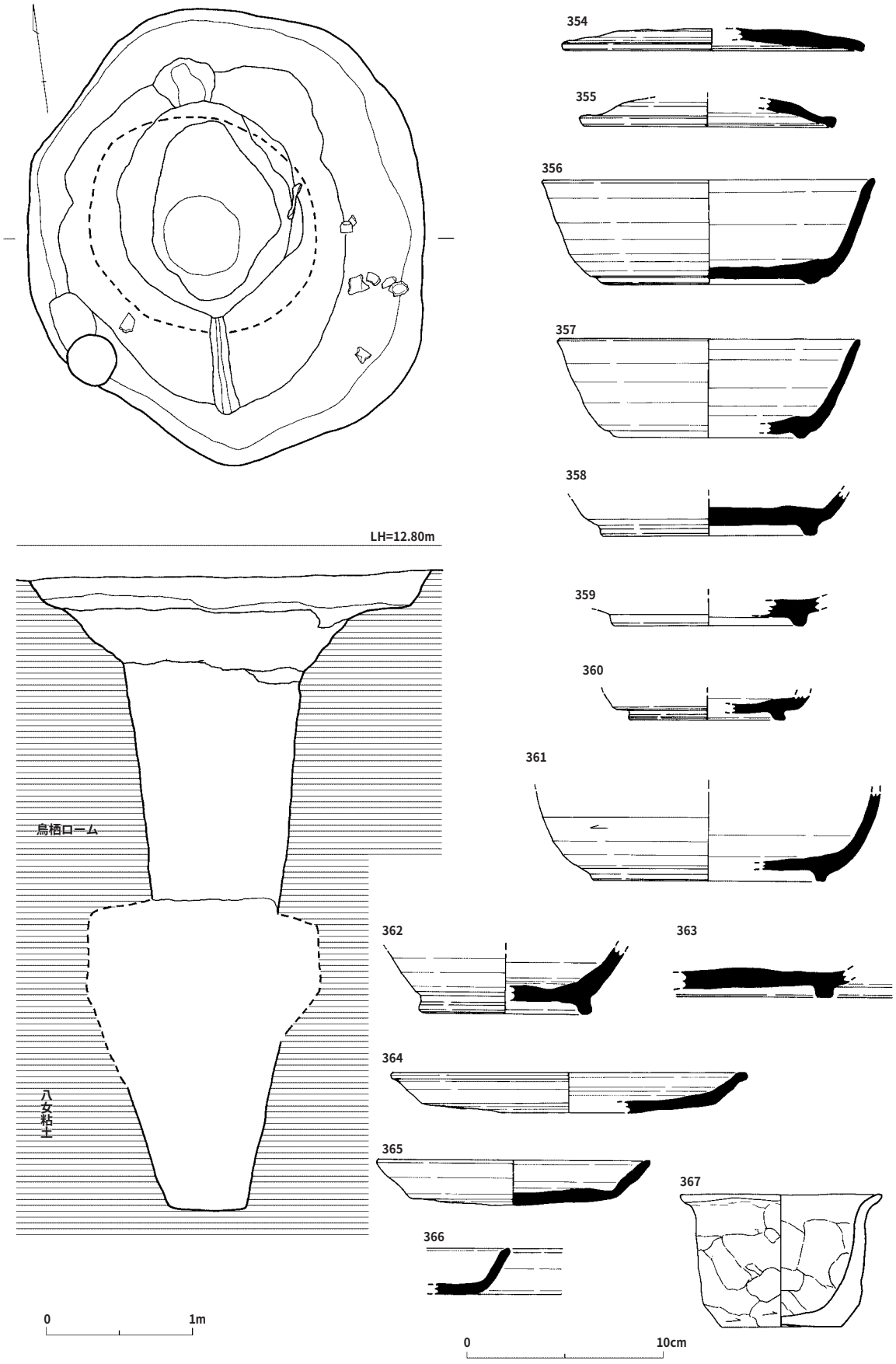


Fig. 92　SE4504実測図１（1/40・1/3）

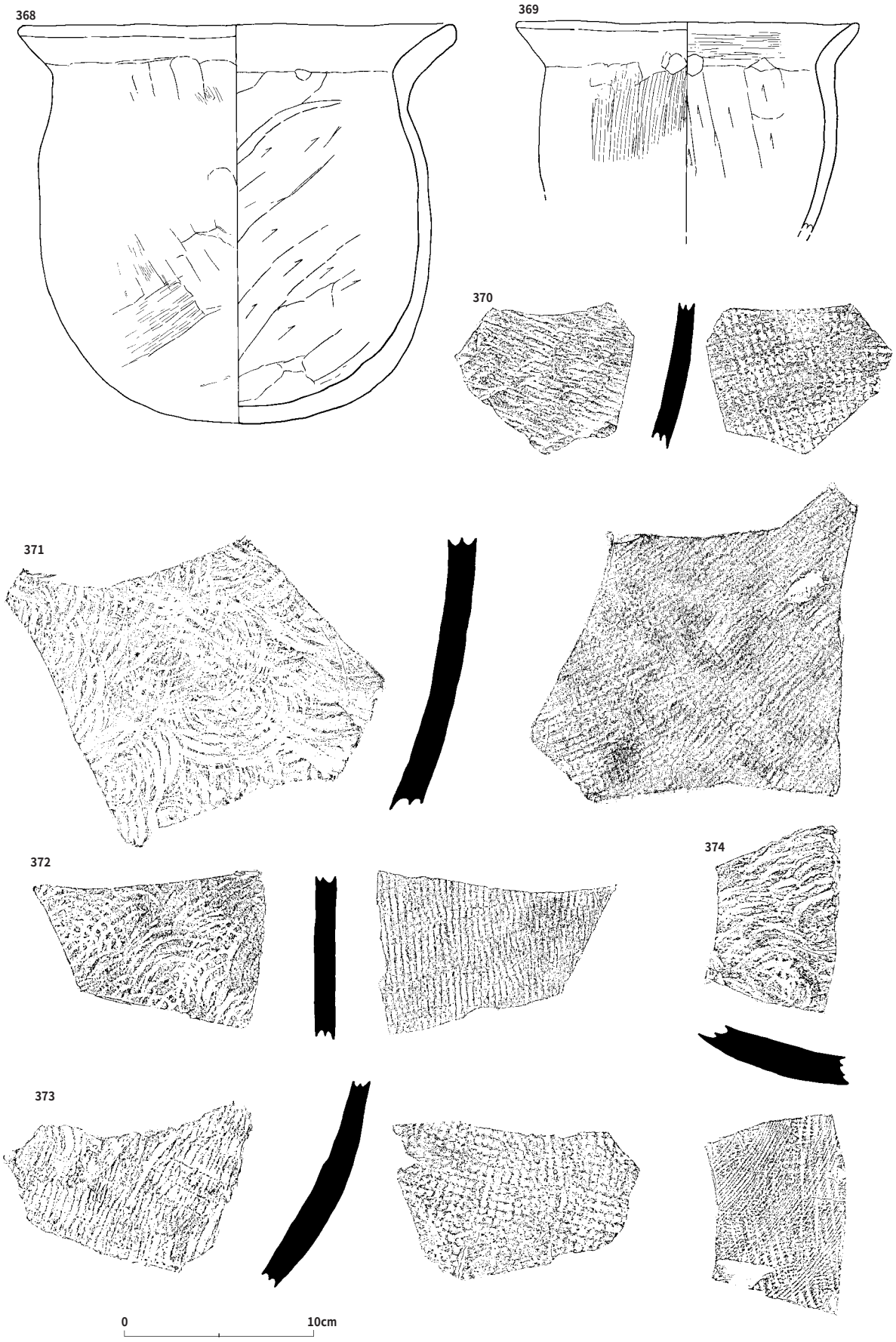


Fig. 93　SE4504実測図２（1/3）

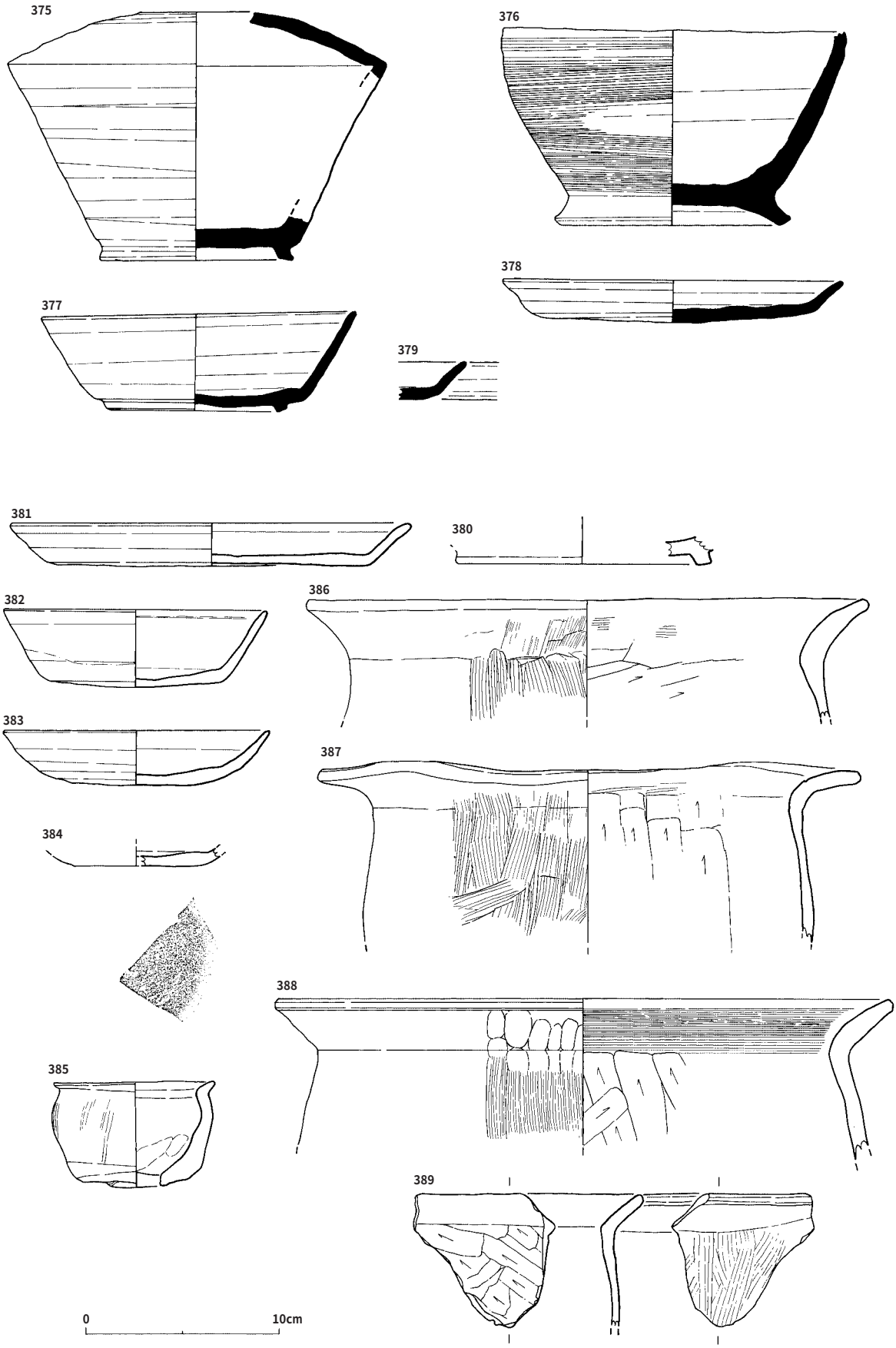


Fig. 94　SE4504実測図３（1/3）

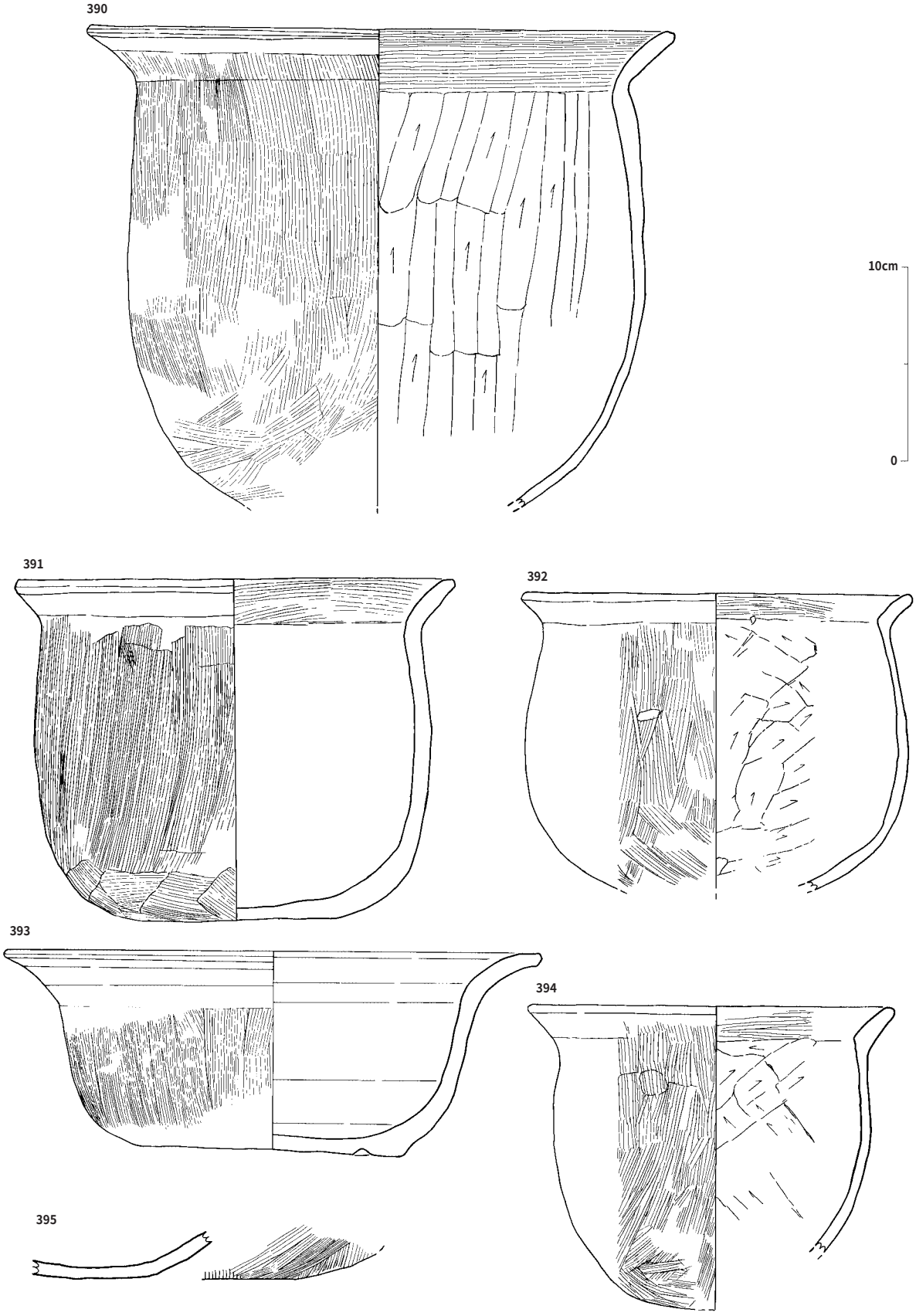


Fig. 95　SE4504実測図４（1/3）

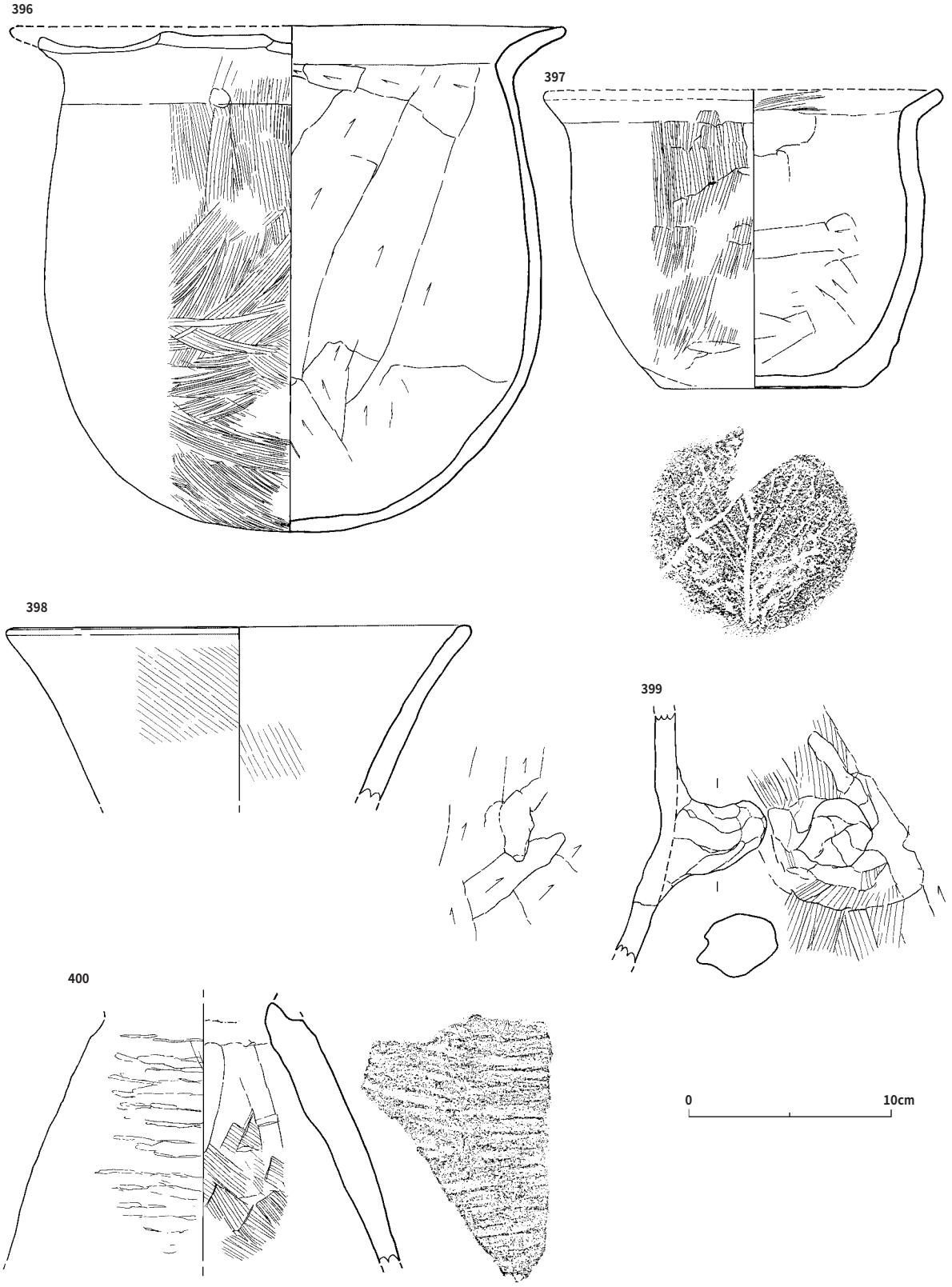


Fig. 96　SE4504実測図５（1/3）

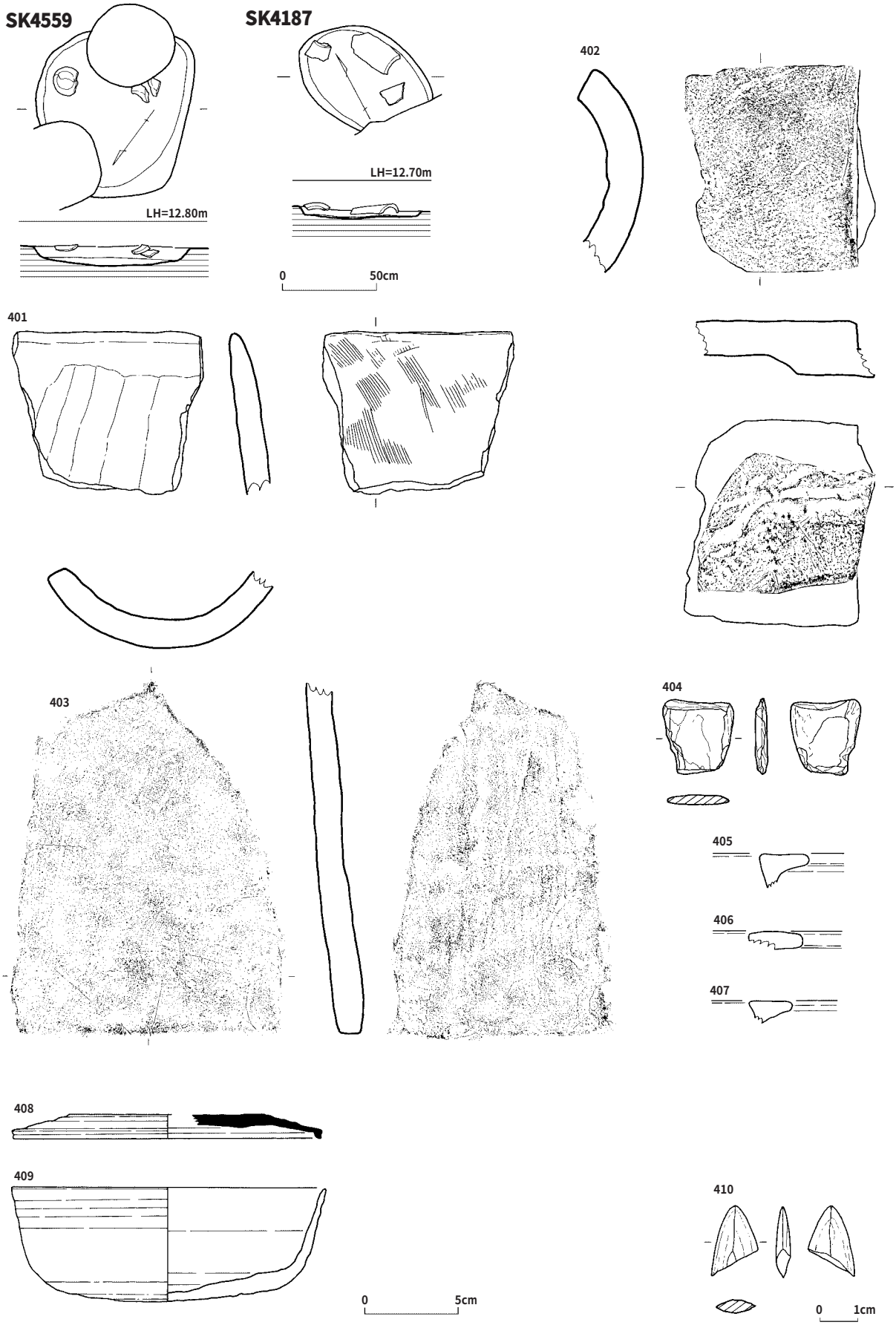


Fig. 97　土坑実測図（1/30・1/3、403は1/4、410は2/3）

上から切り込んだ柱穴など小さな遺構に関してはすべてを検出する事は不可能であり、後期後半の遺物が出土した場合には紛れ込みの可能があるため、判断が困難な状況である。
小銅鐸　調査区中央東端のSC4664から出土した。土層観察用ベルト断面に緑青がみえたので確認のため掘り出そうとしたが、銅が薄い上に遺存状態も悪く触ると粉状になってしまう状態であった。そのため現地で掘り出して実測するのをあきらめ、周囲の土ごと取り上げて福岡市埋蔵文化財センターへ持ち込んだ。その後、X線写真を撮ったところ小銅鐸であることと、紐の部分をななめ下に向けるような状態で埋まっていたことが明らかになった。小銅鐸取り上げ後にベルトを精査したが、小銅鐸に伴う掘り込み等は確認できなかったため、住居の埋没途中で廃棄されたと考えられる。住居の時期は調査当時の発表で後期後半としていたが、SC4664を切るSC4599の時期は両側短辺にベット状遺構を持つなどの形態などから後期後半であるものと思われ、SC4664自体はベット状遺構も確認されず、また後期後半の遺物が全く出土していないため、少し古くなる可能性が出てきた。しかし、コーナー部分が直角に曲がっており、平面形が長方形を呈すとことから中期後半まで遡らないと考えられ、後期前半頃の時期になるのではと思われる。この小銅鐸を含めてＣ区井戸から出土した小型倣製鏡や取瓶（坩堝）、青銅付着土器やＢ区取瓶（坩堝）とともに第６次調査出土青銅付着土器や第11次調査出土銅鏃の鉛同位体の分析を東京文化財研究所の平尾良光氏に依頼した結果がFig.98である。図は鉛同位体比の測定値を図化しており、報告書によると図のＡ領域は、弥生時代の東アジアにおいて中国前漢鏡が主として分布する領域であり、華北産の鉛と推定される。Ｂは中国後漢鏡および三国時代の銅鏡が分布する領域で、華南産の鉛と推定される。Ｃは現在の日本産の鉛の領域で、Ｄは朝鮮半島産とされる多紐細文鏡が分布する領域である。これまでの研究では弥生時代中期から後期後半の青銅に含まれる鉛はＡ領域に含まれ、特に後期後半の資料はＡ領域でも中央の特定の場所（ａ領域）に集中する測定結果が出ている。図は小銅鐸のみの測定結果であるが、中に描かれた円は、黒丸が今回井尻Ｂ遺跡第17次調査で出土した小銅鐸に使用されている鉛の分析値であり、白丸は他の遺跡から出土した小銅鐸に使用されている鉛の分析値である。それまで東京文化財研究所で分析した小銅鐸はそのほとんどが中国華北産鉛を使用しており、特にＡ区の中心付近に集中する傾向がある。今回Ｂ区やＣ区から出土した取瓶（坩堝）や青銅付着土器、それに今までの発掘調査で井尻Ｂ遺跡から出土した青銅器や青銅器生産関連遺物は弥生時代後期の遺物であるが、同じくＡ領域に属しており、中国華北産の鉛を使用している。この中で17次Ｃ区出土小型倣製鏡と11次調査出土の銅鏃は後期前半から中頃とやや古く、他は後期後半から終末期に属している。これは鉛の測定値にも現れており、倣製鏡と鏃がＡ領域でもやや離れた数値を示すのに対し、他の遺物はａ領域のきわめて似た値を示す。それに対し小銅鐸の鉛同位体比の結果は多紐細文鏡などと同じ朝鮮半島産の鉛に近い測定値である。小銅鐸も出土した竪穴式住居の年代が後期であるのは間違いないと思われ、他の青銅器と同様に華北産の鉛を使用しているものと思われた。なぜこの小銅鐸の鉛のみが朝鮮半島産の値を示すのかは、1. 朝鮮半島産の鉛も細々と使用されていた。2. 造られた時期が古い。3. 古い青銅器を鋳つぶして再利用している。などの理由が考えられるが、結論を出すには今後の検討が必要である。

図　　版

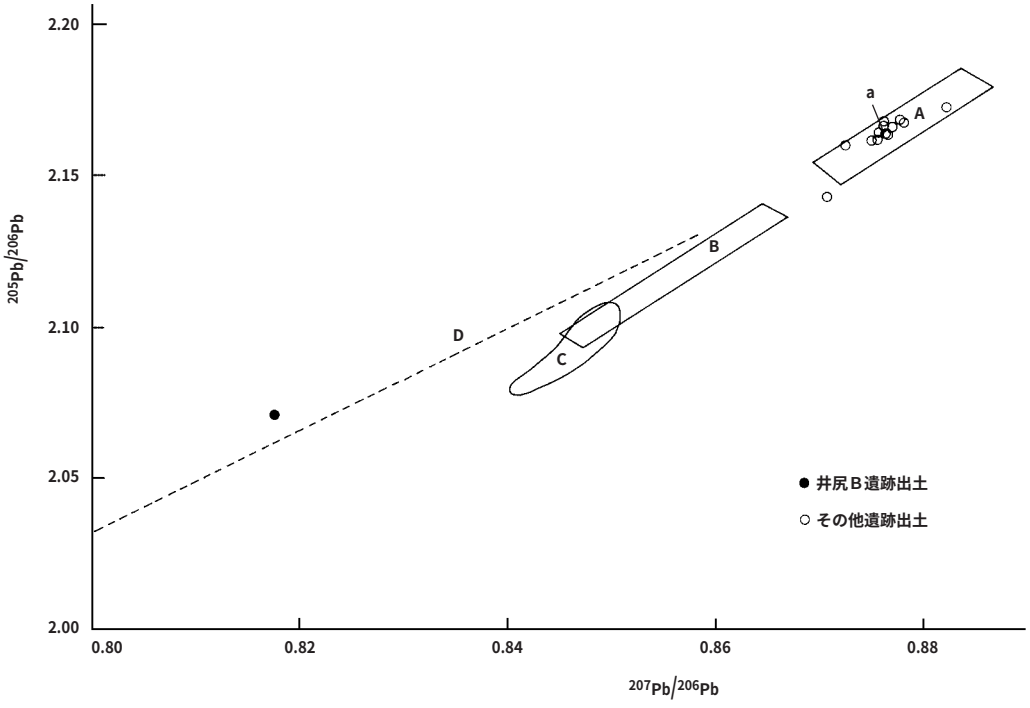


Fig. 98　井尻およびその他遺跡出土小銅鐸の鉛同位体比

調査区北側全景　北から

調査区南側全景　南から

調査区南東端　南から

調査区中央部西側　南から

SC4019　南から

SC4049　北から

SC4060　南から

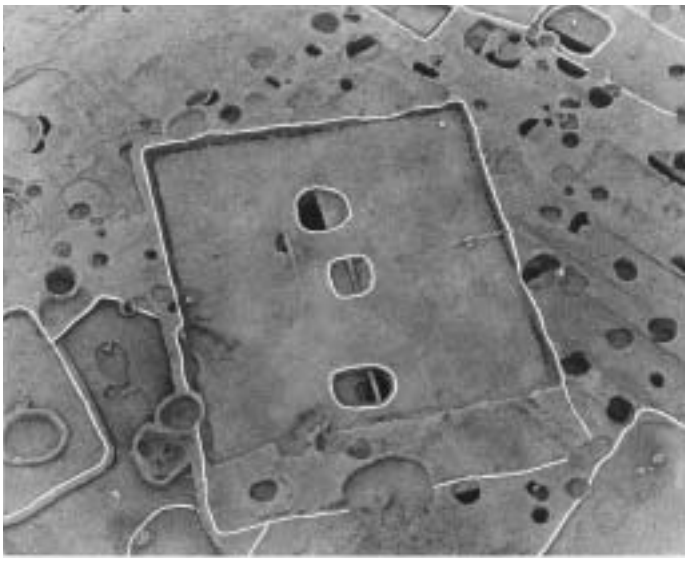
SC4060　遺物出土状況　北から

SC4062　東から

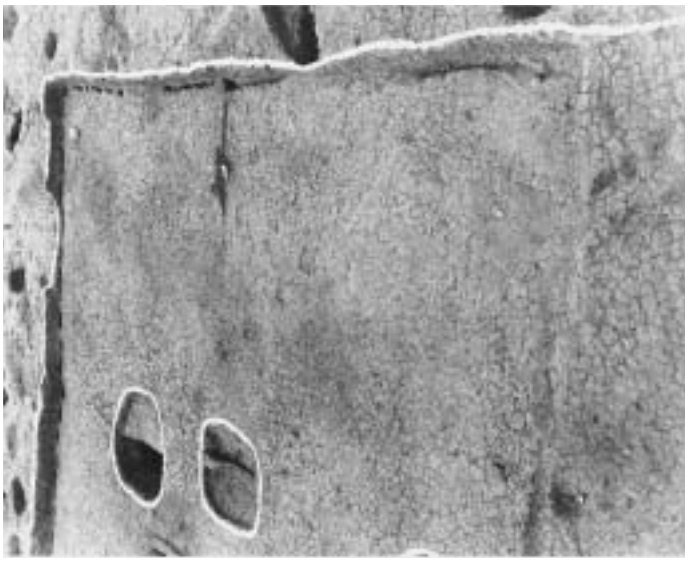
SC4062　炉　西から

SC4063　西から

SC4063　広型銅戈鋳型出土状況　西から



SC4064　南東から



SC4064　床面焼土状況　南西から

SC4162　南から

SC4188・SC4190　東から

SC4188　北から

SC4188　炉　北から

SC4190　北から

SC4220　北から

SC4336　北東から

SC4394　西から

SC4398　東から

SC4398　土山Ｂ土層

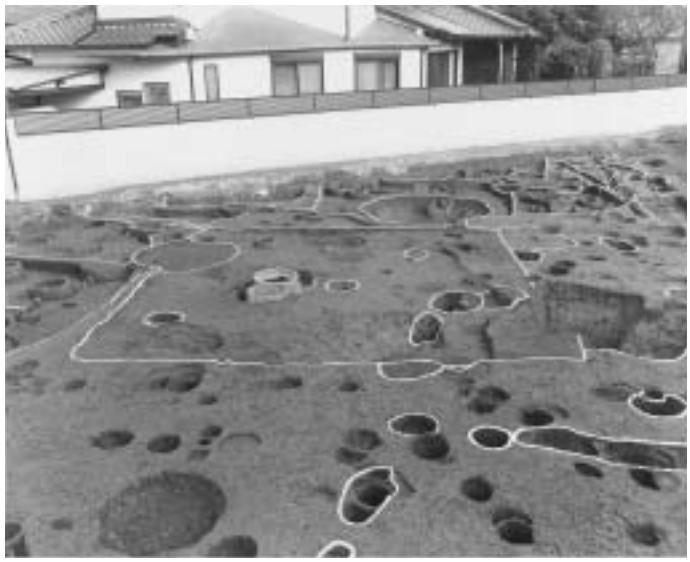
SC4398　土山Ａ土層　西から

SC4398　屋内土坑土層　南から

SC4412　東から

SC4437　南東から

SC4437　炉　西から



SC4438　西から

SC4438　床面出土遺物　西から

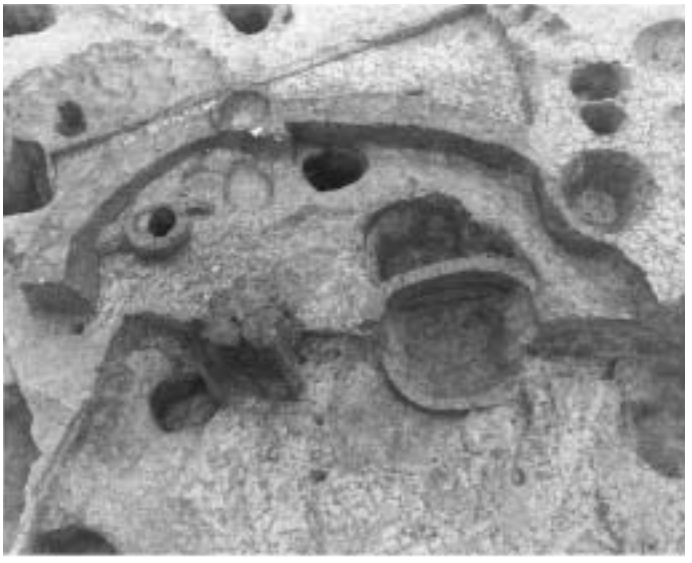
SC4439・4712　南から

SC4599　南から

SC4623　西から

SC4636　南から

SC4636　炉　西から



SC4661　北から

SC4671　西から

SC4712　西から

SC4440　西から

SC4441　西から

SC4442・SE4504　西から

SC4443　南から

SC4542　東から

4446　北から

4741　土層　西から

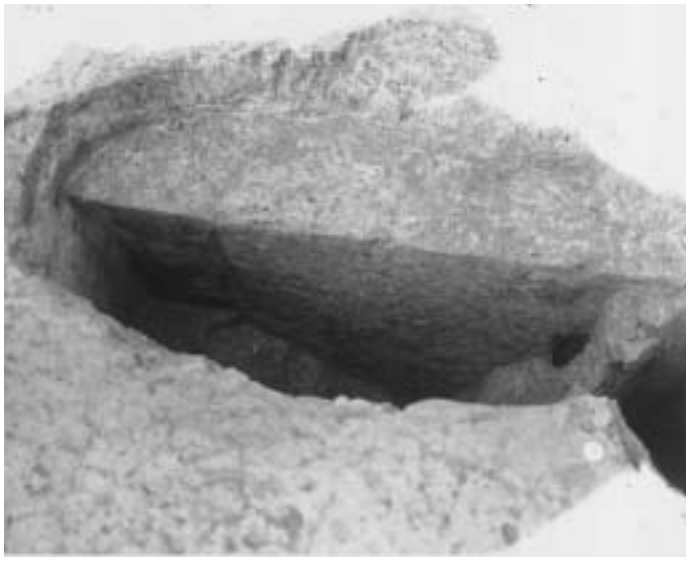
4030　西から

4030　南から

4030　土層　北から

SB04　西から

SB04　SP05　土層　南東から

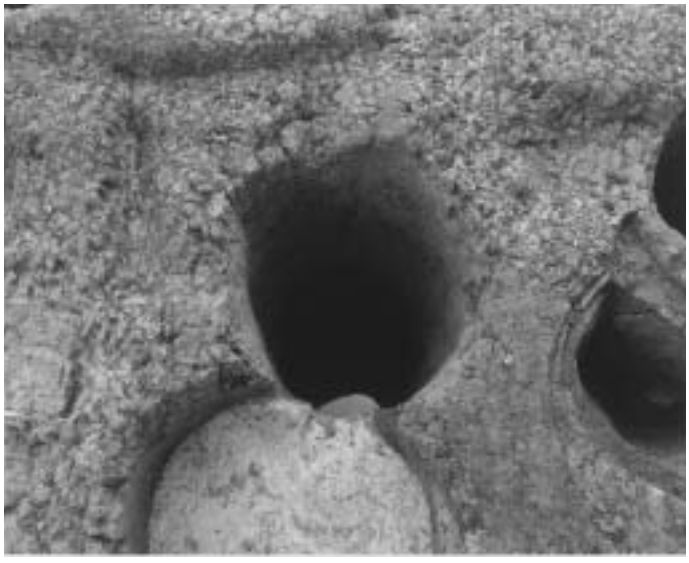


SB04　SP06　土層　東から

SE4154　遺物出土状況

SE4154　南から

SE4154　甕棺出土状況



SE4200　東から

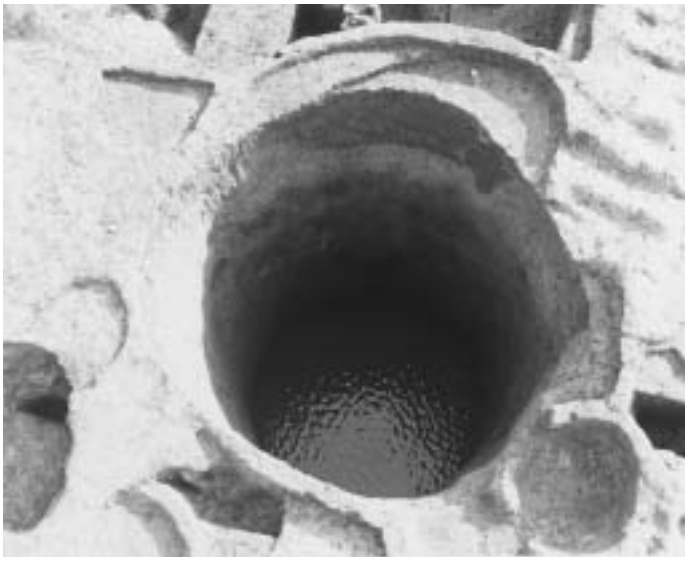
SE4169　西から

SE4169　遺物出土状況

SE4202　東から

SE4231　北から

SE4236　北から



SE4444　北から

SE4669　西から

SK4514　西から

SK4191 土層　東から

SK4191　完掘　北から

SK4235　南から

SK4447　東から

SK4561　南から

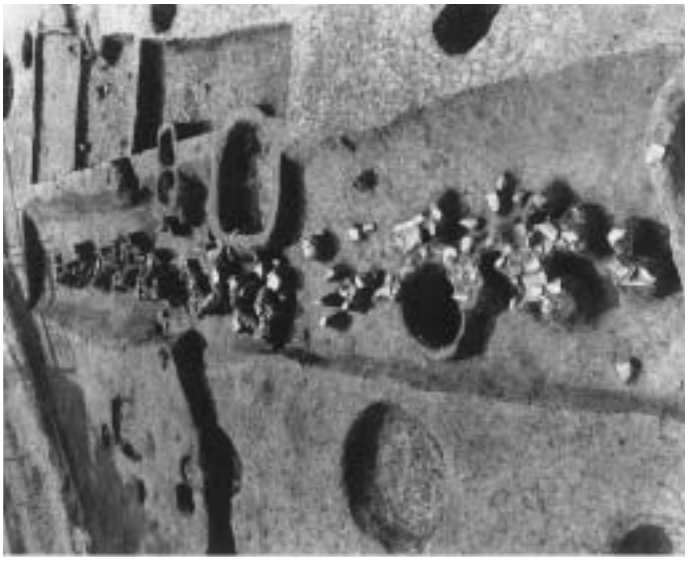
SK4781　北東から

SP4242　東から

SP4320　北東から

SK4247　北から

SC4336　屋内貯蔵穴　西から

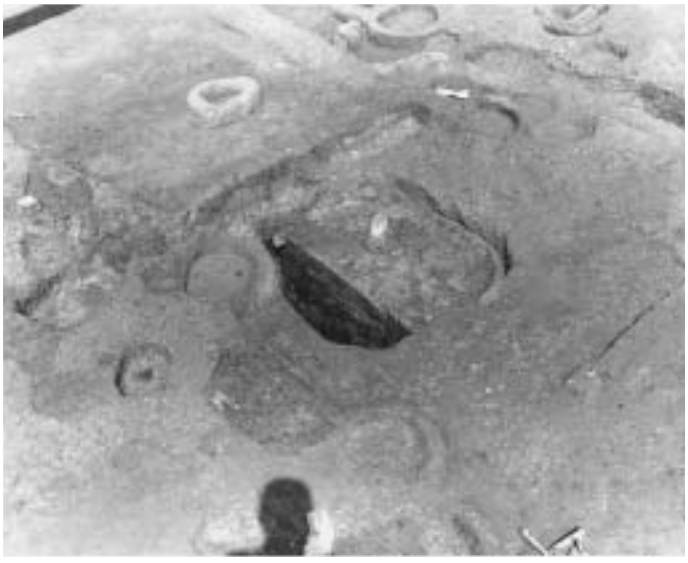


SD4017　西側遺物出土状況　東から

SD4017　土層Ａ　東から

SD4017　土層Ｂ　西から

SB01　南から



SB01　SP05　南東から

SB01　SP06　土層　南から

SB01　SP03　東から

SB01　SP01　西から

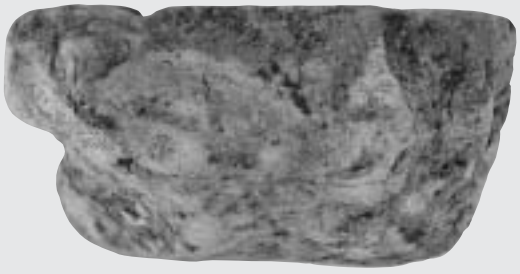
SP4696　土層　西から

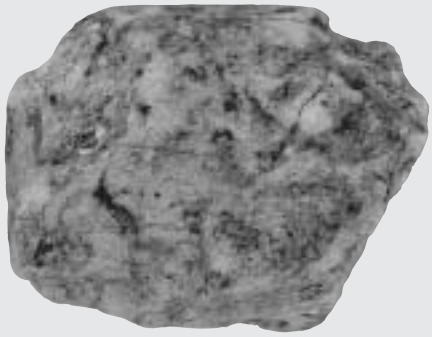
SP4242　土層　西から

SE4504　西から

A区全景　東から

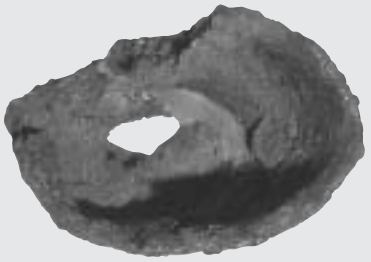
銅戈鋳型





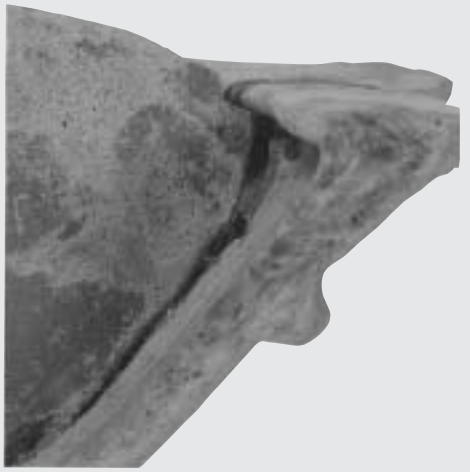
取瓶

ガラス勾玉鋳型



小銅鐘

SE4444　出土高坏



書名　井尻（いじり）Ｂ14
副書名　井尻Ｂ17次（Ｂ区）の調査
巻次　14
シリーズ名　福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号
編著者名　屋山洋
編集機関　福岡市教育委員会　発行機関　福岡市教育委員会
発行年月日　２００５０３３１　作成法人ＩＤ　４０１３４
郵便番号　810－8621　電話番号　092－711－4667　住所　福岡市中央区天神１－８－１
遺跡名振り仮名　いじり
遺跡名　井尻Ｂ遺跡
所在地ふりなが　ふくおかしみなみくいじり
所在地　福岡市南区井尻
市町村コード　40135　遺跡番号　0090
北緯　33°　33′　11.5″　東　経　130°　26′　34.9″
調査機関　福岡市教育委員会　調査面積　934.6㎡　調査原因　都市計画道路新設
種別　集落・墓地
主な時代　弥生時代中期～古墳時代前期　古代
遺跡概要　弥生時代～古墳時代－竪穴式住居　＋　井戸　＋土坑－土器＋広型銅戈鋳型
＋小銅鐸＋ガラス勾玉鋳型
古代　溝　＋　土坑　－須恵器＋瓦
特記事項　弥生時代後期後半～古墳時代前期の大集落で青銅器やガラス勾玉の生産なども行っていた。
古代になると瓦葺き建物が建てられ調査区内では門や井戸などが検出されている。

井尻Ｂ遺跡14

－井尻Ｂ遺跡　第17次（Ｂ区）の調査－
福岡市埋蔵文化財調査報告書　第834集

２００５年３月３１日

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神１－８－１
☎０９２－７１１－４６６７

印　刷　明和印刷有限会社
福岡市南区大楠２丁目12－32
（飛松ビル１Ｆ）
☎０９２－５３１－５３０１